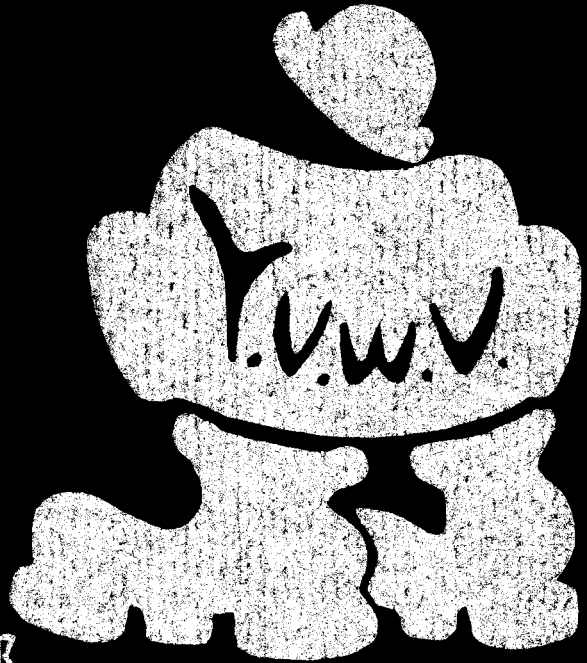


# あひの記

第19・20号



山口大学  
ワンダーフォーゲル部



## 巻 頭 言

ワンゲルに入部してよかったこと

いろいろな土地にいけること

大自然に触れられること

しかし 一番よかったのは

君達と知り会えたことだ。

MASAHARU



目次

巻頭言	1	Panic in ALPS パーティ	37
五十八年度主将挨拶	1	夏へ向かって槍々行々パーティ	38
五十八年度執行部総括	1	南アルプス小町おととパーティ	42
<b>五十六年度春合宿</b>		よい子の絵日記ばあていし	47
西表島なめねこパーティ	3	銀座でルンルン♡目先の幸福パーティ	50
西表トロピカルシャベットパーティ	8	5つぶのコンペイトウちゃんパーティ	55
屋久島るひろ子のニッカーズボンとキスリングパーティ	14	CAO CAO パーティ	58
芸北に春を呼ぶ七福神パーティ	14	硬派・かっこいい奴パーティ	63
そとどけそとどけ酒乱が通るパーティ(剣山)	20	<b>五十七年度春合宿</b>	
青春の門パーティ鈴鹿編	21	ころころ転がるおむすび山パーティ(志賀高原)	69
姑・小姑・嫁パーティ(比良)	21	21・125 パーティ(鈴鹿)	77
Par Pu Party (隠岐)	24	八人のニセ山伏 合言葉はピュッピュチンParty (大峰)	80
<b>五十七年度夏合宿</b>		軟派ノSSSパーティ(剣・三嶺)	85
富士見会V 大萬・花ちゃん軍団パーティ	27	8人のE・Tパーティ(祖母・傾・大崩)	90
ONLY THIS UNCLE パーメン	31	屋久杉とおともダッチパーティ	95
アホ どうにかしてパーティ	31	ちよっと気分はひよっこりひょうたん島パーティ(西表島)	97
剣立白馬キレット ドキノドキノパーティ	31	Star Sand and Sun Shine Showerパーティ(西表島)	107

屋久 the 中富組 パーティ ..... 113

九重で重九の春パーティ ..... 110

**五十八年度夏合宿**

剣を持った白馬戦士パーティ ..... 117

「時をかける防長っ子」パーティ ..... 118

東洋のマッコウ鯨隊 VS 西洋のダムミアン隊  
北アルプス決戦パーティ ..... 122

銀座のささやき♡低音ボソボソパーティ ..... 128

槍ヶ岳にキッス♡うりうりメロンパーティ ..... 133

はまったの!! 南ア全山ドツボパーティ ..... 138

君の汗は塩見岳 僕の体は赤石だらけ  
みんなそろって北ネー岳パーティ ..... 147

乱、酒ましたパーティ ..... 154

南ア感動のドラマ愛と青春の旅立ちパーティ ..... 161

**年間行事**

一年合宿 ..... 167

ワンゲル杯 ..... 167

80km耐久徒歩 ..... 168

雪上訓練 ..... 170

錬成 ..... 170

県内合W ..... 171

**工 学 部**

執行部総括 ..... 173

はいむるぶしパーティ ..... 174

西表島「苦離島離住パートⅡ」パーティ ..... 175

「朝発(A S A D A C H I)」パーティ ..... 177

落武者隊パーティ ..... 177

タコ特級パーティ ..... 181

**F W**

尾 瀬 ..... 185

大 山 ..... 185

白 山 ..... 186

白馬岳 ..... 186

穂高一槍 ..... 187

芸 北 ..... 187

霧 島 ..... 189

九 重 ..... 190

富士山完全登山 ..... 191

プロフィール ..... 195

部員名簿 ..... 211

OB住所録 ..... 216

私語記

## 主将 あいさつ

23期 主将 岡崎 雅治

ワングエルとは何か？誰もが持っている疑問ではなからうか。自分自身入部当時山岳部から特に危険な岩登りや厳冬期登山を禁止しただけの山登りのクラブだと思っていた。しかし山岳部が頂を旨とするの我々が山を歩くことは全く異なるものである。我々は単に頂を旨とするのではなく、その過程、山の中を歩くことをたのしむものであると思う。そして山に登れるメンバーを求めるのではなく、仲間が集まりそれにあつた山に登るものである。山岳部は山に登りに行き、我々ワングエルは山に歩きに行くものだと思う。

山という言葉をよく使うがワングエル活動の対照は山ではないと思う。でっかい大地・大自然が活動の場である。そしてその一部として山があるのだ。今年度のFWを見てもわかるように、萩往還路、ボートの川下り、サイクリングなど山だけではなく自然を広い視野で見ての活動が目立った。

我々の活動には無限の可能性があるもののように思える。しかしこの可能性には条件がありその中の無限の可能性であると思う。そこでその条件の一つは、各人がもつべきワングエルに対する考え方が必要なのである。先も述べたようにワングエル活動は無数の可能性がある逆に言うワングエル活動に定義はないと思う。あるとすれば個人々々もっているワングエル観であると思う。それすらない人間がワングエルの可能性を伸ばすことは絶対無理である。もう一つの条件は常に安全に

は万全をつくさなくてはいけなく、そうすることが当たり前なのである。危険を侵かしてのワングエリングは我々が求めるワングエリングではないのである。だから我部には安対委員を置き、事前に計画書をチェックするのである。

このふたつの条件を踏まえてのワングエル活動は今までも行なわれていたと思うし、先輩たちからも言われたことがあるかもしれない。しかし私が一番言いたいことは、人それぞれワングエル観がまったく違うことである。同じ考えるにしても深く考える者もいれば、浅く、また広く狭く考える者もいる。その考え方をとやかく言いたいのではなく、まず考える、なぜ自分はワングエルに居るのか、そこから考えれば、おのずと自分自身のワングエル観が築き上げることができるとは思えないだろうか。私は部員一人一人のワングエル観を大切にしたい。

## 五十八年度本部執行部総括

副将 岸 義文

三年生十九名全員執行部、この人数の多さにもかかわらず行事をこなしていつているのも、チームワークの良さであろう。我々の学年は一年の時からお互に仲がよく、語らいの場も多く持ち一つにまとまる時に非常に役に立った。能率の悪さなど欠点はあれど、三年全員の意見が執行部会においてもよく出され長所を生かすことができたいへんよかった。

さて、本年度は合Wの主管もなくともすれば何もやっていない執行

部と受けとられがちであるが、「はじめをつける」「自然に親しむための幅広いワンゲル活動」という二つの執行部方針をもとに様々な活動をした。

まず、あげられるのは合宿における混成Pであろう。合宿といえばオッチェン、メツチェン別々のパーティと考えていた我々が混成で合宿を行うという事は、前例はあれど、様々な困難とぶつかった。また、春合宿を控えており試行錯誤の最中ではあるが、オッチェン、メツチェンが同じ部として活動している我々にとっては、ワンゲルの意義を問うものといえるだろう。

次に、県合の規約の承認がなされた事である。我々が一年の時より、それまで慣習的であった県合の主管などをはっきりさせるための規約づくりが行なわれ、本年度承認の運びとなった。県内のワンゲル部の相互の発展を考えるなら、お互の立場をよく理解しなければならぬ。うまくなされれば相乗作用により、よりすばらしいワンゲルとなるだろう。

そして、ボートでの川下り、サイクリングによるFW、西表へ図書を送る、山口県の山々の小冊子を作ろうという活動が行なわれた。ここで理解しておかなければならないのは、執行部は、いかに他の部員に活動をしやすいかということである。実際に執行部員は応々にして動けない場合が多い。これは、すべての行事を事故なく、また、部員が楽しいと思うように行えるために全エネルギーを使ってしまう、ということである。三年になると授業だとかその準備、レポートが忙しくなるとか暇があればバイトをしなければならぬという現実問題にも直面する。その上、トレーニング、行事に参加させる、クラブのまとまりをつける、他のサークル、他大学のワンゲル、OBと

の交流といった事も仕事がある。八十名のクラブ員を動かすために、執行部は犠牲にならざるを得ない現状がある。

しかし、多くの部員が初心者であったのが一年もたてば、りっぱなワンダラーに成長していくのも執行部の力であろう。誰でもが楽しめ、自己を成長させていくことのできるクラブとして、また、人数である弊害はあれども、多人数であるが故の長所を生かしてできる事をやってゆきたいと思う。

何はともあれ、無事故でこの一年間が過ごせるよう精いっぱい、これから残りの期間がんばってゆく所存である。





昭和57年  
3月10日  
~ 26B

奉  
△  
宿  
28.

## 西表島なめねこパーティ P L 総括

P L 中小路 宗 俊

西表島、自分がこの島へ行くのは昨年につづき二回目である。ではなぜ今回の春合宿に一度行ったことのある西表島を選んだのか？それは西表があまりにも魅力的であり、もう一度、あのジャングルと、青い海を感じて見たいと思ったからである。

さて話変わって、まず合宿の準備であるが、この年は中四を主管したため、とりかかるのが例年に比べて遅れた。それと潮の干満の時間と船の出港日の情報が一月以後にならないと手に入らないため、これが後々、計画に影響してきた。

前回の合宿ではちょうど、合宿後半、南海岸に入った時に、昼に干潮となり、おまけに大潮の日まであったので、リーフが完全に出て、その上を歩けたのでよかった。しかし今回は、船の出港日と干潮の日が合わず、南海岸では、昼に潮が満ちる状態であったので、リーフの上を歩くという、西表でなければ味わうことの出来ない、一つの合宿のメインが出来なかったことが悔やまれる。しかしその他は、北海岸（ここはゴミなどが多くあまりよくなかった。）ジャングル、滝、外離島、南海岸など非常によかった。特に外離からみた東シナ海へ沈む夕日は、激最高であった。

次に主な反省点を述べる。まずPメンが一人、スキー合宿で足を痛めて、行けなくなったことである。スキー場では注意をしていたが、

いきとどかなくて残念であった。他のパーティでも、足を痛める者が出た。今後合宿前のスキーは、今まで以上に慎重を重ねて行なっていく。

次に外離島での過ごし方であるが、ここで三泊したのは少し長すぎたような気がする。最初の準備段階では、一日目は島を一周し、つりなどをし、二日目に島の反対側で、竹や草で小屋を作ったり、外離島の最高地点まで行くことなどを考えていたが実行できず、結局二日目は、個人の自由な島内散策になった。もう少しいろいろすることを考えておいたらよかったと思う。

それからトランシーバーであるが、これは西表のような凹凸のある島ではほとんど役に立たなかった。

以上三つ、最初に述べた干満の時間についてとともに、気のついたことである。

全体として六人のPメン、たいした事故もなく（小さいことはいろいろあったが……）、彼らの頑張りとお力のお蔭で、合宿を無事終了し、かつ彼らに西表のジャングルと青い海の素晴らしさを味わってもらえたことに満足している。

今後もし西表への合宿をいろいろアイデアをこらして行って欲しいと思う。西表の青い海とジャングルは決して君達の期待を裏切ることはないだろう。



## 西表なめねこパーティSLD 日記

前田孝志

三月十日

我々なめねこ軍団は、千年に一度の惑星直例があるという吉日に山口を出発したのであった。といっても惑星など肉眼では見える訳なかった。途中、小郡、宇部、小野田、下関と多大な差し入れを頂き、両手が一杯で涙が出るほど皆感謝感激して博多港から船に乗り、即、安眠に入る。船内では、カップラーメンとおにぎりとの格闘が始まるのであった。私事ではあるが、前年の春合宿のPLの松沢氏から煙草一本頂きそれを合宿終了時に喫ったのである。

三月十一日

船内で一泊しだるいだらう船旅が続く。暇であった。船外は雨、甲板に出ても何も見えない。食べるか寝るかすることがない。午後3時、漸く那覇港へ到着。確かに南国、暖かい。七時、石垣行の船に乗る。また退屈な船旅が始まる。クイーンエリザベス号のような優雅さは微塵もない。既に合宿後の計画をする者、トランプする者、只々寝る者、様々であった。やっと差し入れのおにぎりがなくなる。

三月十二日 晴れのち雨

午後2時半、石垣島に着く。そこから小型船でイリオモテヤマネコ

の本拠地、憧れの西表島に上陸。皆船中と違って合宿前の緊張感が溢れている。さあ出発という時、定期バスが出て行った。数百メートルほどロードして海岸沿いを歩く。浜辺はお世辞にも奇麗とは言えずゴミが打ち上げられていた。途中、小島がスリッパを落したと嘆いていたが、左右逆のビーチサンダルを拾い満足していた。ドジな男だ。東風が強くなり雨が降り出したので適当な場所を見つけて、テントを張る。

三月十三日 晴れ 五時二十分起床

今日は全行程ロード。起伏のあまりない道、蒸すような暑さ、皆バテ気味だった。途中、馬の〇〇〇が笑いを誘ってくれただけだった。昼のエッセンが終ってから、平野と私で由布島へ渡ってみた。がそこは既に観光化されていておもしろくなかった。古見に到着すると古見焼の兄ちゃんにコーヒーを頂き雑談をした。大百足、ヒル、別れ浜の幽霊の話聞いていた時、PL氏は顔がひきつっているように見えた。

三月十四日 小雨のち晴れ 四時二十分起床

この日は、合宿のメインである西表島の横断である。初めの一本は小雨が降っていた。横断道の入り口まで牧場みたいな所を通る。そこからはジャングルの中、視界はまったくなかった。所々にあまりはつきりしない看板がある程度だが、道は、はつきりしていた。途中、PL氏がトランシーバーでメッチェンPと定期交信を幾度も試みられたが、結局交信は出来なかった。後で解ったのであるが、原因は相手方がスイッチを入れていなかったそうです。ジャングルの中でヤマネコに会えるかも、と僅かながら期待していたのに、彼らは現われてくれ

なかった。残念。カンピレーの滝に着くと皆一斉に、洗濯を始める。ビバーク好きの棟久は、この日から毎日テントの外に寝ていたようだ。この日は、蚊にも悩まされた夜でもありました。

三月十五日 快晴 六時起床

テン場から軍艦岩まで遊歩道を歩き、マリウドの滝、展望台で写真を撮り船付場でサバニを待つ。サバニから降りてロード二本。西表では、この時期に田植えが始まっていた。機械ではなく人間の手で稲を植えている。琉球の風情を味わうのには申し分なかったが、灼熱の太陽の下、流石に足に応える。白浜のバス停でエッセンを済ませ、サバニで外離島に渡り半日のんびりしていた。エッセン前メッチェンが貝を拾って帰って来た。ラジオから松田聖子の「赤いスイートピー」が流れてくると、まるでメッチェンを無視して聞き入っていた。

三月十六日 晴れ 七時起床

今日は島内巡り、釣り道具を持って外離島北海岸で釣りをする。竿が4本しかなかったので他の者は何をしていたかという、海パンになって海に潜って熱帯魚と戯れる。水中眼鏡が思ったより役に立った。この辺の魚はのんびりしているみたいで釣りをよく知らない者でもよく釣れた。流石に海っ子の桑原は一番よく釣っていたようだ。どの魚もたいへん奇麗で食べるのが惜しいような気がした。食べてみたがおいしくなかった。エッセンをしてからリーフの上を歩き島を半周してテン場に戻る。

三月十七日 快晴 八時起床

澄みきった青空、エメラルドグリーンの中は数々の珊瑚礁と熱帯魚、この世のパラダイスとも言えるような無人島。そこでの一日は昼寝兼日光浴をして暇をつぶした。行動のない日は、書く事も少ないので、SLにとっては、たいへん助かる。

三月十八日 晴 六時四十分起床

白浜からサバニが九時頃迎えに来てくれた。当然のことだが何故か嬉しかった。途中、ゴリラに似ていると言われれば、そう思えるような岩壁に感心し、暫くしてウダラ川河口に到着。降りた場所は泥沼みたいな所だったがテーピングを目印に歩くとすぐまともな道になり一本で鹿川湾に出る。心配していた大百足は出ず、ヒルがSLの足に付いていただけであった。スパッツが必要かもしれない。テン場に早く着いたので次の別れ浜まで行くか、行くまいか迷ったが、結局行かないことになった。

三月十九日 快晴 五時起床

朝のエッセンの後、前代末間のチョンボが発覚する。わかめ御飯の鍋の中にタワシが入っていたのである。知るの是一年のみ、上級生は何も知らずにおいしそうにわかめ御飯を食べていた。多分、エッセンの一ノ瀬の仕業であろう。潮の具合が悪いので一昨年みたいにリーフの上は歩けないので岩場沿いを歩く。一本と少しの所でクイラ渡りへ入る。後は暑い岩場と砂浜の道、嫌になった。別れ浜ではエッセンをして星の砂を拾い、南風見田ビーチにて幕営する。そこは、数日前に福教大の二人が溺死した所であり、砂浜に供えてあった花束が妙に痛々しかった。晩は大エッセン大会、何故か皆よく腹の中に物が入った。

〔行動記録〕

3 / 10 湯田 — 福岡 〰️  
5:35 9:25 12:00

3 / 11 〰️ 那覇新港 バス 那覇港 〰️  
15:00 19:00

3 / 12 〰️ 石垣港 〰️ 西表島(船浦) --- ①  
8:00 2:30 3:40 4:00 6:05

3 / 13 ① --- 1本 --- 1本 --- 1本 ---  
7:10 7:55 8:20 9:35 9:55 10:45 11:00

--- 1本(エッセン) --- 古見 ②  
11:20 13:20 14:10

3 / 14 ① --- 1本 --- 1本 --- 1本 ---  
6:50 8:00 8:10 9:00 9:10 10:05 10:15

--- 1本 --- 1本(エッセン) --- 1本 ---  
10:40 12:00 12:55 1:45 2:55 3:05

--- カンピレーの滝 ③  
3:15

3 / 15 ① --- マリウド滝 --- 展望台 --- 軍艦岩 サバニ 船付場 --- 粗納 ---  
8:10 9:25 10:05 10:50 11:15

--- 白浜 サバニ 外離島 ④ ⑤ ⑥  
12:10

3 / 16 } 島内散策  
3 / 17 }

3 / 18 ① サバニ ウダラ川河口 --- 鹿川湾 ⑦  
9:20 10:00 10:50

3 / 19 ① --- 1本 --- 1本 --- 1本 --- 別れ浜(エッセン) --- 1本 ---  
7:20 8:15 8:30 9:30 9:45 10:55 11:15 11:35 13:00 13:50 14:20

--- ⑧ 南風見田ビーチ  
14:55

3 / 20 ① --- 南風見崎 --- 大原郵便局  
8:20 9:30 9:50 10:25

三月二十日 六時起床  
久しぶりに集落を見る。水牛を横に見ながら、さとうきび畑の中を歩く。海を眺めるとリーフに打ち上げる横一線の白い波、西表だと実感する。今日で合宿も終ると知ってか、皆の足どりは軽い。あつという間に南風見崎に着く。眺望はよいが、岩膚には黒々とした原油のタールが付着していて少々幻滅した。後は大原郵便局の前にて合宿の成功を祝して沖繩が生んだ「オリオンビール」で乾杯！  
みなさんほんとうに御苦労さんでした。

〔PM〕

P	L	中小路	宗俊	(農3)
S	L	前田	孝志	(経2)
会	計	平野	展康	(経2)
衛	生	棟久	恭司	(理2)
装	備	小島	直樹	(経1)
エ	ッ	一ノ瀬	浩樹	(経1)
気	象	桑原	潤	(経1)



# 西表メツチェン

## トロピカルシャーベツトParty

<行動記録>

3月10日(水) 湯田温泉駅 ＝ 博多駅 タクシー 埠頭 フェリー  
 5:35 9:25 10:30 12:30

11日(木) フェリー 那覇 フェリー  
 15:00 19:00

12日(金) フェリー 石垣島 ~~~~~ 西表大原 bus 古見 1  
 9:40 10:40 11:35 13:21 13:45 20:00

13日(土) 1 — 1 本 — 1 本 — 1 本 — 1 本 — 第1山小屋 —  
 5:15 7:25 8:10 8:25 9:16 9:34 10:21 10:41 11:53 12:45 13:10  
 ESSEN

———— 1 本 — 1 本 — 丁字川 — 第2山小屋 — 1 本 —  
 13:38 14:01 14:51 15:00 15:52 16:30 16:50 17:16 17:25

———— カンピレーの滝 2  
 18:13 22:30

14日(日) 1 — マリウドの滝分岐 (⇨マリウドの滝) — 展望台 — 軍艦岩 サバニ  
 6:00 9:10 9:15 9:42 9:57 10:15 10:37 11:30  
 ESSEN

~~~~~ 舟つき場 — 小学校 — 1 本 — 白浜 サバニ 外離島 3  
 11:59 12:35 13:21 14:03 14:44 14:55 15:25 16:00 16:15 22:45

15日(月) 1 — 峠ぐえ — 1 本 — 1 本 — 4  
 7:00 11:16 11:29 13:53 14:30 15:08 15:55 16:27 18:10 20:00  
 ESSEN

外離島の探策

16日(火) 1 ~~~~~ ウダラ川河口 — 1 本 — 鹿川湾 5  
 7:00 9:10 9:35 9:55 10:39 11:05 11:34

17日(水) 1 — 1 本 — 1 本 — 1 本 — クイラ渡 — 1 本 —  
 7:00 9:00 9:51 10:00 10:56 11:10 12:10 12:25 13:06 14:05 14:52 15:10  
 ESSEN

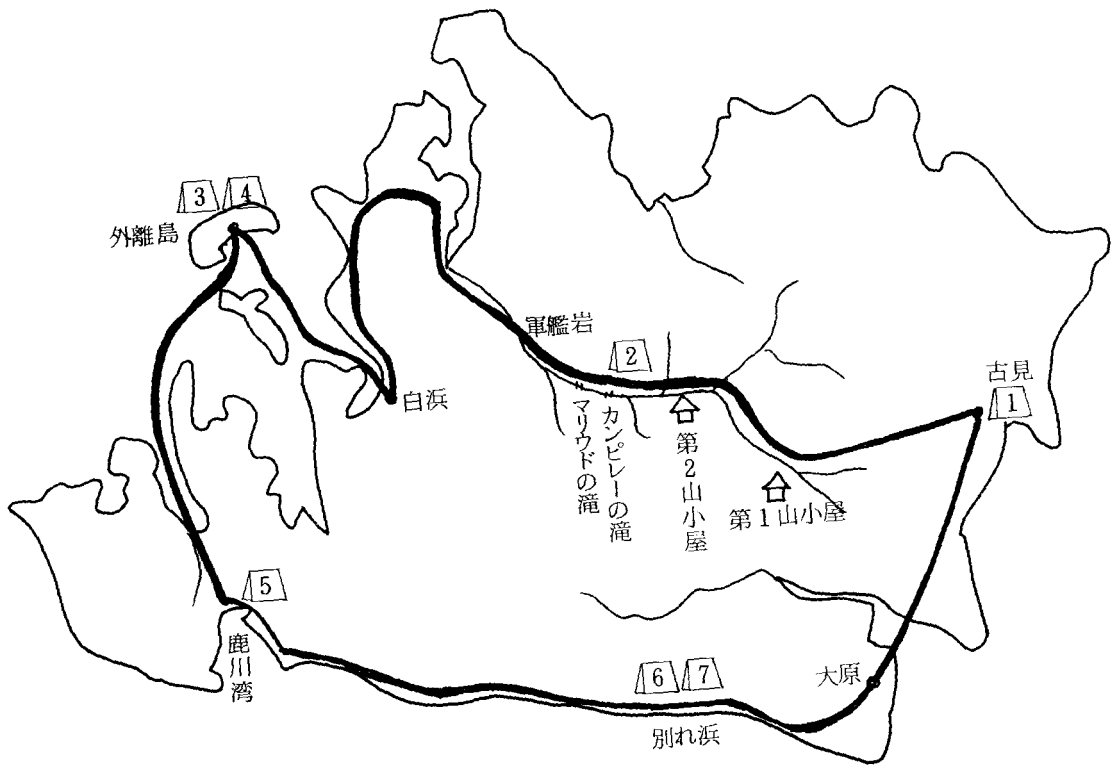
———— 1 本 — 1 本 — 別れ浜 6  
 15:56 16:17 17:07 17:17 17:35 22:30

18日(木) 7 晴沈

19日(金) 1 — 1 本 — 1 本 — 1 本 — 1 本 — 大原 ~~~~~  
 6:00 7:46 8:32 8:45 9:28 9:45 10:32 11:46 12:31 13:00 13:20 15:30  
 ESSEN

~~~~~ 石垣島  
 17:00

< 概念図 >



< Members >

- |          |               |
|----------|---------------|
| PL       | 八木田 美津子 (教 3) |
| SL・会計    | 中 富 史 苗 (経 2) |
| ESSEN・衛生 | 伊 藤 妙 子 (教 1) |
| 装備・気象    | 近 藤 陽 子 (人文1) |

三月十日・十一日

たくさんの差し入れを手にかかえきれないほど持ち、私たちは出発した。博多へ那覇へ石垣へと船で行った。天候がよかったため、船がゆれることも少なく、また差し入れが食べても食べても減らず、快適な船旅であった。沖縄のそばを通ったときにも、まだ実感はいわいてこなかった。

三月十二日

石垣港から、サバニで西表島へ。途中の海がエメラルド色に輝いて、平らな島がよく合っていた。西表島につくと、そこはなんだか異様な密林といった感じだった。これから合宿が始まる。不安と好奇心でいっぱいだった。大原で買い出しをおこない、バス観光所の友利さんに、いろいろ話をきく、それどころか、車で古見まで連れていってくれた。また、珍しいカタガシヤノコギリガニをくれた。まさに、西表の味だ。ほんとうに、友利さんをはじめ、西表の人々の暖かさにふれて感激した。また、サキシマスオウの木を見物、途中でサイクリングで日本一周をしている人に出会った。この日のメニューは、カニと大魚とすきやきという、世にもめずらしい豪華なものだった。これだけたくさんの物が四人のおなかの中におさまった。自分でも信じられない。

三月十三日

古見の小学校を出発。うっそうと茂る密林に入る。西表横断の始まりだ。何の木かは知らないが、どの木も葉が大きく、南国だなあと感じずにはいられなかった。また、ハブの恐怖が忘れられず、どこから出てくるかひやひやだった。異様に大きい葉も見慣れてきたころには、

ハブの恐怖もわすれ、却って疲れがみえはじめた。歩けども歩けども密林から抜け出ることができず、どの辺を行っていいのかもわからず、ただひたすら歩くだけだった。泥がキャラパンの中にまで入り、半分やけになっていた。やっと密林を抜けたところで、近藤さんが、すべって岩の上へ腰から落ちた。さぞかし痛かったことだろうと思う。一瞬体が浮いたと思ったら、その時にはすでに岩の上へおちていたのだから。近藤さんもなんとか動けるようペースをおとして、歩いた。

「もうすぐ着く」と自分に言いかけながら、何度も裏切られたすえ、滝の音が聞こえたときには、本当にうれしかった。体じゅうが、ガクガクになりながらも、十八時十三分、全員無事でやっとカンピレーの滝についた。出発してから十時間四十八分、まさに死闘の一日だった。山女もすでに川を上ぼってきており、その日は、同じ天場だった。暗がりの中でエッセンをし、PM十時三十分、合宿一番の難関を越えて安心して眠った。それにしても、人間の体力って、底しれないものがあるなあ、とつくづく思う。

近藤陽子

三月十四日

三月というのに相変わらずさんと輝くお天気だった。私たち四人はロードの照りかえしに耐えながらサバニへと向かった。サバニはよかった。マンゲローブが生い茂っている川の中を進むのだ。その風景は日本とは思えないアフリカかどこかのようなようだった。サバニを降り

て料金のこと、ひと騒動した。あれは印象的で今思い出しても笑いがでてる。そこからがまたロード。船で外離島に着いた頃はもう薄暗かった。その外離島というのがまた小さな島でロビンソン・クルーソーを思わせるような無人島だ。島について水場を探し、すぐテントをたてエッセンの準備をしていると広島？大野外活動サークルの人が「もずく」をくれた。海藻のもずくを酢としょうゆで調味したものだ。これはなかなかいい。私は気象係だったのだが外離島では台湾放送が入って非常に苦勞した。

三月十五日

午前中は自由時間だった。私たちは絵はがきを書いたり昼寝をしたりのおんぴり過ぎた。ねころがると原始林の上になっ青な空があり、いいところだなあと思った。いつまでもこうしていたいような気持ちだった。午後からはこの島の探索だ。私たちはそれぞれナイロン袋やえんぴつをもって行った。少し行くと海にでた。水着を持って来なかったのがくやしかった。私たちは岩にすいついて貝を武器でとった。やっているうちにだんだんうまくなり、たくさんとった。しばらく行くと、リーフがあった。リーフの上を歩くなんで生まれて初めてだった。私は感動した。足を青い小さな熱帯魚が泳いでいく。すばらしかった。この時は「ワンゲルに入らなかつたらこんな経験などできなかつただろう。入ってよかつたなあ」とつくづく感じた。島を一周した頃はもう日が暮れていた。かなり疲れた。テントに帰ると、オッチェンが着いていた。彼らは海で泳いだそうだ。ここの水場はうっそうとしたところにあるのだが、この日、食器洗いに行つてへビが出た。とても怖かった。

三月十六日

外離島ともお別れだ。これから鹿川へ行くまでのコースは前々から恐れていた。ジャングルなのでヒルなどが出ると言われていたし、かなりきついとも聞いていた。しかし実際は何もでなかつたし二本くらいで着いた。私達はすぐ天然のシャワーを浴び、洗たくをした。水着にきがえ、貝をとったりして遊んだ。それからあの有名な鹿川のおじさんの家を訪れた。去年、三善さんたちがいっしょに撮った写真を持っていった。おじさんは自給自足の仙人のような生活をしていて。私たちがこへ来ることも何日も前からわかつていたというのには驚いた。おじさんとお話をして写真をとった。おじさんはきれいな貝をたくさんくれた。これで私の文は終わりにするが、西表は私にとってとてもすばらしかった。一生の、かけがえない思い出になるだろう。

## 中 富 史 苗

三月十七日

きょうは南海岸に行く。干潮の時間がうまくあわず、岩沿いを歩くことになる。一本目、SLのチョンボで、山の中へ入り込んでしまひ、三十分程ロスする。ギンギンに太陽が照り、まるで真夏。海はきれいに輝いているが、歩いている私たちにとっては、岩からの照り返しは強いし、リーフの倍ぐらい時間はかかり、錬成のロードを思い出す。一年は岩場に慣れていないせいとか、危っかしい。クイラ渡まで、地図から見ると、はるかに遠かった。クイラ渡は、思ったより、道がはつきりとしていた。エッセンの時、水をつい、がぶ飲みしてしまひ、



水不足に悩む。その後少しペースは上がったが、みんな、暑さにより、疲れ気味。ようやく、五時頃、潮が干き、ひざくらいまでつかりながら、リーフの上を歩く。すると、アツというまに、別れ浜に着いた。リーフの上だと楽勝のはずだったのに、非常にきつい一日だった。

三月十八日

きょうは晴れ沈。相変わらずの晴天。海もコバルト色に輝いている。みんな、水着になって、海で貝を採ったり、水浴びをする。おかげで、真っ黒に日焼けしたけれど……。そして、たき木を拾い、かまどを作り、サバイバル的雰囲気、エッセンを作る。夜、この合宿、最初で最後のビバークをすることになる。しかし、別れ浜に幽霊が出るという話があったので、誰が端で寝るかもめ、トランプで決めた。実は、この日、すぐそばの、南風見田海岸で、二人が亡くなっていたんです。今、考えると、ちょっと怖いけれど、砂浜で、波音を聞き、星の輝きの元で、ビバークをした。

三月十九日

きょうはいよいよ石垣島へ。別れ浜から、お土産のために、それぞれ、シャコ貝やタカラ貝など、貝を集めながら、岩沿いに行った。案外早く、南風見田に着いた。ここで、海沿いは終わり。炎天下の中、ロードを二本程歩いて、ようやく大原へ着く。大原で、絵はがきを出した後、ジュースを飲み、アイスクリームを食べた。初めて、西表に上陸した時は、植物の違いのせい、不気味さがあった。合宿を終わった今では、愛着を感じている。もう一度、西表へ来たいと思いつつも、もう来ることはないだろうと思った。そして、西表の美しい海に、

改めて感動し、なごり惜しい気分、フェリーかりゆしで、西表に別れを告げ、石垣へ向った。

最後に、西表は本当にステキな島だった。西表は楽勝だと思っていたが、縦断と、リーフの上を歩けなかったため、かなりきつい日もあった。しかし、西表の海は、私が今まで見た海の中で、一番きれいだった。きっと、これ以上の海は、もう二度と見ないだろう。

山と違った島の魅力を十分に満喫できて、本当に良い合宿だった。それから、八木田さん、どうもありがとうございました。

## 春合宿 P L 総括

八木田 美津子

今回の合宿の反省として次の2つがあげられる。第一番目の反省点は、西表島横断に関してである。予想はしていたものの、一日の行程はかなりハードなものであった。古見小学校を7時30分に出発し天場のカンピラの滝に到着したのは6時すぎであった。横断路は、うっそうと暗く、湿気が多く、ぬかるみのため、大変歩きにくかった。始めのうちは見慣れぬ南国の風景を楽しみながら歩いてきたが、行けども行けども変わらぬうっそうとした風景、そしてぬかるみ道には、皆、少々うんざりさせられたようである。(コース自体は、徒渉を含み、ジャングルの中を歩くという特徴あるものだが)今後また、この横断コースをメッチェンパーティーで行こうとするのなら、途中で一泊することをすすめたい。一日で行くのなら、かなりの覚悟が必要である。

第二の反省点は島という条件から、潮の干満についてである。今回の合宿で、海岸を歩く後半日は、小潮で潮位が低く、その上、干潮時刻は、早朝と夕方であった。リーフの上を歩けるのは干潮の前後2、3時間であり、我々が歩く時は丁度満潮にあたるのが予想できたがフェリーの出航日の都合上、日程は変更できなかった。西表島経験者に相談したところ、慎重に岩を渡ってはいってはいけないことだった。実際に鹿ノ川から別れ浜までの間、潮位は高く、海岸まで迫った山と満々とたたえた海の間わずかな岩をつたって行かなければならず、必要な労力と時間をついやしてしまった。海水の中からリーフが姿をあらわし、その上を歩けるようになったのは、歩き疲れはて、もう天場が見えてきた頃であった。今回の合宿では、私自身あらためて、潮の干満を意識させられた。どの時間に歩くのがよいかと頭を痛めた。夜、寄せては引いていく波とともに、潮が満ちていくのを見ながら、まるで海は「巨大な生き物」だと感じさせられた。今後、西表島に行く時は不必要な疲労をさけるためにも、少しでも早く、船の出航日と潮の干満時刻の資料を入手し、干潮時刻を第一条件に出発日の検討をしてほしい。

きつく単調な西表島横断、リーフの上を歩けなかったことなど、西表は楽勝と言われたのをはね返すほどのハードな合宿となったが、それ以上に、普段の合宿では味わうことのできないような楽しいことを多く経験した。まず、エッセン。今回、私たちの食べたものの中には、魚、かに（以上は西表島交通の方の好意によりいただいたもの）貝、もずく、えびがある。武器を用いてとってきた貝は、御飯にみそ汁に煮つけにと、私たちを楽しませてくれた。また、外離島と内離島との間の砂浜一面に群生するもずくは、一番のおすすめ品である。ただし、

しょう油・酢・だしの素があればのことである。ただパイヤが食べられなかったのは残念である。これは、南海岸には成育していないよなので早目にとって、または島の方からいただいて食べた方がよい。それから、調味料は、海産物をおいしく料理するために、塩、こしょうだけでなく、しょう油、砂糖、酢、だしの素、みそなど、多目に持っていきたい。今回みそを持っていかなかったのだが、途中、出合った方から、みそをいただき、おいしいみそ汁を味わうことができた。他の合宿のように、朝出発を急ぐこともないのだから、朝は、本当のミソ汁をいただきたい。また、今回、横断後はほとんどブスを使わず、石でかまどをつくりたきぎを拾ってきて火を燃やした。板切れでつくった食卓に食器を並べ、星空の下、白いキャンドル（いつものろうそくだが）に火を灯し、波の音を聞きながら味うディナーは格別だった。また、パーメン全員水着を持参し、外離島、鹿ノ川湾、別れ浜と三度も泳いだ。海の色が違う。水平線がぐるりと見渡させる。太陽の光をあびて、光輝く海を目の前にしてはとてもしつとしていられるものではない。外離でテン場から峠を越え、そして目前に海があらわれた時のことは忘れられないだろう。白いサンゴ、小さな青い熱帯魚、海の底がゆらゆら見える……。

合宿最後の夜は砂浜にシュラフを移動し、星を見ながら寝た。はっきり言ってこわかった。誰がはしに寝るかは確かジャンケンかトランプで決めたような気がする。しかし、これも南国での合宿ゆえできることである。風を体感じながら寝た。

予想以上にきつい合宿であったが、4人各々、多くのことを経験できたと思う。

一昔前までは、私たちにとって西表島は道もはっきりしない謎の島

だった。しかし今回、我がパーティの歩いた限りでは道標が整備され道もはっきりしており、迷うことはまず考えられない。もともと、これも天候に恵まれたからこそ言えるのかもしれない。だが、西表島が変わりつつあるのは確かである。残念なことだが、南海岸でもタールが見られ、汚染が始まっていた。

西表島は海あり、ジャングルありで、多くの魅力を秘めた島である。目的を持ち、計画をしっかりと立て、それなりの準備をした上でどんどん行ってほしい。

以上、思いつくままに書いてみたが、西表島に行く時の参考にしてみたらと思う。

## 屋久島るひろ子のニッカーズボンと

キスリングP SL日誌

清藤展生

三月十六日

他の全Pを見送った後、トリを飾って出発、湯田、小郡、厚狭、門司、小倉で多大な差し入れ（中には他のPの分もまじっていたが）をもらい夜行に乗る。

三月十七日 晴れたり雨ったり

鹿児島からフェリーに乗り宮之浦へ。途中船上から屋久島の全貌を見ることができたが、さすが洋上アルプスの名に恥じないものであった。12時45分宮之浦着。バスに間に合わなかったのでタクシーで楠川へ。海拔0mからの出発が今から始まるのだ。楠川に着いた頃、それまで晴れていたのに雨が降りだし、初日の一本目からカッパを着るようになってしまった。ここから三本杉までの間は、雨が降ったり晴れたり非常に悩まされてしまった。三本杉までの登りはたいしたことなかったが夜行の疲れか原田（後々彼には悩まされるのだが）がバテ気味であった。三本杉は屋久島で見る始めての杉ということで皆一応感動していたが、後々になってみるとそれほどすごい物ではなかったようだ。テン場につくとまた雨が降り出した。なんだなんだこの島は。

三月十八日 くもりのち雨

P L氏が、昨日のようなペースでは時間がいくらあっても足りないということから、気象の中桐氏が原田氏の六テンをもつことになった。ここにワンゲル史上初だと思われる共同装備なしのダスター係が誕生。これが最終日まで続くのである。中桐氏は夏に続いて六テンを持つことになってしまいPのためとはいえ何か可哀そうな気がした。さて快調なペースでぐり杉まで来た時、小生メガネのレンズを途中のぬかるみにはまった時に落したのに気づき、探しに戻ったところ運よくぬかるみの中で見つけることができホッとした。小杉谷荘跡からはトラック軌道であり歩幅が合わず非常にだるい思いをした。(中桐氏とP L氏は除く) しかし、途中で初めて見ることができた宮之浦岳や溪流、大株歩道入口の溪流でのんびりしたエッセンは、それまでの大株歩道はその名の通りあっちこちから木の根っこが飛び出している歩きにくいものであった。この後ウィルソン株で初の個人写真を撮り大王杉縄文杉の大きさに全員ビックリし、夫婦杉の形を見て大笑いしこれを見ただけでも屋久島に来たかいたかと思った。テン場につくと明日は雨になりそうだとので、小屋に泊まることにした。今日は思いのほか時間がかかってしまったが全員元気のようにである。

三月十九日 雷雨

沈

昨日の天気がうそのように雷雨となってしまった。やはり屋久島である。この日の夕方に一つの事件がおこったのである。それは、一階

にいた夫婦の使っていたバスの安全弁から突然火が吹き出て、「ポツ」という音とともに我々のいた二階までその火がのぼってきたのである。皆に一瞬恐怖感がおそい、小生は真剣に二階の窓から逃げ出そうと思っていたところだった。 皆さんくれぐれもバスの取り扱いには注意して下さい。

三月二十日 晴れ強風

昨日からの雨もあがり今日は屋久杉に別れを告げていよいよ山に登る日だ。皆快調なペースで樹林帯を通り、白骨林をすぎると視界がひらけ、目の前には緑のじゅうたんに敷きつめられた宮之浦岳と永田岳が現われてきた。皆、そのコントラストの素晴らしさにしばし見とれていたようだ。そこから30分ほど深い溝になっているところを登って行きテン場に到着。ザックを置いて永田岳に向かった。緑のじゅうたんの中を登って行き、さあピークだと思ったところ、どこにも標識がなく、小生のチョンボで十分ほどいったところがピークであった。皆さんゴメンナサイ。ピークからの展望は最高で硫黄島や種子島が海にぽっかり浮んで見え、正面には宮之浦岳が雄大にそびえていた。また海拔0mの水平線が、一六〇〇mの我々の目の高さと同じ所に見える何か不思議な気分であった。

皆十二分に永田岳での展望を味わって分岐のテン場に戻った。今日の行動はこれで終了の予定であったが、テン場に戻ったのが12時ごろであったことと屋久島のことだから明日はガスが入ってしまうのではないかということで、今日のうちに宮之浦岳にもピストンをかけることになった。背丈以上もある草の中をかきわけかきわけようやくピークに到着。

我々は九州で一番高い所にとうとうやってきたのである。その時大田氏は感動のあまり「九州で俺より高い所にいる者はいない」と両手をあげ叫んだのである。みんなあっけにとられていたが大田氏は「お前たちはなぜ感動しないのだ」と説教を始めてしまった。一体彼はなんなんだ。ピークからは先程登ったばかりの永田岳をはじめ、黒味岳、翁岳等360度の展望がのぞめ最高であった。皆思い思いのかつこうで個人写真を撮り、皆でピーク近くにあって小さな鳥居に、これからも合宿がうまくいくように拜んでテン場に戻った。風は一向に弱まりそうではなかったが、この時にこれからくる地獄を予想していた者は、一人もいなかった。

### 三月二十一日 暴風雨のち晴れ

夜半から強風に加え雨が降り出してきた。小生は4テンに寝ていたが夜中何時頃であったらうか、北野氏が呼びにきたので何かと思つたら、何と6テンが風のためつぶれそうになっているとのこと。4テンは大丈夫だったが6テンの方は全員起きており、皆ポールやフレームを持ったままの状態であった。ちょっとでも手を放すと今にもテントがつぶれるといった状態なのである。そのような状態が昼まで延々と8、9時間続いたのである。ろうそくの火の中で皆気がめいっている中で、ラジオからは鶴光の悩みのない声や、「帰ろかな、帰るのよそおかなあ」と尚一層暗くなりそうな気分であった。朝になっても一向に風はおさまりそうになかったが、外が明るくなるにつれてなんとなく気分が落ちついてきたようだ。そんな時、4テンに寝ていたタルが、テントが浸水してきたので寝かせてくれと6テンにやってきたのである。6テンのみんなは、あっけにとられていた。それか

ら交代で朝のエッセンをとったが、その時もテントを支えて片手で食べなければならなかった。その後予報では天気は回復するということであったが、シュラフはビショビショでテントも水びたしになって、このままではどうしようもないということで、永田岳を越えて鹿之沢小屋に緊急避難することになった。雨は小降りになってはいたが、強風の中で必死に撤収をして出発。雨と風とガスの中1m先は何も見えないという状態で現在地が確認できず、本当にたどりつけるか心配であったが、どうにか永田岳に到着。そこで鹿之沢小屋への道標を見てホッとした気分であった。そこから30分下った所だとエアリマップには書いてあったが、いざ行ってみると一時間ほどかかって、ようやく鹿之沢小屋へ到着。皆ホッとしたようである。夕方からは陽も差し始め皆各々に濡れたシュラフやソックスなどを干して、やっと地獄から解放された気分である。

### 三月二十二日 晴れ

夜中急激に冷え込み、小屋は冷蔵庫と化し、みんなほとんど寝れなかったようである。昨日からの雨と急激な冷え込みにもかかわらず、一人も風邪をひかなかったというのは不幸中の幸いだったのではないだろうか。

今日は朝から天気も良く、いざ出発という時に、一人だけダブルヤッケにオーバーズボンという重装備の人間がいた。もちろんタルである。ここまでするともう誰も何も言わないものだ。木と木の間をくぐったり、またいだり悪戦苦闘しながら普通の道に出て、一本で永田岳に登る。途中にろうそく岩なるものがあり予定外のコースでユニークなものを見てしまった。

永田岳は一昨日に続いて2度目。昨日とは大違いである。今日も見晴らしがよく何か得したような気持ちであった。30分程のんびりして、一本で宮之浦岳へ。以下同文。ここを過ぎればあとは下るだけのよなものである。途中翁岳にピストンをかけたが、ピークは岩をよじ登った所にあるため、安全性を考えて登らなかつた。残念。エッセンの後投石平へ。ここは、上を見上げるとこれから登る黒味岳のピークが見える所でなかなかのんびりできる庭園のようであった。皆快調に黒味岳分岐まで行き、そこから我々の登る最後の山黒味岳にピストンをかけた。ピークでは昨日の雨が嘘のように晴れわたり、宮之浦岳や永田岳も見ることができた。考えてみると、屋久島で登る予定の山を今日一日で全部登ったことになる。この3つのピークのうちのピークであつただろうか、一瞬ガスがかかつた時があつたが、その時北野氏が大声で「快晴をかいせエー」と叫んだのである。皆から白い眼で見られていたが、彼のしゃれは世の中すべてをガスにまくようなものである。(PL氏も同レベルだという話もあるが。)黒味岳のピストンも無事終え、花ノ江河、小花ノ江河という原生の湿地帯を回つたが、小花ノ江河の方がよかつたようだ。あとは淀川小屋まで下る一方だが、この下りでタルがバテバテとなつたが、テントも持たずダスターだけを持ってバテられたのではこつちがたまらない。そうこうしているうちに到着。ここにある川はとても美しく定員2人という吊り橋を4人ほどで渡ってしまったが、この橋も今では使用していないようである。今日も小屋に泊ることになった。

三月二十三日 雨


いよいよ今日は下山日である。雨が降っており鯛ノ江の徒渉が心配


されたが、一日ぐらいの雨なら大丈夫ということなので出発することになった。ワンゲルではここ2、3年成功していないコースなので、道もだいぶあれているのではないかと思つていたがそれほどもなく、雨の中を黙々と歩いている岩の上を慎重に渡つた。徒渉も無事終わりに沿って歩いていこうしろで「うーっ」と悲鳴があつたのでふりかえつてみると、又々タルが倒れていた。結局何ということもなかつたが、時間も時間だつたのでそこでエッセンをとることにした。雨が降つて寒かつたのでエッセンを早々に済ませ行動を始めたが、途中何の変つてもない沢を渡つていたところ、今度は「ポチャン」という音がしたのでふりかえつてみると、中桐氏がバランスをくずして沢にはまつて首だけがでているといった状態であつた。彼の顔は完全にひきつっていた。樹林帯に入ると途中で右手に蛇ノ口滝が見えかくれしており、その雄大さは素晴らしいものであつた。途中で一本とり予定には入っていなかつた蛇ノ口滝にピストンをかけたが、雨で川が増水しており、近くまで行くことができず残念であつた。あとはハイキングコースにもなつていゝる所を通つて、やっと尾ノ間に到着。記念写真をとつていろいろあつた合宿も無事完全消化して終了。みなさん本当に御苦労さまでした。最後に未熟なSLで本当にご迷惑をおかけしました。


〈コース・タイム〉 57年春 屋久島

3 / 16 湯田 — 鹿兒島


3 / 17 鹿兒島 — 宮ノ浦 — 楠川 — 一本 — 林道終点 — 一本 —  
1:55 2:10 2:15 2:41 2:45 2:23 3:28


— 三本杉 —  4:34  
4:11 4:22


3 / 18  — 白谷大杉 — くぐり杉 — 小杉谷荘跡 — 大株歩道入口 —  
6:55 7:32 7:45 8:20 8:35 9:20 10:00 11:05 12:05


— ウィルソン株 — 大王杉 — 縄文杉 —  高塚小屋 2:48  
12:25 12:40 1:20 1:35 2:10 2:40

3 / 19 沈


3 / 20  — 一本 — 一本 — 分岐(テン場) — 永田岳 — テン場 —  
7:00 8:38 8:50 9:19 9:30 9:58 10:15 10:50 11:35 12:05 13:35


— ピストン —  
— 宮之浦岳 —  14:45  
13:56 14:30

3 / 21  — 鹿ノ沢小屋  
12:00 13:55

3 / 22  — 永田岳 — 宮ノ浦岳 — 翁岳直下 — 翁岳 — 翁岳直下 —  
6:55 8:17 8:45 10:03 10:30 10:58 11:00 11:14 11:16 11:30 12:15

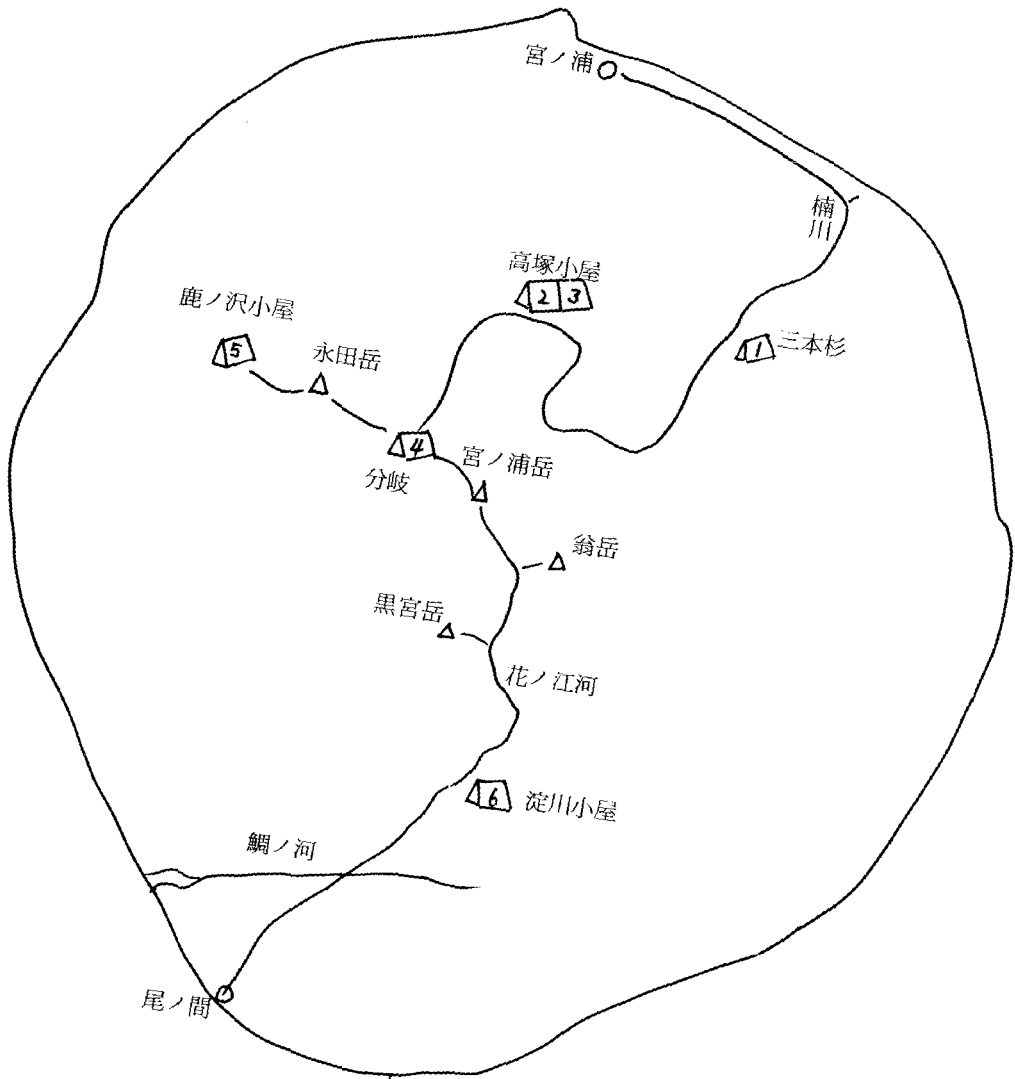
— ピストン —  
— 投石平 — 黒味岳分岐 — 黒味岳 — 分岐 — 花ノ江河 — 小花ノ江河 —  
1:08 1:20 1:45 1:55 2:20 2:45 5:06 5:10 3:25 3:35 3:45 3:50

—  淀川小屋  
4:57

3 / 23  — カップ装着 — 鯛ノ江への下り口 — 徒渉点 — 一本 —  
7:30 7:57 8:03 9:28 9:40 10:20 10:25 11:55 12:25

蛇ノ口滝  
|| ピストン  
— 蛇ノ口滝入口 — 尾ノ間  
2:03 2:55 4:10

〔概念図〕



|      |   |       |      |
|------|---|-------|------|
| P    | L | 畑瀬茂則  | 経 3  |
| S    | L | 清藤展生  | 経 2  |
| 会    | 計 | 北野慎一郎 | 人文 2 |
| 衛    | 生 | 大田剛   | 農 2  |
| 装    | 備 | 原田和宏  | 経 1  |
| S    | 装 | 下川信幸  | 経 1  |
| エッセン |   | 木村忠由  | 教 1  |
| 気象   |   | 中桐清志  | 経 1  |



## 剣山 P 合宿日誌

一年 岸 義 文

三月十六日

湯田駅出発。小郡にて宇部短の見送りをうけて、主将さんの力の偉大さを感じる。広島駅ではMさんの見送りを受けて・・・  
岡山駅でステーション。

三月十七日

岡山から列車、連絡船、バスとのりついで川上まで。途中のバスの中での出来事だった。『老人会は二十日にある』とおじいさんが話をしている、川原氏は二十日にひとり下山しなければならぬとみんなで大笑いした。バスから見える山々は、雪がなくなみなガツカリとした表情だった。

三月十八日

剣山を自指して、登り始める。雨が降り出したので剣神社で様子を見る。岡崎氏が入れるくらいの穴から、岡崎が中に入って戸を開け、小屋の中に入った。暗やみの中で全員かくれんぼをした。富高さんが一人だけ最後までみつからずみんなでさがしたが見つからず、みんなどこにかくれたんだらうと思っていたら影が八つあった。一の森ヒュッテでは、-5°の寒さであった。

三月十九日

一の森ピークにピストン剣山に向かう、ほとんど雪なし。次郎を越え丸石のテン場をとばして白髪分岐にてテン場。途中の笹の原で、階級闘争をして明日の起床を決めた。上田に決まりそれからの一本の上田氏の暗さは想像を絶するものだった。予定の一日半の行程で疲れた我々一年生は夕めしを作りながら「一年は上級生のめしたきばっかりでただ重い荷物を持たされて歩くばかりじゃ」と話をしていたらテント内で上級生が笑っていた。

三月二十日

「起床！」「上田、外の様子どや？」PL氏。「ザー……、ザー……、ぶりです」後で思い出すたびにおかしい会話でした。沈になりPL氏の目つきがおかしくなる。菊池さんがスポーツ新聞の例の部分を感じをこめて朗読すると、PL氏大いに喜ぶ。

三月二十一日

午後より白髪山にピストンガスって何も見えず。そして、三嶺へ。三嶺小屋では、昨日の沈でタバコを吸いつくした上級生は「シークレ」という言葉でシケもくを吸っていた。すべて、禁煙するといいなながらタバコを持たず入山したT氏のタバコの吸いすぎが原因であった。ここまで来て、便秘に苦しむN氏の手はグローブ以上の大きさだった。

三月二十二日

御来迎を仰ぐはずの三嶺ピークで、サブザックを小屋に忘れた川原氏のため、PLも日の出を見れずガツカリ。本日、長い長い行程最終

日にやっと晴天、三嶺を遠くに眺めながらの下山。ついでに道を見失  
いkmの下りの長い長いブッシュ。お疲れさん高知に向かう列車の中  
8人は酔いたんぼりでうれしそうな顔でした。

青春の門パーティ  
鈴鹿編

P L 本田俊秀 (経3)  
S L 石川圭一 (教2)  
会計 田中康弘 (経2)  
衛生 原田卓也 (教2)  
装 備 西田圭吾 (工1)  
Sub装備 斉藤昌彦 (農1)  
Essen 田中正則 (経1)  
気 象 佐藤明次 (経1)

3/16 花折峠 — 分岐 — 荒木峠 [1] (8:00 就寝)  
2:15 2:26 2:35 (X) 2:45 3:26

3/17 [ ] — 権現山 — ホッケ山 — 小女郎峠 — (峠) —  
4:30 6:45 7:37 8:10 8:44 9:05 9:32 10:03 10:08  
9:37 ↙ 9:58 ↘  
小女郎池

— 蓬萊山 — エッセン — 打見山 — [2] (8:40 ねる)  
10:44 10:57 11:07 11:40 12:15 12:32 13:26

3/18 [ ] — 葛川峠 — 烏谷山 — 南比良峠 [3] (8:16)  
4:30 12:05 13:04 13:15 13:58 14:10 15:16

3/19 [ ] — 金屎峠 — さんじょう [4] (9:00)  
4:30 7:05 8:04 8:22 9:03 ↑ 11:08  
9:22  
10:12 ↓ 10:20  
釈迦岳

3/20 [5] 沈

3/21 [6] 沈

3/22 [ ] — — 本 — 武奈ヶ岳 — (ワサビ峠) — (御殿山) —  
4:30 6:32 7:32 8:42 9:12 9:50 10:15 10:22

— 本 — 坊村 — 京都へ  
10:42 10:52 11:40

春合宿  
"比良"  
S L 日誌

岡  
俊  
子

三月十六日

京都駅まで新幹線、京都から堅田駅まで湖西線（山口線といい勝負）に乗る。「湖西線」というのは琵琶湖の西沿いを通っているという由来のようです。比良の山々は電車の中から見ると、うっすらと雪化粧していた。雪山にかけていた私達五人は少々不満気味。しかしSLはそっと胸をなで下ろしていました。

タクシーで花折峠に着いた時、午後2時15分。今日はここがテン場の予定でしたが天気はこの上なく良いし、みんなもごきげんなので、先へ進むこととなる。陰に雪が残っている程度と喜んでいたのもつかの間、高度が高くなるにつれ、銀世界が広がる。道は、はっきりしていないがテーピングは、しっかりしてあるので助かる。荒木峠に着くと突然視界がひらけ、目の前に日本一の琵琶湖。さすがに大きい。青い湖の中にくじらの形をした島が一つポカンとうかんでいます。そして夜食はブルーベリーフラッペ。そして明日の起床はトラップの苦手なシータちゃんです。

|          |         |     |
|----------|---------|-----|
| P L      | 三 善 豊 子 | 農 Ⅲ |
| S L      | 岡 俊 子   | 教 Ⅱ |
| 会計       | 藤 永 志津江 | 人文Ⅱ |
| 装備・気象    | 武 田 徳 子 | 農 Ⅰ |
| Essen・衛生 | 八 川 睦 子 | 人文Ⅰ |

三月十七日

朝からきつい登りの連続、残雪少々、頂上が待ち遠しい。パツと視界が開け、眼下に堂々と琵琶湖が横たわり、水面がきらきら輝いている。やや強い風に笹がなびきどこからともなくうぐいすのさえずりが聞こえる。なんとすがすがしい朝だ。雪山への恐怖心はどこへやら、ほっと安心しきつさも忘れる権現山の頂上であった。

ホッケ山の頂上では差し入れのラズベリーソースのかき氷を食べたのでした。欲張って雪をたくさん入れ過ぎたので舌がしびれる程食べたのでした。

生まれて初めて見た樹氷、カリッカリッという歯ごたえでとってもクリスタルな味が広がったのでした。小女郎池の上をまだ新しいどたぐつで、ドンドンと感触をたしかめ、氷の上では三善さん岡さんに近寄らないように細心の注意を払って歩いてみたのでした。

蓬萊山につき、スキー場を下る、こんな時、スキーがあったらナァと考えつつ下っていると嬉しい三善さんからの朗報、お昼のエッセンです。空にはひこうき雲、右手には空を写したようなまっ青な琵琶湖、スキー場の音楽を聴きスキーヤーを見ながらの平和すぎるような昼食。打見山の頂上には不思議な事に水が湧いていたのでした。打見山を下り、ひざまでうまるような深い雪の所にテントをたて、雪だるまを作ってハイ チーズ!!

三月十八日

4時半起床。強い風がビュービュー吹き、雨もパラパラ。エッセン終了後、三善さんが9時の天気図をとってから、様子を見て決める：と言われる。雪をとってきて水を作り、コーヒーを飲んだ。風は相変

わらず強く、昨日までの春の雰囲気はどこへやら、冬のまっ最中に逆戻りしたようです。暇つぶしに松沢さん差し入れのDrスランプアラレちゃんの絵本を開くと、テントにチカチカと何か当たる音：んちゃ、アラレちゃんが降ってきた。それからその絵本を囲み、その絵本の色あてテストという高度なテストをやる。

雨は止み、お昼のエッセン後いよいよ出発。少し歩くとあれ程吹いていた風もピタリと止んだ。樹林の間をうねうね歩く。樹氷がとってまきれい。一本で比良山頂。まっ青な琵琶湖が見え感激した。そこから急な下りをズボズボ下る。葛川越のあたりで、又あられが降り出し風も強くなってきた。今度は急登をエッサカ登り烏谷山。そして一本で今日のテン場、南比良峠へ到着。

エッセン終了後のひと時、濡れた靴下や軍手などをブスで乾かす。ブスがつくとテント内がホッカリした雰囲気になります。8時過ぎ、今晚は冷えそう、ということ、みんなありったけの服を着込んでお休みなさあーい。

三月十九日

昨夜の冷え込みで雪がガチガチに凍っている。ペグが抜けにくい。堂満岳はトラバースしていくことになる。途中一カ所、緊張したが、稜線に行くよりは正解。

風もなく天気も良かったのがピストンの途中から雲が。北比良峠のロッジのテレビは、今夜から雨と伝えている。PLさんとT嬢が展望台を視察に。結局、そこにテントを張ることになる。

夕方よりガス出る。ロッジのコック氏とバイトの女子大生と少し話す。比良でもガスに迷って遭難する人が結構いるとか。低山といっ

もやはり山なのだと改めて実感する。

(S・F)

4:30 起床  
7:05  
8:05 金鷲峠  
8:25  
9:05 北比良峠  
9:23 ピストン

積迎岳 ピストン  
11:08 峠

三月二十日

今日は沈、九州地方から関東地方にかけて前線あり。中国大陸にも低気圧、あしたもたぶん雨ではないかと思う。あたり一面霧がたちこめており視界が悪い。はやく下山したいよー。三善さんは明日晴れるとおっしゃっているが、私は思わない。帰りたいのが先に立っておまけに腹も立ってきた。ぐるっと見回しても白い霧と細い木以外何も見えない。じっと見ていると、実に美しい。しかし、静けさがそれを不気味に描き出している。聴こえるのは風のうなり声。ひとりでは気が狂いそう、みんながいてほんとによかった。深い霧が明日は晴れる事を望む。

武出 徳子

三月二十一日

4時半起床。外は相変わらず雨がピトピト。ガスもかかってきたけど昨日ほど濃くない。お茶づけを食べ一息つく、しばらくケーキやおいしい食べ物の話に花が咲く。そして松沢さんの差し入れの黒砂糖あめをかみしめながら、夢のような話だなぁーとしみじみ。外は風が

強くなってきた。おなかすいたあし。

今日もチン。この合宿、最初のうちはすごく早く行程が消化できたけど、最後になって悪天に見舞われてしまった。他のパーティも今頃チンしてるのかな？

雨まじりの風の中をロッジまで水汲み。こんな日にも、スキーか登山か知らないけど、ゴンドラに乗ってくる人がいる。

夕方天気図をとって明日の天気予報は晴／＼ ャッタァ／＼ 明日の晴れを祈って、トップでテルテル坊をつくった。明日天気になあれ／＼ それにしてもすごい風。ここ展望台から見る夜景は最高でした。



## S L 日誌 春合宿・隠岐

井野

三月十六日

いよいよ合宿出発の日。湯田駅から「特急おき」に乗って米子まで、そして鈍行に乗りかえ安来まで逆もどりしてOBの山本氏宅で一泊させてもらう。

三月十七日

七類港からフェリーに乗っていよいよ隠岐に到着。浦郷港で山女の寺戸さんの出迎えをうける。ここから島内バスに乗って珍崎に。昼のエッセンをたべ、ここで水を民家よりもらって歩くこと約30分で珍崎キャンプ場に到着。この日は快晴でキャンプ場からの夕焼けがたいへん美しかった。

三月十八日

またまた快晴。今日は黒崎鼻までの散索といったところ。隠岐は日本海に面した部分に断がい、絶壁が多くみられる。黒崎鼻からは海岸ぞいに歩いて珍崎からテン場までもどる。昼からは、各自気ままに過ごした。

三月十九日

今日も晴れた。暗雲を呼ぶ男橋田が同じパーティに居ながらこの快挙である。今日は、予定では合宿中最も長い行程の日で、日本海側に沿って国賀浦までである。途中、矢走26穴（絶壁の下の方に波に侵食された26の穴がある）や大神立岩（侵食されて鋭くがっている）など自然の造形美が随所でみられた。

赤岩の絶壁とのコントラストがひじょうに印象的であった。

三月二十日

ついに天候が崩れ、小雨が降る中を歩く。255mの絶壁摩天崖も360°ガスでは何も見えない。今日は船越海水浴場の近くでテントを張る。

三月二十一日

沈。近くの人にイカをもらって食べた。

三月二十二日

くもり。ブッシュの中を高崎山に登る。ピークではガス、写真をとってすぐ耳々浦のほうに下る。耳々浦でテント場の予定であったが、合宿前の事前調査では本来あるはずの水場が枯れていて使えず、やむなく、アカハゲ山に向う。しかし、アカハゲ山頂のキャンプ場も水が枯れて出ない。水がないと話にならないのでとにかく下山して民家から水を分けてもらうことになり、下山して、神社の境内にテントを張った。到着したときにはもう5時近かった。

三月二十三日

いよいよ合宿も最終日である。知夫赤壁にピストンをかける。赤壁は合宿の最後を飾るにふさわしく、澄みきった青い海水に侵食された





'82

# 夏合宿



南北アルプス

昭和57年7月21日

8月3日



## 82年度夏合宿 P L総括

前田孝志

一九八二年、七月二十七日午前、ヤレヤレ峠を越えて畑薙大吊橋を渡り、バス停に到着する頃になると、安堵と満足感で感極まる思いであった。P Lとして、合宿を大過なく終了出来たことが唯々嬉しくて列の最後尾からパーメンに「よくやってくれて有難う」と繰り返し、繰り返し心で言いながら歩いた情景が想い浮んでくる。

既に一年以上の月日が流れてその合宿を省りみると、悪天候による障害が大きく、前半は結構好天に恵まれたが、後半は雨の降らない日はなかった。皆雨の連続で気が滅入りがちで、結局は聖以南は雨の中を下山した。今年だったら、おしんのように辛抱して、「晴れるまで待とう南アルプス」という家康型山行に於て悪天は百も承知していたのに、又、P Lは常に最悪の事態を考慮してはいけけないのに尚且つ安全とは言えない雨の山行を強いた。精神面の甘さが見事に露呈されてしまった。すべての救いは、各人各様南アルプスを満喫してくれたことであろう。

この合宿の成果は、軽量化と健康管理を随分件った事だ。後者は所詮各自の自覚に因る以外に無かったが、皆よく自覚していて、ベストの体調で入山出来た。前者については、入山時平均二十三kg(水、差し入れなし)であった。エッセンの悲惨さ、テント生活の不便さは強いられたが、長期合宿をするうえで避け難い事ではなからうか。ワ

ンゲル活動の最大の行事である合宿を楽しいF・Wの様には考えないで、一味も二味も違った厳しい山行であると捉えて欲しいと思う。又、トレーニング、錬成、ミーティングは、その為のものであった。最後に、未熟なP Lであったが、合宿で体得したものを各自糧にして、山大ワングルの伝統に恥じない立派なワンダラーになることを期待して筆を置く。

### 南アルプス全山パーティSL日誌

宮本博

7/16(雨)

大雨洪水注意報発令中のドツボの出発だった。雨の中湯田温泉駅までの1本はえらい。この天気ではあったがP L氏の人柄が多ぜいの見送りを受け、出発する。豊橋から伊那北までは4時間30分という超ロング普通列車で、ひまでひまでしかたない。雨の中伊那北駅でステーションする。

7/17(雨↓曇)

今合宿の前途を暗示するかのよう雨の中を出発する。北沢峠で雨の様子をみていると小降りになってきたので甲斐駒へのピストンを決行する。ガスのピークでエッセンをとっているとガスが切れて展望が広がった。北アルプス・八ヶ岳・甲府盆地・奥父秩・中央アルプス・

南アルプスの山々、みごとにながめだ。P.L.の判断は正しかった。

### 7/18 (曇時々晴)

ヤブ沢新道の急登を登り切ると、お花畑の中を歩いて馬の背に出た。高度障害でゼーゼー苦しみながら登る。昨日登った甲斐駒の白い山肌がブキミである。仙丈山荘のテント場は水場も近く、北アルプス・甲斐駒を望め、南アルプスで最高の部類に入と思う。仙丈岳にピストンする。仙丈岳のピークからは、日本1の峰富士山と第2峰の北岳が重なる。北岳がえらい大きく見えた。

### 7/19 (曇のち晴)

やたら寒い仙丈岳のピークで御来光を待つが雲が出て失敗する。この日も展望がよく、北アルプスや南アルプス南部が手に取るようにみえた。両俣小屋までは馬鹿尾根を下ってゆく。この尾根がくせ者でダラダラしたアップダウンが続き実にしょうもないし終りがなかなかこない。雨まで降り出した。単なるコース消化の日だった。

### 7/20 (曇のち晴)

昨日の雨が朝まで残り出発を1時間遅らせ出発する。左俣瀬上は増水して時間がかかった。足を濡らす者数名。落差が100mの急登である。しかし全山のパワーはすごい。バテもせず3本半で北岳へ到着する。日本第2の高峰からの展望は天気もよく最高だった。バットレスの高さと、これから行く南アルプス南部の遠さが印象に残っている。

### 7/21 (曇のち雨)

朝、ガスが切れない。出発を遅らしてもダメでガスの中を出発する。途中ガスが切れてやったと思ったが、間の岳のピーク直前からまたガスがでてくる。松本がキジに行つてなかったらいい景色だったろうなあ。なあ松本よ。間の岳から先は雨だった。よく雨の降る合宿だ。熊ノ平道前で医学部パーティーと会う。宇田さんは全山パーティーは眼中にないらしい。メッチェンパーティー、山女パーティーのことを気にしておられた。熊の平での温かいうどんを食べる。濡れた体に嬉しかった。

### 7/22 (晴)

夏山JOYの1日だった。いい天気の中、塩見岳がどんどん近づいてくる。バットレスを正面にしてみる塩見岳はなかなかのものだ。塩見の下りは南アルプス一番の難所で、落石がしょっちゅう起きている。三伏小屋で菊池氏パーティーと再会する。菊池氏一行は入山日で、きれいさっぱり、それにひきかえ我がパーティーは、髯ぼうぼうで体も臭い、えらい差である。

### 7/23 (曇)

有名なピークもない今日の行程は4時間弱で半沈である。高山裏のテント場は暗く汚く陰気なところだ。何もない1日だった。

### 7/24 (曇)

低気圧が九州にあつて、長崎は集中豪雨らしい。悲惨な状況がニュースで伝わってくる。南アルプスの天気も下り坂らしい。急登を登り切った稜線上は強烈な南風が吹き、雲が激しく流れている。中岳分岐

にザックを固め、マッハで悪沢岳へピストンをかける。ピークは寒かったが、空気が澄んでいて遠くまでよく見える。テン場の荒川小屋まで下ると、PL氏曰く「2日分の行程行くぞ」、荒川小屋から赤石岳の登りはひとしきりだ。赤石岳ピークからは南に聖岳の山塊とV字雪渓が、北に今日登った荒川三山がみえる。ピークに立って10分後、またまたガスと雨の攻撃を受け視界がなくなる。ラッキーのみ、あと10分遅れたら何も見えなかっただろう。百間洞露营地で雨に濡れた井野氏パーティーと再会する。お互いにこれから先の情報を交換した。

7/25 (雨)

沈、全てのものが濡れてしまいドツボ。

7/26 (雨)


朝の一時期雨が上がったので出発を決定する。鈴ヶ峰のメッチェンと写真を撮ろうと誘うが断われ、しかたなく男だけの写真をとって出発する。2本目からまた雨になり、ドツボの山行であった。最後の300m峰聖岳では、記念写真をとっただけで通過した。2時間のロングピッチで最後のテン場の聖平へ。テントの中でブスを焚いて暖をとりながらシュラフを乾かす。香ばしいにおいがしてPL氏のシュラフに穴があいていた。


7/27 (雨時々曇)

ガスと雨の中を下山した。景色は全くみえない。畑薙ダムまで一気に1800mを下った。寒かった山の中からだんだん暑くなってくる。ヤレヤレ峠を越え、大吊橋を渡ると、ゴールはすぐそこだ。なんとも

いえない満足感ついにやった全山縦走だ。乾杯のビールは何ともいえずうまかった。

57年夏合宿南ア全山Party コースタイム

7/16 湯田温泉駅  伊那北駅  
6:23 18:52

7/17 伊那北駅  Bus 北沢峠 — 双子山 — 甲斐駒ヶ岳 — 仙水峠 —  
5:00(起床) 6:10 8:10 9:35 10:33 10:45 12:05 1:45 14:55 15:04  
(エッセン)

— 北沢峠 — 北沢小屋 1  
15:50 14:00 14:10 19:30  
(就寝)

7/18 1 — 5:43 — 6:42 — 馬の背ヒュッテ — 仙丈山荘 2  
3:00 4:55 5:55 6:55 7:39 7:50 8:36 8:55 18:00 (就寝)

(8:55 → 9:13 仙丈岳)  
(10:20 ← 10:05)

7/19 2 — 仙丈岳 — 5:58 — 伊那荒倉岳 — 7:50 — 両俣小屋 3  
2:00 3:45 4:08 5:00 6:10 6:49 7:00 8:00 8:45

7/20 3 — 6:26 左俣大滝 7:27 — 8:27 中白根沢の頭 9:32 — 北岳 —  
3:00 5:30 6:37 7:38 8:40 9:43 10:30 11:15  
(エッセン)

— 北岳山荘 4  
12:05 6:00

7/21 4 — 3080 ピーク — 間ノ岳 — 分岐 ( <sup>8:25 8:54</sup> <sub>10:20</sub> 西農鳥岳 <sup>8:56 9:23</sup> <sub>9:25</sub> 農鳥

岳) — 宇田パーティート会う — 熊の平小屋 5  
10:30 11:30 11:45 12:30 5:00

7/22 5 高倉山 4:05 — 5:15 — 北荒川岳 — 北俣岳 — 塩見岳 — 塩見小屋 —  
4:15 5:25 7:15 7:25 8:26 8:36 9:05 9:50 10:45 11:00  
(エッセン)  
— 11:52 — 三伏小屋 6  
12:04 1:08 5:00

7/23 6 — 烏帽子岳 — 小河内岳 — 7:11 — 高山裏露营地 7  
2:00 4:15 4:57 5:07 6:06 6:18 7:20 8:33 5:00

7/24 7 — 4:49 前岳 分岐 ( <sup>6:10</sup> <sub>6:50</sub> 中岳 悪沢岳) — 大聖寺平 — 赤石岳 —  
2:00 3:50 5:00 6:08 7:48 7:00 7:55 8:08 8:20 9:35 9:50

— 百間平 — 百間洞野营地 8  
10:52 11:00 11:40

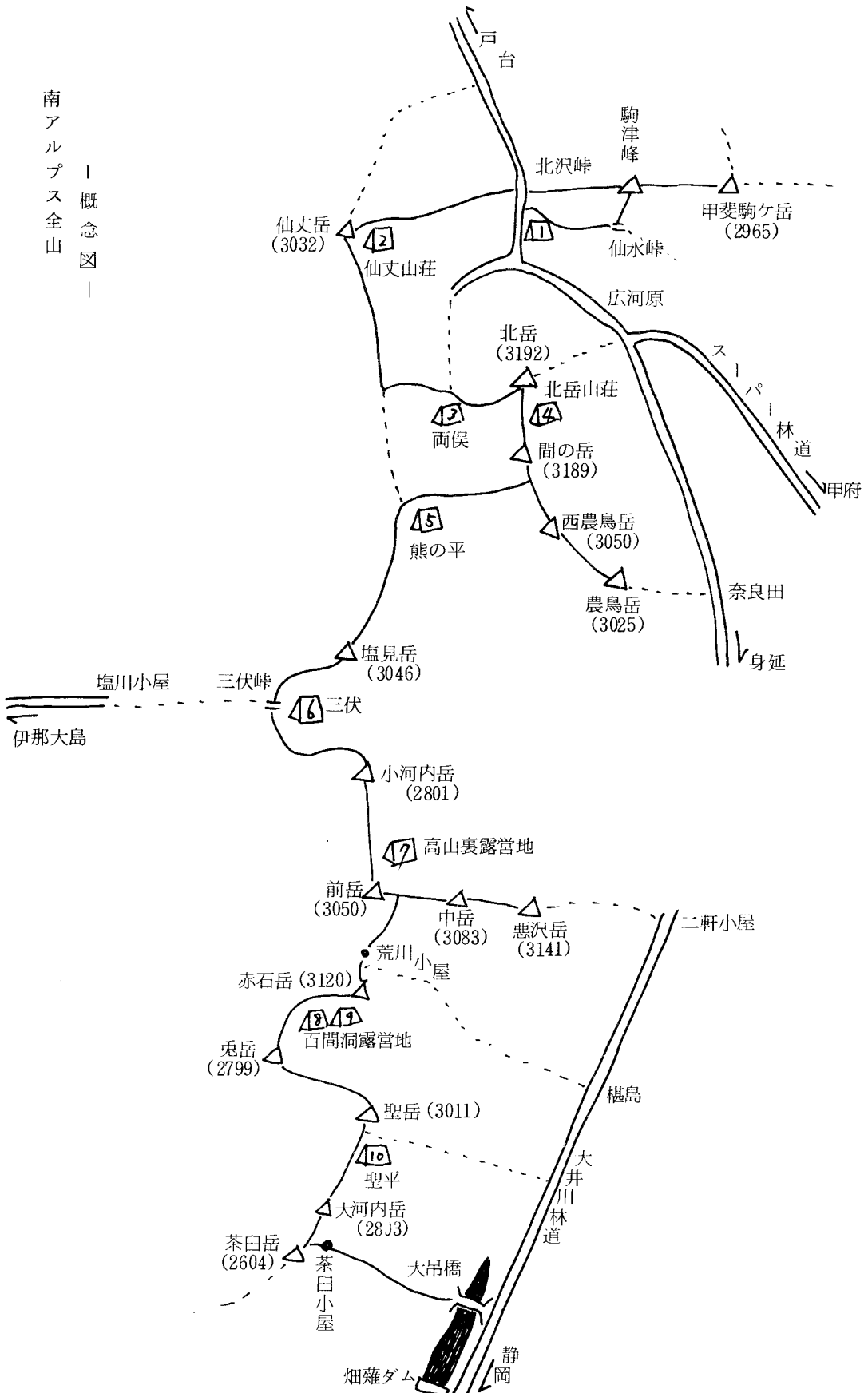
7/25 沈滞 9

7/26 9 — 8:30 中ノ盛丸山 9:47 兎岳 兎岳小屋 — 12:05 聖岳  
3:00 7:40 8:40 9:57 10:27 11:05 12:10 聖平小屋 10  
(エッセン) 2:10

7/27 10 — 5:25 — 茶臼小屋 — 横窪沢小屋 — 畑薙大吊橋 — 畑薙第一ダム BUS  
2:00 4:15 5:35 7:00 7:13 8:15 8:40 10:30 10:35 11:30 12:30

— 静岡駅  
16:10

南アルプス全山  
| 概念図 |



## 南アルプス南部 PL総括

井野博之

本年度の夏合宿は我パーティに関してあまり天候に恵まれず、また、PLの不振等で下級生にはやや不満の残る合宿であったかもしれない。しかし、私自身はパーメンの協力により無事全コース消化でき満足のゆくものであった。ところで、我パーティは合宿前に掲げた目的・方針を達すべく努力してきた。

まず第一に一年生の教育について。一年生の教育については入部した時点からすでに始まっており、夏合宿はそれ以前に学んだ基本的山行技術を長期山行という実践の場において確認・向上させてゆくところに目的があると思う。我パーティにおいては、二年生が中心となり一年を補いつつ教育をおこない成果をあげることができたと思う。

次にパーメン間の親睦について、合宿は一週間以上の長期にわたるものであり、どのような事態がおこるかもしれない。これらに対応できる十分なチームワークこそ重要であると考えから、特にこの点に留意しつつ合宿前のミーティング・トレーニングをおこなったつもりである。

最後にパーティの方針として南アルプスの南部の魅力を知ってもらうことを掲げた。南アルプス、特に南部は3000m級の山がそれぞれに大きなスケールをもちアップダウンの激しさは他の山域にはないものである。南アルプスのこれらの特徴・雄大な景色を十分に体感して

欲しかったのである。

南ア、オンリー、デイス、アンスル  
パーティ―サブリー日誌

一ノ瀬 浩 樹

七月二十二日

前日までの雨は、すっかりと上がり、晴れ間さえ出していた。みんなの顔も明るい。合宿初日にふさわしいすがすがしい朝であった。升川駅から畑薙第一ダムまでバスで向う。ダムからは、勇大な南アルプスの稜線を見ながら大吊橋まで約五十分のロード。大吊橋の長さに感ぜられる。しかし恐ろしい。下を見ると目がまわりそうである。全員渡り終ってひと安心。それから吊橋を四つほど渡り、ウリッコ沢小屋へ着く。そこで昼のエッセンスをすませた後、六百メートルの急登。「きつい、これがアルプスだ」と実感する。昼すぎには、横窪沢小屋へ着く。

七月二十三日

前日と同様過激な急登が続く。茶臼小屋へ着いた時には、全員へとへとであり、話をする元気もない、それから二十分ほど登ると、南アルプスの稜線に着く。はじめてアルプスの稜線に立った喜びで、今までの苦しさも忘れてしまう。そこから最初のピーク茶臼のピストンに向う。あいにくガスが多く百パーセントの展望ではなかったが、ガス

の切れ間から見る南アルプスは、緑一色であった。それからガスは濃くなり、小河内岳のピークは、何も見えず一分ほど写真を撮り、すぐ聖平へと向う。聖平では、鈴ヶ峰のメッチェンパーティーがいて、これからの行程がまったく同じであることを知る。みんなの顔は、当然ニヤケ

七月二十四日

聖岳まで八百メートルの急な登りが続く、ピークからは、勇大な赤石岳をはじめ三百六十度の展望。岡田さんのシャッターの音がさえる。しかしその喜びも束の間、兎岳へ近づくとつれて、雨が強く降りだす。避難小屋で震えながらエッセンを取り、覚悟を決め雨の中、小兎、中盛丸をこえて、百間洞へ向って歩く。天場については二時過ぎで、みんなは、はじめなほど疲れていた。天場にはなんと明日出会うはずの全山パーティーがいるのではないか。彼らは、二日分も天場をとばしていたのである。彼らはもうすぐ合宿が終り、ぼくらは、これからが本番という大きなギャップにますます痛めつけられ、今日は今合宿のうち最も苦しい日であった。

七月二十五日

沈 尾崎と引き替えに鈴ヶ峰の一年生と遊ぶ。

七月二十六日

今日も雨、ぼくと尾崎が寝ていたサブ天は、水溜りができており、気が付いたらそこは、水の流れの真っ只中であった。今日も沈かと思っていたら、鈴ヶ峰がテントを撤収するのを見たパーリー井野氏は、

女が行くならと「行くぞー」の一言。また今日も赤石への急登である。途中朝から体調の悪かった野村がバテる。赤石の避難小屋でエッセンを取る。小屋の壁には、「ぼくは、大人になったら建設大臣になって南アルプスを削ってやる」という落書きがしてあり、野村は、心から共鳴していたようである。赤石のピークでもちよっと写真を撮っただけで、荒川小屋へと向う。

七月二十七日

今日は、めでたい岡田氏の誕生日である。しかし今日もまた雨、雨の中、荒川岳の分岐に向いどうせ行っても展望はないんだとはぶてながらも吹きさらしの中、悪沢岳へピークハントへと向う。やはり悪沢岳からの展望は、ゼロ。晴れていたならあそこに富士山が見えるんだと思いがちながらも現実、現実である。そこから今来た道をもどり、高山裏へと向う。途中なんと晴れ間が見えはじめ、天場についた時には完全に晴れていた。天場では、岡田氏の誕生会ということで鈴ヶ峰と共に花火などをして楽しむ。

七月二十八日

やっと戻った快晴の中、次の天場三伏へと向う。今日は、楽勝の日である。近くに前日越えてきた荒川三山が見える。晴れたらあんなに良い山なのと思いがちながらも、もう戻ることはできない。お花畑が広がる中、小さなアップダウンを繰り返しているうちに板屋岳、大日影山のピークを気付かずに通る。それからなだらかな小河内岳へ登る。富士山をはじめ荒川三山、塩見岳、今まで通ってきた南部の山々、今から向う北部の山々、南アルプスほとんどが見渡せる最高の展

望であった。そこから前小河内、烏帽子岳を越えて三伏へ到着した。

七月二十九日

この日も快晴であった。小ピークを越えているうちに勇大な塩見岳のシルエットがだんだん大きくなり、やがて塩見岳の後から朝日が登る。夢のような一時間であった。今日もあの塩見岳を越えてしまえば楽勝である。塩見小屋までどんどん登り、そこで一本、天狗岩のするどい岩肌が見える。これからの一本は、充分注意しなければならぬ。塩見岳は南アルプス数少ない危険ヶ所である。岩の合い間を三点確保で登る。途中どこかの私立大学のパーティと行き違ったが、その中の一人が石を落とし、はじめて落石の恐ろしさを知る。塩見岳からは、北の果て甲斐駒ヶ岳までも見ることができた。一時間ほどピークで休んだ後仙塩尾根へと進む。小さなアップダウンの後農鳥の稜線を見ながら三本ほどで熊の平へ到着。

七月三十日

また雨が戻って来た。しかしいよいよ後半戦であるということ、やる気充分である。間ノ岳のトラバースルートを通り農鳥小屋へ、そこでザックを置き、農鳥ピストンへ向う。西農鳥も濃鳥も展望ゼロで小屋へ戻って来た時は、みんな体が冷えきっていた。しかし小屋で熱いお茶を飲むと、みんな元気になり、間ノ岳へと向う。間ノ岳もガスの中であった。そこから吹きさらしの中、中白根を越え北岳山荘へと向った。天場についてしばらくすると雨が上がり、ガスもとれ、北岳が姿を現わした。明日は、とうとうあのあこがれの北岳である。

七月三十一日

朝起きると満天の星空、今日は、今合宿ではじめて御来迎を見ることができる。しかも北岳の御来迎である。ぼくらは、北岳一番乗りを目指し、走るように北岳へ向った。北岳のピークは、まだ真っ暗であったが周囲のピークは、確認することができた。それから一時間ほど、あたり一面の雲海の中、富士山の横に太陽が姿を現わす。この景色は、一年に数回しか見ることができないであろう。それから約一時間ピークで楽しんだ後北岳をあとにする。いよいよ下山である。北岳のバットレスを横に見ながら大樺沢をいきおいよく下り広河原に到着する。無事下山。しかも完全消化、大成功である。みんなの顔も一つの大きな事を成し遂げた喜びと満足でいっぱいであった。





〔コースタイム〕

7/22 畑薙ダム — 吊橋 — ヤレヤレ峠 — ウソッコ沢小屋 — 横窪沢小屋 ①  
 7:45 8:35 8:50 9:10 9:20 10:07 11:20 12:47

7/23 ① — Pausl — 樺段 — 稜線 — 茶臼 — 上河内岳 —  
 4:10 4:50 5:00 5:41 5:50 6:46 7:00 7:12 7:45 10:07 10:12

— Pausl — 聖平 ②  
 11:18 11:30 12:04

7/24 ② — 小聖 — Pausl — 聖岳 — Pausl — 兎岳 — Pausl —  
 4:50 6:03 6:13 6:43 6:53 7:23 7:45 8:35 8:45 9:18 10:25 11:43 11:53

— Pausl — Pausl — 百間洞 ③  
 12:15 12:25 1:15 1:25 2:38

7/25 ③ 沈

7/26 ③ — Pausl — Pausl — Pausl — 赤石岳避難小屋 — 赤石岳 —  
 8:00 8:51 9:11 9:50 10:00 11:00 11:10 12:15 12:40 12:41 12:42

— 荒川小屋 ④  
 2:18

7/27 ④ — 8:41 9:00  
 分岐 — 悪沢岳 — Pausl — 高山裏 ⑤  
 5:30 6:40 7:05 8:02 8:10 10:00 10:10 10:55

7/28 ⑤ — Pausl — Pausl — 小河内岳 — 前小河内岳 — 烏帽子岳 —  
 5:15 6:05 6:15 7:10 7:20 8:00 9:00 9:25 9:35 10:02 10:10

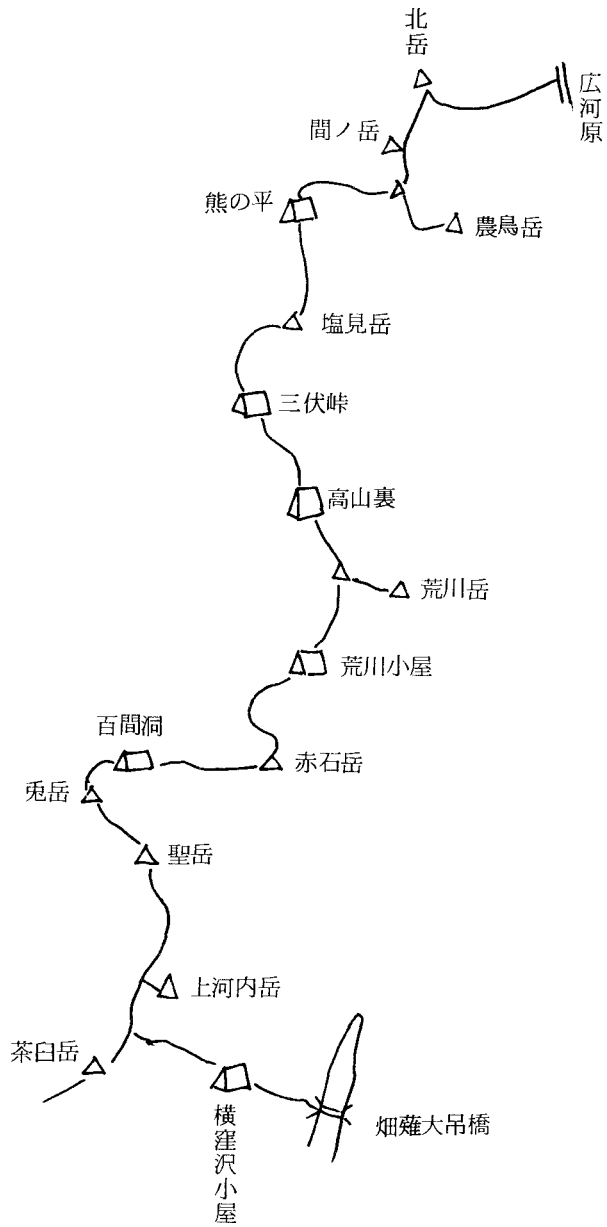
— 三伏小屋 ⑥  
 10:30

7/29 ⑥ — 本谷山 — Pausl — Pausl — 塩見岳 — Pausl — Pausl —  
 4:00 4:43 5:00 5:47 5:57 7:00 7:20 8:00 9:00 9:40 10:30 11:32 11:50

— 熊ノ平 ⑦  
 1:00

7/30 ⑦ — 三国平 — Pausl — 7:50 8:55 7:30  
 (農鳥小屋 — 西農鳥 — 農鳥) —  
 3:10 4:00 4:10 4:50 5:00 5:50 6:05 6:27 6:30 6:50 7:10

— Pausl — 間の岳 — 中白根 — 北岳山荘 ⑧  
 9:43 9:53 10:12 10:45 11:23 11:30 11:55



# 「Panic in ALPS」 P PL総括

清藤展生

今回の合宿は中盤に悪天候が続いたにもかかわらず予定通りコースを消化できたことは幸運であったと言えるだろう。

コースとしてはまず入山2日目に剣ピストンを入れることによりザックを担いで縦走を開始する迄に5食分のエッセンを減らす事ができた。又アプローチの時点で二kmを越す所にいる為一日にkm登るという様な事もせずに済んだ。

又懸念していた槍から一度横尾までkm下って再び溜沢まで800m近く登るといった事も、双六の天場から予想以上のペースで行けたことや天気が良かった事、Pメン全員が合宿中最高の体調であった事など好条件が重なって殺生ヒュッテを飛ばし一挙に横尾を天場とする事によって解決する事ができた。

そしてこのコースはダイヤモンドコースと呼ばれているわりには三俣蓮華岳を過ぎる迄余り人と出会う事もなく十分に山を満喫できるものであった。

次に反省点を挙げると、第一にアプローチにおいて高度二kmを越す室堂まで交通機関を使った為体が慣れておらずPメン(特にPL自身)に高山病の症状がでてしまった。第二に中盤で雨が続いたが、後々の事を考えて一日雨の稜線を歩かせてしまった。

風がそんなに強くなり事故が起らなかったのはよかったが、今後

PLとなる者は雨の日の行動(特に二日以上降り続いた時)をよく考えて欲しいものだと思う。

パーティシップについては合宿前のミーティングの時から終始ユニークで最高のものにする事ができた。

今回の合宿は雨が多かったものの晴れるべき所ではよく晴れてくれて、特にこのコースのメインである剣及び奥穂でPメンの感激の声を聞いた時はこのコースをたててよかったと心から思ったものである。

そして自分にとってもPメンにとってもアルプスの厳しさ、怖さ、そして素晴らしさを感じとる事ができて十分満足のいく合宿になったと思う。

最後に未熟なPLをよく助けてくれた棟久氏、及び二年生そして文句一つ言わずよく頑張ってくれた一年生に感謝すると共にこの合宿で得た事をもとにより一層飛躍し活躍することを祈ってPL総括とする。

## - Party Member -

|        |      |      |
|--------|------|------|
| PL     | 清藤展生 | (経3) |
| SL     | 下川信幸 | (経2) |
| 衛生     | 棟久恭司 | (理3) |
| 会計・S気象 | 斉藤昌彦 | (農2) |
| 装備・気象  | 山崎茂  | (経1) |
| エッセン   | 日野裕幸 | (工1) |

## 夏へ向って

### 槍々行々パーティ S L 日誌

岡崎雅治

二十一日

大正池、帝国ホテル、焼岳、そして河童橋、写真でしか見たことがなかったものが自分の目で見ている。雲の間からは穂高の頂が見えかくれしていた。合宿だ！合宿だ！夏合宿が始まった。本日のテン場は上高地の小梨平。松本Pと一緒。

二十二日

上高地から横尾までは車も出入できる広い道で明神池あたりまでは観光客も多く、ドタ靴とキスリングではちよとばかしはずかしくなる。PLの怒りに触れたK氏は徳沢園から数分、ザックの後ろにヌード写真をはらされて歩くはめになった。ここで全員K氏から離れて肩のネームを隠して歩き他人のふりをする。あーはずかしい。

二十三日

ひたすら汗を流し足元が岩場になった。ふと顔を上げるとまっ青な空に槍が突き出ている。あこがれの槍が目の前にある。ヤッタネー！あんなにもトンガッテルとは思ってもみなかった。ピークからは白い凧をだれかが飛ばしているようだった。実にスバラシイながめ。殺生

にテントを立て槍までピストンをかける。一言、さっきまでの快晴はどこへいったんじや。

二十四日

槍の肩からこれから行く稜線が雨雲の中に見えた。西鎌尾根では足元がしっかりせず一年生を心配しつつ歩く。やっぱり雨が降りはじめ。今日のテン場は双六だ。

二十五日

雨！雨！……沈。

二十六日

雨の中を三俣山荘までズブ濡れで歩く。テントを立てすぐに小屋に逃げこむ。濡れかたがひどかったので本日はテントを放棄して小屋に泊る。ひとつのフトンで二人寝る。それも見も知らぬ人と寝る可能性がある。あまり快眠はできないようだ。ちなみにふかふかフトンではなく、湿気ているフトンでした。

二十七日

雲ノ平は、ほんとうに雲の中になりました。ほとんどアップ・ダウンがなく庭園の中を歩いているようだった。ここで初めて雷鳥を見ることができた。岩の上にチョココンと立っている雷鳥を写真で写つそうと、カメラを取りだそうとしているまにどっかにいってしまった。雲ノ平山荘の帰りはガスも晴れ左手に見れた水晶岳は雄大そのもの、みんなの歓声があるほどだった。しかし明日はあの稜線を歩いて行く

と思うと……。ちなみに本日は三侯においてテントで寝ます。

二十八日

この合宿一番きつい行程の日がきてしまった。一時起床そして三時出発、もちろん懐電行動である。鷲羽岳の途中ふりむくと、みんなの懐電の光が闇の中でまぶしいぐらい明るかった。ピークにつくころには東の空が暗いオレンジ色に染まり太陽が頭をだしかけている。今俺たちは太陽より上を歩いているのだ！なんちゃって。すっかり陽が昇ったころ裏銀座の尾根をはずれ水晶岳へと赤牛へと進む。赤牛のピーク標は赤インクで牛と書いているだけ、だれかが「岡崎の考えそんなことじゃの。」と言う。御尤も。ここからの下りは読売新道といわれる。はつきし言って私はこの道はきらいだ！ただ下るだけで第一、四時間以上もかかる。途中にはIIガンバレジャイアンツIIそれに禁欲生活をしている私たちなのに○○マークを岩に書いている。膝をいためるだけだ、と思いつつテン場の黒部ヒュッテについた。ちなみにA君が雷に弱くT君がやっぱし頭が弱いことがこのテン場でわかった。

二十九日

渡し船を降りるとき、日本カモシカが突然あらわれた。あまり大きくはないが雄壮な姿をしていた。黒部湖を右に見ながら北へ進むとやがて日本最大の黒四ダムへたどりつく。デカイ！やたらとデカイダムだ。ダムの上から下流をのぞくと吸い込まれそうになる。ここでバカをしたのはA君だった。ダムの上は観光客だらけ、その中を歩いていたら俺たち、とつぜん後方でガチャン、ガラガラとナベの音を立ててAがコケタ。みんなの視線が集まり一緒にいた俺たちのほうが赤面しま

した。Aのブアカー。

三十日

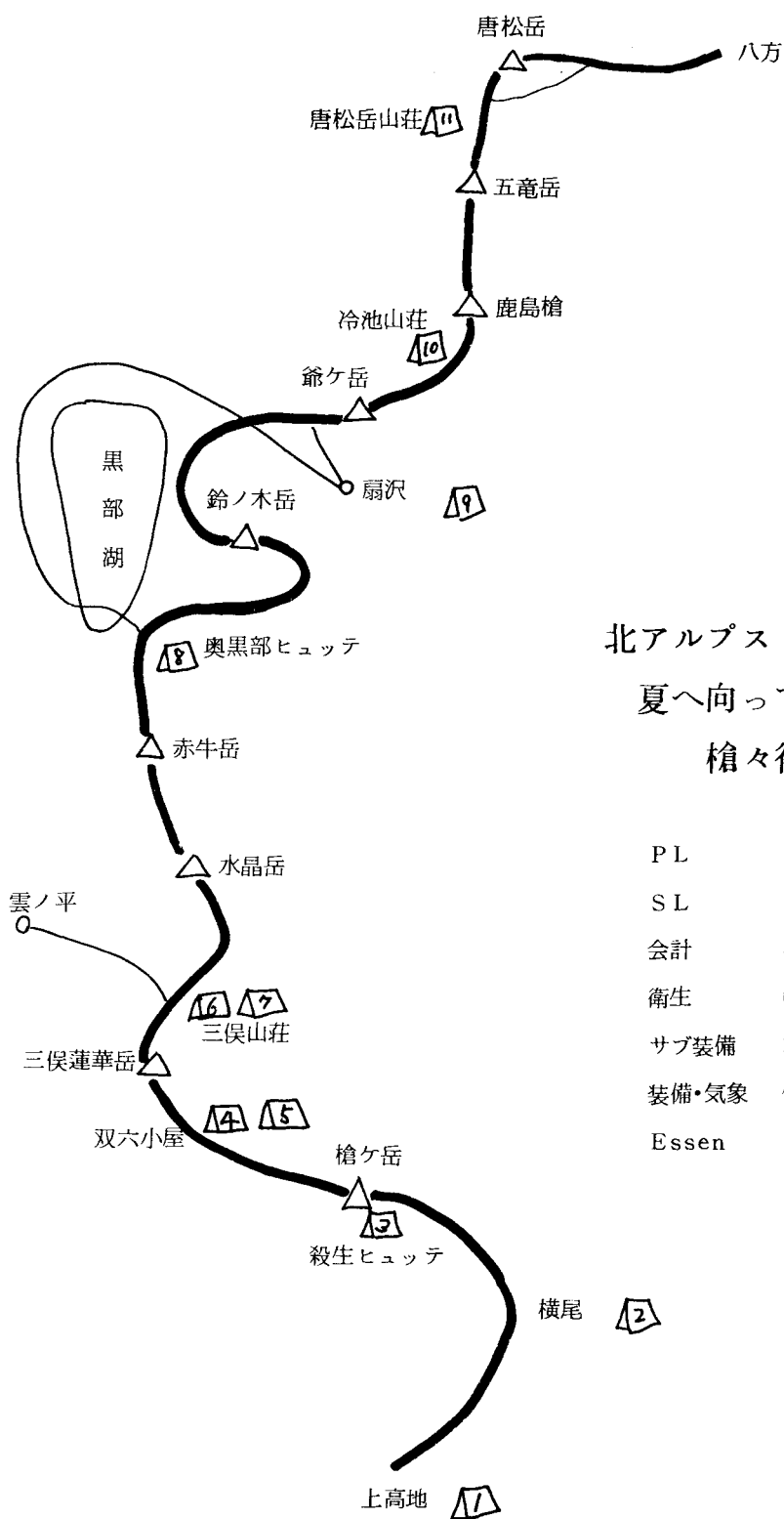
扇沢トローリーバスでステーションし今日は再入山の型で冷池を目ざす。種池山荘の手前で一年をおだてさせマイベースをかけさせると、すなおな二人はほんとうに走りだした。ピークらしいものはなくテン場へついった。池の中に手を入れら「オーつめた池」

三十一日

ふたつ目の槍である鹿島槍から見た槍は三角帽のようにピョコンとそびえている。コース難所である八峰キレットも無事こえられた。立龍のピークは道からはずれている。ガスっていたからただピークを踏んだだけ。唐松岳手前の山荘テン場で本合宿最後の一夜をすこす。明日は下山。

一日

雨だ！台風が接近している。雨の中ひたすらに八方尾根を下る。八方池も白馬も全然見えない。ケルンだけが印象的だった。途中ロープウェイ・ロマンスリフトを使いズブ濡れになりながら白馬駅へとつく。温泉にはいって飲んだビールはやっぱり最高！みなさん御苦勞様でした。




北アルプス … '82 夏…

夏へ向って

槍々行々パーティ

|       |            |
|-------|------------|
| PL    | 富高紳夫 (経3)  |
| SL    | 岡崎雅治 (農2)  |
| 会計    | 橋田忠昭 (医3)  |
| 衛生    | 中桐清志 (経2)  |
| サブ装備  | 木村忠由 (教2)  |
| 装備・気象 | 竹中秀四郎 (経1) |
| Essen | 天野雅紀 (経1)  |

(行程表)

- 21日 上高地 — 小梨平 1  
17:34 17:55
- 22日 □ — 明神池 — 徳沢園 — 横尾 2  
7:20 7:50 8:00 8:35 9:00 9:45
- 23日 □ — ノノ俣 — 本 — 本 — 本 — エッセン — 殺生ヒュッテ —  
4:25 5:15 5:30 6:15 6:35 7:15 7:30 8:05 8:15 8:30 9:15 10:20 11:20  
— 槍ヶ岳P — 殺生ヒュッテ 3  
12:00 12:25 1:20
- 24日 □ — 槍ノ肩 — 本 — 本 — 双六小屋 4  
4:30 4:55 5:05 6:00 6:10 7:00 7:10 8:00
- 25日 沈 5
- 26日 □ — 本 — 三俣山荘 6  
5:50 6:40 6:50 7:35
- 27日 □ — 日本庭園 — エッセン — 雲ノ平小屋 — 本 — 本 —  
7:15 8:20 8:25 9:05 9:50 10:05 11:20 11:50 11:55 1:00 1:05  
— 三俣山荘 7  
1:25
- 28日 □ — 鷲羽岳 — ワリモ岳 — 水晶小屋 — 水晶岳 — 本 —  
3:05 4:05 4:15 4:35 通過 5:15 5:25 5:50 6:05 6:55 7:10  
— 赤牛岳 — 本 — 黒部ヒュッテ 8  
8:20 9:10 10:15 10:30 12:45
- 29日 □ — 本 — 平ノ渡 <sup>船</sup> — 平ノ小屋 — エッセン — 本 —  
8:20 9:25 9:30 9:50 10:30 10:50 11:40 12:40 12:50  
— 本 — 黒部ダム駅 — 扇沢駅 9  
1:35 1:45 2:20 2:50
- 30日 □ — 本 — 本 — 本 — 種池山荘 — 本 —  
4:40 5:30 5:45 6:30 6:45 7:30 7:40 8:15 9:10 9:55 10:05  
— 冷池山荘 10  
10:30
- 31日 □ — 本 — 鹿島槍P — 本 — キレット小屋 — エッセン —  
4:25 5:15 5:20 5:45 6:00 6:45 7:00 7:40 8:00 9:00 9:30  
— 本 — 五竜岳 — 五竜山荘 — 本 — 唐松山荘 11  
10:20 10:35 11:20 11:35 12:05 12:30 1:15 1:35 2:25
- 1日 □ — 八方リフト乗場 下山   
7:30 9:00

## 82 南アルプス小町おっとりP

### PL総括

中 富 史 苗

夏合宿を振り返ると、南アルプスにおいて、メッチェンとして初のコース消化というおまけつきで、合宿が成功して、大変うれしく思う。その成功の理由としては、メッチェンの南アの歴史が浅いため、欲張らずに、無理のないコースだったことがある。また、軽量化（特にダンロップのテント）のおかげで、十八kg以下のザックで出発できたこともある。そして、何よりも、パーメンが雨にぬれつつも、体調も崩さず、元気に頑張ってくれたことが、成功につながったと思う。

しかし、今回の合宿で残念だった事は、天候が悪かった事である。にもかかわらず、雨やガスの中、パーメンがよく歩いてくれて、南アの自然の雄大さを十分に感じられ、山の魅力を知ってくれたと思う。南アは、確かに、千mのアップダウンが何度もある。しかし、メッチェンでも、そのアップダウンは、日頃のトレーニングと錬成を、きちんととして、行く気と根性があれば、体調を崩さない限り、必ず行けるはずだと思う。そして、山のきつさよりも、山の大きさや良さが勝って、南アに行く価値は十分あると思う。

ところで、今年是一年生が多く、上級生が二人しかいなかったため、一年への指導が十分に行えたかは疑問である。一年生はよく働いてくれたが、もっと厳しくすべきだったと思う。また、三年一人だったせ

いもあるが、つくづく PLとしての責任や難しさを感じた。パーメンに、十分な事をできなかったが、みんなよくついてきてくれ、いつも明るいPで、楽しい合宿ができた。本当に、PMに感謝している。どうもありがとう。

## 南アルプス小町

### おっとりパーティー日記

武 田 徳 子

七月二十一日

強尽な体力をもつ恐るべく一年のメッチェン三名、決して黙ることを知らない物静かな中富PL、そんな間に挟まれて不安げに旅立ったのである。伊那北駅につき伊那北駅前の酒屋の町の有力者であろう親切なおじさんの計らいによって、高尾神社という所にテントを張り、先を争うように眠りについたのであった。

七月二十二日

五時〇三分起床、さっそくミキのチョンボ。バスで入山という楽勝なルート、途中で山口さんにばったり会った、相変わらずのたくましさで脱帽。吸い込まれそうな深い谷底。その名の通り、ぎざぎざに尖った鋸岳、これから私たちを待っている未知の世界にわくわくしながら、バスに揺られて北沢峠へ。北沢のテニ場はすぐ横に川が流れてお



り、ちょっと手を洗っただけでも死ぬ程冷たかった。ポカポカと眠りを誘うような暖かさの中で、みんなはお昼寝。なぜか私だけが下見、「ふーんだみんなより先に見れるんだ」と思いながら、丸木橋の数を暗記し、ゴロゴロした岩の道を仙水峠へ。

七月二十三日

二時起床、今日はピストンだ。三時四十分出発。昨日の下見とはうって変わり、まっ暗な道を懐電一本を頼りに歩く心細さよ。次第に明るくなり、石ころゴロゴロの上を歩いて仙水峠へ。「あれが甲斐駒よ」と言って指差されるととても高くそびえたつものに、みんな「えーっ」六万石のところからダイレクトに登る途中、岩に付いた足跡を見失った。ちょっとまちがった所へ出るとぞっとするような崖に出てしまう。まるでゲームをしているように足跡をたどりながら岩をよじ登るスリルと変化に富んだ岩登りにみんな楽しいばかり。下りはまるで合宿でないかのようにピーチクパーチクしゃべりながら下ったのであった。

### 橋本史子

七月二十四日

二時起床。大滝頭まできつい登り。右に折れ少し下る。沢を数度わたる。雪渓が残っている。藪沢小屋から、鋸、甲斐駒が見える。馬ノ背ヒュッテを過ぎ、稜線に出ると仙丈がきれいに見える。南の山は大きく吸いこまれる様だ。雲海がはるか下方に見える。仙丈岳、カールが前方にひらけ、仙丈小屋にテン場をとる。遠くの稜線がはっきりと

見える。十二時過ぎごろから雨が降り始める。天気図をとると、低気圧が接近している。長崎では集中豪雨そうな。明日はカッパ行動だろう。

七月二十五日

三時起床。雨、風とも強く、沈に決定。六時まで二度寝。しかし朝食後、両俣小屋まで行くことになり出発。岐阜大VのOBの方二人に道案内をしてもらう。仙丈に登り、ゆるい下りが続く。伊那荒川を経て横川岳、野田呂川を越え、テン場へ、菊池Pは到着して、エッセン後、岐阜の永田さん、山崎さんと自己紹介、歌を歌い、お開き、明日は沈の予定。

### 吉田美樹

七月二十六日

七時起床。天気は予想通り雨。北岳を越えて北岳山荘にテン場をとる予定を、肩ノ小屋止りに変更。少し水が増えた左俣沢の沢渡りから始まる。甲斐駒の大きな岩に登るのもおもしろかったが、まず右足をこの岩、あの岩に左足：と目で飛んで拵ってから跳ぶ沢渡りも、最高におもしろい。同行した岐阜大OBの方たちは、水の中につかって渡して下さった。また渡る場所にも気を使ってもらったようだ。メッチェンということだけで、迷惑をかけて悪いなあ、と思ったが、でもやはり心強かった。

登り始めてからしばらくして、本来ならば両俣で会うはずの菊池Pとすれ違う。別の道の向こうとこち。Pさん同士の短い会話で別

れてしまった。山大本部の中では、会うことのできる唯一のパーティ  
だっただけに、残念。

その日は肩ノ小屋で半沈。

七月二十七日

三時起床。北岳：とにかくピークで晴れてほしい。富士山が見たい  
よー。こんな毎日、雨で靴下はビチャビチャ。きついだけの登山は嫌  
いだ。起床の時、下界での生活を思い出すと、すぐに起きてシユラ  
フをたたむ気にはなれなかった。

北岳まで一本、<sup>8:36</sup>登頂。ガスって、全然何も見えない。しかし、そ  
こはやはり北岳に登ったうれしさというもの、晴れるまで、と言いつ  
つ、二時間粘った。団結踊り、キングコング、アヒル、くわがたが：  
etc。唄を歌って、結局昼のエッセンをとって、ベンチに記念を残して  
。北岳のガスは、私たちの予想もしない、恥のないはしゃぎように  
も、中富さんの声にも、ビクともしなかったのだが、それでも楽しい  
ピークだった。

北岳山荘へ。ガスがとれ出して、北岳のピークが見えた!! (思えば  
初めて見た) 中白根ノ頭から、道がズーッとつづいているのが見える。  
あの道を歩いて、ここまで来たのだ。やはり人間の力は強いノと思わ  
ずにはられない。富士山も一瞬、うっすらと見えた。やはり高い、  
明日は晴れますように。今までのいやな生活、もうやめたいと思った  
生活が報われた。すぐに忘れてしまう。山はやはりステキだ。

七月二十八日

今日はこの合宿の行程で一番短い<sup>2:40</sup>の日である。そのためプリンも  
ある。昼寝も出来るというわけで、私はこの日を待ち望んで今まで歩  
いてきたのだった。天気も今までずっと雨だったが、前の日の北岳山  
荘のテンバに着いた頃から回復し、上々である。ルンルン気分です歩  
いていると、すぐに間ノ岳に到着。な・なんと間ノ岳からは、日本で一  
番高い富士山と二番目に高い北岳の両方が見えるではないか、頭を  
雲の上に出し、地方の山を見降して：、という歌の文句びつたりの富  
士山は、なだらかな曲線を描き、それと対象的に北岳は鋭いイメージ  
である。私は思わず感激してしまった。そこで、北岳をバックに個人  
シリーズの写真を撮った。(わぁー楽しみ、：しかし後で現像してみ  
ると一人だけ写っていない人がいた。かわいそうな私)それから富士  
山を横目で見ながら歩いていくと、まもなく農鳥小屋に着いた。そこ  
で気付いたことだが、トイレの窓が低い！これでは見えるのでは？  
と思っていたら、そう、見るためにわざわざ低くしてあるそうだ。な  
にを？って、そりゃあもちろん富士山を！とわかって、またまた  
思わず感激してしまった!?

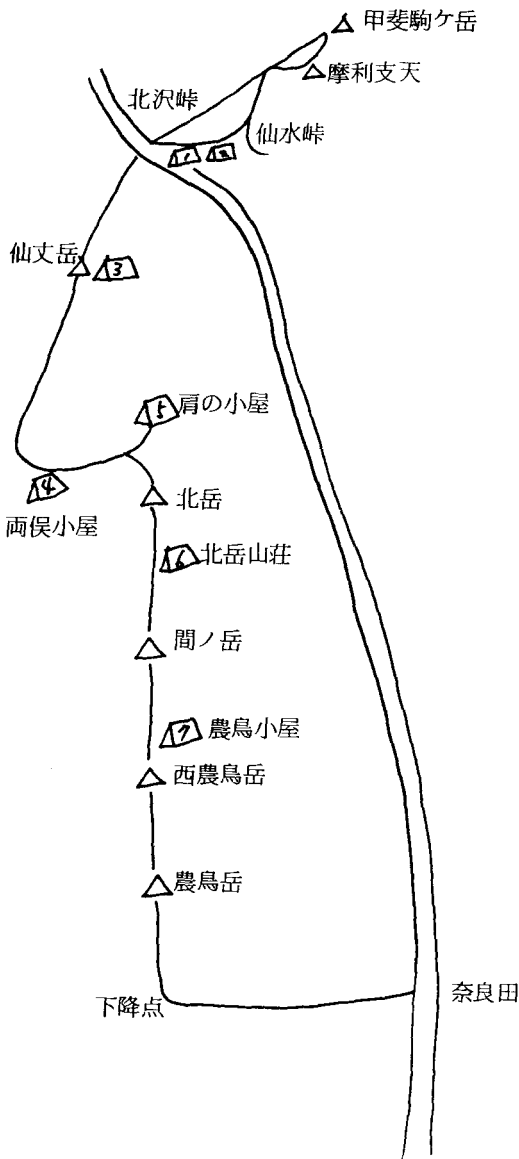
今日は合宿の前半以来の天気よき足が乾く、雨が降ると降らな  
いでは気分的にこうもちがうものかと改めて感じた。

七月二十九日

今日は朝から「アイスクリームが食べたい、お風呂にはいりたい、  
布団で寝たい」といっていたら、あした降りる予定が今日になった。

天気上々、ただただアイスクリーム目指してがんばった。農鳥岳からはきのうにも増して富士山がよく見えた。私達は行っていないが鳳凰山、塩見岳もくっきり、はっきり見えた。しかし南アルプスの山は一つ一つが大きいなあとつくづく感じた。それから、南アルプスの山々に別れを告げて広河内へと一挙に降りていった。この日の行程は7:40だったが、人間ってそういうものなのか、それとも私が単純すぎるのか奈良田の旅館について、一休みした後、きつかったことなど忘れてただだなんとなくうれしさがこみあげてくるだけだった。一年生は先輩にただ追っていくだけ、という傾向があるため、二、三年の先輩方には、大きな負担がかかったのではないかと思う。先輩方を含めたメンバーのみなさん御苦勞様でした。そしてありがとうございます。

〔概念図〕





- Member -

- |       |              |
|-------|--------------|
| PL    | 中 富 史 苗 (経3) |
| SL    | 武 田 徳 子 (豊2) |
| 装備・衛生 | 坂 田 良 子 (教1) |
| 気象    | 橋 本 史 子 (教1) |
| エッセル  | 吉 田 美 樹 (教1) |


(コースタイム)


7/21 湯田温泉 ~~-----~~ 小 郡 <sup>ひかり120号</sup> ~~-----~~ 名古屋 ~~-----~~ 豊 橋 ~~-----~~ 伊那北 [0]  
6:23 6:41 6:51 10:41 11:05 12:20 12:35 18:52


7/22  <sup>bus</sup> 戸台口 <sup>bus</sup> 仙流荘 <sup>bus</sup> 北沢峠 —— 北沢長衛小屋 [1]  
6:01 6:51 7:14 7:21 8:20 9:35 9:40 9:48


7/23  —— 北沢小屋 —— 仙水峠 —— 登りの途中 —— 甲斐駒ヶ岳 —— 分 岐 ——  
3:40 4:20 4:32 4:56 5:03 5:45 5:53 7:21 7:40 8:03


—— 摩利支天 —— 分 岐 —— 六万石 —— 駒津峰 —— 途 中 —— 北沢長衛小屋 [2]  
8:15 8:30 8:40 8:55 9:36 10:06 10:15 11:20 11:31 12:02


7/24  —— 2合目 —— 藪沢小屋 —— 仙丈山荘 [3]  
3:45 4:36 4:45 6:00 6:24 7:38

7/25  —— 仙丈岳 —— 途 中 —— 途 中 —— 途 中 —— 横川岳 —— 両俣小屋 [4]  
7:40 8:02 9:05 9:15 10:19 10:24 11:21 11:49 12:41 12:53 13:51

7/26  —— 左保大滝 —— 途 中 —— 北岳まで1.5km —— 分 岐 —— 北岳肩ノ小屋 [5]  
8:35 10:22 10:35 11:35 11:45 13:00 13:08 13:58 14:10 14:21

7/27  —— 分 岐 —— 北 岳 —— 北岳山荘 [6]  
8:03 8:15 8:37 10:46 11:40

7/28  —— 中白根山 —— 間ノ岳 —— 農鳥小屋 [7]  
4:49 5:19 5:40 6:29 7:07 8:10

7/29  —— 西農鳥 —— 農 鳥 —— 下降点 —— 途 中 —— 途 中 —— 大門沢小屋 ——  
4:58 5:34 5:39 6:18 6:55 7:20 7:30 8:22 8:30 9:03 9:40 10:11 10:35

—— 途 中 —— 途 中 —— 発電所 <sup>bus</sup> 奈良田温泉  
11:35 11:48 12:35 12:50 13:34

## 「よい子の絵日記P」 PL総括

垣田章夫

我部の合宿も年々大型化し、ややシビアになってきている。しかし我部の合宿は他の私大などのワングルとは違いシビアで征服感を求めてやっているのではないと思う。みんながいかかにして山を楽しむか、これが主眼であると思う。そこで自分は合宿に「絵日記」を取り入れた。その効果として、まず合宿後またワングル生活の記念になる。そして山や植物などを観察し描く事によってより山に親しめる。またパーティの雰囲気盛り上げ結束を固める事に少しでも役に立つのでは、など以上のような事を考えた。しかしその結果はしっかり防水をしなかつたため最後にはぼろぼろになってしまった。数々の名画、珍画も……しかしパーティの雰囲気を盛り上げるには大変効果を発揮したと思う。みんなでへたな絵、うまい絵など見せ合いパーティの雰囲気は大変盛り上がった。今後、防水さえしっかりすればよい思い出になると思う。今後も活用しては……

ところで自分のパーティは、折立、槍、大天井、蝶々上高地というもつともポピュラーで比較的楽なコースであった。そのため少々天候が悪くとも全員が余力を残して楽しい山行ができたと思う。一つや二つのピークを増やして余裕のない山行をするより、みんなで楽しく山行を行った方がよいと思った。PLになると何かと強欲になり(自分もそうであったが)あれも登りたいこれも登りたいとなってしまふ。パ

ーメン全員が楽しく快適な山行を行うこれが一番大切であると思う。腹と一緒に八分目がよいのではなからうか。

最後に未熟なPLに本当によくついてきてくれたパーメンに感謝し、パーメンの今後の活躍を祈ってバンザイ三唱ーバンザイ、バンザイ、バンザイー

## よい子の絵日記P SL日誌

田中正則

七月二十一日

大学を出発一三・二二富山駅着 OBの大丸氏の出迎えを受ける。この日は、岡さんPと共に富山大の寮に泊めてもらう。寮でも大丸氏のさし入れビール、スイカ、あげくのはては寮の風呂にまで入る。それにしてもカの多い寮であった。

七月二十二日

この日は折立までの予定であったが、AM八・四五に着いたため、あすのぶんも行動した。天気もよく好調なスタートをきった。それにしても暑かった。

七月二十三日

三日目のきょうは合宿で一番行程の長い日であったが、天気もよくコースも平坦であったため、みんな元気によく歩いた。天場に着くとすぐ小雨が降りだした。

七月二十五日

朝から大雨、沈の決定下る。下界では長崎豪雨のニュースが入り小屋にTVを見に行くが結局見れなかった。午後はテントで雑談をする。それにしても寒い一日であった。

七月二十六日

朝、雨であったが、PLの行くぞという言葉にPメンみんな生ツバをのむ。西鎌の上り、しかも小雨とガスの中Pメンみんなつかれたがなんとか肩に到着。しかしヤリは見えず、殺生へと下る。大雨の中テントを立て、すかさずコーヒーをのむ、みんなふるえ上がっていた。夕方やっと雨が上がり、ヤリを見る。すぐさま、記念撮影。

途中、死にそうな人に出会ってその後ラジオを聞くとその人は死んでいた。

七月二十七日

午前中小屋でツンちゃんPとトランプをした。午後天気が回復したのでヤリへピストン。先にツンちゃんPが登られたので楽勝で登れると思ったのが大まちがいで非常にこわかった。よくもあんなこわい所に小学生たちがよく行くと思った。あげくのはてには雷は聞こえてくるは、まさにオカルトであった。しかしみんなヤリに登ったという満足感にみちていた。

七月二十八日

朝から快晴。殺生↓大天井へと大移動であったが西岳から見たヤリ・ホ etc は最高であった。それにしても最高の一日であった。

七月二十九日

夜中、強風になやまされ、再びネムれぬ夜となる。朝きょうぎの結果、つばくろのピストンはやめとなる。結局常念小屋まで行く。

この日、翌日下山が決まり、エッセン大会となるが、例によって奥丸が食べない。

七月三十日

AM五・〇〇起床、徳下園へ下山する。一二・〇〇前に上高地に着。御苦労さんでした。



〔行程表〕

7/21 湯田 6:23 — 富山駅 13:22 —<sup>バス</sup> 富山大 18:20

7/22 富山大 5:30 —<sup>タクシー</sup> 富山駅 —<sup>電鉄</sup> 折立 8:45 — 三角点 9:25 — 薬師峠 11:00 12:00 2:22 〔1〕

7/23 〔1〕 — 太郎山 5:30 5:40 — 北ノ俣岳 7:15 7:30 — 黒部五郎の肩 10:20 12:00 — 黒部小屋 1:32 〔2〕

10分 ↓ ↑ 10分  
黒部五郎

7/24 〔2〕 — 三俣れんげ 7:32 7:55 — 双六小屋 9:25 〔3〕

7/25 沈 〔4〕

7/26 〔4〕 — ヤリの肩 9:06 9:10 — 殺生 10:00 〔5〕

7/27 〔5〕 — ヤリの肩 12:45 1:11 3:24 —<sup>2:24</sup> ヤリ —<sup>3:10</sup> 殺生 3:55 〔6〕

7/28 〔6〕 — 西岳の肩 4:55 7:35 8:17 — 大天井ヒュッテ 10:51 11:05 — 大天井荘 11:45 〔7〕

↓ ↑  
西岳

7/29 〔7〕 — 常念小屋 5:50 7:27 7:45 — 常念岳 8:50 10:00 — 蝶ヶ岳ヒュッテ 1:35 〔8〕

7/30 〔8〕 — 徳沢 6:50 9:12 10:00 — 明神 10:40

## 銀座でルンルン

### 目先の幸福パーティーPL総括

平野 展 康

今回の合宿を計画するにあたって、一つの問題があった。それは、ここ数年來、日数的、コース的に長期化する傾向にある中で、他パーティーとのバランスをとるといった意味もあったが、表銀座、裏銀座縦走、七泊八日の少し短かめの計画にしたことから生じる、時間的・体力的余裕をいかに有効に利用するかという点であった。その有効利用について、まず考えたのが、山でスケッチをする事である。コースタイムにも余裕があり、スケッチの道具も、スケッチブックに色鉛筆と軽いものなので、これを探り入れたのである。

次に考えたのが、エッセンの充実である。最近の山行の長期化に伴い、軽量化が進められてきたが、そのためテント生活で最大の喜びとなるエッセンが、あまりに貧弱になってきたのではないかと思うのである。そこで、余裕のある範囲内でエッセンの充実を考えたのである。

以上二つの点について、どのような成果があったか、結論から言えば、合宿という極限状態にある場合には、なかなか体力的・時間的余裕は生まれないことである。いくらコースタイムが短かくて、テン場に着くのが早いからといって、余裕のある時間をスケッチの時間にするよりは、昼寝の時間にした方がいいし、七泊でコースも短い

からといっても、少々エッセンを豪華にしてザックを少しばかり重くするよりは、エッセンが貧弱でもザックは軽い方がいいと思うことである。ただ、スケッチについては、かなり長い時間山を観察するという事になるので、山の地形を覚えたりするのに大変効果がある。ただ単に景色を見渡すよりは、はるかに鮮明に頭の中に記憶する事が出来るので、出来れば手帳に鉛筆かなにかでもスケッチすれば、また別の山の楽しみ方が広がるのではないかと思う。

しかしながら、完全に軽量化して行けば、かなり余裕のあるコースには違いない。七泊に対して予備日三日、しかも一日のコースタイムが短いというのはかなりの余裕を生んだ。今回の合宿は天候が悪く雨の日が多かったが、合宿の中盤に双六で三日連続泊っても、全コース余裕をもって消化する事が出来たし、途中沈をしすぎて後半の日程が苦しくなり、ガスの中をも強行しなければならないというような羽目にもならなかった。

最近の傾向として合宿の長期化が進んでいるが、ガスや雨の中をも強行しなければ消化出来ないようなコースを計画するよりは、沈を四日位しても晴れた日に歩いて尚かつ消化出来るような余裕のある山行計画を考え直して見る必要があるのではないかと思う。

最後になったが、一年生・二年生の協力で感謝するとともに、未熟なPLに色々と助言してくれた三年生のI氏に感謝したい。この合宿の経験が今後のワンゲル活動に活かされることを期待して総括とした。



## 目先の幸福パーティー S L 日誌

石井敬治

七月二十一日

三時起床。天気はくもり。湯田駅で盛大な見送りを受け、北ア目ざして出発。何度も乗り変えて、ようやく有明駅へ着く。タクシーで中房温泉に三時二十分到着。明日はいよいよ入山である。好天を望む。

七月二十二日

三時起床。今日は燕岳へのきつい一三〇〇mの登りだ。出発して五分もしないうちに急登になり、二十五分後ようやく第一ベンチに到着。一本とって出発する時になって、他大学のメッチェンPがやってくる。PL氏はすかさず出発を五分遅らせる。さすが目先の幸福P。第二・第三ベンチを過ぎ、合戦小屋へ。途中下をくぐった荷物ケーブルがうらめしかった。合戦小屋からは少し楽になり、展望も開けてきて、一時間で燕山荘に到着。三百六十度の展望にPメン一同大感激。槍ヶ岳が青空に映えていた。今合宿のコースがほとんど見渡せるのも良いのやら、悪いのやら。昼のエッセンをもって、花崗岩の奇岩の多い燕岳へピストンをする。エッセンの後ゆっくり昼寝などしてテン場にもどる。

七月二十三日

三時起床。稜線ぞいに西岳までの行程である。PL氏によると楽勝とのこと。槍を眺めながらルンルン気分が快調なペースで進む。蛙岩・簡単な鎖のある切通岩を過ぎ、だからとした上りを登り切ると大天荘だ。往復十五分のピストンをすませ、大天井ヒュッテめざして一気に下る。西岳ヒュッテへの途中にある赤岩岳ピークで昼のエッセンをとり、Pメン全員スケッチを行なう。持参したスケッチブックに思いのタッチで槍ヶ岳を描く。真剣に山を見つめるもの、他のPメンの絵をあれこれ見て回りながら書くもの、様々だった。西岳ヒュッテのテン場は狭く、奥の方にあいているところを見つめる。目の前に見える東鎌尾根を見て、明日の闘志を燃やす。

七月二十四日

三時起床。天気はあまりよくない。水俣乗越までハシゴ・鎖を使って下る。いよいよ東鎌尾根の上りである。PL氏から気をつけて登れとお声がたびたびかかる。しだいに槍が大きくなっていく。途中、ハシゴ・鎖があつたが、注意して登ればそれ程でもないと感じた。天気が悪くなり、時折、槍にガスがかかりだす。殺生ヒュッテに寄ってジグザクの道を登って、とうとう槍の肩に到着。この時にはパラパラと雨が降っていた。天気の様子を見て槍ヶ岳にアタック。登りやすいようにルートが作っており、二十分で狭いピークへ。我々がピークに立つと、日頃の行ないが良いのか、ガスが晴れて三百六十度のパノラマが楽しめた。肩に降りてから昼のエッセンをとり、双六小屋まで行くことに決定。少し急ぎめのペースで、雨の中を二時半過ぎに無事到着。ここに三泊もするとは思ってもみなかった。

七月二十五日

雨のため沈。潤れたものをもって、小屋の乾燥室へ何度も往復した。

七月二十六日

雨のため沈。せっかく乾かしたシュラフがまた濡れて、寒い夜だった。乾燥室に濡れたものをつっこんで、ほとんど一日中小屋にいた。烏帽子岳まで行けるのかと不安になる。

七月二十七日

三時起床、ようやく行動できる。快調なペースで三俣蓮華岳への分岐に着く。ピークへピストンをし、何も見えない中で写真を取りそそくさともどってきた。七時半にはテン場に到着していた。テントを張っていると岡Pが通りかかり、富高Pがテントを張っているとのこと。写真をとって別れる。天気はしだいに回復してきて、午後には完全に晴れた。目の前には鷺羽岳が雄大な姿を現わし、遠くには数日前に歩いた表銀座の稜線がくっきりと見えた。Pメンはスケッチブックを取り出し高山植物や景色をスケッチし、久しぶりの好天を満喫していた。三俣山荘の前からは槍ヶ岳がよく見え、全員で記念撮影、個人シリーズでは、山科氏が変態ポーズをとり、Pメンからののしられる。

七月二十八日

三時起床。鷺羽岳へは、下から見るときつそうに見えたが、思ったより楽だった。水晶小屋まではなだらかな稜線を行く。小屋から水晶岳へのピストンは、少々ガレている所もあり注意が必要。ピークでの個人シリーズでも山科氏が話題となった。薬師岳をバックに立て看板


の棒切れを小脇にかかえて、ポーズをとった。何の意味だと尋ねると薬師丸ひろ子のセーラー服と機関銃だと、のたまわった。他の登山者の笑いを誘う。真砂岳を越え、どこがピークなのか、わからないくらいだっぴろい野口五郎岳へ。ピークのど真中で昼のエッセンを広々ととりながら、今合宿ではもう見ることができないかもしれない槍ヶ岳を見に焼きつけていた。階段状で狭いテン場についてのんびりしているうちに、隣のメッチェンPとトランプでもしようという相談がまとまり、話をもちかけようとしていると、突然雷が接近してきて、おまけに強風に雨もまじって、すさまじい悪天に急変。隣のメッチェンPは小屋に避難してしまっていた。誰かにテントのポールを持たせ、人柱にすると天気がよくなるなどと、無責任なことを言いながら、真上にいる雷に恐れおののいていた。就寝するときになって、サブテンが飛ばされていることに気づき、探していると、テン場の下の方でひっくりかえっており、中の物は濡れ、フライはなくなり、フレームも折れてしまっていた。夜中も天気は回復せず、強風のためフレームが内側に曲って頭をたたたくし、濡れたテントが顔にへばりついて、眠れぬ夜を過ごした。


七月二十九日


五時起床。昨日からの雨が止まず、一度起きて起床を遅らす。天気回復しそうなので強風の中を合宿最後のピーク烏帽子岳を目ざして出発する。烏帽子小屋への下りで山科氏が足をねんざする。そのため烏帽子岳へのピストンは、他のPメンだけで行ない、留守番役となる。烏帽子岳からは三百六十度のパノラマで、後立山連峰や薬師岳などの眺めがすばらしかった。

〔行程表〕


7/21 湯田温泉 ~~⇄~~ 有明 ~~⇄~~ 中房温泉 


7/22  ———— 第一ベンチ ———— 5:49 ———— 6:32 ———— 合戦小屋 ————  
 4:50 5:15 5:30 6:00 6:50 7:35 8:00

— 8:15 ———— 燕山荘  ( 0:20 → 燕岳 )  
 8:20 9:00 0:20 ←


7/23  ———— 蛙岩 ———— 6:34 ———— 切通岩 ———— 大天荘 ————  
 5:10 5:34 5:46 7:00 7:27 7:31 7:58

( 0:10 → 大天井岳 ) ———— 大天井ヒュッテ ———— 10:23 ————  
 0:10 ← 9:05 9:32 9:45 10:35

— 赤岩岳 ———— ヒュッテ西岳   
 11:03 12:15 12:50



7/24  ———— 6:16 ———— 7:15 ———— ヒュッテ大槍 — 殺生ヒュッテ ————  
 5:20 6:30 7:25 7:38 7:50 8:03 8:10


— 槍岳山荘 ( 0:20 → 槍ヶ岳 ) ———— 12:27 ———— 13:32 ———— 14:10 ————  
 8:39 0:25 ← 11:30 12:35 13:40 14:15


— 双六小屋   
 14:33



7/25 沈


7/26 沈

7/27  ———— 6:15 ———— 三俣蓮華岳の分岐 ( 0:10 → 三俣蓮華岳 ) ———— 三俣山荘   
 5:20 6:25 6:50 0:10 ← 7:15 7:30

7/28  ———— 5:55 ———— 鷲羽岳 ———— 7:27 ———— 水晶小屋 ( 0:25 → 水晶岳 ) ———— 10:28 ————  
 5:10 6:05 6:12 6:35 7:35 7:44 0:25 → 9:25 10:45

— 野口五郎岳 ———— 野口五郎小屋   
 11:25 12:15 12:25

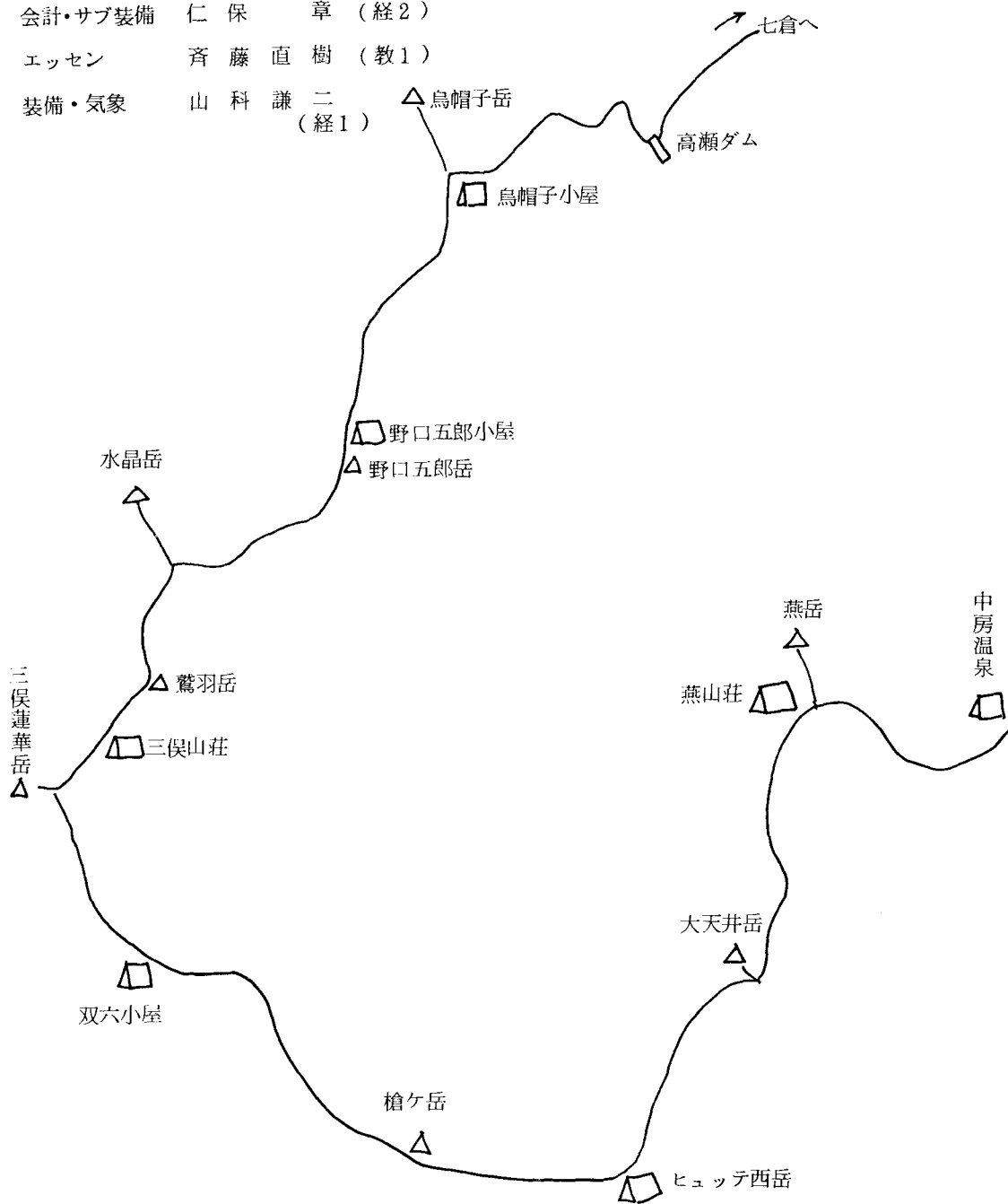
7/29  ———— 8:18 ———— 烏帽子小屋  ( 0:15 → ニセ烏帽子岳 0:15 → 烏帽子岳 ) ————  
 7:25 8:30 9:15 0:10 ← 0:10 ←

7/30  ———— 濁沢吊橋 ———— 高瀬ダム ———— 七倉  
 5:50 7:45 7:55 8:14 9:35 10:37

七月三十日  
 三時半起床。とうとう下山の日である。約一三〇mの急降下を、二時間のロング一本で一気に下ってしまった。吊橋を二つ渡り、高瀬ダムのえん堤でエッセンをとり、幾つものトンネルを抜け、七倉で合宿完了。バスで信濃大町に行き、ビールで乾杯。全員無事に下山できた。みなさん御苦労様でした。

メンバー

- |         |           |
|---------|-----------|
| PL      | 中野展康 (経3) |
| SL      | 石井敬治 (教2) |
| 衛生      | 稲葉真一 (経3) |
| 会計・サブ装備 | 仁保章 (経2)  |
| エッセン    | 斉藤直樹 (教1) |
| 装備・気象   | 山科謙二 (経1) |



## 5つぶのコンペエトちゃんP

### PL総括

岡 俊子

今、北アでの合宿を思い出してみると、様々な困難があったにせよ、全員無事に、そしてコース全消化して下山できたことに對し、Pメン一人一人に「ありがとう」と言いたい。

初めてのPLである私にとって、北アはとても大きな山だった。事実私は一年の時、北アで高山病にかかり下山した、という苦い経験をもっており、出発前、北アに對して私自身不安がなかったと言えは嘘になる。しかし、あの不快な経験は、色々な面で役立ってくれた。コース案をたてる時点で言えば慌ただしい入山を避け、アプローチを必要程度に長くした。コース案全体はごく一般的なコースでメインの槍ヶ岳をめざしていった。

今回は合宿出発の一週間前に突然SLが合宿に参加できなくなり、他のパーティから超重要な人材を一人抜きとってしまった、松本さんのパーティには本当に迷惑をかけてしまった。合宿前のPメンの健康上の把握はPLの重要な義務である。

合宿というものは、山行基礎技術の修得を一番のねらいとするが、それ以上に長期間にわたる山での少人数との生活を通して、言葉では言えない、人には言えない様々な経験をし、その中から自分のワンゲル観をみつけることもできるだろうし、あるいは、自然を見直すこと

のできる充分な山行である。

一年生は合宿第一日目と比べれば、最終日にはりっぱなワンダラーになっていた。そして私達三年も、リーダーという職責を再認識した。下山後の二泊三日の上高地は、やけに夕日が美しかった。

## 「5つぶのコンペイトウちゃんP」

### SL日誌

槍を目指して

七月二十二日 晴れ

富山大窟よりタクシーで最初のテン場折立へ。ここはトイレも水場もきちんとしていてまだまだ山の中の気分ではありません。でも水がとても冷っこかったことが印象的。テント設営後、一年生三人娘はちよつとそこまでおサンポ。二人の三年生の先輩は、今後の鋭気を養うためか、テントでお昼寝。

明日は一時起床。まだ周りがざわつくなかオヤスミナサイ。いよいよ合宿本番です。

七月二十三日 晴れのち雨

朝の一本目は皆、かなりこたえた模様。やつとの思いで三角点。なだらかな山のかさなりは心のなごむものでした。薬師沢峠についてプリン製作。PLさんみずからかすりをする。ステキなPLさん。お昼寝をしているあいだにテントも増え、空の雲もみるみる増えています



にも降ってきそうな、星、星、星。槍ヶ岳からの美しい展望のことを考えると妙に浮き浮きしてきた。テン場から三十分ほど急なガレ場を登った所で、山に来て初めての御来光を拝む。一瞬、音の無い世界へ吸い込まれたように、何とも言えない気分浸っていた。

さあいよいよ槍に向かって、だからと続く西鎌尾根を歩いた。途中、松本Pとの再会。とにかくうれしくて、みんなの顔も思わずほころんだ。松本さんPと別れを告げてから、岩場、ガレ場も多く、結構さつい登りになったが、何とか槍ノ肩へとたどり着いた。槍への登りは、怖いながらも、案外楽しかった。ピークは想像していたのとは、ちよつと違い、あまりの人の多さに少しがっかりした。でも、あの三百六十度の大パノラマは、きつといつまでもみんなの胸に残るにちがいない。

明日はいよいよ上高地へ下山。様々な思いを胸に、合宿最後の夜を今日、槍ノ肩でお会いしたOBの松沢さんと楽しく過ごした。

七月二十九日 晴れ

昨夜のものすごい風には本当にまいったが、なんとかテントが生き残ってくれてとてもうれしかった。今日はいよいよ殺生のテン場を後に、上高地へ下山。昨日、槍ノ肩でお会いしたOBの松沢さんとも別れを告げ、かなり急な岩場を下っていった。途中、朝日に輝く雪渓の水で顔を洗いながら、もう今日で山を下りるんだという感慨にひたっていた。槍沢、一ノ俣の川沿いの道は、水音が心まですすがしくさせ、途中、川原で食べた最後のエッセンは、この合宿の中で忘れることのできないものとなった。

横尾まで来ると、急に下界のにおいが漂ってきた。一週間ぶりに見

る車や、サンダルをはいた人たちを、始めはぼうつとして眺めていたが、同時に、やっとここまで下りて来たんだという感激もわいてきた。横尾から上高地までは、少々単調で、だるい道のりを約十一キロ、ただひたすら歩いた。小梨平に着き、PLさんの、ご苦労様という言葉を聞いた時は、足の痛さも忘れ、うれしさと、色々の想いがこみ上げてきた。



# CAO CAO PARTY

## PL総括

松本常子

今回の夏合宿をふりかえってみると、思い出されるのは、槍からのご来迎を拝めたあの風景である。雨の多かった今合宿であるが、目標として歩いたあの槍で、ご来迎を拝めたのは、まさに幸運であったし、PLとして私はたいへんうれしい。

しかし、反省してみると、私はいつも危険なことばかりするつまらないPLであった。あの危険な東鎌尾根を雨の日に歩かせるなど、私の山行体験の不足からでた失敗だと思う。あの時には、パーメンの力量と状況を考え、歩こうと判断したのであるが、後日、その東鎌尾根で事故がおきたときには、背すじが、ゾクゾクとしたのを覚えている。

そんなつまらないPLを支えてくれた二年生、そして私を信じてついてきてくれた明るい一年生。彼女らのすばらしい協力こそが、無事に合宿をおえられたのだと思う。またいろいろと御指導していただいた諸先輩方に改めて感謝しているしだいである。

# CAO CAO PARTY

## SL日誌

八川睦子

七月二十一日

三時起床。心配した雨も降ってなくて一安心。五時過ぎ、山大合宿所を後にして湯田温泉駅へ。先輩方からのどっさりこんの差し入れを手に手に持って、いざ出発。新幹線はよかったものの、名古屋からの「しなの9号」は、超満員ですがにみんなぐったり。やっと松本に着き、買い出しを済ませ上高地へ向かう。小梨平は涼しくて気持ちのよい所だった。

七月二十二日

六時起床。十時間睡眠で、お目覚めスッキリ。とっても良い天気で、パッキングを済ませた後、上高地の散策。ここで本田さん差し入れのパンダちゃんあめ登場、みんな必死でかじる。穂高が昨日とは比べものにならないくらい、くっきりきれいに見える。九時前に小梨平出発。ザックを置いて明神池へ。なぜかSさんの手には、エッセンのネギがしっかりと握られていた。明神池は、見物料が一人二百円也。お金を持ってなかったので、柵の間からのぞき見して写真を撮り、満足して帰る。十時前に、いざ徳沢へ。遊歩道のゆるやかなアップ・ダウンの道をずんずん進む。調子によって新村橋まで行ってしまい、15



分位戻って十一時半に徳沢へ到着。みなさんスイマセン。お昼のエッセンを食べ終わると、日なたぼっこしながらだべりんぐ。テン場に着いた時は、我がテントの回りは他のテントなどなかったのに、あつという間に増えてにぎやかなこと…。

七月二十三日

三時、アラームの起床。ピーピーピー。90分パッキングで四時半出発。長嶺山の急登は覚悟はしていたもののやはりきつい。ゆっくり、ゆっくり登った。四本めをとった所から穂高が真正面に見える。そこから一本で、やっと長嶺山のピークへ。周囲に木がはえていたので展望が今いちだったけど、その木々の間から、穂高、そしてちっちゃな槍も見えた。三十分くらい歩いたとこ、シナノキンバイが咲き乱れ、ハエの舞う中、お昼のエッセン。ちょっと行くと稜線に出て二十分程で蝶ヶ岳ヒュッテへ到着。ここから穂高、槍が真正面にくっきりノすごい迫力で最高に感激してしまった。

七月二十四日

二時半起床。ガスってる中を出発。まっ白の中をポクポク歩いていると、一瞬ガスが切れ槍が見える。ラッキーノ。蝶ヶ岳からどんどん下っていく。稜線だから吹きさらしなのかと思っていたら、樹林帯の中をアップダウン。目指す常念は、岩だらけの山という感じ。ピークに辿り着いたものの周囲はまっ白。本当ならあの辺に槍があつて、ノがあつて…と想いを巡らせながら祠の前でハイポーズ。下りも岩ゴロゴロ…。すぐ足元に常念小屋が見え一本で下る。水場は十分程下ったところ、小雨のバラつく中、全員で水汲みに行く。テントに戻るとみ

んなでゲームに興じる。ウルトラマンゲームやパラリコ…。一番チヨンボの多かった清水さんがスタンツの主役になることが決定する。

ガンバレ ガンバレ 智ちゃんノ。雨はやみそうになく、ポタポタ雨漏りし始める。エッセンを終わる頃には、テントの隅へ水が浸入してきてビショビショ。恨めしきは愛しのダンロップちゃん。

明日も雨だろうということで、起床は四時。雨の音、そして近くのテントの男の人達の山の歌を予守歌に、お休みなさい。

七月二十五日

昨日からの雨。それに風も相当なもので我が五天は崩壊状態。寝ても顔の上にテントがベロン。起床がかかっても、起き上がるにも起き上がれずボケー。予備食を食べ、五時十分のラジオの天気予報を聞いて沈は止め。大天荘まで行くことにする。雨は小降り。カッパを着ていざ出発。次第に雨も風も強くなる。二本ちよつとで大天荘へ。みんなきつそうだったので今日は小屋泊り。合宿中に布団に寝れるなんて初めてで感激ノ。みんなで布団に足をつっこんでこたつごつた。エッセンの話に花が咲く。久々にラジオで下界のニュースを聞いていると、長崎の方は集中豪雨で大被害を被ったとか。あらまあ。こちらの天気予報も、どれも雨で思わしくない。

七月二十六日

一旦三時起床。しかし外は強い雨と風。PLさん、もう一時間寝よう。実は布団の暖かさが離れ難かったとか。ムフ。再び四時に起きた時は小雨になり、出発する頃にはガスってはいるけれど雨は止んでいた。大天井ヒュッテをちよつと通り過ぎた頃、「キヤア」という悲

鳴。PLさん滑落事件でした。でも大したことなく一安心。八時前、ヒュッテ西岳に到着。再び降り出した雨が相当強くなっている。ここに泊まるか、殺生ヒュッテまで行くか皆で相談する。結局頑張っ行って行くことに決定。歩き出してすぐ、ガレ場のような道でセカンドのTさんがこけてズリリリ…とすべり落ちかける。あー怖かった。

はしごあり、鎖あり、の東鎌、それも雨の中でスリル満点、どうにか無事に通り過ぎ、岩ゴロゴロの殺生ヒュッテへ辿り着く。ボロっかいテントがあるナと思いきや、それは垣田Pのテントだった。

七月二十七日

今日は沈。それにしても昨晩はもの凄い風だった。何度も目が覚めてテントが倒れるんじゃないかと怖かった。お蔭でテントにかけていたポンチョはビリビリに裂けてしまい、見るも無残な姿となる。ヒュッテに避難し、同じく沈の垣田Pと「大貧食」に興じる。一番勝ちちはアーモンド二個、二番勝ちちは一個。十時頃テントに戻り昼のエッセン、お待ちかねのホットケーキ。ぶん捕ったアーモンドをきざんで入れる。なかなかおいしいホットケーキだった。ごっくん♪ そうこうするうち、時々晴れ間が出てきた。すかさず槍にピストン。ペンキ印を目印にスリル満点のよじ登り。槍岳山荘から二十分程で、あの槍の先っばに到着。わぁーい、やったネ。素晴らしいパノラマに満足して

CAO CAO!

七月二十八日

二時起床。もちろん槍で御来迎を…という目的。見れば、まだ闇の中に佇んでいる槍のあちこちには、もう懐電のライトが点々とピーク

を目指している。私達も張り切って出発。ピークは満員御礼の大賑わい。槍のピークに二度も立てるなんて…感激を胸に下っていく。肩からしばらくはガレ場の急降下。一本ちょっと歩いた辺りで岡Pと再会。みんな元氣そうです。話はずきずき、四十分くらいおしゃべりしてバイバイ。途中、一本とったところから、槍穂がものすごくきれいに見える、誰ともなく手帳を取り出し、スケッチをした。今日のテント場双六小屋では清藤Pと一緒にだった。

七月二十九日

朝、テントの隅は水たまり。もーいや。風が絶え間なく吹いている。小池新道は廃道になっていて弓折岳の稜線を通るコースを歩くことになる。今日からの行程は、マイナーなためか、合宿前半のような、人、人、という感じは全くなく、行き交うパーティもほとんどない。唯一、関学のパーティの人達が私達と同じテント場に向かっていった。一本とっていることに抜きつ抜かれつ…で、思わず笑ってしまった。テント場には向こうが先に着いており、その隣りにみすばらしい五天を張った。

関学の人達の「一緒に笠ヶ岳にピストンを！」というお誘いのおかげで、予定外のピストンをした。夜、お隣りの関学Pさんは、ざーっと歌を歌ってた。まるでもう合宿が終ったかのように、賑やかなこと…

七月三十日

さていよいよ下山の日。起床係のトリは私メが務めましたのです。しかし、昨晩は雨、雨、でシュラフはべっちょり。くすん。

予定外のピストンが入ったので、槍に続いて笠ヶ岳も二度めのピス

〔行動記録〕

7/21 松本  $\rightleftharpoons$  上高地  $\text{---}$  小梨平キャンプ場 1  
17:55

7/22 □  $\text{---}$  明神池  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  徳沢園 2  
8:53 9:30 10:10 10:54 11:05 11:30

7/23 □  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  1本  $\text{---}$   
4:30 5:00 5:10 5:50 6:00 6:50 7:00

$\text{---}$  1本  $\text{---}$  長堀山  $\text{---}$  Essen  $\text{---}$   
7:55 8:15 8:58 9:15 9:45 10:15

$\text{---}$  蝶ヶ岳ヒュッテ 3  
10:35

7/24 □  $\text{---}$  蝶ヶ岳  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  1本  $\text{---}$   
4:23 4:50 4:57 5:47 5:58 6:45 6:56

$\text{---}$  1本  $\text{---}$  常念岳  $\text{---}$  常念小屋 4  
7:35 7:45 8:33 8:50 9:40

7/25 □  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  大天荘 5  
6:47 7:47 7:58 9:18 9:23 9:40

7/26 □  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  赤岩岳午前  $\text{---}$  ヒュッテ西岳  $\text{---}$   
5:05 5:45 6:00 6:53 7:03 7:53 8:05

$\text{---}$  Essen  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  殺生ヒュッテ 6  
9:05 9:27 10:27 10:33 11:40 11:50

7/27 7 沈  $\left( \begin{array}{l} \text{---} \text{槍岳山荘} \text{---} \text{槍ヶ岳} \\ 11:47 \quad 12:20 \quad 12:35 \quad 12:56 \quad 13:19 \\ \text{---} \text{槍ヶ岳} \text{---} \text{槍岳山荘} \text{---} \\ 15:00 \quad 14:33 \quad 14:02 \end{array} \right)$

7/28 □  $\text{---}$  槍の肩  $\left( \begin{array}{l} 4:25 \quad 4:45 \\ 5:54 \quad 5:25 \end{array} \right)$   $\text{---}$  槍ヶ岳  $\text{---}$  千丈沢乗越  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  Essen  $\text{---}$   
3:43 4:23 6:05 6:50 7:00 7:19 8:02 9:01 9:50

$\text{---}$  1本  $\text{---}$  双六池キャンプ場 8  
10:35 11:03 11:46

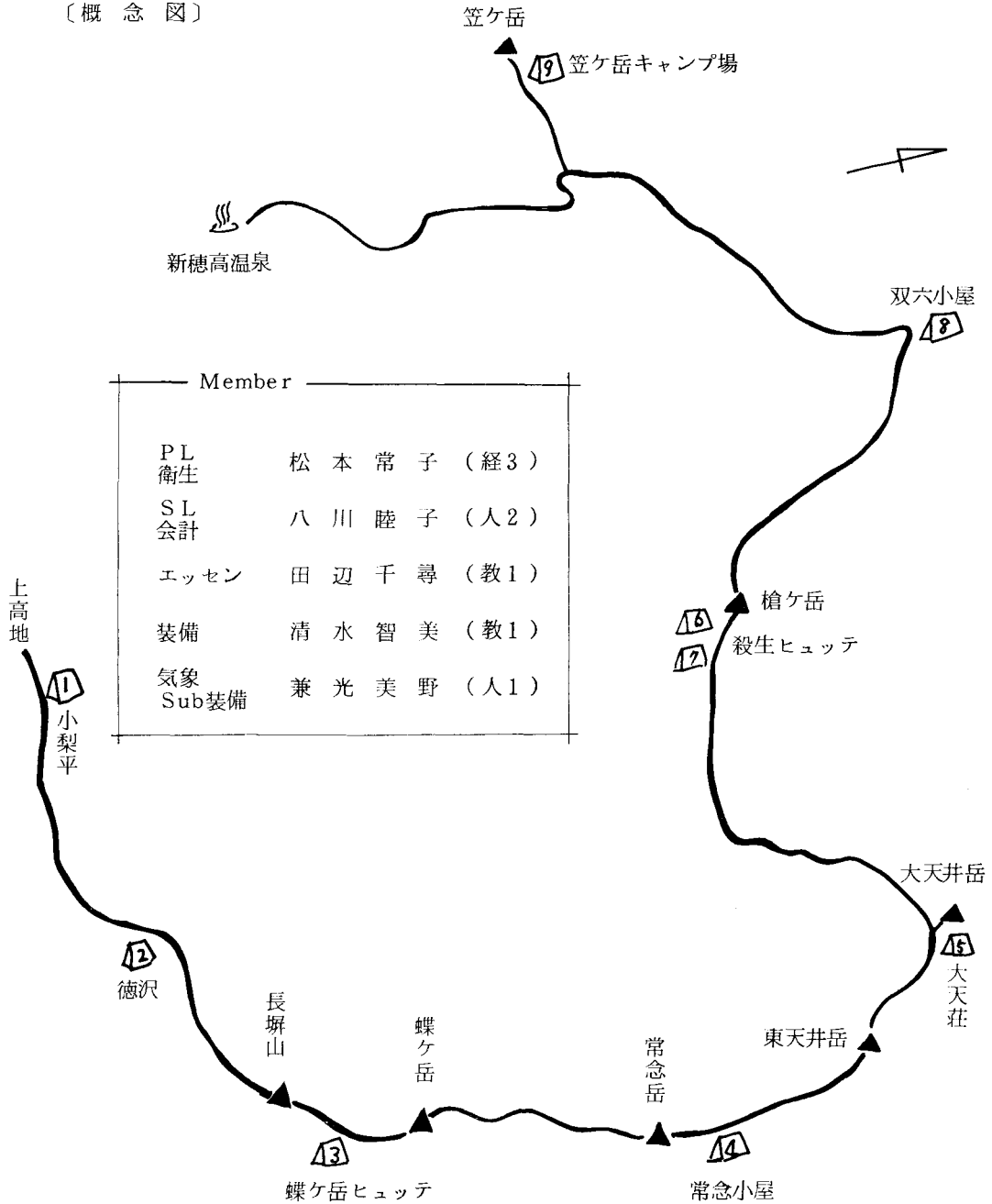
7/29 □  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  大ノマ乗越  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  Essen  $\text{---}$  1本  $\text{---}$   
5:06 5:52 6:00 6:44 6:55 8:15 8:30 9:22 10:02 10:48 11:00

$\text{---}$  笠ヶ岳キャンプ場 9  
11:30

7/30 □  $\text{---}$  分岐  $\text{---}$  均子平  $\text{---}$  1本  $\text{---}$  Essen  $\text{---}$  林道  $\text{---}$  新穂高温泉  
7:30 8:15 8:23 9:25 9:38 10:25 10:35 11:27 12:10 13:20 13:33

ト。やっぱり二度ピストンするといひことがあります。今朝の笠ヶ岳からの展望は good。まっ青な空に浮かぶようにキラキラ輝くさあ、あとは下るだけ、下山パワの超特急でズンズン進んでしまったSL。でも一年生も、そんなことはものともせず、びったりついて超特急で下った。  
新穂高温泉につくと、すぐ無料のおふろに入って、合宿中、共に北アを巡り歩いた汚れを洗い流したのでした。皆さん、本当に御苦労様

〔概念図〕



| Member |           |
|--------|-----------|
| PL     | 松本常子 (経3) |
| 衛生     |           |
| SL     | 八川睦子 (人2) |
| 会計     |           |
| エッセン   | 田辺千尋 (教1) |
| 装備     | 清水智美 (教1) |
| 気象     | 兼光美野 (人1) |
| Sub装備  |           |

## 硬派・かっこいい奴P

### S L 日誌

上 田 泰 宏

七月二十一日

待ちに待った合宿が今日から始まった。一・二年生にとっては初めてのアルプスであり、期待している反面、体力が持つのだろうかという不安もあった。そして、湯田温泉駅を出発したのである。長い間列車に揺られて伊那大島駅に着いてみると、ドツボの雨であった。これから先どうなるのだろうかと不安に思いながら、別れを惜しんでいるマッチェンPをあとにして、タクシーで塩川へと向った。塩川に着くまでに雨がやみ、みなほっとする。エッセンの後で、差し入れのスイカを食べていると、大田さんがスイカを見て喜び躍り出した。

七月二十二日

朝起きてみると心配していた雨は降らず、まずまずの天気である。塩川小屋のおぼちゃんと記念写真を撮った後、いよいよ三伏峠へと山道を歩き出した。なかなか感じの良い沢沿いの道を過ぎると、急な登り坂へと移っていった。三伏峠には、思っていたよりもあっけなく着いてしまった。本来ならここにある三伏峠小屋がテン場であったのだが、小屋にあるはずの電話がなかったために、計画を変更して三伏小屋にテントを張ることになった。一日ほど行程を短縮していた前田P

が、順調にいったらいいれば、この日に三伏小屋がテン場だったからである。前田Pとは、七月十六日以来の再会であったが、みんなすこぶる元気であった。太陽がときどき雲から顔をのぞかせていたのでひなたぼったをしていたのであるが、このあと一週間も太陽を見ることができないなどということは、この時夢にも思わなかった。

七月二十三日

朝のエッセンのとき雨が降りしたが、間もなくやみはしたもののガスのため何も見えない。ちょっとしたことでも石が落ちそうなガレ場を登りきると、塩見岳のピークに着いた。大田さんと渡辺さん以外は初の三〇〇メートル級の山であり、四方の景色を満喫するはずであったのだが、一面真白であった。塩見岳は東峰と西峰があり、三角点は西峰にあったのだが、「塩見岳」という標識は東峰にあった。とりあえず、東峰で写真を撮り塩見岳をあとにした。この後、歩けども歩けどもなかなかテン場に着かない。おまけに雨まで降り出した。やっとのことで熊ノ平に着いたものの、テン場ははじめにいてすぐ隣にゴミの山があるところしかあいていなかった。とにかくきょうは長い行程だったため、みんな疲労している様子だった。特にSLは疲れでしまい、三〇分くらい横になっていた(なさけない)。テン場賃もここだけ高くてあまり良い印象を受けなかった熊ノ平ではあったが水洗トイレには感激した。

七月二十四日

起床から出発までなぜか手間取り三時間もかかってしまう。太陽はでていないものの遠くの方まで見渡せ、振り返ってみるときのう歩い

てきた塩見岳から仙塩尾根が見ることができた。そして、農鳥小屋へのトラバースの途中から見た西農鳥岳の山の大きさに感激してしまつた。さすが南アルプス、「山がでかい」の一言に尽きる。農鳥岳のピークでは三六〇度展望がきき、北岳、間ノ岳、塩見岳、赤石岳、鳳凰三山、富士山がバッチリだった。また、農鳥小屋の管理人から長崎大水害のことを聞き、西の空を見ると真黒な雲が漂っていた。あの雲がこちらを避けて通ってくれることを祈るばかりである。間ノ岳に着くころはガスってしまい何も見えず、中日峰もただ通り過ぎるだけであり、やっとこさ北岳山荘に着いた。北岳山荘は、近代的な建物であったのだが、何といつても水場が遠い。三〇〇メートルも下らなければならぬ。一年二人、二年二人で水くみに行つたものの、きのうきょうの疲れのためか帰りにSLバテてしまい熱をだしてしまつた。(何ともお恥すかし。)また、渡辺さんも多少熱があり、他にも不調を訴える者もいた。しかも、天気図を見てみると、あしたの天気は期待できそうにもなく、あすはよくても半沈と決定。

七月二十五日

沈殿。

朝から一日中雨。テントの中はドツボになり、カッパを着て寝なければならぬ羽目になってしまつた。

七月二十六日

朝、SL飯がなかなか食えず出発が遅れてしまう。(ウググググ…)雨の中の出発となり、北岳のピークに着いても何も見えなかったため、降り始めるとなぜかガスが晴れ急いでピークに戻り、一大パノラマを

見ることができた。北岳を離れると、またガスってしまい小雨まで降つてきた。中白根沢ノ頭付近からものすごい下りとなり、前から少し膝を痛めていた木村が遅れだす。しかも、左俣大滝の直前で道が崩れており、そこでSL一〇メートルぐらい滑落し道を失つてしまう。(きょう二度目のチョンボ。申し訳ない。)しかし、運よく中富Pが通りかかり道を発見。沢には出たものの、雨のためかなり増水していて徒渉がむずかしく、岸と道を探せどあまりはつきりとしていない。どうにか両俣小屋に着いたときは、昼なんかとくに過ぎていた。ここで昼と夜のエッセンを続けざまに腹に流し込み空腹感をいやした。

七月二十七日

最近建てられたばかりの両俣小屋を後にして、ガスの中を出発した。野呂川越に案内に着いたものの、ガスと樹林のため北岳を見ることできず、北岳を四面から見るというパーティの目的のうち、西から見ることはできなかった。だからとした仙塩尾根を、ガスの中何も見えず、ただひたすら歩くのみであった。休憩中に、「もうそろそろ仙丈岳に着くはずだ」と話しをしていると、なぜか急にガスが晴れ、仙丈岳が目前に迫っているではないか。しかも、太陽と青空を見るのは三伏峠以来である。晴れている間に仙丈岳に着こうと、急いで歩きだしたものの、ピークに着くとガスって展望はきかなかつた。南アルプスにしては大きな雪渓の脇を通って仙丈山荘に着いた。時々薄日が差していたのでシュラフを干し、やっと濡れたシュラフから解放された。ちなみに、隣りにテントを張ったPは、厚い肉を焼いていた。

七月二十八日

起きたとき空には満天の星だったものの、行動中に上空が曇ってきた。しかし、小仙丈岳のピークでは、塩見岳、間ノ岳、北岳、富士山、鳳凰三山、甲斐駒ヶ岳、仙丈岳が見える一大パノラマであった。そして、この合宿で初めての御来光を拝むことができた。今日は、出発が早く行動時間が短かったため、初めて午前中にテン場につくことができた。ここ北沢小屋のテン場で、エッセンを作っている最中に前代未聞の事件が発生した。ナベを確保していた木村が、あまりにうまそうなカレーのため、ナベの中によだれを垂らしたのである。

七月二十九日

岩谷の三〇分の起床チョンボで明ける。今日は甲斐駒ヶ岳のピストン行動だけなので、比較的気も楽である。前日にコースの下見をしておいたのであるが、暗いのと岩場のためいくつも道らしきものがあり、前の日とは違った道を通ったような気がするがどうか仙水峠に着いた。ここから見る甲斐駒ヶ岳までの急登を駆け登り、巨大な岩石である六万石まで意外にあっけなく着いてしまった。この六万石の裏に、案外大きな自然の石室があった。ここから甲斐駒ヶ岳のピークまでは南アルプスにはけっこうスリルがあった。どういうわけか、甲斐駒ヶ岳のピークだけにガスがかかっていた。しかし、時々ガスが晴れかかり、仙丈岳・北岳が見ることができた。摩利支天へと下って行くに従ってガスの中から脱出し、鳳凰三山や富士山が見ることができた。今日も行動時間が短かったため暇を持て余し、心地よい日光を浴びながら大貧民に励んだ。今日の空が今合宿で一番青いようだ。

七月三十日

昨日、行動予定を変更して南御室小屋まで行くことが決っていたので起床が〇時であったのだが、なぜか三〇分のチョンボ。仙水峠まで昨日と同じように行き、ここから栗沢山に登るわけだがどういうわけかキジ場へ迷い込み、引き返して一本をとった。今度はまちがいがなく栗沢山へと登り始めたが、途中で雨が降り出し、雨の中での懐電行動という最悪のパターンとなってしまった。明るくなってもガスがかかっているので足元以外全く何も見えず、ただコース消化のために歩いている感じだ。途中、どこかの私大と思われるワンゲルと擦れ違った時、一年生らしき者が倒れており、上級生から文句を言われていたようだ。しかも我々が見えなくなると殴られているようだった。かわいそうに。ガスのためオベリスクへのピストンを止めてしまったが、鳳凰三山の辺りは白砂で感じのよい所であった。今日は行動時間が長いので昼のエッセンが二回あり、二度目のエッセンを食べて観音岳へ着くと、中学生ぐらいの団体がぞろぞろと登ってきた。よくこのガスの中を登ってきたものだ。やっと南御室小屋に着き、テントを張り終えると、疲れがどっと出てきた。あす下山するので大エッセン大会の後みんな腹いっぱい、寝る用意をしているのに木村一人でラーメンを作っていた。彼の胃袋はいったいどこまで大きくなったことやら。

七月三十一日

今日はただ降りるだけだというのに、皮肉なことに青空が広がっていた。日が差し込んでくる樹林帯を歩いていくと、急に開けた場所に到着した。山火事跡である。ここから眺める白峰三山は雄大であった。そして、多くの登って来る人々と擦れ違いながら、案外広い道を下っていった。あいにく、夜叉神峠から白峰三山は見えなかったものの、

〔コースタイム〕

7/21 湯田温泉駅 ~~→~~ 伊那大島駅 ~~→~~ 塩川小屋 1 (0:00)  
タクシー

7/22 □ — — 本 — — 本 — — 本 — — 本 — —  
6:30 7:03 7:15 7:58 8:15 8:55 9:10 9:52 10:07

— 三伏峠(エッセン) — 三伏小屋 2 (2:53)  
10:22 11:12 11:40

7/23 □ — — 分岐 — — 本谷山 — — 本 — — 塩見岳 — —  
3:57 4:21 4:31 4:47 5:47 7:08 7:18 8:00

— — 本(エッセン) — — 本 — — 本 — — 安倍荒倉山 — —  
8:45 9:30 10:15 10:34 11:19 11:35 12:17 12:30

— 熊ノ平小屋 3 (6:16)

7/24 □ — — 本 — — 本 — —  
4:55

— 農鳥小屋 ( 7:35 —————→ 8:35 農鳥岳 ) — —  
10:10 ← 西農鳥岳 ← 9:07  
(エッセン) 9:33 9:41 10:45

— — 本 — — 間ノ岳 — — 中白根山 — — 北岳山荘 4 (6:07)  
11:15 11:23 12:02 12:10 12:50 13:12

7/25 沈殿 5 (0:00)

7/26 □ — — 北岳 — — 本 — — 本 — — 両俣小屋 6 (6:20)  
5:45 6:46 7:45 8:43 8:50 9:51 10:00 13:20

7/27 □ — — 本 — — 野呂川越 — — 横川岳 — — 本 — — 本 — — 高望池 — —  
4:15 4:55 5:07 5:20 5:50 5:59 6:06 7:06 7:15 7:30

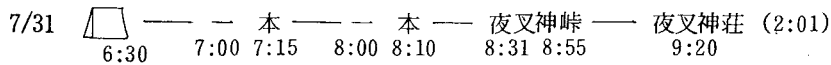
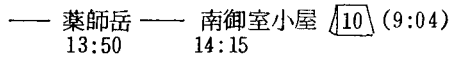
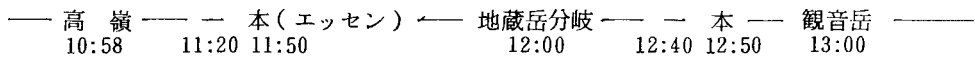
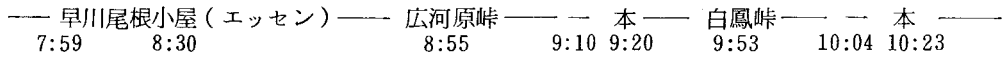
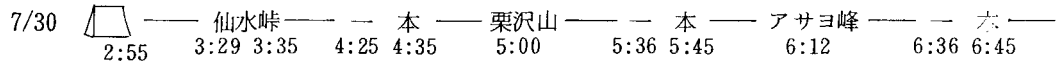
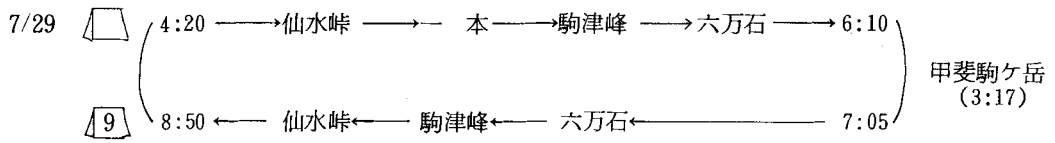
— 伊那荒倉山 — — 本 — — 本(エッセン) — — 本 — — 仙丈岳 — —  
7:44 8:11 8:20 9:10 9:55 11:08 11:25 11:40 11:54

— 仙丈小屋 7 (5:59)  
12:07

7/28 □ — — 本 — — 小仙丈岳 — — 本 — — 北沢峠 — — 北沢小屋 8 (2:52)  
3:35 4:07 4:15 4:25 5:15 6:00 6:15 6:55 7:12 7:57

きれいな花が咲いていた。ここまで来ると下界のにおいが感じられる  
ようだ。あともう少しで下界に着くことができるといってはやる心を抑  
えていたものの、建物が見えた時は、やっとこの合宿が無事終わるこ  
とができたと思った。そして乾杯をし、ビールを飲みながらこの合宿  
のことを回想するのだった。



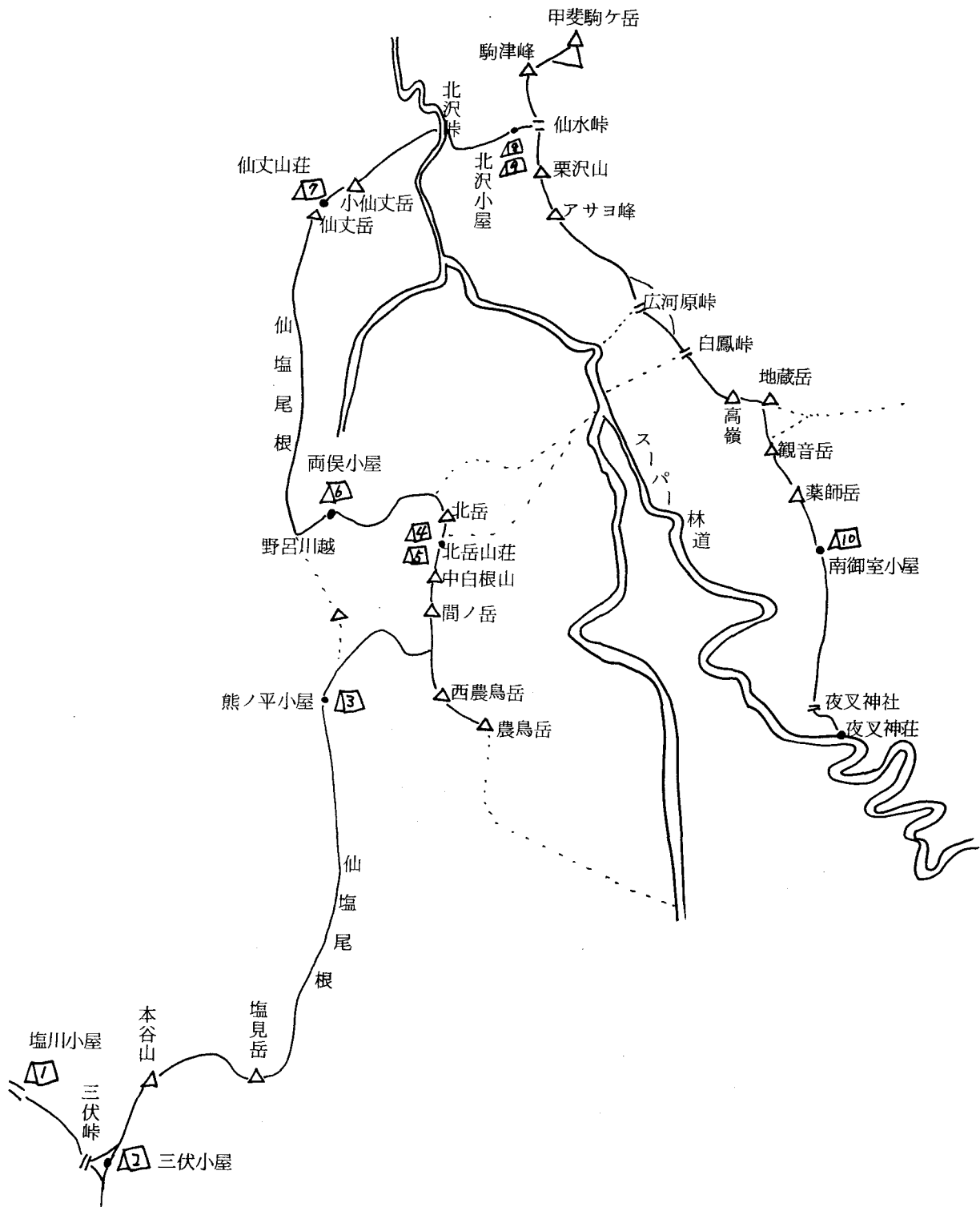


T : ( 4 4 : 4 9 )

パ ー メ ン

|              |      |      |
|--------------|------|------|
| PL           | 菊池輝幸 | (経3) |
| SL           | 上田泰宏 | (経2) |
| 会計           | 大田剛  | (農3) |
| 衛生           | 渡辺浩幸 | (教3) |
| サブ装備<br>サブ気象 | 岸義文  | (教2) |
| 装備・気象        | 木村洋司 | (人1) |
| ESSEN        | 岩谷明彦 | (経1) |

〔コース概念図〕



# 83'春合宿



## 志賀高原山スキーP・PL総括

(山スキー二代目P.L合宿報告) 西 杉 滋

これを書くにあたっては、書きたい事が山ほど有るのだが、あまり長いのもどうかと思われるので、後々のためになる内容を優先させた。

まず合宿までの経緯だが、四月から棟久君と共同で計画を立て始めた。八月に最終的に山域を一昨年と同じ、志賀に決定した。これは技術的に自信がなかった事による。

夏合宿後に一度、九月の試験休みに再度現地踏査を行い大体のコース案を立てた。十一月にPメンが決定し十二月初めに大阪のIBSにスキーを注文した。年内には届いた。今回の雪上のコースは(一日目徳佐駅⇨バス⇨市場バス停⇨十種ヶ峰スキー場、二日目(スキー場で十時まで練習)⇨途中(スキー・デポ)⇨頂上)⇨スキー滑降

というものである。今後は林道等も使って、年ごとにバラエティに富んだコース立案をしてほしい。また芸北等にも目を向けても良いだろう。また大山スキー合宿はこれまでより二日多い四泊五日とした。そして晴れた日に元谷へピストンをした。今後は中宝珠越えのツアーも考えてみてほしい。

さて本番の合宿であるが、まずこのコースについて。はっきり言って山スキーというよりスキーツアーと言った方が正確であるコースで

ある。コース案について青柳氏(山スキールート図集著者)に相談すると、横手山⇨東館山、野沢越え(焼額山⇨野沢温泉)のコースを勧められた。しかしまだこれはまだ無理であると考えた。そして一昨年の合宿のコース+奥志賀ラングフラウコース+竜王越えというものになったのである。今後まじめな態度で、各代のパーティが技術発展に務めれば、おそらく野沢越えや八甲田あたりでも合宿可能となろう。しかし今回の様なコースでも気を抜くととり返しつけないことになることを忘れないでほしい。

二年・一年の教育については今後のことも考えて、特に技術的な面に関してなるべく具体的に厳しく教えた。殊に一年はスキーも初めてであったのに、ほんとうによく頑張ってくれたと思う。

最後に志賀について、はるかに北アルプス妙高などの銀屏風を眺めつつ、白銀原野にシュプールを描くのが志賀の魅力です。今後もどんな行って下さい。その時君は風になれるでしょう。なんちゃって。

なお、色々な面で協力して下さった、野村君をはじめとする三年生諸氏、泉谷さんをはじめとする四年生の方々、現地調査のおり、厳ししながら的確にアドバイスを下さった、クマと格闘したという山本さん、ヘタな字で書いた手紙に親切に返事を書いて下さった青柳氏ら多数の方々、そして何よりも鈴木、市川、松沢(57年度卒部)の三先輩に末尾ながら謹んで感謝の意を表します。どうもありがとうございます。

今後「山スキーを志す」  
志賀高原に行く」人のために

一、58年度春合宿時の志賀横手山頂の気象データ（合宿終了後、日本気象協会長野支部へ問い合わせたもの）

| 月日   | 最低気温 | 降雪量  | 積雪    | 天気 |
|------|------|------|-------|----|
| 3/13 | -6   | 10cm | 280cm | 雪  |
| 14   | -16  | 10   | 290   | 雪  |
| 15   | -18  | 0    | 280   | 晴  |
| 16   | -13  | -    | 280   | 晴  |
| 17   | -7   | 20   | 290   | 雪  |
| 18   | -15  | 30   | 320   | 雪  |
| 19   | -17  | -    | 325   | 晴  |
| 20   | -13  | -    | 315   | 晴  |
| 21   | -7   | 10   | 310   | 雪  |
| 22   | -11  | -    | 310   | 晴  |
| 23   | -7   | -    | 300   | 曇  |

。財団法人・日本気象協会長野支部  
長野県長野市箱清水二三八三

二、アドバイス

- 1 シールは貼りつけ用の方が絶対便利。
- 2 金額面、使い易さ、軽さから見てスキーはジルブレッタ300と、サクソン・オールラウンドが我々にとってベストと言える。（今の段階では）
- 3 冬の気圧配置でも志賀では半日くらい晴れている場合がある。上空に寒気が流れ込む迄にずれがあるのである。その後は確実に吹雪になる。ツアーするときは移動性高気圧におおわれた時に限った方が安全である。

・・・志賀高原及び山スキーの照会先・・・

- （青柳裕樹（「山スキーの技術」「山スキー・ルート図集」著者）  
〒189 東村山市萩山町3-20-39
- （I B S・大阪店（山・スキー）  
〒530 大阪市北区梅田1-2 TEL(山) 06(344)5225(代)  
(スキー) 06(344)0025
- （下谷昌幸（「エアリア・マップ・志賀高原・草津」著者）  
〒377-04 群馬県吾妻郡中之条町1303
- （佐伯邦夫（「実践山スキー」著者）  
〒793 魚津市友道1305-1
- （竹節近久（志賀高原遭対協・隊長）  
〒381-04 長野県下高井郡山ノ内町 志賀高原高天ヶ原・高天ヶ原ホテル
- （志賀高原観光協会  
長野県下高井郡山ノ内町志賀高原 〒381-04
- （財団法人・日本気象協会長野支部  
長野県長野市箱清水2383
- （志賀高原観光情報電話  
02693(4)2323
- （I B S横浜本社  
〒230 (山・スキー) 横浜市鶴見区鶴見中央4-37-37  
TEL 045(502)3611(代)

## シュカブラ

岡田昌博

白根山のツアーは、まことにサブかった。下界はもう春というのに、志賀の山は、非常にヒヤいのだ。空はピーカンなのに目の前は、地吹雪でまっ白、何も見えない。山岳小説っぽくていい感じだ。おもむろにカメラを出す。手が凍えて思ったように動かない。そうこうしてる間に、パーメンに置き去りにされた。あせった。そしたら、深雪に足をとられた。コケた。カメラ持ったまま、雪の中へ潜り込む。一瞬息ができない。水の中にいるようだ。やっと顔をあげると、そこには雪が輝いていた。クラストした斜面に、シュカブラが、太陽に照らされていた。思わず、雪の上に顔を出したままシャッターを切った。ファインダーの向こうから、粉雪がたたきつけてくる。きれいだ。ほんとうに。光っていた・・・

(注、シュカブラとは、雪と風が造る自然の彫刻である。)

## シーハイル

竹中秀四郎

志賀高原山スキー合宿は私に多くのことを体験させてくれた合宿で

あった。南国育ちのものにとっては信じられないほどの雪の深さと寒さ。それは私にとってははつらさというよりは驚きであった。身を切るような寒さの中をツアーしている時、強い風で舞う雪のロンド、そして見晴らしのよい頂上に立った時、すき通るような青い空に輝く白い山々、そのむこうに壁のように連なる白銀の北アルプス、この素晴らしい景色の中を軽快？にすべるスキー、そしてその雪煙りが空に舞った時のきらめき、これらは私の脳裏から離れることはけっしてないだろう。苦しいこともつらいこともたびたびあったがこのようすばらしい体験をさせてくれたPLさん、志賀高原の自然、そして山スキーに感謝したい。そして今後も一生山スキーを続けて生きたい。おおシーハイル!!

## 山スキーパーテイ Pメン日誌

棟久恭司

スキー合宿の計画にあたり、自分は志賀高原よりも氷ノ山を考えていた。一昨年、志賀高原での山スキー合宿に参加したからである。今回山域が志賀に決ったというのは氷ノ山が合宿に適していないからではない。調査期間などの問題があり、初めての山域としては十分な準備ができなかったからである。ベースキャンプ方式ならば十分可能であると今も考えている。今後スキー合宿を考える人がいたら是非考えてもらいたいものである。

さて、今回の合宿であるが、自分の考えていた以上に充実した合宿

を行うことができた。全てはパーリーをしてくれた西杉とパーメンの努力によるものだと思っている。一昨年と比べると本格的なツアーを組んだ事、またそれを予定通り実行できたことが一番大きなことだ。我々は大きな舞台で新しい事を行うときは概して保守的になる。計画の失敗を恐れるがために思いきった計画が立てられない。今度の合宿にしてもそうであった。スキーをした事のない一年生を連れて経験の少ない我々がツアーなど可能であるかという事が一番の焦点であった。案ずるより生むは易しとはまさにこの事であった、とは合宿終了後の感想である。何はともあれ、事故もなくこの合宿を終え、志賀高原の春を十分に堪能できたことは非常なよろこびであった。重ねてパーメン諸氏の協力に感謝する。

最後に今後の同形式の合宿を立てる人のために簡単な会計報告を付け加えておく。

交通費 一一九、五六〇円（出発集集中）

エッセン 四一、八三〇円

リフト 四三、七〇〇円

他合計 二四〇、〇〇〇円（七名）

## 志賀高原山スキーP・SL日誌

宮崎 圭二郎

三月十三日

湯田温泉駅。四年生、残りのパーティの方々の見送りをうけ、胸を

ふくらませて出発する。小郡駅で、宇部短の二年生が、たくさんの差し入れ、なぜか、他のパーメンが、私をひやかす。理由がよくわからない。大阪から、大阪の某大学の女性と一橋大の男性とスキーや大学生活について楽しく話すことができた。いつのまにか、眠りについていたのであった。

三月十四日

冷たい窓に、ほほが触れ目が覚める。水滴を手でふくと、そこは、まぶしいほどの雪景色だった。長野で、その二人と別れを告げ、湯田中から、木戸池へ。積雪3mすごい雪である。雪でポールをつくろうとしても、パサパサと地面に落ちてしまう。まさに、パウダースノーである。十一時、テント設営。竹ペグを十字に、埋め、しっかりとベースキャンプを設営する。熊ノ湯スキー場へ、練習に向う。高校時代に一度、行ったことがあったが、その記憶が戻ってきて大変懐かしく思えた。

三月十五日

石井の五十分の起床チョンボで、朝が始まる。蓮池経由ブナ平到着。これから、東館山へシール登行。リフトを横目に、必死で登る。汗が顔をつたって落ちる。メガネがくもる。P.Lの許可も得ずに、竹中にサブザックからタオルを出してもらい、メガネをふこうとすると、P.Lから、「おまえら、いいかげんにしろ、雪山は、そんなに甘いものじゃない」と、きびしく叱りつけられた。起床チョンボ、シール装着に時間をとり過ぎたこと、行動が、緩慢であったことなど、雪山に対して甘さがでていた。登りのきつさも、滑降があると思えば苦にならない。とうとう寺小屋ピートクへ。岩管山がきれいだ。志賀高原全体がよく見える。大滑降。ジグザグの林道を、ぶっちぎり。まさに、この

世の快感だ。スキーは、やったらなかなかやめられない。本当に。

三月十六日

晴れ。横手山ピストン。山頂までリフト。なんと、夏合宿の姿とはまったく違った、真っ白な北アルプスの全貌が見えるではないか。春合宿でもアルプスが見れて、自分らは、なんと幸せかとパーメン一同酔いしれていた。

またも、大滑降。みんな思い思いのシュプールを描く。Sで先頭であるので、先に待っていると、みんなの滑りがよくわかる。うまくなったものだ。特に一年、竹中、石井。

三月十七日

二つ玉低気圧接近のため、この日は雪だった。それでも、熊ノ湯スキー場で練習。帰りは、笠ヶ岳スキー場を経由して、BCに着く。

三月十八日

典型的冬型の気圧配置で、完全に志賀高原は冬山と化していた。午前中は、停滞し、ホットケーキを作った。こけたケーキは、寒さともにも、みんなを不快にした。午後より木戸池スキー場へスキー練習。容赦なく雪は降りつけ、視界は、10mもない。寒い。木村の様子がおかしい。手の感覚がないというのだ。急いで近くのホテルに入って、ぬるま湯で徐々に暖める。第一関節が白い。原因は、晴天時に、ハンガローをぬらしたため、今日の寒さで凍りついたためだろうと思う。オーバーミトンをしていなかったのもよくなかったようだ。そういうことで、今日は、これでBCへ戻った。

三月十九日

晴れ。本日は、白根山ピストン。渋峠ではマイナス12℃。あまり寒く感じないのは、体が慣れてきた証拠だ。しかし、またまた木村が凍

傷にかかる。今度は足の指だ。これも、靴下が湿っていたためのようだが、本人の体質もあるようだ。「絶対、雪山に行かん」と彼は言った。山田峠へ向う。日本海と太平洋の風がぶつかりあって、それはもう強い風。白根山までツボ足で行く。ここは、修学旅行の見学地だろうだが、さすがにその様子も感じられない。酒釜、湯釜、水釜という湖がきれいだ。あの浅間山もみえる。ここで例の木村氏は言う。「やっぱ雪山はええのう。」他パーメンから、どっと笑いがこぼれる。シルをつけて、戻る。のぞき小屋で気象をとり、BCへ。

三月二十日

晴れ。本日は、移動日。一ノ瀬スキー場、高天ヶ原スキー場には、一般スキーヤーが、ひしめきあっている。これだけの人を、合宿中に見るのは、うちだけだろうと思うと情けなく思えた。奥志賀高原まで焼額林道を北上する。人もいなくなり、あたりは雪でおおわれたすばらしい雪原だ。やっと山スキーの雰囲気が出てきた。滑降だけでなく歩くスキーもいいもんだ。明日は、いよいよ竜王越えだ。

三月二十一日

三時起床。星がきれいだ。気合いがはいる。ところが次第に天候が悪化。岩菅山東館山がガスの。一本取る。PLより引き返す指示があるので。せっかくバックキングをしたのにも思いつつも、引き返す勇氣も要るんだと感ずる。結局、今日は沈みぞれも降りだした。

三月二十二日

晴れ。天気も良く絶好のツアー日和。500mの登り。最大傾斜、40度もある斜面をシル登行。シルの威力はすごいものだ。三時間の登りを終え、焼額山に着く。いよいよ、アタックを背負っての滑降。20kgもあるため、ひざをぐっと入れて、スキーの先端をおさえて、スピ



ードを制御する。ところが、サブザックの時に比べて、不安定な滑りもっと技量があればと感じる。最大の難関、蟻の戸渡りに着く。やせ尾根のため幅2mしかない。慎重に渡る。まるで車庫入れをしているようだ。恐かった。これからは、もう危険カ所がない。しかし、雪が湿って急斜面なため、パーメン全員よくこけた。一人平均百回はこけたろう。最後は、おきる気力もなくなる。二千m地点から、一気に800mも下るこの竜王越えは、非常にきつかったが、楽しいものだった。この合宿で、ゲレンデスキーから、脱ゲレンデ山スキーへと自分のスキーの考えが変わった。山スキーには、少し物足りない山域であったが、楽しく、又、厳しい合宿だった。PLさん始め、他のパーメンのみなさん、大変御苦労様でした。私は、来年も山スキーをやりま

## 春合宿スキーPに思う

一年 装備 石井 勝

スキーというのは最初カッコいい人がやるものと信じていた。したがって自分にはできまい、と思っていた。しかし、ひよんなはずみでスキー合宿のパーティに入り、Pメンを聞いた時、僕には一つの確信ができる仮定が成立した。「スキーは誰でもできるんだ」という言葉がエコーがかかって胸の中でときめいた。

しかし、現実は厳しかった。十種で、本当に生まれて初めてスキーをやって、僕は赤子同然のように、先輩から手取り足取り教えてもらったが、一向にうまくならない。結局、その日は夕ぐれまで練習した

のにブルグボーゲンも満足にできなかった。けれど疲れきった僕はそれでも目は輝いていた。「練習しかありませんね。先輩」西杉さんは静かにうなずいてくれた。シブイ。

大山のスキー合宿では僕らは他の人たちより3日ほど早く発ち、テントを使用した雪上生活も含めたプレスキー合宿を経験した。この合宿では、スキーツアーができ、しかも海が見えるスキー場で僕は内心ルンルンしていた。けれどシュテムターンがなかなかできず、研究しても上達しなかった。そんな時、ある夜、テントが強風に舞い上がり、ポールが折れてしまった。その時、スキーの技術だけでなくテントと生活にも目が向けることができ非常に勉強になったと思う。また本番の春合宿には天候を含めた状況判断の難しさも思った。

いろんな事があったスキー合宿だったが、この合宿を通じて感じたこと。そして今も自分の思考の元となっていることは、「頭の中で考えるのと、実際にやるのは大違いだ」ということである。

〈 コースタイム 〉 58年春 志賀P

3/13・14 湯田 小郡 大阪 長野 湯田中 木戸池 B.C

17:43 18:01 22:20 6:00 8:00 9:30

(  $\xrightarrow{12:40 \quad 1:08}$  熊ノ湯スキー場 )  
 $\xleftarrow{3:40 \quad 3:20}$

3/15 蓮池 — ブナ平 — 一本 — 寺小屋山スキー場  
 7:00 7:45 8:00 8:45 9:00 10:00 10:15 11:25 ( 昼エッセン )

(  $\xrightarrow{12:00 \quad 12:20}$  寺小屋山Peak ) — ブナ平スキー場 — ジャイアントスキー場 —  
 $\xleftarrow{1:00 \quad 12:40}$  1:43 1:55

— ブナ平スキー場 — 蓮池 — 木戸池   
 2:15 2:20 3:15 3:20 4:00

3/16 横手山スキー場 — 横手山Peak — 横手山スキー場 — 昼エッセン —  
 7:00 7:25 ( スキー練習 ) 9:20 9:40 9:50 10:00 ( スキー練習 ) 11:27 11:30 12:00

— 横手山スキー場 —   
 12:10 1:25 2:30

3/17 熊ノ湯スキー場 — 昼エッセン — 笠ヶ岳スキー場   
 10:20 10:40 ( スキー練習 ) 12:05 1:00 ( スキー練習 ) 3:00 3:25

3/18 木戸池スキー場   
 1:30 1:40 ( スキー練習 ) 2:30 3:00

3/19 横手山スキー場 — のぞき — 渋峠 — 山田峠 ( 昼エッセン ) —  
 6:20 6:40 7:00 8:05 8:35 9:08 9:15 10:40 11:40

— 白根山 — 山田峠 — 一本 — のぞき —   
 12:10 12:20 1:20 2:00 2:55 3:00 3:45 4:30 5:20

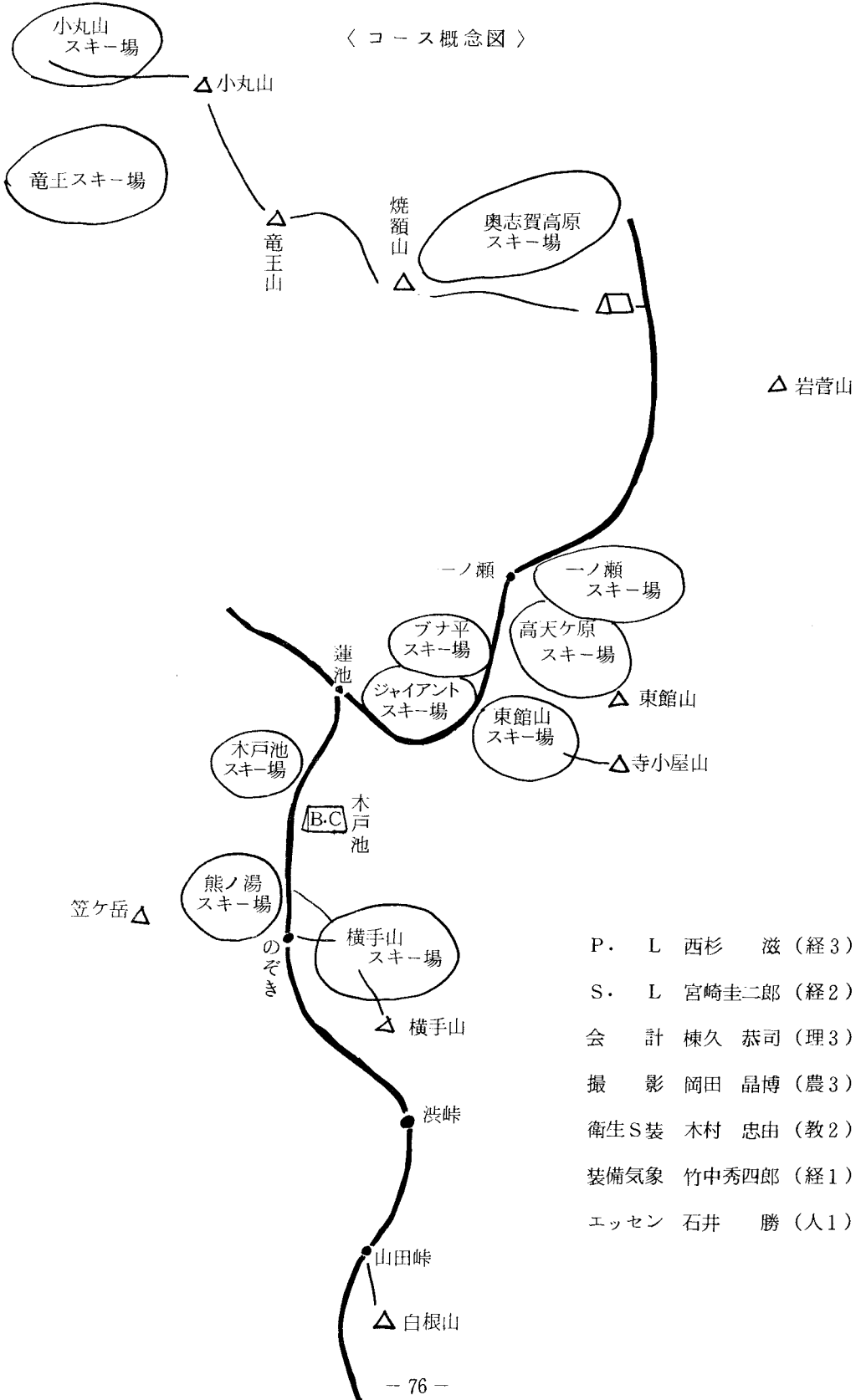
3/20 はず池 — バス停 <sup>Bus</sup> — ノ瀬スキー場 — 一本 —   
 9:20 10:15 10:20 10:40 10:42 11:40 12:20 1:00 1:20 2:30

3/21 第5・6ゲレンデ <sup>引き返す</sup>   
 5:55 6:40 6:50 7:25

3/22 一本 — 一本 — 焼額山 — 竜王手前のコル — 一本 —  
 5:45 7:25 7:45 8:30 8:40 9:15 9:45 10:55 昼エッセン 12:40 1:20 1:35

— 蟻の戸渡り — 小丸山Peak — 小丸山スキー場 ( 下山 )  
 2:30 2:45 4:05 4:10 5:05

〈コース概念図〉



- P. L 西杉 滋 (経3)
- S. L 宮崎圭二郎 (経2)
- 会 計 棟久 恭司 (理3)
- 撮 影 岡田 晶博 (農3)
- 衛生S装 木村 忠由 (教2)
- 装備气象 竹中秀四郎 (経1)
- エッセン 石井 勝 (人1)

# 鈴鹿パーテイ S L 日誌

川原 修

三月十三日

湯田温泉駅 柏原駅 2:39 | 3:14 3:22 | 4:07 4:16 | 4:43 四合目小屋



真冬の夜、田んぼに裸で飛び出し、泥んこになりながら暴れ回るというオカルトミーティングを行った鈴鹿Pは、平均年齢二十一、一三五歳という高齢にもめげず、若さとパワーを内に秘め、この日鈴鹿を自指した。途中広島駅でOBの梅沢さんと河野さんの差し入れを受け、Pメン一同感激したり、(お二人は十一月三日に御結婚されました。お幸福をお祈りします。おめでとうございました。)山科が浅野のいない間に美人のOLと仲良くなってしまい、隣の浅野の席を彼女に譲って浅野を困らせたりしながら柏原駅に着いた。この時の悪天は、合宿の悲惨さを予感させたが、なんとか雨も上がり、四合目小屋までたどり着いた。しかし、期待された雪は少なく、ガスのため何もわからず、寒い夜をすごした。小屋のすき間風が身にしみた。

三月十四日

8:45 | 9:45 9:50 | 11:00 11:10 | 12:50 エッセン 岐 1:20 ピストン ↓ 1:50 霊仙岳 2:10 ↓ 2:40 分岐 2:50 |

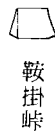


五僧の手前

四時起床、雨のため朝寝する。雨が上がったので出発するが、湿った雪とブッシュが前進を妨げる。おまけに私はトラバースルートがわからず、一気に小ピークに登りつめ、稜線伝いにピストンの分岐点に着いた。一時間四十分のこのロスタイムと雪との格闘にはほとほと疲れた。Pメンの皆さんすいません。ピストンをかけたたらピークはガスっていたが、何故かヒワイでヒョウキンなPメン諸氏が、はしゃぎ回って楽しかった。分岐から林道に向かう谷道が今度は猛ブッシュ。ようやくたどりついた林道がたつぷり二本のロードときは、思わず涙の一日だった。

三月十五日

6:50 | 7:00 五僧 7:20 | 8:07 8:17 | 8:52 9:06 | 9:52 676 10:04 | 10:59 803 エッセン 11:20 | 12:15 12:25 |



鞍掛峠

五僧はやはり暗かった。うわさ通りの五僧だった。この日三国岳までは快調だった。雪も少く、ひざ位まででラッセルも楽だった。せっかく好天なのに三国岳のピークは天望が悪くがっかりした。ここからテン場まで雪まじりの猛ブッシュ。またまたはまった鈴鹿P。ああこのパーテイに明日はあるのか。

三月十六日

7:00 | 7:40 7:50 | 8:35 鈴北岳 9:20 | 9:35 エッセン 分岐ピストン ↓ 10:00 ↓ 10:20 御池岳 11:45 ↓



この日は遊んだ。楽だった。最初の一本目に菊池氏がO嬢の乳を恋

しがる。御池岳では天望も良く、かなたに御在所岳を拝む。鈴鹿恒例の裸体写真を撮り、二手に別れて雪合戦をして遊んだ。この時山科、突然味方を裏切り、あっちについてたりこっちについてたり、まるでこうもりのようだった。当然、それなりの制裁を受けていたが。浅野は雪に埋められ女体を形作られていた。妙にリアルな形だったが、Pメン諸氏皆熱心に創作に励んだ。真の谷に向かう途中、雪の積もった沢で雪のトンネルを掘ったりして遊んでいたが、岡部が大きな穴に全身はまって恐怖にひきつった顔を見せた。他のPメンは大笑いしていた。

ここでSLもしばしばはまり、他のPメンに笑われた。雪山のSLは哀しいなあ。何故か岡部のはまった穴がS嬢の穴と名付けられ浅野が興奮して、これ以上は書けません。何やかやとワイワイしながら真の谷に着く。濡れた物を干して一同くつろぐ。くつろぎついでに菊池氏が、PL氏のいない間にPL氏のタッパーから女性の写真を見つけて出し、大騒ぎとなる。後日、清藤氏曰く「あれがありゃあ、あんな悲惨な合宿にも耐えられるわいや。」一ノ瀬曰く「心の支えが必要だ。」和やかな一日だったのに、夕方から降り出した雨が、菊池氏に悪夢の夜をもたらせた。魔のテン場・真の谷の伝説は今回も生きており、菊池氏を襲ったのである。

三月十七日

8:30 | 白瀬峠  
9:02 | 白瀬峠  
9:06 | 10:02  
10:10 | 11:20 藤原岳小屋



サブ天に寝ていたのは、菊池氏・一ノ瀬・山科の三人だった。朝、六天に入ってきた菊池氏は全身ビショ濡れ、寒さのあまり震えていた。前夜の雨でサブ天は水没し、端に寝ていた菊池氏は特にひどかったという。トランプに勝った山科が真ん中に寝ていたが、あまりの菊池氏

の悲惨さに「菊池さん、かわりましょるか」と健気にも言ったそうだ。その時、皆を感動させた？菊池氏の一言「死ぬのは俺だけでいい。」一ノ瀬曰く「あの言葉は感動したいね。」三人は一睡もできずに夜を明かし、菊池氏の身体に暖かみと顔に微笑がもどるまで、しばらくの時間が必要だった。

この日は小雨の中、とにかく藤原岳の小屋で暖をとる、濡れた物を乾かそうと出発する。ペンキ、テーピングに助けられ、ガスのため迷いかけながらも何とか小屋に着く。立派な小屋だった。午後には暗れるというPL氏の判断の通り、雨もあがって、藤原岳が顔を出した。濡れた物を乾かし、真の谷の悪夢を笑い合ったり、トランプをしたり、楽しい午後だった。登山記録簿にあるメッチェンの名前を見つけては興奮し、メッチェンを待ち望んでいたが、この日小屋に来たのは他大学のオッチェンPと地元のおじさんだけだった。がっくり。トランプ大会の最中、浅野は「エッチラオッチラ」トランプを配り、S嬢の名前でハッスルしていた。明日はこの天気が続きますように。

三月十八日

8:05 | 藤原岳  
8:28 | 藤原岳  
8:38 | 9:30  
9:50 | 10:41 治田峠  
11:16 | 12:25  
1:30 竜ヶ岳前



四時に起床したが無情の雪が降りしきる。御来光を拝めず、天候回復を待って出発した。しかし藤原岳のピークはガスの中だった。この日は昼のエッセンの頃から雪が降り始め、まともなカッパを持たなかったSLは全身濡れねずみになってしまった。あまりの激しい雪のためPL氏はコース半ばで断念、明日に希望を託して竜ヶ岳前の稜線にテントを張った。夜のエッセンを作り始めると、Pメン諸氏の熱気と、ブスの熱のためにテントの中が蒸気で真っ白になってしまった。

PL氏と一年生はお互いの顔が見えなかったという程の蒸気のため、Pメン全員で何やらガスにまかれた遭難ごっこのようなはしゃぎ方をしていた。「おーい生きてるかぁ。明日は晴れるぞぁ」

三月十九日

|      |   |      |     |       |   |       |      |       |   |       |   |       |   |      |   |      |   |      |          |
|------|---|------|-----|-------|---|-------|------|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|------|---|------|----------|
| 7:30 | — | 8:55 | 竜ヶ岳 | 10:00 | — | 10:45 | 石ぐれ峠 | 11:30 | — | 12:30 | — | 12:40 | — | 1:29 | — | 1:30 | — | 3:10 | 八風大明神の鳥居 |
|------|---|------|-----|-------|---|-------|------|-------|---|-------|---|-------|---|------|---|------|---|------|----------|



晴れた。最高に気分が良かった。ルンルンであった。

三時三十分に起床したが、テントがバリバリに凍っており、スパッツのファスナーも凍りついて、ライターであぶったりしていたために出発が遅れた。私のハンガロが夜明けの寒さに凍りつき、手からぬいてもそのままの形で不気味だったが、笑ってしまった。テントのすぐそばに、いくつかの黄色い模様があった。昨夜は寒かったから遠くに行くのがおっくうだったのだろう。六時には御来光が拝めた。パッキングに手間取りながらも感激の美しさだった。浅野は凍ったテントと格闘していた。

竜ヶ岳の展望は優だった。御在所岳が近くに見える、名古屋方面の平野が一望でき、これまで歩いてきた山々が白銀の美しさを見せていた。晴れた鈴鹿は美しい。石ぐれ峠でのエッセンは暖かった。バイクのおじさんに出逢ってしまい、思わず下界の近さに驚いた。この後笹ブッシュに悩まされながらテン場に向かったが、浅野が遅れ始めた。毎日の悪天のため濡れたテントを担ぎ通し、特に今日は凍ったテント。浅野の闘志も燃えつきたかに思われたが、PL氏の気合いのおかげで何とかもちこたえた。テン場で見た夕陽は神神しく、夕陽に向かって撮った全体写真は、何とも言えない程格調だった。大エッセン大会をして皆、気持ちよく眠りについた。明日は下山だ。

三月二十日

今合宿は凄かった。鈴鹿のいろいろな面を体験し、御在所岳ではしばらく満足感に浸りきっていた。この日、一年生の下山パワーに驚かされた。昨日の彼らとは似ても似つかぬ、SLを追い越しそうな勢だった。御在所ロープウェイでは、Pメン一丸となってすれ違う登りのロープウェイのメッチェンをふり向かせることに懸命だった。下山後、焼肉を腹一杯に猛スピードで平げて店の人をあきれさせ、満足してぐったりしてビジネスホテルのほかほかベッドで幸福に眠った。同室の菊池氏に襲われませんようにと祈りつつ。期待してたりして。

御在所岳で女性を見た時に「女だっ」と叫んだPメンがいたような気がする。御池岳のおぞましき裸体写真が忘れられない。病気人間の集団だったが、タフで優しい男達だった。



## 大峰七人の修行僧 Party

### PL総括

橋田忠昭

大峰という山域は、ワングルの合宿で用いられるのは初めての山域であったが、僕がこの山域を春合宿に選んだのは、豊富な雪量があり、雄大な山容を誇る山域であったためだった。又、しっかりした小屋が点在し、ルートもアップダウンの少ない稜線沿いであったことも、計画を立てる上でささえになってくれた。

はじめての山域であり、雪量も多いということで、問い合わせを出したり、小屋のおやさんに聞いてみたりして、ピッケル、アイゼンを使うかどうか検討してみたのだが、ほとんどが必要ないという答えだったので、ワカンだけを持っていったのだが、実際には、何ヶ所かピッケル、アイゼンがあれば、と思わせる所があった。最近では、ワングルの春合宿の傾向として、寒冷地を望む動きがあるように感じるが大峰や剣山等の山域以上を望むのなら、装備面を考え直さなければならぬと思う。ピッケル、アイゼン等は、あくまでより安全に山行をするための道具なのだから、どうやって使いこなせるようにするかとか、金銭面での問題もあるが、あまりこだわらずに使うことを考えてはどうかと思う。

耐寒訓練ということで、乾布摩擦の他に、コタツに入らないとか、雪上訓練でビバークする等を強制したのだが、乾布摩擦以外は、ほと

んどメンタルな部分での効果を期待してのものだった。他のパーティの者が、コタツに入っている時に、我慢して入らないことによって、日常の生活においても、自分は雪山に行くんだという自覚が生まれてくれればと期待したのであり、又、合宿中の寒い時にでも、雪上の時のビバークよりはましだ、というように感じてくれればと思っただけだが、Pメンの皆は、本当によく協力してくれ、成果があったように感じる。

僕の個人的な理由で、合宿の出発を遅らせてしまっただけでPメンや上級生に心配をかけるなど、恥かしいPLでしたが、Pメンの皆、本当によく団結してくれ、雰囲気盛り上げてくれました。最高の合宿でした。

最後に、「悲しい色やね」を聞くと、山上ヶ岳から見た、夕暮れの大阪湾を思い出すぜい！

## 大峰P SL日誌

3月17日(木) 晴れのちくもりのち吹雪

他のパーティよりも2日ほど遅れていよいよ合宿へ出発である。湯田温泉発6時22分。見送りは山女の徳田さんただ一人。徳田さんに感謝しながらPメン皆落ち込む。ところが小郡駅のホームで新幹線を待っていると、山女の佐々木の車で中間、松野、住吉がわざわざ宮野から見送りに来てくれた。Pメン皆感動のあまりに涙を流しながら

ら新幹線に乗り込む。

大阪で環状線に乗りかえ、天王寺で降りる。そこでかつてノーマン喫茶で有名だったあべの橋というところから近鉄に乗り、下市口でバスに乗り代え、午後3時ごろ入山口の洞川へ着く。この日は面不動の鐘乳洞までピストンをかけ、洞川キャンプ場にテントを張る。夕刻ごろから雪が降り出す。明日の天候が心配である。

3月18日(金) 雪

起床5時。少し様子を見るが、雪は止みそうにもない。沈に決定。

気象の尾崎氏が天気図をとると、2つ玉の低気圧が我々を追いかけてきている。パーメンの中に低気圧を引き寄せる超能力を持っている人物がいるようだ。鈴鹿と剣山はツボにはまっているだろう。いい気味だ。トランプをして暇をつぶす。雪がひどいため、テントがつぶれそうになったので、ババぬきで負けた者が雪かきをすることになった。なぜか雪かきをするのは2、3年生ばかりであった。明日は晴れそうだ。

3月19日(土) 晴れ

起床5時。キャンプ場のまわりの積雪は20〜30cmくらい。上はどのくらい積もっているのだろうか。考えただけでウンザリする。7時30分テン場発。テントが凍ったために出発までに時間がかかってしまった。法力峠を過ぎたあたりから雪が深くなる。稲村小屋の近くになると、所々で雪のためトラヴァース気味についている道がわからなくなってきた。ラッセルはやはりきつい。正午ごろ小屋に着く。昼のエッセンの後、大日岳にピストンをかけるが、深雪のため、手前でウターンする。残念。小屋に帰る途中で、パーメン皆上半身裸で写真をとる。そのときの尾崎の尾和を見る目が心なしか光っていたのは気のせいでは

あろうか。2人ともエイズだけにはならんといってくれ。

小屋に帰ると、コース調査に行った私以外の他のパーメンは、小屋のおっさんにつれられて水汲みに行かされる。この小屋のおっさんは、皆をこき使えるだけ使つて、しまいはじゃまもの扱いくさつた。こらゝ俺たちは客なんぞゝ三波春夫を見習わんかいゝいっべんどづいたろゝかゝ本当に頭にきた。どんなことがあっても、今後二度とあの小屋には泊りたくない。

3月20日(日) 晴れ

起床4時30分。おっさんにせき立てられるようにして小屋を出発する。途中までは昨日コース調査に行ったときのトレースがあったので比較的楽であった。しかし稜線の北側のトラバースに入った当たりから急に積雪が多くなり腰くらいまでもぐる。また、所々で雪面が凍っており、エンピでステップを切りながら進むが、結局、レンゲ辻まで夏山コースタイムの3倍近くもかかってしまった。レンゲ辻には女人結界の門があり、女性はこれより先に進めないようになっていて、エンピでステップを切ろうとするが、エンピの先が曲がってしまつて思うようにいかない。みんな何とか無事にやり過ごしたが、やはりピッケルは持つて来ておくべきだと思つた。難所を越えた所でS L氏が少しバテ気味だったので先頭を桑原にかわってもらう。ところが、先頭を代つたとたんに桑原はものすごい勢いでラッセルをし始めて、50mも行かないうちに息を切らしていた。やはり彼は完全無欠のタコであるとき実感した。桑原のラッセルのおかげで皆無事に山上ヶ岳につく。予定では小笹の宿までであったが、今日はここでストップすることになり、ピークから少し下つたところにあるボロボロの避



難小屋の中にテントをはる。その後、皆で、鐘掛岩、西ののぞきにピストンをかける。西ののぞきで、次期主将の岡崎が異常なまでの高所恐怖症であることが発覚し、皆でいじめて遊ぶ。非常におもしろかった。

3月21日(月) 雨のち晴れ

起床5時。外はガスって雨が降っている。沈に決定。水を作ったりして暇をつぶす。午後になって晴れてきたのでピークまでピストンをかける。夕日を反射して輝く大阪湾が見えたので皆感動し、その夜ラジオから流れてきた上田正樹の「悲しい色やね」がパーティソングとなる。

3月22日(火) 晴れ

起床4時30分。小屋を6時40分に出発。

前日の雨で雪がしまつて少し歩きやすくなった。大普賢岳まではなかなかのペースで進む。このピークで別府大学の3人パーティに出合う。彼らも前鬼まで行く予定らしいが、コンパスを忘れてきたそうである。信じられん。途中まで好調であったが、国見岳の附近の鎖場が凍っていて手間どる。この鎖場で尾崎が凍っている道の上をスルスルと立ったまますべり出したので皆あわてて声を発した。運よく数十mで止まったが、その先は十数mの断崖となっていたので、落ちたらただでは済まなかったであろう。皆の狼狽ぶりに反して本人は何事もなかったような顔をしていたのが非常に印象的であった。14時過ぎに行者還の小屋に着く。今日はよく歩いた。

3月23日(水) くもりのち雨

起床4時30分。小屋を6時27分に出発。

一の峠まではものすごいペース。無積雪期とほとんど変わらないコー

スタイムで進む。しかし、弥山の登りにかかると、雪質が悪くなり、皆、腰くらいまでズボズボとはまってしまい思うように進まなくなった。しかたがないのでワカンをつけるが、あまり効果はなかった。10時35分に弥山小屋に到着。小屋に着いたとたん、ドンシャ降りの雨が降り出した。

3月24日(木) 雨のちガス

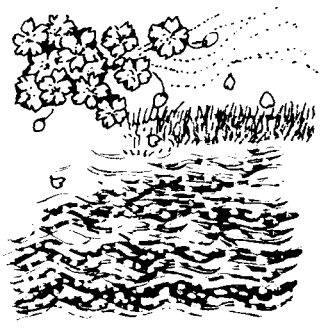
起床5時。雨が降っていたので少し様子を見るが、予備日も少なくなってきているので、今日中に楊子ヶ宿の小屋まで行っておくことにする。10時過ぎに小屋を出発。昨日からの雨の影響で雪質は最悪である。皆ボロボコとはまりながらこの合宿のメインピークである標高一九一五メートルの八経ヶ岳に着くが、視界は全くきかない。写真をとるとすぐに出発。この下りで今までチョンボのなかったSL氏が道はずしてしまいパーメンに迷惑をかけてしまった。どうもスマミセン。五銛峰の手前当たりから雪が少なくなってきたが、道が凍っているので油断はならない。案の定、舟ノ峠のすぐ手前で尾崎が足をすべらし、一回転しながら2〜3m落ちた。大したことはなかったが、この男だけはよくパーメンを心配させてくれる。しかし、この時も尾崎は冷静であった。

14時15分に楊子ヶ宿の小屋に着くが、この小屋は今までの小屋の中でいちばんひどく、屋根が半分しかなくて戸が完全にしまらないというしろものだった。しょうがないのでポンチョで屋根を応急処置し、何とか寝れる状態になった。明日はいよいよ前鬼だ。

3月25日(金) ガスのち晴れ

起床5時。エッセンをすましていざ出発しようとするどタ靴がビンビンに凍っていた。しょうがないので30分くらいかけてブスで溶か

す。そういったわけで7時12分に小屋を出発。孔雀のぞきまではなかなかいペースであったが、釈迦ヶ岳の登りの道が凍っていたので手間どってしまった。せめて4本爪アイゼンがあればもっと安全で迅速に進めただろう。釈迦ヶ岳で昼のエッセンをとると、前鬼までものごいペースで下る。本当は今日は前鬼の宿坊に泊まる予定であったがPL氏がこのまま前鬼口まで行けば今日中に大阪まで帰れるバスに間に合う、というので、そのまま前鬼口のバス停までの10kmのロードをすることになった。がしかし、このロードがこの合宿の最後をかざるにふさわしい悲惨なものとなった。前鬼口のバス停に着いたとき、パーメン皆足はマメだらけ、体はボロ雑巾のようになっていた。おまけにPL氏の感ちがいでバスはとなり町止まりで、今日中に大阪まで帰るのは無理であった。パーメン皆最後になって落ち込む。しかし、その日泊まった民宿で飲んだビールは一生忘れられないだろう。パーメンの皆さん、本当にゴク로우サマでした。



< コースタイム >

3月17日(木) 湯田温泉 6:22 新大阪 天王寺 下市口 bus 洞川 15:10  
くもりのち晴れ 13:05 13:24 15:00  
のち雪

—— 洞川キャンプ場 16:20 → 面不倒鐘乳洞 ( 1 : 35 )  
15:35 17:30 ←

3月18日(金) 起床 5:00 沈殿  
雪

3月19日(土) 起床 5:00  
晴れ  
洞川キャンプ場 7:30 登山口 7:57 8:05 8:49 9:00 9:40 9:50 10:30 10:40  
法力峠

—— 稲村小屋 12:50 → 13:20 大日岳手前 ( 4 : 34 )  
11:50 14:00 ← 13:40

3月20日(日) 起床 4:30  
晴れ  
稲村小屋 6:58 8:19 8:32 9:44 10:00 10:40 山上ヶ岳 10:45 西ののぞき → 鐘掛岩  
12:07 ←

( 4 : 25 )

3月21日(月) 起床5:00 沈殿  
雨のち晴れ

3月22日(火) 起床4:30  
晴れ

山上ヶ岳——小笹の宿——脇の宿跡——大普賢岳——  
6:40 7:20 7:50 8:30 8:40 9:33 10:05 10:55 11:10

——七曜岳—— 水場——行者還小屋 (6:05)  
12:05 13:00 13:40 13:50 14:07 14:15 14:25

3月23日(水) 起床4:30  
くもりのち雨

行者還小屋——一ノ峠——石休ノ宿—— 弥山小屋  
6:27 7:27 7:40 8:40 8:55 9:40 10:00 10:35 (3:20)

3月24日(木) 起床5:00 →7:00  
雨のちガス

弥山小屋——八経ヶ岳——  
10:17 11:00 11:05 11:45 12:00 13:00 13:05 13:42 13:50

——楊子ヶ宿小屋 (3:25)  
14:15

3月25日(金) 起床5:00  
ガスのち晴れ

楊子ヶ宿小屋——孔雀のぞき—— 釈迦ヶ岳——  
7:12 8:07 8:20 8:50 9:00 9:50 10:02 10:27 11:00

——太古の辻——二ツ岩——前鬼—— 前鬼口  
11:55 12:53 12:33 12:53 13:25 13:45 14:30 14:40 15:10 15:23 16:10

(6:37)

八人のニセ山伏

大峰

合言葉はビュッビュチン party

|                |              |
|----------------|--------------|
| PL             | 橋田 忠 昭 (医3)  |
| SL             | 西 田 圭 吾 (工2) |
| 会計             | 大 田 剛 (農3)   |
| 撮影             | 原 田 卓 也 (教3) |
| サブ装備)<br>サブ気象) | 岡 崎 雅 治 (農2) |
| 衛生             | 桑 原 潤 (経2)   |
| 装備)<br>気象)     | 尾 崎 幸 司 (経1) |
| エッセン           | 尾 和 寛 章 (経1) |

## 軟派／ SSSパーティ PL総括

私、富高、井野にとって最後の合宿は、大変思い出深いものとなった。

まず、3月の剣山の寒さ、雪の多さであった。入山直前の問い合わせとは一変して、日一日と積雪量がふえていった。はじめはSLだけ、次は2年生3人、最後には8人全員交代でラッセルを行なった。皆、気力体力とも十分、よく頑張ってくれたと思う。八甲田山、吹雪の進軍の様な日にも、よく歩いてくれた。これからの大きな自信となったことだろう。そして無事下山でき、楽しい思い出となったのは、8人のチームワークの結晶であったと思う。ミーティング・誕生会・そして極めつけメッチェン総なめ計画・2度の雪上・スキー合宿と、とにかく皆で色々やった。交換日記も行った。

パーティが決定し、4月の打ち上げまでつねに笑いのたえない、ひょうきんなパーティであった。この団結も、全員が個々の役割を十分に果たしているという土台の上にあるものであり、大変満足している。反省点としては、入山前にまたしても私がかんざしをして万全の体勢でなかったこと、他にも万全で臨めなかった者もいた。我クラブ最大行事である合宿前のコンディション作りの大切さをまたしても認識した。私事を書かせてもらえば、自分は、とにかく気楽で、のんびりして、おもしろいパーティをつくりたかった。剣山は、前川氏、権藤氏、泉

谷氏（岡崎氏）と多くの主将がPLとなってきた由緒あるコースであり、小生そのことも頭をよぎったが……。私は合宿のみならず、いろいろ多くの人間と山へ行き、そして同じパーティとなったら時には腹をわって話し、楽しくすごすように努める姿勢が大切であると思う。特に一緒に合宿に行った人間は一生忘れられぬと思う。

あの吹雪、豪雪の剣山で6泊したわがパーティの団結は永遠に不滅である。

## 3Sパーティ・SL日記

春を感じさせる影に着いた時の感激は忘れられません。今回、豪雪の為に、三嶺に行けなかったのは残念でした。しかし、雪化粧の山々は素晴らしさ、また、吹雪の山の恐しさを体験できました。

ただ、合宿の途中で私がバテてしまって、PL氏や他のPM諸氏に御心配をおかけしましたことを深くお詫び致します。本当に、未熟なSLでしたが、御指導くださったPL氏ならびに三年生諸氏、そして協力してくれた二年生諸氏ならびに一年生諸氏に深く感謝します。ありがとうございました。

3月13日

プレ合宿を終え、湯田温泉駅で見送りを受けて、8時8分の列車で出発した、我がPは、一日かけてのアプローチという苦痛的な時間を

楽しんで過ごしました。広島までは、差し入れの話に花が咲いていました。広島で岡山行きの特急に乗換え、差し入れの弁当を食べて、その後は、雑誌の回し読みや雑談で時間をつぶしていました。P.L氏は、寝ておられるか、某メッチェンからの差し入れを大切に握りしめては悦にいつておられました。とにかく長いアプローチは、午後8時前にあの池田高のある阿波池田に着いて終りましたが、空は雨模様で明日からの行程の不安も出ていました。その夜は阿波池田でステーション。

3月14日

5時起床。阿波池田を5時45分に出発、貞光に着くあたりで、山に雪が積っているのを見て、昨日の雨が山では雪であったことを知る。剣橋までのバスは、ジェット・コースターまがいで、粟太郎は、一番前に乗って楽しんでいた。剣橋に着く頃から、雪が降り始める。ロードを一本して、登山道にはいる。高度を上げるにしたがって、積雪量が増え、白銀の世界が広がってゆく。最後の一本は、長くてまいった。今日のテン場は、国民宿舎の軒下で雪に降られることがない。ラッキー。ピストンは、明日に延したため、テン場でのんびりした。午後から晴れたので、雪は、まぶしいくらいだった。夕焼けが美しかった。

3月15日

起床を私がチョンボしてしまいました。あわてて、エッセンを作り6時45分にピストン出発。ここで、地図通りに稜線に入ったために道がなく、ブッシュしてしまう。皆さん、すみませんでした。なんとか道を見つけたのでありますが、なかなか、塔の丸につけば、途

中でひきかえしました。しかし、塔の丸への稜線から、剣山、次郎笈、三嶺などが見え、最高でした。テン場にもどって、パッキングした後大剣神社までの行程でしたが、西島神社に着く頃には、私、非常に疲れたため、トップを小島氏にバトンタッチしました。その後、長い一本でテン場に着きましたが、テン場に着いた時には、ほとんど体に力がいりなく、サブ天で寝らせてもらいました。エッセンの時には、少しよくなったものの食欲がなく、食後、ビタミン剤を飲んで寝ました。この時ばかりは、P.Mに申し訳がないと共に、明日の行動に不安が残りました。P.Mの皆さん、どうもすいませんでした。

岩谷明彦

3月16日(水)

何ということだろう！八甲田山死の行軍である。朝、剣神社を出る時は、それほど吹雪いているというわけでもなかったのに……。稜線に出ると、次第に風は強くなるわ、雪は横なぐりになるわで、視界も20mぐらいなもの。途中からは、富高氏がずっとラッセルをして、高瀬へと我々を導いて下さった。持って行ったワカンもまるで役に立たない。雪山のきびしさ、恐怖感さえ忘れさせる。寒いノザックを降ろしたくないノただ考えることは、一早く高瀬の避難小屋へたどり着くことだけだ。剣山のピークから4本で小屋に着く。幸い、小屋には非常用のまき、かまどがあつて、暖をとることができた。一同、小

屋に着いた時には、思わず万歳三唱をしていた。今から考えると、本  
当に恐ろしい。うまく小屋までたどり着かなかったら、当然、ビバ  
ークになつたらう。とすると、翌日、あの吹雪の中、どうなっていた  
らう。雪山での気象判断のむずかしさを、痛感した。

追記、この日PL氏は、カメラを落としてしまった。写真が欲しい  
ヨ〜。

### 小 島 直 樹

3月17日

起床がかかる。今日の天気はどうかと心配する。小屋のドアを開け  
てみると、昨日までの吹雪は嘘のように、太陽が照りつけ雪に反射し  
てまぶしいばかりである。「やった／＼」と思ったのも束の間、「はま  
った／＼」と思った。

出発前、靴が凍っていたために、焚火をして、靴を乾かし出発する。  
やはり前に思った通り並の雪ではない。2mは積っていたらどうか。

SL一人ではこの新雪の中を進むのは体力的に無理であろうと考えら  
れたPL氏は、『全員ラッセル令』を出された。だいたい一人、5  
10分程度であるが、雪に妨げられて前へは進めない。一時間に50m位  
だろうか。

PL氏は、ラッセルの途中で、『大』の字にうつぶせに倒られるし、  
小生は、両足、両手、頭を雪の中に埋め、雪の上にザックだけが姿を

見せている状態になり、セカンドに助けをもらうなど、悲惨なドラマ  
が数多く生まれた。

こういう状態を続け、徐々に前進を続け三嶺を眼前にして、白髪の  
小屋跡がテン場となった。テン場からの三嶺は壮大で、明日はそこに  
行けると希望をふくらました。

3月20日(曇)

天気は下り坂らしい。三嶺のピークがガスに隠れだした。ガス、エ  
ッセンとガスの残りが少ないことからPL氏は下山を決意し、エスケ  
ープルートを通り久保影に向う。前半は表面が凍った雪で中が新雪、  
後半は腐った雪のラッセルと非常に歩きづらかった。井野氏のドタ靴  
はビブラムの前半分が開いて雪のハンバーガーになっている。高度を  
下げるにつれて雪が減ってゆき、途中からロードとなる。途中の氷の  
滝が見事だった。

久保影は梅の花が満開で、すでに春であった。僕が春山を好きな理  
由のひとつに下山がある。冬の世界から数時間で春を一気に体感でき  
るからだ。

< コースタイム >

3/13 湯田 8:08 小都 8:28 8:32 広島 11:05 11:45 岡山 14:40 15:13 宇野 15:46 15:54 宇高連絡船 高松 16:54 17:35

阿波池田 (Station) 19:53

3/14 (雪)

貞光 bus 劍橋 葛籠 (一本) 沢 5:43 6:18 7:15 8:13 8:45 9:10 9:20 9:55 10:10 10:40 10:55

夫婦池 12:05

3/15 (晴天)

(一本) 塔ノ丸の手前 林道 (ピストン) 6:45 8:00 8:10 8:55 9:20 10:10 10:15 10:35 11:55

見ノ越 西島神社 大剣神社 12:30 12:45 1:35 1:50 3:00

3/16 (吹雪)

剣 peak (一本) 次郎笈 丸石 高ノ瀬避難小屋 6:35 7:15 7:25 8:15 8:30 10:20 10:30 11:50 12:50 1:38

3/17 (晴のち雪) 沈

3/18 (吹雪) またも沈

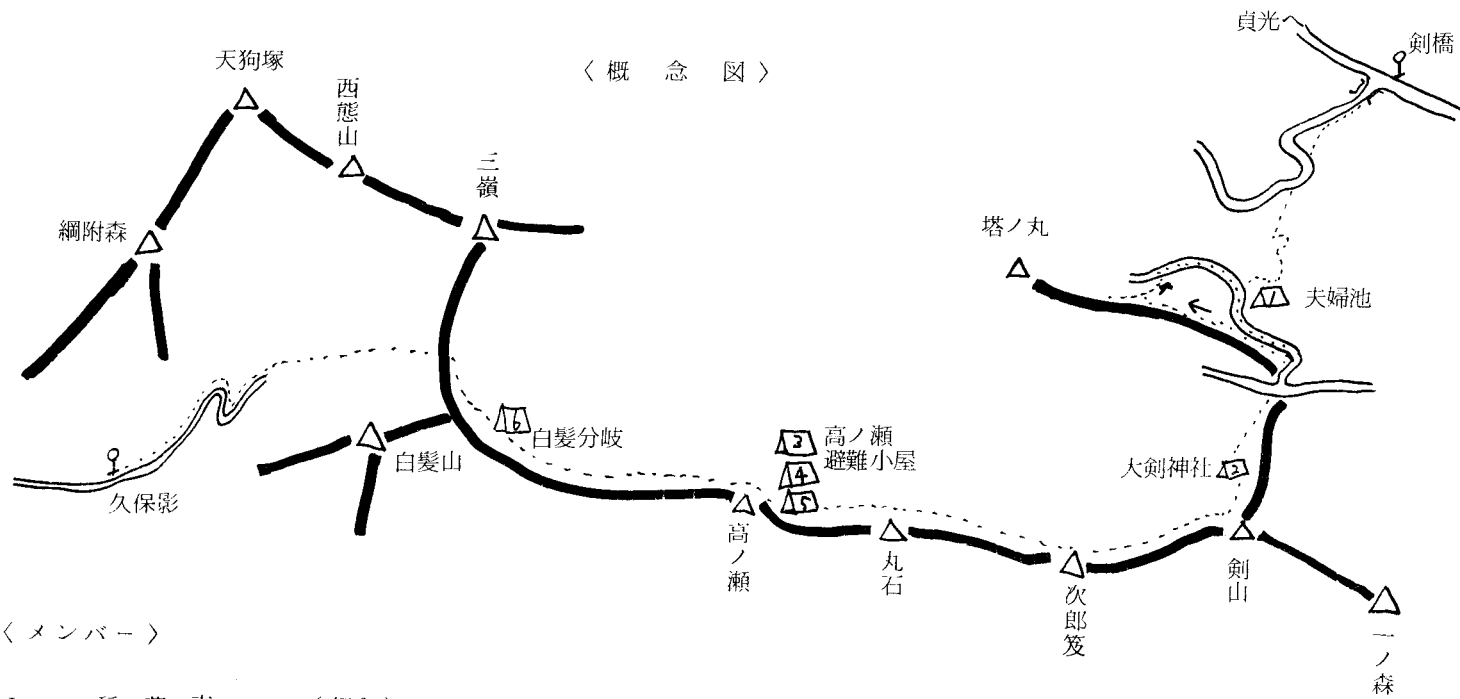
3/19 (快晴)

高ノ瀬 石立山分岐 (一本) (一本) 白髪分岐 6:50 8:45 8:55 10:15 10:40 12:00 12:40 2:00 2:20 3:25

3/20 (曇天)

(一本) (一本) (一本) さゆりが原キャンプ場 6:55 8:40 8:50 9:40 9:50 10:30 10:45 11:10 11:50

売店 久保影 (合宿終了) 1:05 1:25 2:15



|    |     |      |      |
|----|-----|------|------|
| P  | L   | 稲葉真一 | (経3) |
| S  | L   | 斉藤昌彦 | (農2) |
| 会  | 計   | 井野博之 | (経3) |
| 衛  | 生   | 富高紳夫 | (経3) |
| サブ | 装   | 宮本博  | (経2) |
| サブ | 気   | 小島直樹 | (経2) |
| 装  | 備・気 | 岩谷明彦 | (経1) |
| エ  | ッ   | 斉藤直樹 | (教1) |
| セ  | ン   |      |      |



## 「8人のE・T」PARTY

PL総括

渡辺 浩幸

合宿初日、大崩山に向かうバスの中で、「雪が少ないように」とひたすら願っていた。というのは、合宿前、不安だったことが、第一に雪、第二に大崩の沢歩きであったからだ。特に雪が不安であった。というのは、合宿直前の問い合わせで祖母山の積雪が70センチであるといわかったからである。雪山経験のない僕としては、過去二回の合宿で雪山に行かなかったことを後悔した。そこで僕としては、「70センチならひざ上だから大したことはない」と都合よく自分に言い聞かせた。それに、三年があと二人いて、どちらも雪山経験があるということも頼りになった。第二の沢歩きは、調査Wで行って感じたことで、徒渉が多い上に、沢沿いの石や岩がすべりやすかったのである。春合宿に行くのは三月であり、結氷の可能性もあると問い合わせてもわかっていたので不安があった。しかし、行ってみると、雪も、祖母付近は確かに腰付近まであったが、支障をきたすほどでもなく、沢歩きも朝は結氷していたが、心配するほどでもなかった。

今回の合宿で初めてPLをさせてもらったのだが、PLをして感じたことは、自信をもつことが一番大切だということである。PLが不安そうにしていたのでPMは安心してついていけない。この自信は裏付けされた行動がなければもてない。したがって、僕は、コース把握

については自信をもっていたが、雪山、沢歩きについては、自信をもてなかった。これらはFWで養うものだと思感した。他には、決断力、判断力、統率力などが必要だと思った。これらのどれもが自分には不足している。

したがって、PLは役不足であったにもかかわらず、合宿が無事に完全消化できたということは、PMが協力してくれたおかげだと思う。僕にとつて、非常に良い経験となった。コース自体は、雪、沢歩き、ブッシュ、岩登りなどバラエティに富んでおり、下級生には、今後の山行に少しでも役に立つのではないかと思っている。

最後に、合宿成功バンザイ！ PMのみんな、どうもありがとう。

## 「8人のE・T」P Pメン日誌

天野 雅紀

三月十三日

出発は10時24分湯田発で、起床から時間が余りすぎて合宿所でトラップ（階級闘争）をして時間を潰す（この後合宿中階級闘争を200回近くやる事になる…） 見送りは残りのPがほとんどないので寂しいものとなった。延岡まで約7時間はとにかくくだった。延岡はこの日風が強くて夜は冷えこんだが合宿前の緊張をよそによく眠れた。

三月二十日

天気の良い心を心配しながらの出発だった。八丁越までは地図上にな

いアップダウンが多く意外と疲れた。最後のピーク大障子岩からの展望を楽しんだ後、神原まで一気に下山だ。舗装した道に出た時はやっとという気がしたが、それからバス停までがまた長かった。バス停前の神社で濡れた物を干して最後のエッセンを食べた。とにかくみんな御苦労様でした。この夜PメンのS氏の自宅で食い地獄が待っていた。

## “8人のET” P SL 日記

### 中 桐 清 志

三月十三日 雨のち曇

四時起床。出発までに時間があるので、合宿所で遊んだ後、十時二十四分に湯田を出発、延岡へと向った。延岡駅前を下界最後の食事を会計を口説いて豪勢に行なう。今夜はステーション。犬コロがかわいかった。

三月十四日 曇のち小雪

五時十分起床(野村) 六時半のバスで、上祝子へ。谷底へ落ちてもおかしくない様な狭い道をクラクションを鳴らしながら進む。一時間到着。目指す大崩は、積雪しており、いよいよ合宿だという緊張感が走る。林道を通って、笹の林を抜けると、大崩山荘跡。四、五cm程の積雪の中を歩き、昼前に今日の天場、吐野小屋跡へ。昼からSとI氏下見に行く。雪があつて一時間以上遊んで帰る。河原は日なたぽっこをするのに最高だった。

三月十五日 晴のち曇

五時半起床(野村) 今日、大崩山にピストン。天場からすぐに渡渉して河原をずっと進む。三回程渡渉して、二回滝を巻いて登る。滝は凍っていて、アイスキャンデーのようなつららが出来ており、皆より大きいのを取ってきては見せびらかしていた。稜線に出ると、眺めのよい石塚に着く。祖母傾の山なみやかすかに霧島が見える。五分程で大崩山。あまり展望は良くない。帰りは来た道に戻る。朝凍っていた所も溶けて、楽であった。巨大な横岩屋は屋久島の岩を思い出させてくれた。渡渉では、こけそうな人間はやはりこけた。一年のN氏、周りの声を無視して渡ろうとし、ずぶ濡れになり、ブツブツと文句を言っていた。テントに戻ると、昨日と同様トランプに熱狂する。

三月十六日 雨

五時起床(天野) 起きると小雨が降っていたが増水したらまずいというこで出発。数多くの渡渉をし、凍っている滝を慎重によじ登って三本目あたりで沢が枯れてきた。渡渉や滝登りは、天然のフィールドアスレチックみたいで楽しみながら歩けた。滝登りでは、A氏後ろのS氏にキックを顔面にくらわす。稜線に出る手前の笹ブッシュでは予想通り、目標より南にずれた所に出ってしまった。ゴメンナサイ。ここでもN氏、笹ブッシュに文句を言っていた。五葉岳のピークはガスでまっ白。証拠写真を撮って即下山。鉱山跡の不気味なトンネルは探険隊の気分で通過。橋を数回渡って見立へ。PLの冷静な判断により上川の公民館に泊まることに決定。だるいロードも暖かい公民館とトランプが待っていると思うとすぐであった。途中で気象の時間になったのでA氏中の結のバス停で天気図をとる。寒い中御苦労様。公民館は一人五百円也。細引きを張って濡れた物を干して、まるで下山の雰囲気。暖かくてぐっすり眠れた。

三月十七日 曇のち晴時々雪

六時半起床（野村） ロードで見立迄戻り、林道に入る。小雪のちらつく中林道と山道をどんどん進み、九折越に至る。公民館泊りだったせいか、皆、バテていた。水場は、小屋の手前十分程の所に有る。夜は恒例のトランプ大会に燃える。寝る前、外に出ると大雪で、S氏「八甲田じゃ。八甲田じゃ。」と騒ぐ。寒さで震えながら眠る。

三月十八日 ガスのち晴

五時起床（佐藤） 傾山へピストン。靴が凍っていてブスで溶かして出発。一、三七八のあたりから目前に大きく傾が見えてくる。後傾の直前に少しすべりそうな所があったが、無事、傾山へ到着。今まで歩いてきた大崩、五葉や目指す祖母の山なみが見えた。眼下には竹田の町が広がり、その向こうには、雪をかぶった九重が見える。九重の「メッチェンPも寒いやろうな」九折越小屋まで戻り、小屋の左手の縦走路を行く。笠松山、本谷山とも、周りは木に覆われていて、あまり良いピークではないが、木に登ると九重、阿蘇、由布岳が見える。まるで猿である。十五cm程の雪の中をドドドと下ると、尾手越。天場は狭い。山口のFMが入り、皆、懐しがついていた。昨日あたりから夜のエッセンが終ると、皆落ち着きがなくなるようになる。戦い（トランプ）に備えて、各自、準備を始めるのである。今夜はやけに星が奇麗だった。

三月十九日 快晴

起床五時（石井） 20〜30cmの雪の中を二本で古祖母へ。ピークは南側の展望が良い。I氏地図を見ながら、「あそこは河岸段丘で…」と講義してくれる。さすがに地理研。「さっぱりわからん」学年写真を撮る。三年生は「土俵入り」二年は「見ザル、聞かザル、言わザ

ル」一年は「？」の題であった。古祖母から障子岳の間は、雪のため笹が中途半端に倒れてきており、S L ずぶ濡れになる。S氏なせかよくこけていた。障子岳は天気も良く最高のピークだった。霧島、阿蘇、九重が望め、特に阿蘇の外輪山は模型のようだった。エッセンをして、祖母へ向かう。祖母の直前は、ハシゴがあり、凍っていて、一歩間違えばころげ落ちていく様な所でスリルがあって楽しかった。祖母山頂は広く、人も数人いた。遙かかなたに傾山が見える。H氏はFWの雪辱を果たして喜こんでおられた。少し下った所に小屋があるが汚ない。小屋の仙人が登ってきたのでテントを張る。水場は近くだが、チョロチョロとしか流れていない。今夜は、トランプはせずにH氏のお話で盛り上がる。

三月二十日 曇のち晴

起床四時（中桐） 天気が心配なので、急いで出発。今まで、歩いてきた稜線を右手に見ながら八丁越まで行き、大障子岩へピストン。大障子岳は見た目にはすごい崖だが、道は裏を回っており楽に登れる。ピークはやたら風が強かった。カッコイ松の木の上で写真を撮る。パチリ。分岐まで戻って一気に下る。さすが大分だけあって、しいたけがたくさん作ってあった。バスで竹田に出て、杵築のS氏宅にて盛大な打ち上げを行なう。

大崩、祖母、傾は、山だけでなく、いろいろと楽しめるいい山城だと思ふ。特に大崩の沢は夏に行つて泳いでみたい所だった。

一日も沈することなく無事コース消化できたのは嬉しかった。皆さん御苦労様でした。

〈コースタイム〉

3/13 湯田温泉 ~~-----~~ 延岡

3/14 延岡 <sup>BUS</sup> 上祝子 ----- 大崩山荘跡 ----- 吐野小屋跡 [1]  
6:30 7:30 7:40 8:50 9:00 9:50 10:00 10:50 11:00 11:50

3/15 [ ] ----- 滝 ----- 石塚 ----- 大崩山 ----- 滝 ----- [2]  
7:40 8:40 8:55 10:00 10:05 10:35 11:00 11:05 11:20 12:30 12:35 12:30

3/16 [ ] ----- 五葉岳 ----- (エッセン) -----  
7:15 8:15 8:20 9:25 9:35 10:25 10:35 12:20 12:25 13:30 14:00

----- 上川公民館 [3]  
16:15

3/17 [ ] ----- 林道との出会 ----- 水場 ----- 九折越小屋 [4]  
8:50 9:40 9:50 10:35 10:45 11:30 11:35 11:50

3/18 [ ] ----- 傾山 ----- 九折越小屋(エッセン) ----- 笠松山分岐 ----- 笠松山 -----  
8:30 9:35 10:00 10:45 12:00 13:00 13:00 13:05 13:10

----- 分岐 ----- 本谷山 ----- 尾平越 [5]  
13:15 13:15 14:30 14:45 15:50

3/19 [ ] ----- 古祖母山 ----- 障子岳(エッセン) ----- 尾平への分岐 ----- 祖母山 -----  
7:40 8:35 8:45 10:00 10:20 11:35 12:30 13:10 13:20 14:35 15:15

----- 九合目小屋 ----- [6]  
15:30 15:30 15:35

3/20 [ ] ----- 八丁越 ----- 大障子岳 ----- 八丁越 ----- 神原  
6:20 7:05 7:20 8:25 8:30 8:55 9:05 9:20 9:25 10:15 10:25 11:25

PL 渡辺 浩 幸 (教3)

SL 中 桐 清 志 (経2)

会計 前 田 孝 志 (経3)

撮影 平 野 尾 康 (経3)

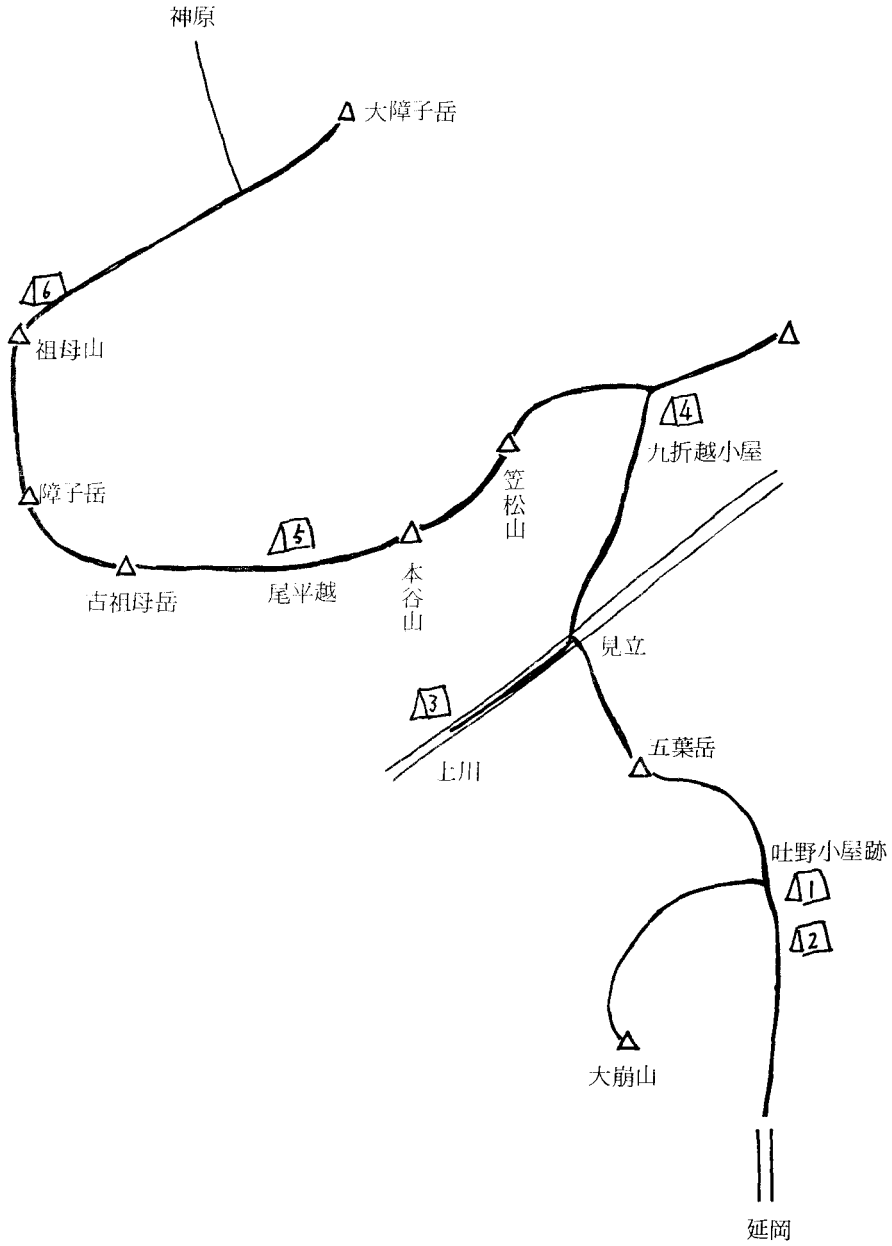
衛生 石 井 敬 治 (教2)

S装備  
S気象 佐 野 明 次 (経2)

装備  
気象 天 野 雅 紀 (経1)

エッセン 野 村 雅 見 (教1)

〈 概 念 図 〉



# 『屋久杉とおともダツチ』Party S L 日誌

仁 保 章

三月十三日

春合宿出発の最終パーティということで、駅での見送りはさほど盛大なものではなかった。夜も遅いので、電車の中ではほとんど眠ったまま、翌朝、西鹿兒島へ、昼頃には、屋久島に到着した。

三月十四日

バスで楠川登山口まで行き、ここで昼食をとることにする。ここで事件発生！ プレ合宿中に全員で作った宮之浦岳のピーク標をバスの中に忘れたことに気づくが、あとの祭りであった。登山口から約二時間で三本杉に到着。三本杉といっても大したものではなく、少々、期待はずれであった。

三月十五日

小杉谷荘跡は、事業所になっていた。ここからトロッコの線路上を歩く。歩幅があわず、全員歩みにくそうである。唯一、上田だけ快調なペースである。今日は、待望の屋久杉のオン・パレードである。三代杉に始まり、ウィルソン株、大王杉、夫婦杉、縄文杉と、どれも屋久島特有の自然の中で育った見事なものである。この日だけでも屋久

島の自然を十分に満喫することができた。今日の天場は高塚小屋である。水を探して沢を下ると、偶然にも鹿と出会った。

三月十六日

沈殿日。雨とはいえ、屋久島特有の大雨とはほど遠い。メツチェンPはどうしているかと思っていたら、何と雨の中を淀川小屋から稜線を越えてやって来た。よく考えてみると、Pは中富嬢であった。一同納得!!

三月十七日

悪天候の中、沈と決めこんだメツチェンPの見送りを受けながら、小屋をあとにする。しかし、3本歩いたところで稜線上は、強風の為前進不可能。岩場も凍りつくほどの寒さである。これでは分岐での天場は無理とのP L氏の判断により、引き返すことに決定。あまりの強風の為、皆じっと立っていられない。しかし、松野氏だけはザックとの総計100kg、びくともしない。ジグザグの道を下る際、奥丸が風で一直線に下まてころがっていった。近道をするとは怠慢な男である。結局、小屋から1本歩いた水場のところで天場とする。夜は非常に冷え込み雨は雪へとかわった。

三月十八日

木村が故障のためもあり、ややペースダウンはしたが、遂に九州最南峰に立つ。しかし視界はゼロ。雨は降らなかったが、宮之浦も黒味もピークでの天候に恵まれず、ガス以外何も見えない。高度が下がるにつれ、天気もよくなり、花之江河につく頃は、時々、陽も射してき

〈コースタイム〉

3/14 楠川 14:20 15:07 15:20

15:50 16:23 16:35 三本杉

3/15 6:15 7:10 7:26 白谷山荘

8:05 8:15 8:55 9:10 三代杉

9:57 10:12 10:45 12:00 ウィルソン株

12:47 13:18 14:00 14:23 大王杉 縄文杉

14:30 高塚小屋

3/16 沈

3/17 8:00 8:50 9:04 9:51 10:00 10:54 11:40 12:45 (ここからコースを逆戻り)

13:45 13:55 14:15

3/18 7:00 7:30 7:45 8:25 8:35 10:30 10:45 11:40 12:45 13:35 (0:25 → 黒味岳) 13:55 (0:10 ← 15:45)

16:00 16:05 17:15 淀川小屋

3/19 7:10 7:55 8:15 9:25 9:40 11:05 11:50 12:58 13:10 14:25 14:40

14:57 (0:16 → 蛇ノ口滝) 15:02 (0:15 ← 16:15 17:15) 尾之間

三月十九日  
今日は尾之間目ざして一路下山である。途中蛇ノ口の滝へピストンをかけ、全員快調なペースで、予定の10時間行程も苦にはならず、夕方5時には無事下山できた。考えてみると、幸か不幸か屋久島特有の大雨には一度も会わず、それどころか、予想外の雪の量に驚かされた合宿だった。ただ単に高い山を目ざして登るのもいいであろうが、こうした変化に富んだ自然を満喫させてくれる屋久島こそ、一度は足を運ぶ価値のあるところだと思った。

た。今日は淀川小屋に泊まる。小屋はカビ臭く、暗くて不気味である。こんな所とてもひとりでは泊まれないと思った。実は私は「恐れ」であった。夜は、毎度のことながらトラップに興じる。勝負師奥丸の目が暗やみで鋭く光る。明日はもう下山かと思うとあっけないものだと思う。

## 「西表ローボート探検」

### PL総括

垣田章夫

二年の時に行けなかった西表に行こうとしてボートを漕ごうと考えたのは三年の夏休みでした。まっ青な空とコバルトブルーの海でボートを漕いだらどんなにかっこいいだろうそれが始まりでした。しかし本当に実現できたとは今でも信じられない……これが実感です。九月の三年会の時にはみんなにバカにされ、これが却って発奮材料となり着実に準備を始めました。西表へ、ボート会社へ、各大学へ、各省庁出先機関などへの問い合わせ、計画のアウトラインができたのが十月中旬、この頃三年の田中君が自分の計画がだめになった時ピュラーなコースでリーダーとして立つと言ってくれ大変心強く、うれしく思いました。そして工学部の松中さんの知人から貸してもらえることになったボートで初めて田中君と二人でボートに乗り漕ぎ方を研究しました。十一月にはこのコースで安全であろうという返答を西表の方（小野さん）からもらいました。しかしもう一隻のボートの手配つまりスポンサーが決まらず、この時のコース決定の三年会では「スポンサーが付かなかった自分が自腹を切って買う」という事で主将の野村と強行突破しました。十一月中旬にどの会社にも「学生の道楽にはつき合えない」と断られる中、「宇部マリーナ」がやっとスポンサーについてくれ、ボート一隻寄附してくれました。それからスポンサーPRの

ための新聞社へ掲載の依頼、パーメンの決定、部会通過、十二月の中旬からは週三回の筋トレ（武道場トレーニング室）そして本当に寒い中でのボートの練習、以上が準備段階でした。

さて、いざ合宿になると天候が不順で肌寒く、また思った以上に風の影響受け、ぜんぜん進まない時もスイスイ進む時もありました。しかし危険性を感じる事はなく、安全面は綿密な準備の御蔭で十分でした。詳しい事はSL日誌に譲る。

この合宿は自分のワングル生活の総決算でした。自分はこの計画を思いついた時クラブの発展性などまったく考えていませんでした。（部会でも偉そうに言ったが）ただ「自分自身大きくなりたい。ワングル生活の最後を飾りたい」という事でした。クラブの発展性など後から付いてきたものでした。ただし実現するための準備は六カ月かけ綿密にしました。それから先は自分自身の可能性です。若さに任かせて突っ走れるのは大学生の特権です。みんなもワングル観がどうの、クラブの発展性はと言う前に、自分自身、精一杯可能性にチャレンジする事が本当に重要だと思います。ただボートは一隻あります。これを生かすのも殺すのも後輩です。有効に使って下さい。

最後に、未熟なリーダーを助けてくれたパーメン諸君に本当に感謝します。そして、援助してくれた部員一同、本当にありがとう。



# 西表島ローボート探険報告書

S 58.3.9 / S 58.3.19

山口大学ワンダーフォーゲル部

Y・U・W・V

垣田 章夫  
田中 康弘  
田中 正則  
下川 信幸  
松本 勲  
日野 裕幸

一九八三年

宇部マリーナ欄がスポンサーとなってくれる。

一月 朝日、読売新聞に取り上げられる。

部会において本計画全体承認

二月 第二回、第三回ボート練習（榎野川にて）

三月 第四回、第五回ボート練習（榎野川にて）

NHK、テレビ山口、朝日、読売にて報道

〈活動記録〉 合宿中

一九八三年

3/9 湯田温泉 5:34 博多 9:25 10:00 えめらるどおきなわ

3/10 那覇新港 18:00 伊江島農協会館

3/11 ハブ支所、食料買い出し 那覇新港 19:00 玉龍

3/12 石垣 17:30

3/13 石垣港 9:00 大原 10:00 バス 11:05 浦内橋 12:00 14:05 軍艦

岩 14:35 15:05 マリウドの滝 15:12 15:17 カンピラの滝 15:22

15:55 軍艦岩 ①

(ボート6km、2:50、歩行1:20)

〈活動記録〉 準備段階

一九八二年

八月 活動開始、西表島の資料を集めだす。

九月 西表ネイチャーセンター、海上保安庁を初め各方面に問い合わせを出す。

スポンサー探しを始める。

十月 計画書作製

クラブ内において検討し始める。

十一月 四人乗りボート一隻縄田様より貸与。

榎野川にてボートの試漕

部会において本計画コース承認

メンバー決定

十二月 第一回ボート練習（榎野川にて）

3 / 14  
 7:00  
 浦内橋  
 10:40  
 11:00 白  
 11:35 浜  
 12:35 外離島  
 2

(ボート 10 km、3:00)

3 / 15  
 13:50  
 15:20  
 3

(ボート 4 km、1:30)

3 / 16  
 8:00  
 10:25 仲良川上流船付場  
 11:00  
 12:00 河口

12:30 船浮湾東海岸  
 4

(ボート 13 km、4:30)

3 / 17  
 7:50  
 9:10 クイラ川上流  
 5

(ボート 5.5 km、1:30)

3 / 18  
 8:15 クイラワタリ  
 8:45 鹿川湾  
 9:45  
 10:30 浜  
 10:50

12:00 別れ浜  
 6

(ボート 4.5 km、2:15、歩行 0:30)

3 / 19  
 8:00  
 9:30 岩礁  
 11:00  
 15:30 豊原、南風見崎手前ボート

浸水 16:00  
 16:40 大原  
 16:50  
 17:40 石垣

(ボート 8.5 km、7:30、歩行 0:40)

3 / 13 曇、波高し

3 / 14 曇一時晴、波弱し

3 / 15 曇のち雨、波やや高し

3 / 16 曇のち雨、波弱し

3 / 17 曇、波やや高し

3 / 18 曇のち晴、波高し

3 / 19 曇、波非常に高し

## Sub Leader 報告

田中 康弘

クラブ最後の合宿として何かやろうという気持ちで臨んだ合宿でした。しかしあまり天候に恵まれず残念でした。ぼくはSLとして一隻のボートを指揮しましたが、そこでの問題点として、二つのボートが離れすぎて連絡を密にすることが出来ませんでした。これは反省点です。そして一番印象に残っているのは最終日(別れ浜と大原)です。この日は波が高く、満潮でもあり、漕いでもあまり進まず悪戦苦闘でした。今後ボートを漕ぐにあたっては満潮時を避け、少し潮がひき始めた時機を選ぶのが最も漕ぎ易いでしょう。ただ、川や湾内は少々の

波や天候でも漕ぐのはあまり影響はありません。

これら僕達の経験をこれからの合宿に役立ててほしいと思います。

## コース・リーダー・撮影係報告

田中正則

ボートを使う初めての合宿であるため河川、海岸線の地形と地図を照らし合わせて現在地を確認する作業が鍵になりました。特に外洋の場合ボートの時速が風向き、波によって異なるため移動距離がはつきりせず、現在地の確認が完璧ではありませんでした。河川の場合は地形は変化に富んでいますが、波の影響はほとんどなくほぼ完璧にできたと思います。

撮影に関しては常にカメラが水につかる可能性があり、防水ということをも十分すぎるほど考えた方がよいと思います。

## 衛生係報告

下川 信幸

初めてのボート合宿ということで慎重な計画であったためメンバーの体力が限界近くまで達することなく、全員余力があり、大変元気でした。また心配されたハブも見かけることなく、一度も衛生箱を出さ

ずに済んだ合宿でした。

また個人的には、海は想像していた通りの美しさで、海の色、色とりどりのさんご礁、海草そしてまわりを泳ぎまわる熱帯魚などすべて期待を裏切ることのない素晴らしいものでした。

## エッセン係報告

松本 勲

西表での第一印象は予想よりも寒く、雨が多かったということである。しかし田んぼの中に放してある水牛は、東南アジアの国々を想わせる。また人間よりも大きいシダ類、ヘゴ、マングローブ、アダンが熱帯の密林を想わせた。川は流れがほとんどなく、まるでアマゾン川を小さくしたような感じを受けた。とにかく上流の方まで潮の干満の影響を受けるのには驚いた。海は抜けるように青く、潜ると色とりどりの魚が群をなして泳いでいた。僕は食料係だったのだが、サバイバル的な面ではマングローブシジミ、小魚、海ではサザエ、シャコ貝、カサ貝、スズメダイ、熱帯魚などを採って食べることができた。今後の課題として、本格的にサバイバルを行うためには、穀物、植物からビタミン類、炭水化物を摂取することまで考えねばならない。魚貝類はまず心配ないので、今後は西表においてそのような穀物、植物をいかに見つけるかである。そうすれば完全なサバイバルになるであろう。

## 装備・気象報告

日野 裕 幸

装備に関しては今までの山行の装備とあまり変わりませんでした。テントの立て方、コンロの使い方などは今まで通りでしたが、共同装備について海洋を漕ぐ場合は塩水に対するより完全な防水が必要とあります。テントのポール、コンロなど鉄、アルミニウムというものは塩水に漬ると、すぐ錆びるからです。

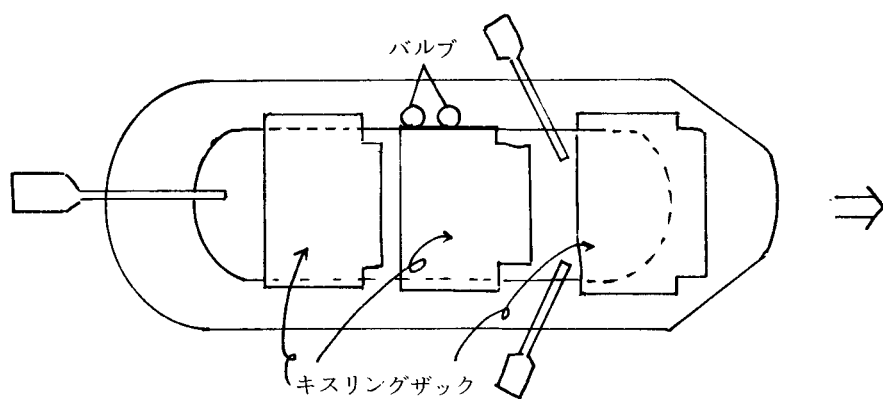
気象に関しては西表においては気象通報があまりよく入りません。通常の天気予報に十分注意するべきだと言うことです。

## ボート関係報告

垣田 章 夫

### 装 備

|             |                  |           |
|-------------|------------------|-----------|
| 岡本理研ゴム      | アポロFR-260 (4人乗り) | 2隻        |
| オール         |                  | 8本 (予備2本) |
| ポンプ         |                  | 2個        |
| 。全身用 エアーマット |                  | 2個        |
| 。10ℓポリタン    |                  | 2個        |
| 。ひも付浮き輪     |                  | 1個        |



。ライフジャケット  
。修理セット

各自1個 計6個

まず、ボートの漕ぎ方ですが、上図のように2人が左右で漕ぎ、後ろで1人が舵をとるという方法でやりました。この方法はかなりの速度が出て方向性も安定し最善の方法と思います。この方法を3人で30分〜1時間ごとのローテーションを組みやりました。またザックの下に全身用エアーマットを敷くということもザックの防水に対してかなりの効果があったと思います。

次にボート自体について露見した問題をあげます。

まず砂地の所に上陸したためバルブや隔膜の継ぎ目の接着部分や床と気

室の隙間部分に砂が溜るといふことです。特にバルブは砂がねじ山部分にはいりこんでとれにくくねじ山を傷つける結果になりかねない状態でした。そして隔膜は非常に弱くザックの出し入れによって傷がついてしまいました。(穴は開きませんでした。)

ボートは少々の波でも転覆の心配はありませんでしたが、水がかなり入りこんできました。そのため水抜き用の装置があればよいと思われました。

ゴムボートの一番の利点は携帯性です。そして多くの人数と荷物(4人用なら3人とザック3個)を積めます。そのため速度はカヌーより劣りますが、上記の2点は大きな長所です。ワングルをはじめとする野外活動サークルにおいて川と川(例えば太平洋の川を上って日本海側の川を下るとか)川と山などを組み合せ速度よりも携帯性と運搬力を求める活動は多々あります。より一層、性能の良いボートが販売されることを期待します。

## 西表島近況報告

垣田章夫

西表島と言えば行かれた人々は御存知のように、青い海とジャングルというまだまだ大自然が多く残された島です。一度行った人はまた行くかと思ひ、まだ行ったことのない人もいつかは行ってみようと思っている人は多いと思います。今、西表では観光化が進んでいます。

南海岸に道路を通そうという話があり、大手ホテルが用地を買い占め

ています。また西表は人口2000人ほどの小さな島です。このような自然保護か観光開発かという問題が住民一人一人の間にはね返ってきているのです。このような環境破壊の問題は全国に起ってきています。自然を愛する者の集りであるワングルフォーゲル部はこのまま手をこまねいて見ているのだから、自分達を感動させ、楽しませてくれた自然というものを次の世代に残さなくていいのだろうか、西表の地元の人に言われた言葉がまだ耳の奥に残っています。「あと何年後か何十年後、再びこの大自然を満喫しようとして来てみても、もうないかもしれないよ」

今、まさにワングルフォーゲル部の長年の活動の場であった西表の自然が破壊されようとしています。今、一度、ワングル精神の原点に帰って考えてみるべきではないかと思ひました。

### 《協力者及び協力会社》

- 宇部マリーナ(株) 4人乗りゴムボート1隻 寄付
- 縄田 博様 4人乗りゴムボート1隻 貸与
- 山口女子大学 芳賀健治先生 ライフジャケット6着 貸与
- NHK山口放送局 フィルム6本及び現像、焼き付け
- 日本赤十字社 山口支部
- 西表ネイチャーセンター 小野紀之様
- 西表島白浜 屋良商店様
- 西表島船浮 池田米蔵様
- 広島大学ワングルフォーゲル部
- 琉球大学ワングルフォーゲル部

[ ルート概念図 ]

~~~~~ → ボートを漕ぐ

----- → 歩く



- 浦内、仲良、クイラ川については川はほとんどありませんでした。  
しかし千潮差の影響がかなり上流までありました。

3/9

湯田温泉を5:34に出発、盛大な見送を受け、両手にさし入れを持って出発。博多よりえめらるどおきなわに乗る。船内ではみんな食い地獄でうれしいひめいをあげていた。

3/10

昨夜らしい海のシケのため、みんな船内でダウン、松本一人元気があった。船は3時間遅れでは不着、予定を変更し、伊江農協会館に泊る。みんなで楽しくベスト10を見る。

3/11

AM7:30に起き、沖縄公害衛生研究所ハブ支所までタクシーで行き、ハブについて研究する。

市内の市場で買い出し、本土とはちがった野菜もあり、地元の人との会話もおもしろかった。夕方、石垣行きのギョクリュウに乗る。

3/12

一日中船内で猛暑と戦った。長い船内のすごし方などもう少し考えた方がよい。宮古に11時着、石垣にはPM5:30着予定より3時間以上船の到着が遅れ、西表に渡るのをやめ、この日は船乗り場の前のき下にテントをはったが、注意され、口論の末なんとかとめてもらう。来年以降行くパーティは、船の遅れなど十分考慮した方がよいと思われる。

3/13

AM5:30起床、9:00に石垣を出て浦内に行く予定であったが、

島の北側は波が高いというので、大原行きの船しか出ず、大原へ行きそこからマイクロバス（船会社が連れていってくれる）で浦内へ行く  
AM11:05 おりからの北風で西表に来たという感じではなく、とにかく寒かった。浦内橋より少し上流の船着場より、いよいよボートを漕ぎ始める。ちょうど追風となり順調に進みはしたが、観光船が横を通るとボート内に水が入ってきたり、風があまりに強すぎて、岩場に衝突もしたりしたが、上流に行くにしたがって風も波もなくなり回りの景色を見る余裕が出てきた。マングローブが両岸いっぱい生えており、やっと南海の孤島にやってきたという感じがした。

軍艦岩14:05着、岩より少し登った所にテントをはり、マリウド、カンプレリーの滝までピストン。

初めて西表でボートを無事漕げてPメンみんな一安心して眠りについた。（※エッセンの塩ぬき不足というチョンボがあった。）

3/14 4:30起床

浦内川を下る。昨日ほど風はなく2時間余りで橋に到着。橋の上でエッセンをとり、白浜へ行くためヒッチハイクを試みたが失敗、まあ1年の顔を見ればだれでもことわりたくなるなと思いきらめてバスで行く。このころやっと陽がさすようになり、外離島にわたるのは快適なボート漕ぎになると思ったが大ぢがい、島は遠いわ、波は高くなるわ、サンゴはなくなり海底が見えるようにはなるわぼくは「わしゃヘレンケラーじゃ」と叫んでいると、他のPメンからおまえはアホかと言われたが、今考えてもあれは地獄であった。

外離ではイノブタの歓迎を受けた。まあ1年の顔を見ればイノブタ

も寄ってくるのも当然だと、自分は納得するのであった。その後釣り  
& 探険をしてすごしたが、ぜんぜん魚は釣れなかったし、サメの死体  
は浮いていたし、オカルトの1日であった。夜はミニファイヤーをし  
た。ニヒヒヒノ

3/15

AM 6:00 起床予定だったが、6:40 ごろおきる。小雨。

朝のエッセン中、イノブタが集団でやってくる。よくみるとザックの  
近くにイモがあり、それを掘って食っていた。雨のためトランプ。イ  
ノブタはこの時期繁殖期に当るので、注意ノ

AM 11:06 魚釣り雨のためやめる。あすの天気が不安なため、PM  
1:50 外離れを出る。PM 3:20 白浜着。途中重宗Pがサバニに乗って  
外離れ向うのに出会う。なんともうらやましい限りである。

この日の天場は、白浜小の校長さんにたのんで小学校の近くの広場  
に沈させてもらう。他の場所はテントを張らしてくれないので注意す  
る必要がある。

夕方スコール。

3/16

この日は8:10に白浜を出て中間川の探険。中間川のボートが行け  
る所まで上りそこでエッセン。

その後クイラ川河口入り口付近に天場、0:30着。そこには放し飼  
いの牛がたくさんいた。

3/17

5:30 起床 7:50 発 クイラを上る。追風のためほとんどスピー  
ドが出、9:00には天場に着く。人が住んでいるようなあとがあり、  
シャツなども干してあったが、人に会うことはなかった。この日は川  
で釣りをしたり、話などをして終わる。

3/18 AM 6:00 起床

クイラわたりをこえるため合宿中初めてキャラバンをはき、約30分  
歩いて鹿川湾へ出る。鹿川湾より、いよいよ南海岸をボートでこぐ予  
想より波が高く、なかなか進まずボート内にも水が入り、全員ずぶぬ  
れになる。別れ浜12:00着。

このころから晴れ間が広がり、やっと南国気分を味わうことができ、  
みんな泳いだり、釣りをやったりする。魚、シャコ貝、サザエなど取  
り放たれていた。

重宗Pと再会し、夜、えものをみんなで料理して食べていたが、つ  
ぼ焼きをしていたサザエが突然爆発し、約2名がヤケドを負うという  
大惨事となる。

3/19

いよいよ最終日、天場からは波、風ともさほどではないと思われた  
が、沖に出ると強風、しかも逆風でボートはほとんど進まず、横波を  
受け、ボート内に海水が入ってきて、2回も上陸して水を出す。リー  
フの中とはいえ、満潮の時は、波が高いので注意すべきと思われる。  
昼すぎ潮がひいて少しは漕ぎやすくなったが、浅いサンゴの上をボ  
ートをひきずったため、船底に大きな穴があき、南風見崎3キロ手前ぐ  
らいでボートを漕ぐのはあきらめ、ここから大原まで歩く。



(ポートをひっばる時は十分注意すべきだと思った)  
全コース消化はできなかったが、あの大波の所をよくポートを漕いだ  
だと思った。この日石垣にわたり打ち上げをして合宿終了。  
ごくろうさん。



## Star Sand and Sun Shine Shower Party PL総括

重宗 恵子

一九八三年春、三月、私たちは暖かい南の島、西表で合宿を行うはずだった。が、実際の西表は40年来の異常気象とかで、よく雨のふる寒い日が続いた。私たちは西表⇨沖繩⇨暖かい、と考えてしまいがちである。確かに暖かくお天気の良い年は多いのだろうが、そうではないこともあることも知っておく必要があると思った。それは、お天気に限ったことではないと思う。

また、合宿の前に事前研究を行ったのだが、実際に見てみるとわからないものも多かった。サバイバルが浸透してきつつあるからこそ、食べてはいけないものや、危険なものに対する知識を充分身につけていない。西表には予想以上にたくさんの人々が入ってきている。観光客やワンゲル、その他個人的に研究している人なども。そういう人たちと情報交換をする場を積極的にもつとおもしろいのではないだろうか。コースについても島全体の開発がすすんでいるからこそ、生の自然にふれたがっている人も多い。それらの人の全てを真似することはできないだろうが、無理しない程度に少しずつコースや合宿の形態に変化をつけてみれば、また、一味違った西表が味わえると思う。

外離島ではサブザックを背負って岩場を這うようにして歩いていたPメンも、合宿最後の日の岩場では、ザックを背負ってでもとぶよう

に歩いていった。些細なことだがとても嬉しく思えた。拙いPLだったけれども、自分の得たこと、感じたことを少しずつでも実行にうつしてもらえたら幸せである。西表に行ったことによる様々なことや人との出会いを大切にしてほしい。

武田 徳子

三月九日

大勢の見送りの中、差入れをかかえ切れない程持って、湯田温泉駅を出発。無事船に乗り昼食、みんな嬉しくて甲板でゴム飛びをしたりはしゃぎまわっていた。そのうち悪天候のため船が激しく揺れはじめ、重宗さん、みさちゃん、さとちゃんがDOWN。りょっ子はうろうろしている。

三月十日

七時起床、しかし、まだ揺れる。起きていると気分が悪いので寝る。甲板へ出ると、いつの間にか風が生ぬるくなっており、沖繩だ。ついに来た。天気も良くなり波も静かでアクアポリスが見える。

三月十一日

ハブ研究所に行きサキシマハブを見る。西表島のハブは毒性が弱いということを書きいてまずは、ほっとひと安心。市場本通街で買出し、肉も魚も大胆な売り方をしている。魚はほんぽんとおいてあり、肉はちょっとリアルすぎる。まるで獣医の解剖棟のようだ。牛の舌はぶら

下げであるし、トン足がコロコロころがっている。さすがは沖縄。みんなできもちが悪いと言いながらも、しっかり見てまわった。玉龍に乗り込み石垣へ。

三月十二日

宮古島に入港のだが風がめっちゃ強くて接岸できない。風向きが変わり次第入港。朝日が雲に隠されてしまつて綿のような雲が手の届きそうな所を風にせかれるように駆けて行く。高い所の雲は透き通っていて、水色の空にじつとしていて。みんなだいぶん船に飽きてきた様子。石垣島に到着、しかし、西表へ向う船はもうすでに出てしまっている。困っている私たちをたつたの五百円で泊めてくれた。とても親切にされ嬉しかった。まだ三月というのに夏の夜を思わせる暖かさ、風が涼しくて気持ちがいい。

三月十三日

六時起床、朝のエッセンの釜めしもおいしくいただき、親切にしてください方々にお礼を言う。第八安栄丸で力強く大原へ、波をかぶりながら猛スピードで突進。まるで海の暴走族だ。バスで船浦へ。さっそくピナイ滝へ向かう。平原を通り、ジャングルのような所へ入る寸前、ハッとした。ウッホ、ウッホと原住民の声、体じゅうの血の気がひいた。まだ未開の地だったのだと思っていると、まっ黒な体に裸足の団体がウッホ、ウッホと通り過ぎて行った。なかなかおもしろいと私たちも真似をして行った。ピナイ滝はゴーと音を立て、ものすごくかった。月ヶ浜へロードしていると、サトちゃんが発狂しそうに叫びはじめた。な、なんとこの南の果ての西表島で友達に会ったのだ。な

んという偶然、しかしあの狂喜には驚いた。月ヶ浜へ到着。夜は阪大、岡大の人たちとちょっとしたコンパ、夜光虫を教えてもらった。今日は、水牛、マングルーブ、前にも横にも歩けでんぐりかえるミナミコムツキガニ、アダン、なっているパイナップルを見た。そして、西表のカエルはポコポコ鳴くということを知った。見るもの聞くものすべて新しいものばかりでとっても楽しい一日だった。

三月十四日

今日は晴れているのでーす。波あそびを楽しんでいるカニを激写。星砂ヶ浜へ。星の砂だらけー★  
黒ニッカにくつつくと、夜空の星のようだ。ビニール袋にいったいつめてみんな持って帰っている。サバニに乗って、マリウドの滝、カンピレーの滝へ。カンピレーの滝は雄大な滝だ。いったいどこまで続いているのだろうか。

ここでPLの格言 LOVE IS POWER.

愛は単なる言葉より強い。

三月十五日

夕べはカエルの歌とカンピレーの滝の音がすごかった。朝になるとカエルは寝たのだろうか、急に静かになった。  
雨が降っている。はやく雨があがって外離れで泳げるといいのに、外離れに行く途中、オッチェンのボートに会って感激、日に焼けてめちゃめちゃたくましくなっていた。

外離れで釣りをしたが、釣れず、えさのサンマを焼いて食べた。炭焼きの味がおいしかった。

三月十六日

曇り、エッセンを外でつくっていると、いのぶたが来た。外離れ散策の時、みんなでもずくを取っていた、事件はここから始まったのだ。サトちゃん、黒いさつまいも様の物を、なまこだ、なまこだと言っ  
て持って来た。さわるのもいやらしい感じのなんかへんなものを彼女が平気で握っているのには驚いた。食い気とはこんなにも力強いものかと、彼女は、それを無残にもしごき、ルンルンと鼻うた混じりに切りきざんでいる。むごいナァーっと感じて見ていると、食べましょう」と言っ  
てパクッとおいしそうに食べた。どれどれと、ひと切れ口の中に入  
れると、なんと前代未聞のしぶみというか苦味というかとにかく吐き出さずにはおれな  
かった。あとで鹿ノ川のおじいさんに聞くと、あれは、なまこではなく、うみうし  
の一種だと言っていた。どうりで、しかし、食べ物への執着心をまざまざと見せつけられた。  
なまこもどきのせいで気分が悪いまま就寝。

三月十七日

今日はものすごい収穫で、サンゴ礁の上を歩きながら、しゃこ貝、かさ貝、まき貝などをとり、たき火でお正油をちよつとたらし、焼いて食べた。しゃこ貝はちよつと堅かったけどかさ貝はもう最高だった。卵をも  
っていて、口の中で、とろけるようなおいしさだった。鹿ノ川のおじいさんにも会い、一  
緒に記念撮影してもらった。

三月十八日

朝起きると、リョッ子がエッセンをすでにつくっていた。ユカリではんと、貝のみそ汁だ。おいしかった。

久々に青空と太陽を見て嬉しくなった。このまま晴れるといいのにナァ。リーフのブルーの穴の中で、コバルトスズメなどの熱帯魚と一緒に泳いだ。今夜は星がきれい  
だ。最後の夜はビバークをさちちゃんとした。

三月十九日

今日で合宿は終わり、考えてみると早いものだ。岩場にも慣れ、みんなピョコピョコザックを  
からったまま岩から岩へ飛び移っている。途中で一本とった時のネーブルがとてもおいしく、南の島らしい甘い香りがなんとも言えない。あと一本だ、南海岸からの風が心地良い。

## 屋久 the Party PL総括

中 富 史 苗

私にとって一年の時、風雨にさらされ、相当、悲惨な合宿であった屋久島だった。二度とあの雨は経験したくないと思っていたのだが、いつしか、その思いよりも、もう一度、九州最高峰を持ち、樹齢二千年以上の屋久杉を持つ屋久島へ、PLとして行きたいという気持ちが強くなった。

合宿を振り返ってみて、コースが比較的楽だったのに、タクシーで奥まで入り、入山を楽にしたことや、途中で白谷山荘に泊まったことなど、PLとして、甘すぎたと反省せざるをえない。

屋久島特有の雨は、降るには降ったが、少々物足りなさを感じるもので、幸運であり、残念であった。また、雨ばかり念頭にあり、予想してなかった雪に悩まされたが、雪をかぶった宮之浦や屋久杉を見ることができ、屋久島の違った魅力に触れることができた。

また、宮之浦岳では、二時間粘ったかいがあり、ガスが晴れ、三百六十度まではいかないが、展望が良く、海もほんの少し見れ、本当に、私自身、二回行ったかいがあった。

雨に風に雪に、と、悲惨な日々もあったにもかかわらず、PMの明るさのせいとか、いつも笑いが耐えずに、楽しく過ごすことができ、本当に良かった。そして、何よりも、みんなが無事下山でき、私の最後の合宿を終了できたのが、一番うれしく、ひとえに、PMのおかげで

ある。みなさん、御苦労様でした。

## 屋久the中富組 Pメン日誌

八 川 睦 子

3月13日

今日の春合宿出発の最後を飾る屋久島♀♂2パーティー。思っていたよりどっさりこの差し入れを手にいざ出発。電車の中では、差し入れの消化にハッスルーでも門司から西鹿児島までの急行かいもんは割りりと人が多く、苦痛の夜行列車だった。

3月14日

ようやくのことで西鹿児島に着き、すぐ市電に乗って港へ。到底食べきれない差し入れをロッカーに入れフェリーに乗り込む。桜島や開聞岳を眺めながら、しばし甲板で戯れた。

12時過ぎ宮之浦港着。そこには予約していたタクシーが2台待っていてくれた。今日の屋久島は良い天気。屋久杉ランドまでの予定が、登山口までタクシーで行けるということで、即、テン場とぼし決定。安房林道に入っ飛ばるとデコボコ道。その途中サルがいるわ、いるわ。車を止めて手招きするとタクシーに飛び乗ってきた。サルと一緒に写真をパチリ。赤ん坊のおサルちゃんは、モンチッチのようですごくかわいかった。2時間余りタクシーに揺られ、登山口に降り立った。木の根の入り組んだ道を45分くらい登ると、何か陰気な小屋

が目に入った。つまりはこれが淀川小屋だったのだ。小屋には先客がいたけど、どうにかもぐり込む。それにしても何か汚なくて暗い小屋だなあ。

夜、エッセン終了後、トランプによって起床もカスリもツイワイと決まっていた。アプローチの疲れも見えず、パーメン全員元気一杯。キャーキャー騒いでたら下にいたパーティーの人達に怒られてしまった。そしてみんなおとなしくなり、眠りについたのです。




3月19日





4時起床。エッセン後、一年生の労をねぎらって、PL、SL、が食器洗いをする。といってもすぐ側の水道で洗うのだから何のことはない。明るくなってから出発しよう…ということ、パッキングをすませてから1時間くらいストープにあたりながらのんびりする。








6時すぎ、このきれいな白谷山荘をあとにする。割りと平坦な道が続き、一本で三本杉へ。計画通りに行っていたらここがテン場だったのか…と思うと、白谷山荘に泊まらせてくれたPLさんに感謝。





樹林帯を抜け林道に出ると、頭上にはまっ青な空が広がり、眼下は海ノ。もう言うことなしのお天気で最高のルンルン気分。今朝、ストープにあたって暖を取っていたのが嘘のよう。雨を恐れていた合宿だったけど、ほとんど雨に濡れることもなく、こんな良い天気の中、合宿が終えられるなんて幸運だなあなんて喜んでいるうちに楠川バス停に到着。皆様お疲れ様。ジュースで乾杯し、バスに揺られ宮の浦港へ。お土産屋さん巡りをした後、屋久theパーティーの5人の乙女は、浜辺で戯れ、屋久島との名残を惜しんだのでした。





(行動記録) 中富P

3/13 湯田温泉  小郡  門司   
20:13 20:29 20:39 22:01 22:10








3/14  西鹿兒島  宮之浦港  登山口  淀川小屋 1  
6:16 8:00 12:30 12:40 14:30 14:51 15:35



3/15   高盤岳展望所  小花之江河  花之江河  黒味分岐 (  8:57  9:30 黒味岳 )  
6:15 7:21 7:30 7:51 8:06 8:18 8:25 8:50 10:10 10:03 9:35






 Essen  翁岳分岐  宮之浦岳  鞍部 2  
10:40 11:30 12:48 12:55 13:46 14:40 15:12

3/16   1本  小高塚山手前  高塚小屋 3  
7:00 8:20 8:30 9:48 9:55 11:10

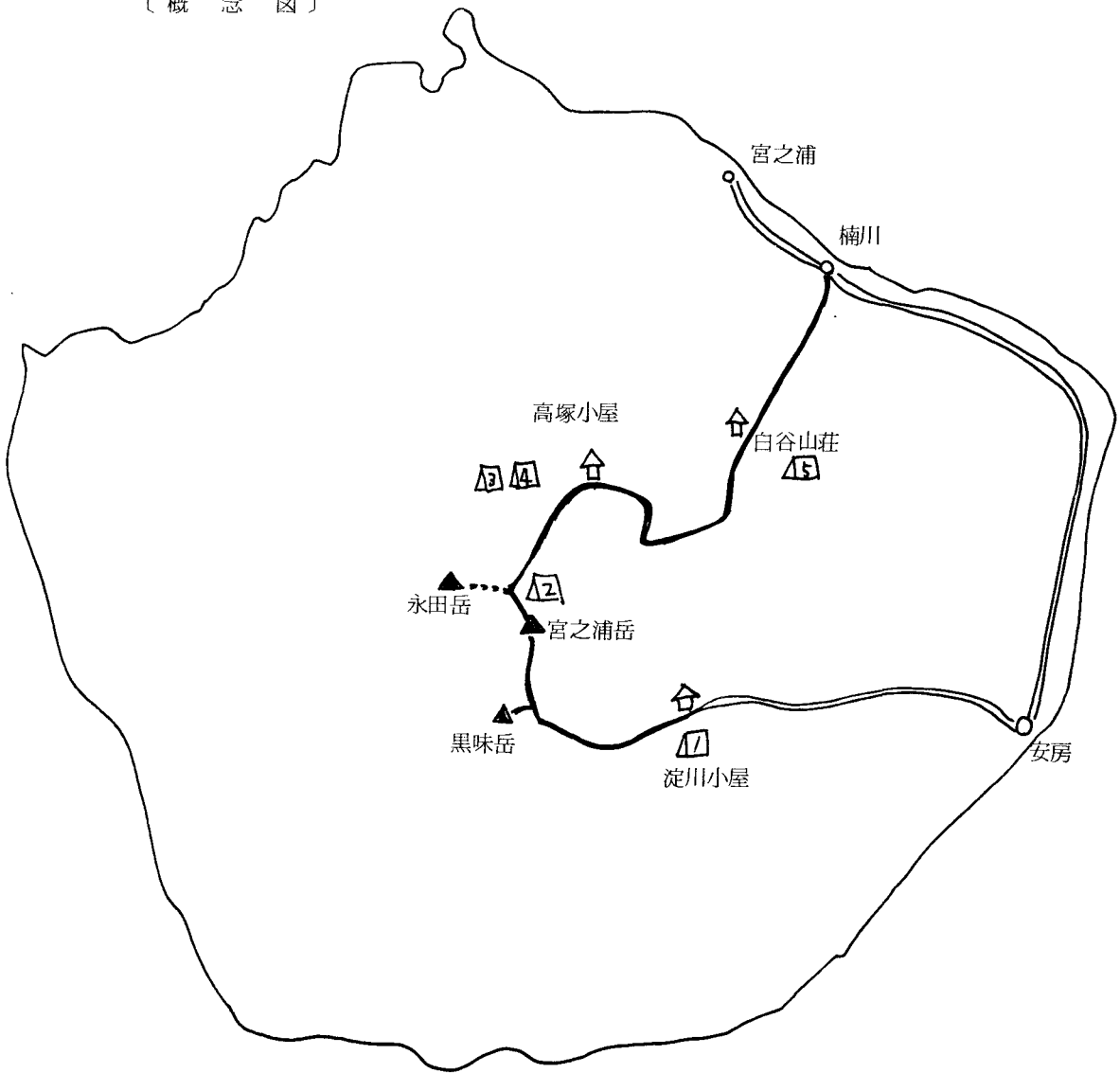
3/17 4 沈

3/18   縄文杉  夫婦杉  大王杉  ウィルソン株  三代杉 Essen   
6:55 7:05 7:20 8:04 8:18 8:21 8:35 9:21 9:40 11:09 12:05

 辻峠  白谷山荘 5  
13:13 13:25 14:50

3/19   三本杉  林道  楠川  宮之浦  
6:20 7:20 7:34 8:25 8:40 9:08 9:19 9:25

(概念図)



Member

- |          |           |         |
|----------|-----------|---------|
| PL       | 中 富 史 苗   | ( 経 3 ) |
| SL・会計    | 八 川 睦 子   | ( 人 2 ) |
| Essen・衛生 | 西 原 真 理 子 | ( 教 1 ) |
| 装備       | 田 辺 千 尋   | ( 教 1 ) |
| 気象       | 近 藤 香 織   | ( 教 1 ) |

## “九重” P P L 総括

岡 俊 子

最後の合宿が全員無事に元気に下山でき、パーメンのみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

九重というFWで簡単に行くことのできる山域で合宿を行ったことに対して、いくらか問題があるのではという意見もあったのだが、私自身の考えとして、この合宿を通して、ワンゲルの活動を多様化することはできなくても、合宿でパーメン一人一人が緊張感をもち成功させるには十分なコースであったと思う。

しかし、いざ合宿が始まると、P Lとして、反省すべき点が多くあった。プレ合宿の時、九重の営林署に連絡を入れた際、雪はほとんどなく、心配ないという話だったので、雪山装備を装備からはずしてしまった。しかし、私達が入山した日に、かなり雪が降り、「運が悪かった」ではすまない状態となってしまった。九重という山域を甘くみすぎてはいけないと肝に命じていたのに、結局私の判断ミスであった。

こういう状況の中で、私達5人の合宿は、雪に負けることもなく、1人として、合宿をあきらめることもなく、がんばってくれた。メインである中岳は登山者の話から危険と聞かされ、断念せざるを得なかったが、それ以外は、数々の困難をくり抜けて、ピークを踏み360度の展望を楽しむことができた。

アルコールの入っていないシャンペンを飲んで、狂った別府での夜もまた格別であった。

みなさん ありがとう！

## 「九重で十九の春」PARTY

S L 日誌

松 本 常 子

3月13日

いよいよ、春合宿のはじまりである。今年は暖冬なので、「春山の久住」を夢みながら、汽車に揺られ、バスに揺られ、今日のテン場の長者ヶ原に到着。

白いものがふっている。非常に寒い。この時点では、まさか、雪なんてという気持ちが強く、これからの合宿が雪で泣くことになるなどは、誰も想像しなかった。

3月14日 雪

朝、起きると、一面は銀世界。雪がふる中を歩く。ふきだまりでは30センチぐらい積もっている。スパッツを持ってこなかったのが、敗因で、どたぐつの中に、雪がはいり。雪もひどくなったので、すがもり越で一泊することにする。

3月15日 快晴

三俣山にピストンをかけ、坊がつるへ。天気もよいので、大船山、



平治岳にもピストン。VIRGIN SNOWに光が反射して、きらきらとしている。大船山は霧氷がりっぱで、霧氷の木々の下を通りぬけ、前方をみると、青空が開けてくる。しかし、雪やけになりそう。日嬢は、雪やけをおそれて、バンダナで覆面をしている。銀行ギャングを連れて歩いてるみたいだ。

3月16日 雨

雨が降っているので、沈。この雨が、どこまで雪をとかしてくれることやら。

テントの下に水がどんだんはいつてくるので、避難小屋へ。

3月17日 雪

今日は、雪にかわり、沈。小屋にはいっても、冷たい。寒いことばかり頭で考えているせいか、時間がたたない。昼から、2階の部屋に移り、少しは、寒さもしのげる。

3月18日 曇のち晴

雪もずいぶんつもっているし、冬山装備をもってこなかったので、久住山をあきらめ、長者原におりる。そこから、牧ノ戸峠へバスで行き、今日のテン場のすじ湯には1時すぎ到着。今日中に涌蓋山にピストンをかける。天気もよく、ここは、雪がピークに少しあるだけだった。

3月19日 晴

今日は、合宿最後のピークである由布岳に登る。今までとは、うそのように暑い。登りが、4本近くあり、きつい。しかし、青空が広がり、気持ちがいい。

天気はよいが、かすんでいるので、くっきりとはみえないが、別府湾がうっすらとみえる。

バスに乗り、別府へむかう。みんな雪やけでまっくらになった顔をみあわせ、白い歯をみせながら、にたにたしてしまふ。きつかったけど楽しかったね。おつかれさまでした。



〔行動記録〕

3/13 湯田温泉 豊後中村 長者原

3/14 — 6:50 — 7:45 — 8:00 — 8:44 — 8:53 — すがもり越 9:50

3/15 — 6:12 — 三俣山 — 7:19 7:29 — すがもり越 — 8:00 8:15 — 9:09 9:27 — 坊がつる 10:19

坊がつる 10:23 —→ 大船山 11:05 11:55 —→ 平治岳 12:42 1:22  
14:56 ←

3/16 沈

3/17 沈

3/18 — 7:34 — 8:40 8:45 — 長者原 牧ノ戸峠 — 10:23 12:00 — すじ湯 1:13

すじ湯 14:13 —→ 涌蓋山 15:52  
17:17 ← 16:07

3/19 — 6:22 — すじ湯バス停 豊後中村駅 由布駅 — 8:44 — 9:34 9:38 — 10:43 10:51 —

— 合野越 — 11:20 11:48 — 東岳ピーク — 13:01 13:20 — 西岳ピーク — 13:48 13:55 — 合野越 — 14:51 14:54 — 西登山口 別 府 15:17

'83

# 夏合宿



南北アルプス

昭和58年 7月20 ~ 8月4日

## 剣を持った白馬戦士パーティー

### PL総括

木村 忠 由

今回の合宿においては、私には大きな不安が、その不安とはいろいろな要素が複雑にからみあっていて、具体的に説明できるものではないが、常につきまとうっていた。山行中は「不安」が「願望」に変わっていった。その願望とはほかでもない。ただ、「パーメンを全員無事に下山させること」につきる。

合宿終了後、それに対しての意見が交わされる、「いい合宿だった」「もの足りなかった」etc。人間ひとりひとりの考え方は、それぞれに違う。個人の考え方は多様である。

PLとしては、パーメンの思いを十分把握することも大切であるが、それ以前の問題として、前述した「全員無事に下山させること」に全神経を集中させるべきである。そういう点を考えてみると、今回の合宿は一応成功したものだといえよう。

私が、なぜ今、「全員無事に下山させること」という合宿の原則から頭が離れられないかという、そういう思いを強くさせられたような危険な場面に多く出会ったからである。しかし、そういう場面に出会い、苦しいことが多かったにもかかわらず、私は当然として、他のパーメンにも合宿終了後の充足感が得られたのも、ひとえに、合宿中の人間関係が優れたものだったからであろう。

皆人間的にすぐれた奴らであり、お互いに先輩、後輩の枠はあるものの、人間として認め合い、優れた人間関係が保てた。自分が教えられたことも多くあった。

今回の合宿は、苦しい場面に出会うことが多く、パーメンには苦勞のかけ通しだった。耐えに耐えた彼らに心から感謝したいと思う。これからのワンゲル活動に、きっと何らかのプラスになるものと信じてペンをおく。ごくろうさまでした。

## 時をかける防長っ子 P PL総括

中 桐 清 志

今回の合宿は、悪天にたたられ、コース消化できず残念であったが、全員元気に下山できて嬉しく思っている。

コース計画の段階で、無理があると指摘され、大幅にコースを縮めこれなら充分だと自信はあったのだが、メインである槍と薬師岳には晴れた時に登りたいというPMの意見を取った結果、途中で下山となった。今年の場合、入山しても雨ということがわかっていたのであるから、仮に山口を予定通り出発しても、悪天ならば、何らかの方法で入山を遅らすことの出来る様対策を立てておくという事もこれから考えてもらいたい。

実際に山に入って、前半はほとんど毎日雨に降られたわけであるが、悪天時の移動、テント生活、撤収、設営等、それなりの方法は徹底出来たと思う。しかし観天望気という点については、自分も含め、まだまだ未熟であり、悪天時にどう行動するかという事について、リーダーとして絶対の自信が無かったのは反省するところである。

又、二年生の一人が初めての合宿であったという問題があったのだが、ミーティング、錬成等で、二年生であるが、初めての合宿であるという事を自覚させたつもりであったが、合宿後の退部という事実から、自分が至らなかつたのであろう。

しかし、後半、薬師岳で快晴に恵まれ、PMの笑顔を見た時、それ

までの悲惨な事も忘れ、PMの努力が報われたと思う。  
これからの我Pメンの活躍を期待する。

## SL日誌

### 時をかける防長っ子パーティー

野 村 雅 見

アブローチ

学校出発 4:18 | 湯田駅 4:45 | 1:20 本 2:00 タクシー 3:30 上高地

一日目は、起床二時でとても朝が早かった。湯田駅では、多数の四年生の方がさし入れに來られた。

電車を乗り継ぎ松本につき、そこで、今晚の夕食のすき焼の材料を買った。

松本に着いた時から小雨が降っており、上高地に着いたときには、雨が強く降っており、テン場を急に代えて、バスターミナルの所で、今日は、夕食を食べることにする。

先が思いやられる雨だった。

二日目は、朝から雨が降っており、出発を見送らしたが、9時ごろ雨が止み晴れて来たので、天気図を取り10時ごろ出発する。

横尾までの道は、2mぐらいの幅があるが、雨の影響で、川のようになっており非常に歩きにくかった。

横尾には、1時前に着き、みんな2時ごろから昼寝をした。

(二日目) 雨のち晴れ

起床 5:00 — 10:00 上高地 — 10:56 明神 11:05 — 11:48 徳沢 12:00 横尾 12:48 — 6:00 就寝

三日目は、雨が降り続き沈で、8時ごろ起床した。

その日は、暇をトランプなどでつぶした。

すると、自分達が夕食のエッセンを作っているとき、自分達の山太のぼろテントを見てずっと前のOBの方から「元氣を出せよ」とホワイトのミニボトルを二本もらった。

中桐さんがとても喜んでいたが、合宿中の禁酒ということですので飲めないというジレンマから複雑な顔をしていた。

四日目は、朝少し雨が降っていたが、先のことを考えて行くことにする。

数日の雨で、道が川のようにになっており歩きにくかった。

また、大曲りの雪渓を通る時に、山本直樹(一年)が、気でも狂ったのか、登っても登っても滑る雪渓で「わしゃ、もういや」と叫びながら一人列をはずし走って行った。

雪渓を抜けた時は、全員疲れ果てていた。そして殺生ヒュッテ付近は、ガスっていて迷いやすかった。

またテント場についてからは、風が強くてテントを張るのに約一時間ぐらいかかり、上田さんが奮闘していた。

その風の強さは、二人ぐらいテントの中に入っていないと吹き飛ばされるくらいだった。

それでサブテントを張るのは、やめにした。

起床 2:30 — 5:30 横尾出発 — 6:36 一ノ俣 6:50 — 槍沢 7:40 7:50 — 8:40 8:50 — 9:45 10:10

10:50 11:05 — 11:30 22:42 — 12:45 殺生 天気—雨のち曇

五日目は、沈。

殺生の風や雨が強くテントを何回も修復しテントの中に、20cm四方の石を2個か3個ぐらいいれないと、飛ばされる強い風だった。

起床 7:30 — 6:00 就寝

六日目は、晩から朝にかけて強風と雨で、メインロープが切れ、また、テントが壊れたので、5時ごろ起床し、念願の殺生ヒュッテに避難となる。

我々山大パーティが殺生ヒュッテに最後に避難した。

ダンロップテントなどは、ポールが折れて悲惨な状態だった。

そして小屋に避難する際は、テントをつぶし大きな石でテントが飛ばないようにした。

またその日、川原Pの吉田さんが小屋に来て、ちょうどそのとき今までの事情を話すと、すぐテントに帰り、川原Pもテントを撤去し小屋泊りとなった。

起床 5:00 — 6:00 就寝

七日目、朝から小雨が降りガスっていたが、コースの予定を考え出発することにする。

七日目にして初めてピークに立ったのだが、槍ヶ岳のピークは、全く白の世界で何も見えなかった。

また僕等のパーティは、このように出発したが、川原Pは、小屋泊りだそうだ。

僕にとっては、槍の上りは、とてもスリルがあつておもしろかった。そして、危険である西鎌尾根は、風を心配していたが、その心配なく無事に渡れた。

またその途中で、武田Pと会った。

西鎌尾根は、アップ・ダウンがだらだら続き何か、防下帯を思わせるようだった。

そして、双六のテン場に着き、テントを張る時に、OBの大丸さんと出会い、今までの悲惨な状態の話に花を咲かせた。

起床 4:00 — 8:45 殺生出発 — 9:18 槍の肩 9:25 — 9:40 ピーク 9:55 — 肩 10:15 10:45  
11:05 武田Pと出会う 11:15 — 12:14 12:20 — 1:04 1:10 — 1:15 双六 — 6:00 就寝 くもり

八日目は、双六のテン場を出発しコースの予定を考え、黒部五郎のテン場を飛ばし薬師平まで行こうとしたが、途中で雷雨に会いテン場飛ばしは、断念した。

これでコースの完全消化は、難かしくなる。また、双六のピークはガスっていたので、ピークがどこにあるか全く解らなかった。

そして、黒部五郎のテン場に着いたが、テン場が、数日の雨でびしょびしょであり、Pメンの身体の調子を考え、小屋泊りとなる。

小屋についてから、衣服とシュラフを乾かし、今夜は、久しぶりにぬくいシュラフで寝れそうである。

また小屋では、愛知女子学院大学と出会い、一年の山本が、ぼく等のラジオを、中桐さんが殺生のテン場で壊したので、そのメッチェン達といっしょに天気図を取ったりして、久しぶりになごむことができた。

起床 2:00 — 4:20 双六出発 — 4:50 分岐 4:55 — 5:30 双六岳 5:36 — 6:30 分岐 6:35

7:00 雷雨に会う — 出発 7:30 — 8:05 黒部五郎テン場 — 6:00 就寝

九日目は、朝小雨が降っていたが出発。

黒部五郎岳のカールは、なかなか見る価値があった。

ピークに立ったときは、ガスっておりあまり見えはしなかった。そしてピークから下りた時ぐらいから晴れ始め、もうちょっとピークにいたらと残念だった。

薬師平までは、100と200mぐらいのアップ・ダウンが続く、なだらかな稜線で、8時過ぎぐらいから晴れてきて、今まで歩いてきたコースが見渡せるようになった。

また北俣過ぎには、お花畑が、けっこう広く続いており、気分を和らげた。

テン場に着き、本部との電話連絡で、黒部ダム沿いの道が壊われているという連絡があり、コースの完全消化は、できなくなり、折立の方へエスケープルートを使って下山することになった。

そして、明日は、薬師岳のピストンだけとなった。

一年の山本直樹が特に喜んでいたようだ。

また同じ渡辺は、九日目にしての晴れにテントが乾き顔がほころんでいた。

起床 2:50 — 5:00 黒部テン場出発 — 5:41 分岐 5:50 — 6:42 ピーク 7:05 —

7:12 分岐 7:13 — 8:07 中俣 8:20 — 9:25 北俣 9:50 — 10:45 11:00 — 11:10 太郎平 11:25 — 11:38 薬師平 — 7:00 就寝  
天気 — くもりのち晴

十日目は、ピストンだけなので、みんな、和やかだった。最初の15分ぐらいは、急登が続いた。あとは、ピークまで、だらだらと、だるい登りだった。

薬師岳の眺めは、最高で遠くは、富士山まで見えた。

北薬師岳までの道は、ガレていてとても危険であった。

時間は、多くあるので、ピークで3時間くらいいて、みんなで遊んだ。

|      |      |       |       |       |       |      |      |      |
|------|------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|
| 9:29 | 薬師   | 10:30 | 10:39 | 10:47 | 11:32 |      |      |      |
|      | 起床   | 2:30  | 4:48  | 5:10  | 5:15  | 6:10 | 7:11 | 7:47 |
|      | 出発   | 4:48  | 5:10  | 5:15  | 6:10  | 7:11 | 7:47 | 8:55 |
|      | 避難小屋 | 10:39 | 10:47 | 11:32 |       |      |      |      |
|      | テンバ  |       |       |       | 7:00  |      |      |      |
|      | 就寝   |       |       |       |       |      |      |      |
|      | 天気   |       |       |       |       |      |      | 快晴   |

十一日目は、いよいよ下山である。

朝は、小雨がぱらついてしたが、行動に支障はない。

下山の途中、山本が以前から痛めていた足が、ひどくなったので、ぼくや上田さんなどがWザックして下山した。

下りは、ゆるやかで、道は、とても整備されていた。

また小屋が見えてきても、なかなか着かないので、みんな、シレンマを感じていた。

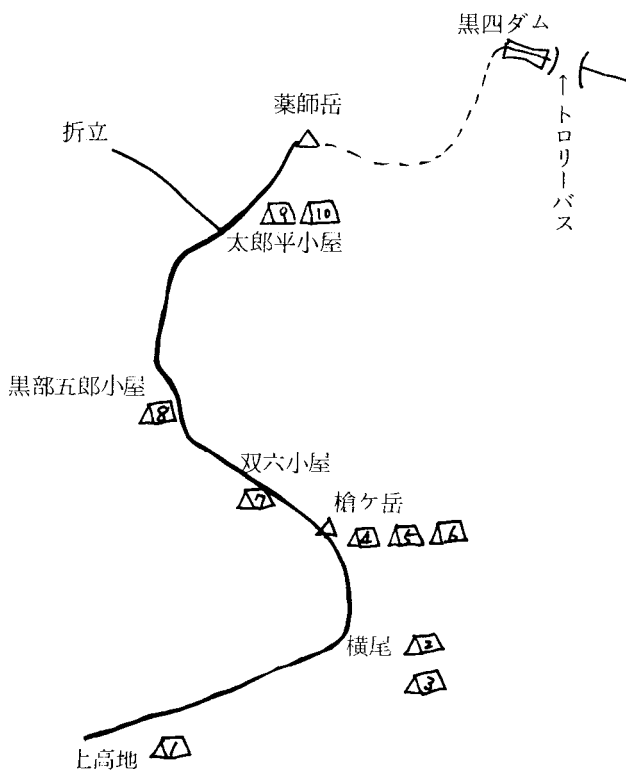
やっと下山し、みんな、合宿の無事を祝ってビールで乾杯したら、久しぶりのアルコールで、みんな酔ってしまった。

|    |      |      |      |      |      |      |       |
|----|------|------|------|------|------|------|-------|
| 起床 | 4:00 | 5:40 | 5:58 | 6:15 | 6:55 | 8:26 |       |
| 出発 | 5:40 | 5:58 | 6:15 | 6:55 | 8:26 |      |       |
| 下山 |      |      |      |      |      |      | 天気 小雨 |

のちくもり

このようにして合宿が終わったが、ほとんど雨で、テントが壊れるほどの風が吹き悲惨であったが、Pメンがカゼをひくこともなく無

事下山できたことが、なによりもよかった。





## 東洋のマッコウ鯨隊

vs

## 西洋のダミアン隊

### 北アルプス決戦パーティー

#### PL総括

小島直樹

今回の合宿で一年は初めての長い山行を経験するのであり、期待感・不安感を持ったであろう。また、一年の今後のワンゲル感に大きく影響を与えるのは必至である。そのためにも、Pミーティング等で一年の緊張感・不安感を柔らげ、限られた期間にできるだけ安全で多くのピークを踏んできたつもりであった。

しかし、雨の中を人山したことによって、下級生に不安感を募らせたような気がする。また雨のため2日目の薬師岳のピストンをあきらめたのは、Pメンに残念な思いをさせたが、今になって、入山してから一週間雨に見舞われたことを考えると正解だったと思っている。しかし、雨の中、雲ノ平のピストンを強行したため雷雨に見舞われ、Pメンは生きた心地がしなかったであろう。こういう状況に、Pメンを追いやったのは、リーダーとしてコース・天候に対する慎重策を採らなかった弱気な態度によるもので、大きな判断ミスであった。

また、長期合宿に相当する燃料の節約を考えず、一年にすべてを任

していたために二日分の燃料が不足するという事態を引き起こした。これは、合宿前、一年に手際の良さ、能率の良さをもっと習得させるべきであったと反省する次第で、リーダーとしてまだまだ未熟であるということを感じさせられた。

入山してから雨ばかりであったが、これといった事故もなく合宿を終了できたのは、実に喜ばしいことである。また槍ヶ岳では晴れ、360度のパノラマが眼前に広がり、各人が歩いて来た道を振り返った時、アルプスの山々の楽しさ、美しさ、厳しさ、恐ろしさを十分に満喫できたのではないだろうか。

最後に、未熟で力不足なリーダーであった自分を助け、ついて来てくれたPメンに対し感謝すると共に、この合宿で得た何かをベースとして、今後、一層の飛躍を期待して総括としたい。

#### マッコウパーティーSL日誌

天野雅紀

7月20日 三時起床

朝、出発時に降り出した雨が富山に着くと大雨になってしまった。今日は折立に泊まる予定を変更して富山でステーションとなった。駅構内でのエッセンに一年生は少々恥ずかしがっていた。

7月21日 四時起床

昨日の雨が朝になっても止んでいない。木村Pが先に富山を出発。

とうとう知った顔が自分のPメンだけになった。いよいよ合宿に入つたこの時実感した。雨の中を富山地鉄で有峰口へ。途中で雨が上がり遠くに立山・剣連峰が見える。有峰口から折立までのバスはひどかった。朝のバスが雨のため動いておらず有峰口が登山客でごったがえしており、その全員が三台のバスにそれも折りたたみすまで出してぎゅうぎゅう詰めに乗り込んだ。折立に着くと晴れていたが、今日は折立泊りとした。この時の太陽が、この後一週間も見れないはめになるとは、だれも夢にも思わなかっただろう。

7月22日 二時起床

起床がかかると外は大雨であったが、今日ほとにかく太郎まで行くことになる。1870三角点からは展望がよいはずなんだが。雨が横から降る中をやつとの思いで太郎平小屋へ。この雨の中でも小屋を出発する人が数名いたがまあとにかく気をつけて。テン場の薬師峠までは15分だったがまわりが見えないのでたった15分がとても長く感じられた。この夜、大雨によりサブ天が一時崩壊、床上(?)浸水と、もうめちやくちやになりA氏とダミアンは眠れぬ夜となった。

7月23日 二時起床

天気の様子をみて薬師ピストンを断念する。薬師はこのコースのメインの一つだったので、残念だ。雨が小降りになるのを待って出発。太郎のピークはどこがピークかわからないほどなだらかだった。ここどこかのメツチェンPと会い、今日のテン場が同じなのを聞いて一回ルンルンノここでは雷鳥にも出会った。8ミリをもって来ていたので撮ろうとしたが、その前に飛んでいってしまった。北ノ俣ピークから一瞬富山平野のあざやかなグリーンが見えてPメン一同一瞬顔がほころんだ。黒部五郎岳のピークも白一色。稜線を通るのをやめてカー

ルの中を黒部五郎小屋へ向かう。途中で雲ノ平の向こうに赤牛が見えて写真パチリノ黒部五郎小屋は静かで雰囲気のある小屋だった。

7月24日 起床六時

昨日小康状態だった雨がまた強くなり、今日は沈を決定する。今日は下界では全国的に日曜日。ラジオをつけるとベスト10番組だらけ。このころから主題歌が決まりだした。電話リクエストがあったので山の上からリクエストすると必ずかけてくれるとPメン確信するが、気分が乗ったところでここには電話がないことに気づき一同がっかり。

7月25日 起床二時

朝から大雨だったが三俣山荘まで行くことにして出発する。稜線にでももちろん白一色。ピークと山荘への分岐になかなか着かずに冷や汗が出る。分岐へつき一本とるがとても寒い。分岐へつき一本とるがとても寒い。分岐をでるとすぐに一つの事件が待っていた。S1が不注意で雪渓をすべり落ちてしまったのである。目の前で見たセカンドのI君は落ちたS1よりも心配な顔をしていたがまあ大事に至らずよかったよかった。山荘までは先の見えない雪渓横断、地図にない沢登りなど雨の中、道をまちがえなかったのが不思議なくらいだった。さすがS1さんノ(ナンチャッテ)この日は7時半にはテン場に着きほとんど沈と同じようであった。

7月26日

今日は一日大雨。隣のテントが完ペキなフライ付で石を投げつけたくなる。昼から山荘へ行き食堂で熱いミルク、紅茶、ココアなどを飲み一同ラッキーノ遠くに大天井岳が見え始め明日こそは晴れると一同確信してシュラフに入った。

7月27日 起床二時

今日は雲ノ平へピストンのあと双六まで行くことにしてパッキングをしてから出発する。小雨が降っていたが雲が上がっていく様子だったので晴れを信じて雲ノ平へと向かった。しかし、晴れるどころか日本庭園付近から雷が鳴り初め雨も強くなってきた。雷はだんだん近づいて来てこうなったら追いかけてこである。山荘につくのが早いか、雷に追いつかれるのが早いか競争になった。I君は雷の光と音の間の時間を一回一回数えてだんだん近づいてくるのがひしひしと伝わってくる。谷や少々木があればいいのだが、雲ノ平はだだっ広い所でまわりにはハイマツと石しかないのも、もちろんまわりで高いのは人間である。雲ノ平のテン場を過ぎた所でPL氏ストップをかけたが、昨年も来たSLが、もうすぐそこだからと説得して小走りで急いだ。雷雲の下ではなく真只中に居るのだからどこから来るかわからず、生きた気がしなかった。山荘まであとほんの少しという所でとうとう雷に追いつかれた。一瞬目の前に電光が走ったかと思うと、間髪を入れずに言葉では言い表わせないような大音響が鳴りひびき、Pメン全員その場にしゃがみ込んだ。そのあとすぐに山荘が見え全員走り込み無事だったことを素直に喜んだ。山荘に入ると雷がうそのように止んでしまい、これは絶対にある一年(通称ダミアン)のせいだと言うと彼は無気味な笑いをうかべていた。

雨は止みそうになかったが雷はもう鳴っていないので三俣まで帰ることにして雨の中を出発した。帰りも三俣山荘近くまで来てまた雷に合い、今日一日で全員寿命が縮まったにちがいない。結局今日も三俣に泊まることにした。

7月28日 起床三時

今日は一気に槍までだ。三俣ピークはガスっていたものの双六まで

行く途中で晴れて来て、Pメンにとってまぶしすぎる一週間ぶりの太陽だった。お花畑の中を通過してまず双六へ。ここから槍までが長い長い西鎌尾根である。双六からの一本目の途中で、急にガスが晴れた槍ヶ岳のピーク全容が見え、全員ワァーと驚きの声を出して喜んだ。もちろんここで写真をパチリノ西鎌尾根を前へ前へ進むと槍がだんだん近づいて来るが、すぐに行けそうでなかなかさうはいかない。千丈乗越から少々ガレた登りを一時間登るとやっと槍ノ肩に着いた。ここがキスリングを持ち上げる最高点標高三〇〇〇Mだ。ゆっくりとエッセンをとったあとと槍ピークへアタックノとにかく人が多かったが、ピークに着いた時はヤッターという気分がPメンを支配した。真青な空、眼下にはすばらしい北アルプスの景観。今合宿初めてのピークからの展望に一年生も「一週間雨に耐えた甲斐があった」と感慨無量の様子だった。この夜、久しぶりの星空の下でシュラフにくるまった。

7月29日 起床三時

久しぶりの快晴の朝。とにかく寒い。まず槍沢を一気に下り横尾まで行く。途中一年のI君が足を踏みはずして2、3M落ちたが別になんともないよう先を急いだ西横尾まで来るともうここは下界と同じようなもので、車は入ってくるはチャリンコなどもここまで入ってきている。しかし、これからまた湖沢へ向けてまた八百Mほど登らなければいけない。人でいっぱい横尾山荘をあとに湖沢へ全員元気(へ?)出発した。湖沢の登りはだるく、晴れていて日ざしが強く汗ばかり出て、やはり千三百の下りのあとの八百の登りはきつかった。湖沢ヒュッテでは濡れたものを全部だして干し、自分たちもユニフォームをぬいで太陽の光を休いっぱい浴び日光浴を楽しんだ。ここでは稲葉氏、西杉氏に再会した。

7月30日 起床二時

十日間の合宿もとうとう最終日を迎えた。最終日の今日は穂高へピストンのあと一気に上高地だ。朝のエッセンのあとすぐに奥穂へのピストンに出発。途中で懐電行動。ザイテングラードに入ってすぐに常念岳の向こうからの日の出だ。空がオレンジに染まり、きれいな三角形をした常念のすぐ横から、真赤な朝日が顔を出した。声も出さずにしばらく朝日を見つめていた一年生が印象的だった。この時、AM 4時55分。穂高山荘まで来ると下の濁沢ヒュッテがガスって見えなくなり奥穂ピークでの展望が心配になってきた。山荘から30分でピークに着いたが案の定まわりは白一色。合宿最後、それも最も高いピークに来たのに景色が見れないのは残念でならなかった。少しねばったが晴れそうなのでしかたなく最後の奥穂ピークをあとにした。山荘でみやげを買いコーヒーを飲んでゆっくりしたあとガスの中を濁沢へ下った。濁沢では雪溪の上で雪合戦をしてはしゃぎ回り最後の楽しい思い出となった。濁沢からなんと一本(2時間20分)で横尾。登ってくる人が多くて時には数分間も立ち止まることあり少々うんざり。横尾まで来れば半分下山したも同じ。エッセンのあと雨の中をゴールの上高地へラストスパート。徳沢園、明神池とだんだん下界の気配が強くなる。小梨平を過ぎ向こうにゴールの河童橋が見え始めると同時にすこい雨が降り出し、ゴールした時はぬれぬれみだだった。7月30日 17時10分河童橋到着。Pメンのみなさん御苦勞様でした。

カンパライノ

< 行動記録 >

7/20 湯田  $\rightarrow$  富山

7/21 富山  $\rightarrow$  有峰口  $\rightarrow$  折立  $\boxed{1}$

7/22  $\boxed{1}$  折立  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  
4:40 5:20 5:30 6:08 6:15 6:48 6:55 7:38 7:48 8:34 8:41

$\rightarrow$  太郎平小屋  $\rightarrow$  薬師峠  $\boxed{2}$   
9:00 9:55 10:10

7/23  $\boxed{1}$  薬師峠  $\rightarrow$  太郎平小屋  $\rightarrow$  太郎ピーク  $\rightarrow$  2576 M地点  $\rightarrow$  北ノ俣ピーク  $\rightarrow$   
5:30 5:48 5:53 6:03 6:25 7:12 7:20 7:57 8:08



$\rightarrow$  赤木岳  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  分岐(エッセン)  $\rightarrow$  黒部五郎ピーク  
8:42 8:53 9:37 9:45 10:30 10:35 11:00 11:14 11:18 12:24 12:32 12:42


$\rightarrow$  分岐  $\rightarrow$  本  $\rightarrow$  黒部五郎小屋  $\boxed{3}$   
12:48 13:07 14:00 14:20 14:50

7/24 沈


7/25  $\boxed{1}$  黒部五郎小屋  $\rightarrow$  分岐  $\rightarrow$  三俣山荘  $\boxed{5}$   
4:50 6:05 6:20 7:25


7/26 沈

7/27  三俣山荘 —— 雲ノ平山荘 —— 三俣山荘   
6:25 7:05 9:00 10:15


7/28  三俣山荘 —— 分岐 —— 三俣蓮華ピーク —— 分岐 —— 双六小屋 —— 本  
6:00 6:30 6:35 6:40 6:45 8:00 8:25 9:40 9:50


—— 本 —— 本 —— 槍ノ肩(エッセン) —— 槍ヶ岳ピーク —— 槍ノ肩 ——  
10:45 11:00 12:20 12:35 12:45 13:55 14:30 15:05 15:30 15:50

—— 殺生ヒュッテ   
16:10

7/29  殺生ヒュッテ —— 本 —— 本 —— (槍沢ロッヂ8:50) —— (一ノ俣小屋 8:50)  
6:00 6:30 6:40 7:50 8:05

—— 本 —— 横尾山荘(エッセン) —— 本 —— 本 —— 本 ——  
8:55 9:10 9:55 11:00 11:45 11:55 12:37 12:50 13:35 13:50

—— 濁沢ヒュッテ   
14:25

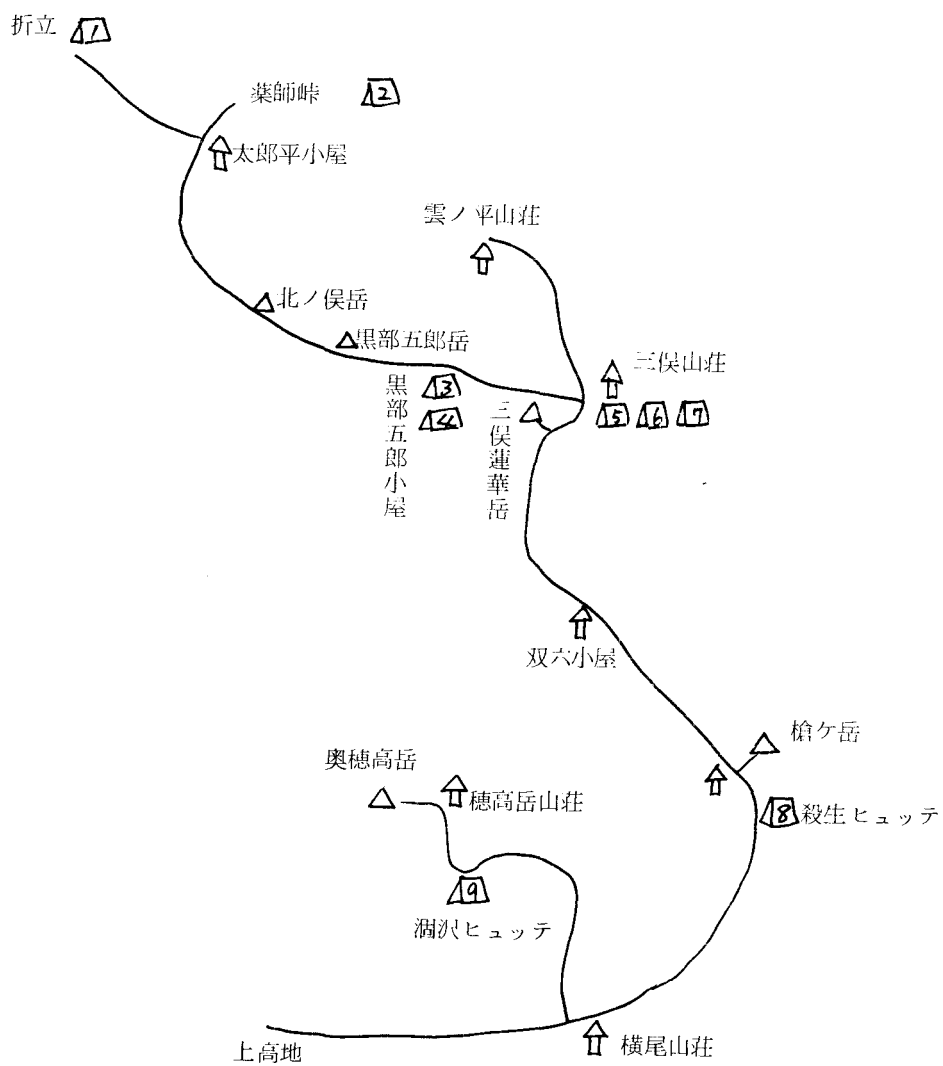
7/30  濁沢ヒュッテ —— 一本(日の出) —— 穂高岳山荘 —— 奥穂ピーク —— 穂高岳山  
3:55 4:45 4:58 5:20 5:35 6:05 6:45 7:25

荘 —— 濁沢ヒュッテ —— 横尾山荘(エッセン) —— 徳沢園 —— 明神 ——  
8:25 9:20 10:45 13:05 14:35 15:20 15:40 16:20 16:30

—— 上高地河童橋  
17:10

|      |      |      |
|------|------|------|
| PL   | 小島直樹 | (経3) |
| SL   | 天野雅紀 | (経2) |
| 撮影   | 仁保章  | (経3) |
| 会計   | 石井敬治 | (教3) |
| 衛生   | 尾崎幸司 | (経2) |
| 装備   | 井上宏史 | (工1) |
| 気象   | 半田栄志 | (工1) |
| エッセン | 荒木雅彦 | (経1) |

< 概 念 図 >



## ぼそぼそパーティーやる気の記

### またの名をSL日誌

兼 光 美 野

その一。野上君の場合

七月二十一日。合宿所を出発。湯田駅に着くまでに時計を亡くし、薄暗がりの中をさがし回る。幸い後続パーティーの方が拾って下さっていてほっとした。新幹線の中でさし入れを食べた。ケーキのさし人は、他のオッチェンはいらなと言ったが、僕は食べます、と言ってしまった。二年のメッチェンが一瞬寂しそうな顔をした。

中房のテン場につく前から雨はザーザー降っていた。テントを設営し、一息つく間もなくエッセン。しかし：エッセン係の僕はラードを忘れてきてしまった。明日からはチョンボのない様に：。それにしても雨は止みそうにない。

その二。川原氏の場合。

七月二十一日。三時起床。雨は音をたてて降り続ける。私は我知らず雨に問いかけていた。何で降るんか。いつまで降るんか。明日は止むんか？。いろいろ話しかけたが、雨はいつでも、「まだ降りますよ」と答えるのみ。私は沈を決定した。6テンからメッチェンが出て行って、広いなーと思ったのもつかの間。たちまちテントは湖と化した。オッチェン総掛かりで水を汲み出す。私たちの苦労も知らずにメッチェンはサブ天で寝ている。

九時ごろ一転して晴れる。登山者やハイカーが続々と登っていく。メッチェンを起こしてテント撤収。寝過ぎでメッチェンの顔は、はれている。

さあ、山行の始まりだノ千三百メートルの登りにとりかかる。

その三。下川氏の場合

同日、信じられない天気の変わりようだ。稜線に出るまでは景色も単調であるが、合戦小屋からの登りの途中で槍ヶ岳の穂先が見えた。それにしても人の多いこと多いこと。さすが表銀座の人口だけある。この分ではテン場も狭いだらうと、PLがSLにテン場確保を伝える。しかしSLはばてていた。そこで俺がマイペースで他のPメンをひきはなしてテン場を先に確保した。

燕にピストン。槍ヶ裏銀座を見る。ぞっとするほど高い山々だ。頂上あたりはほとんどガスっている。燕はというと、他の山々とは違って岩がよきよきとつつ立っていて、一風変わった面白さだ。

テン場にもどると、はるか下方に下界の街が見える。まだ街が見えるだけホッとす。あたりが薄暗くなる頃、西の空が夕焼けで赤く染まった。それにしても寒い。裏銀座の山々は黙ってそびえている。

その四。清水さとみの場合。

七月二十一日。朝から雨、強風。昨日の晴天が空しい。まわりは白の世界で、今回初めての沈となる。でも、テントの中は意外に明るく、メッチェン（特にみき）は笑いをよく提供してくれた。お昼の紅茶に巨大なナメクジが入っていたのは閉口。（でもおいしかった♡）

その五。木村のおじさんの場合

七月二十二日。夜中は台風以上の風が吹き荒れた。起床係だった私は、テントが崩壊せぬよう、常にペグやポールを点検して回り、一睡

もしなかった。それにしても、サブ天のおばさん三人組は生きてるの  
だろうか？（注。木村君は、サブ天まで見まわりに来てくれて本当に  
御苦労様でした。）

#### その六。内賀君の場合

同日。まだ風雨は強い。なのにPLさんは行動を決定。昨夜までの  
雨でテントは重くなっているが、文句一つ言わずパッキングを始めた。  
燕までで高度を稼いでいるので、あとは稜線を歩くのみ。大天井まで  
は、風がつよく、とても歩きにくかった。この道は、途中、蛙岩、コ  
マクサの群生、レリーフなど、見るべき所が多い。岩ばかりのガレガ  
レの道を登ってやっと二つ目のピーク、大天井岳。ここからは高瀬ダ  
ムのあたり、烏帽子岳が印象的だ。

大天井と大天井ヒュッテは、雨も小降りです。途中お花畑もあり、やや  
楽に歩ける。大天井ヒュッテで昼のエッセン。この時だけが「メッ  
チェンは、米はオッチェンより食わんに、昼のエッセンはオッチェ  
ンと量が変わらないか」  
と言った。メッチェン三人は少なからずギクリとしたように思えたが  
……。

ライ鳥の親子に出会った。ひなを見て、吉田さんがしきりに、「マ  
ーブルクッキーみたい」を連発。あーあ、メッチェンの発想……。

ヒュッテ西岳につくと、ばかばか陽気に変わり、テントも乾いて嬉  
しかった。（注……つかの間の喜び）

#### その七。みきの場合

七月二十四日。小雨が降る。我がP動かず。十時ごろは晴れたがや  
はり沈。昨夜私は、○○さんの夢を見た。（SLはこの夜、某四年生  
が採用試験を受けていらっしやる夢を見た。本当の話。）おかげで今

日はルンルン。トランプで、みのちゃん（注、SLのこと）からサラ  
ミを奪い取った。じっとしているのが嫌な木村君は東鎌尾根を下見に  
一年二人は西岳ピストンに出かけた。暗い私と下川さんは、テントの  
中で語り合った。PLさんはシュラフを干すのにな所懸命だ。

西岳のテン場からは、蝶ヶ岳と常念岳と大天井岳が明るくはつきり  
見える。しかし、槍・穂の方面はいつも暗くガスっている。常念の沢  
の細い白い筋が印象的だが、木村君がこれを「そうめん」と呼んで皆  
をがっかりさせた。夕方、槍ヶ岳が姿を現し、全員感動した。しかし、  
観天望気によるとまた雨だそうだ。

#### その八。SL日誌。―ある後悔（歩こうかい）―

七月二十五日。東鎌尾根。噂ほど危険とは思わなかったが、やはり  
注意すべき道である。今回最も恐怖を感じた箇所は、ヒュッテ大槍か  
らの稜線だ。強風を考慮すれば、稜線でなく、下の道をとってれば  
よかったと後悔した。前へ進めない程の強風が時折襲って来た。殺生  
ヒュッテの赤い屋根が、左下方に見えた時はホッとしたが、これから  
テントを設営する苦勞を思うと、いやになった。

殺生のテン場は、他のテントが一、二張あるくらいで、閑散として  
不気味だ。四苦八苦して、テントをたてた。メッチェンは、サブ天の  
中にザックを入れ、ガタガタ震えながら耐えた。しばらくして6天に  
行くと、中はゴチャゴチャで、オッチェンの苦勞がうかがわれる。外  
は、間断なく吹きすさぶ風。小石のように痛い雨。地獄のテン場だ。  
今夜は一睡もできそうにない。

みきが殺生ヒュッテで中桐Pと再会。彼らのPが小屋に避難した事  
をPLさんに伝える。即テント撤収。撤収は設営以上に苦勞した。サ  
ブ天はそのまま数十メートル下方に飛ばされるし、6天は、オッチェ



ン三人を中に入れたまま一回転した。この作業の間、肌をつき刺す風雨が横なぐりに吹きつける。早く早くと心が焦る。やっと小屋に落ちつき、一時はホッとしたが、小屋のガラス窓がうなる音は不気味だ。

七月二十六日。野上君、起床で一時間三分のチョンボ。風雨は止む気配がなく、とうとう三日目の沈。Pメンも暇をもてあまし気味。武田Pと再会。皆元氣そうでにぎやかだ。今日のヒットは、PLさんのナベの確保。PLさんと内賀君の対照的な笑顔が忘れられない。余談：小屋のトイレの壁に、I LOVE 松本常子 という落書きがあるそうだ。

七月二十七日。とどろく雷鳴、車軸を流す雨の中、小屋を離れ、槍沢まで降りる。視界が悪く、皆、ものも言わず、ひたすら歩く。コーズ消化できないショックは誰の胸にもあっただろう。明日の槍ヶ岳ピストンにかけるしかない。

七月二十八日。夜、月が出た。スチャラカチャンチャン。寒々とした丸い月だ。二時起床。懐電行動で出発した。聞こえる音は、ゴゴゴという沢の音と我々の足音。二つ目の雪渓にさしかかったころ、上方の山肌が赤く染まった。Pメン全員（下川氏は昨日足をケガし、テシ場にいた）足をとめ、言葉もなくそれに見入った。

一歩一歩登り、もうそろそろ槍が見えるはずだが、と見上げる。白いノガスっている。あきらめ半分で肩まで登った。肩からもピークは見えない。それにしても人、人、人の多いこと。自分達も人の中に混じった。

なかなか動かない行列にうんざりしていると、突然霧の底からサイレンの音！  
「落雷するぞ」

誰かが叫ぶ。サイレンが止むと前の人が、じわじわ動く。少し進むとまたサイレン。PLさんは「行け」の指示。しかし、三回目にサイレンが鳴っている時、とうとう下山。燕、大天井に続く第三のピークは踏めなかった。

肩から降りる途中で晴れ始め、真青な空をバックに槍ヶ岳の雄姿が現れた。皆が無邪気に雪合戦をした雪渓から見た槍は、青空と雪の白さの好対照で、美しく神々しかった。

こうして、我々ぼそぼそPの夏合宿も終わりを迎えようとしていたが、この頃から、私の心の中には、ある後悔があった。槍ヶ岳の肩まで来ていながらピークを踏まなかったことだ。他のPメンは登りたかったのでは？実を言うと、私個人はピークを踏むことに執着しないので、槍ヶ岳のピークが云々と言うことはない。しかし、SLとして、なぜ「登りましょう」と言うだけの意欲がなかったのか。自分が山から逃げたような気がして、自分に対して情なかつたのだ。

私たちが下るにつれ、切りは夏の様相を示し始める。おそらく上高地からであろう、登山者が続々と登ってくる。彼らとすれ違いながら私はこれまで我がPが歩んできた道を思い越こした。下る者と登る者……。これから登っていく人たちには、山はどう迎えるのだろうか。下山しつつ、ふと足をとめて振り返らざるをえない合宿の終了であった。下山時のあの気持ち、私を振り返らせるものの為に私は山に登るのである。

悪天候の厳しい山行ではあったが、PLさんのおかげでためになる事を知った。混成であることも、PLさんの頭を悩ませたのではないだろうか。川原さん、お疲れ様でした。今回の山行は、自己反省や問題意識をもつことができる良い山行だったと、私は思っている。

〈行動記録〉

7/20 湯田温泉  $\rightleftharpoons$  小 郡  $\rightleftharpoons$  名古屋  $\rightleftharpoons$  松 本  $\rightleftharpoons$  有 明  $\rightleftharpoons$  中房温泉 [1]  
6:39 6:51 10:41 11:00 13:18 13:33 14:34 15:00

7/21 [ ] 9:45 — 10:17 — 10:55 第2ベンチ — 12:20 第3ベンチ —  
10:22 11:45 12:28

— 13:42 合戦小屋 — 14:03 — 15:12 燕山荘 [2] (  $\frac{0:24}{0:20}$  燕岳 ) 16:50  
13:53 14:09 15:45

7/22 沈

7/23 [ ] 5:20 — 5:48 蛙岩 — 6:38 — 7:30 — 8:05 大天荘 (  $\frac{0:09}{0:09}$  大天井岳 )  
5:52 6:45 7:35 8:07

8:45 — 9:17 大天井ヒュッテ — 10:26 — 11:14 — ヒュッテ西岳 [ ]  
10:00 10:35 11:20 12:10

7/24 沈

7/25 [ ] 12:12 — 13:12 水俣乗越 — 14:05 — 15:06 殺生ヒュッテ [ ]  
13:16 14:12

7/26 沈 ( 殺生ヒュッテ )

7/27 殺生ヒュッテ 12:33 — 13:38 — 14:51 槍沢 [ ]  
13:43

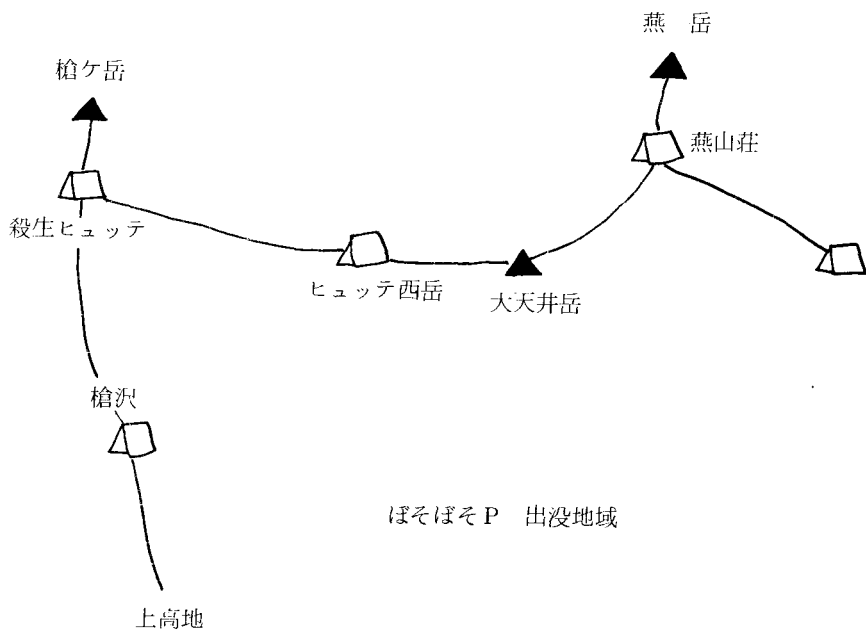
7/28 [ ] 3:44 — 4:34 — 5:24 — 6:00 — 6:27 — 6:52 槍岳山荘 (  $\rightarrow$  槍ヶ岳途中 ) 9:20 —  
4:37 5:29 6:06 6:32

— 9:40 殺生ヒュッテ — 10:46 — 11:50 槍沢 [ ]  
9:46 10:57

7/29 [ ] 5:14 — 5:35 — 6:27 — 7:48 横 尾 — 9:25 徳 沢 — 10:35 小梨平 —  
5:44 6:38 8:26 9:45 10:46

— 11:26 上高地

(注、本文はすべてS.Lが書きました。多少の誤りはご了承ください。)  
特に他のPメンの記述のところなど…)



ほそぼそP 出沒地域

|       |           |
|-------|-----------|
| PL    | 川原修 (教3)  |
| SL    | 兼光美野 (人2) |
| 撮影    | 下川信幸 (経3) |
| 衛生    | 吉田美樹 (教2) |
| 会計    | 清水智美 (教2) |
| S装    | 木村洋司 (人2) |
| エッセン  | 野上貴行 (理1) |
| 装備・気象 | 内賀重信 (工1) |

## 槍ヶ岳にキッス♡パーティー

### PL総括

武田 徳子

今回の合宿程、山が恐いと思った事はなかった。初日の烏帽子岳では晴れていて景色も良く、うん、アルプスに来たんだナァという実感がありみんなはしゃぎまわっていた。夕焼けも空いっぱいになり、とてもきれいだ。ところが次の日から、雨雨雨の中を黙々とただ槍ヶ岳へ向って歩いた。ひたすら槍で晴れる事を信じて歩いたのだ。野口五郎岳付近は風が強く、一歩踏み出すことさえ困難であったので三身一体となり風に立ち向ったのだ。双六では、突風と雨のためテントのポールが折れ、いつつぶれるかも知れないテントをみんなで押えながら寝たのだ。よく朝までもったものだ。こういう風に自然と戦いながらもやっとたどり着いた槍ヶ岳、ひと目でいいから見たいという願いも虚しく、ただ一度たりとも私たちの前に姿を現わしてくれなかった。そればかりではなく、私たちの登った数時間後には落雷によりけがが出るという恐い事故もあったのだ。槍に裏切られたような気がして腹が立った。せめて一年生だけでも見せてあげたかった。PLとしてほんとに未熟で反省すべき事ばかりである。強風の中、雨の中の強行的確な判断とは言えないし、天候の事ばかりを考えて他の事を考える心の余裕がなかった事も事実である。メインである槍をコースの最後にもってきたこと、これは日々

に槍ヶ岳が近づいて来るのを楽しみに歩きたいと思ったからであるが悪天続きの場合、やはり無理をしてしまう原因となる。

楽しかった事よりもつらかった事や恐かった事が思い出となってしまいう合宿だったけど、山は恐いんだという体験を生かして、今後安全に山行してほしい。そして、天気の良い時の山程すばらしいものはないという事を教えてあげられなかったけど覚えていてほしい。最後にほんとにこんな未熟なPLについてきてくれてありがとう、とってもいい思い出になりました。

### '83夏合宿・北アルプス裏銀座

#### 槍ヶ岳にKISSパーティー

#### SL日誌

荒二井 照子

七月二十日、小雨模様。みんなの期待をよそに、あやしい空模様の中、まだ薄暗い湯田温泉駅を後にした。途中で何度か列車を乗り換えるたびに、他パーティーが次々に下車し、なんだかとても淋しくなった。

私たちのパーティーは、午後三時、雨の信濃大町で下車し、タクシィで車の入れる所まで行ってもらう。明日は入山だというのに、雨足は増々ひどくなり、高瀬ダムまで行こうとした私たちの事を、タクシィの運転手さんや、地元の警察の方が心配してくださったが、とにか

く、今日は高瀬ダムの下の安全な場所にテントを張った。雨音に不安をかき立てられながらも、具のたっぷり入ったすき据きで、心も体も暖まり、就寝。

七月二十一日、雨。外は昨日と相変わらずのどしゃ降り、朝のエッセンの時も、みんなの顔色が冴えない。今日はこの合宿中で最もきつい尾根を登らなければならないのに、と思うと、容赦ない雨が憎らしい。

ともかく入山することになったが、雨水で足下が悪く、狭い急登を進んで行くのに、かなり神経を使った。一年生も、キャラバンが滑って歩きにくそうだった。でも、お昼のエッセンを終えた頃、薄日が射し、所々に青空が姿を見せると、それまでの不安な気持ちも、嘘のように消え去った。三角点付近では、思いがけず槍の姿を発見し、みんな感激しながらも、いいこと続きで、少し妙な気がした。

三角点から烏帽子小屋に行くまで、かわいい高山植物に見とれて、何度も足を止めた。今日は急登を登り続けたため、足が重かったけれど、あまりのお天気よさに、烏帽子岳にピストンをかけることになった。途中のニセ烏帽子までは展望がすばらしく、何度も声を上げて見とれている一年生を見て、頑張って入山してよかったと、しみじみ感じた。いい事続きのおまけみたいに、今日の夕日の美しさといったら、とても口では表現できなかった。他パーティーの人も、どこかであの夕日を見えていますようにと願った。

七月二十二日、強風を伴う雨。今日の野口五郎小屋までの行程は、稜線も割とはっきりしていて、危くはないだろうということで、雨の中、烏帽子のテン場を出発した。しかし、稜線に出ると、突風を直接受け、針のような雨が頬に痛かった。道もガレ場で、足をとられやす

かったが、みんな無事に稜線を通り抜けた。この時、突然白いガスの中に姿を見せた雷鳥の親子は、沈んでいた私たちの心をほのぼのとさせてくれた。

風雨はおさまる見込みもなく、今日は小屋泊り。ストーブの部屋で濡れた体を暖め、いろんな人と話をしているうちに、雨でめいっていい気持ちも、しだいに和らいでいった。

七月二十三日、強風。昨夜までの雨はおさまったものの、小屋を出る前からもすごい不安がつきまとった。何度も風に体をゆさぶられながら、野口五郎岳へと向かったが、ピークでの展望はなく、とにかく寒いので、早々とピークを後にした。この強風も、東沢乗越のあたりになって幾分おさまったが、周囲は依然として真っ白という中を、水晶小屋へ向かった。小屋の前で少し戸惑ったが、結局予定通り水晶岳にピストンをかけた。石のごろごろとした狭いピークで、本当なら雲の平も見渡せるのと思うと、悔しかった。

水晶小屋から、鷲羽岳は越えずに谷の道を、今日のテン場、三俣山荘へ向かったが、山荘は見えているものの、足が重くてなかなか着かないような気がした。テン場では、流れる雲の切れ間から槍の先が顔を出し、みんなしばらく見とれていた。明日こそお天気になりますように。

七月二十四日、雨。今朝もまた、雨音を耳にしながらのエッセンで、いい加減この雨には呆れてしまった。今日は、三俣から双六までの比較的楽なコースで、途中、三俣蓮華岳にピストンをかけた。ここも晴れていれば、お花畑を横目に、気持ちのいい登りのはずなのに、とても残念。

双六のテン場に着いて、さっそくブスをたいて、ほくほくのラーメ

ンを食べると、びしょ濡れの体も生き返るようだった。どうやら、最も風当たりのいい所にテントを張ってしまったようで、今夜はおおち寝ていられそうもない。

七月二十五日、強風を伴う雨。昨夜からの風雨は止むことなく、今日はこの合宿で初めての沈。みんな思い思いの事をして過ごしてもいいということ、手紙を書いたり、小屋に遊びに行ったり、自由でのんびりした一日だった。

午後、中桐さんPが双六に来るのではないかと思い、テントを捜してみたが、どうも見当らなかつた。風は一向に弱まる気配はなく、今夜はみんなテントにすがるようにして寝ることになった。

七月二十六日、雨。昨夜はあまり寝られなかつたのと、シユラフも体もびしょ濡れになったのと両方で、今朝は気がめいつていた。けど、風はいくらかおさまったようなので、今日はいよいよ槍ヶ岳を目指して、西鎌尾根に行くことになった。途中、槍ヶ岳山荘の近くで中桐さんPに出会おうと、みんなのそれまでの重い足どりが、急に軽やかになった。やっぱり、山の中で知った人に出会えるのはとてもうれしいものだ。

今夜は殺生ヒュッテに泊まることになった。ここでは、川原さんPとの再会もあり、久々に一年生の楽しそうな笑い声も聞かれた。それにしても今夜はユニークなエッセンも食べたし、安心して眠れそうだ。

七月二十七日、曇り後雷雨。殺生ヒュッテから槍ヶ岳にピストンをかけて、今日はいよいよ上高地まで下山することになった。槍への登りは、周囲がガスっていることもあって、足下が頼りなく、一歩まちがえば下に落ちてしまうのではないかと思うと、何度も足がすくんだ。なんとかピークまでにたどり着いたものの、この合宿で一番楽しみだ

った、槍からの三百六十度のパノラマは白い世界に包まれてしまった。ピークから殺生ヒュッテに戻る途中、落雷の音を何度も聞き、その度に身をかがめた。

殺生ヒュッテで川原さんPと別れを告げ、いよいよ下山することになった。小屋を出てからも、雷を伴う雨は増々激しくなり、しばらく続いた岩のごろごろした下りや、濁った川を渡る時といった、晴れていれば何でもないような所も、とても危険な状態になっていた。槍沢、一ノ俣を経て横尾へ向かう道も、水があふれ出し、ほとんど川の中を歩いている感じだった。横尾まで来ると、みんな、かなり疲労しているようだった。私もやけになってただがむしゃらに歩いていたので途中とんでもない方向へ行ってしまう、他のパーメンに迷惑をかけてしまった。それでも何とか、上高地の小梨平キャンプ場に着いたころは、もう薄暗くなっていた。この時はもう胸がいっぱいになって、本当に泣けてきた。

パーメンのみなさん、雨の中本当にご苦労様。ありがとうございます。

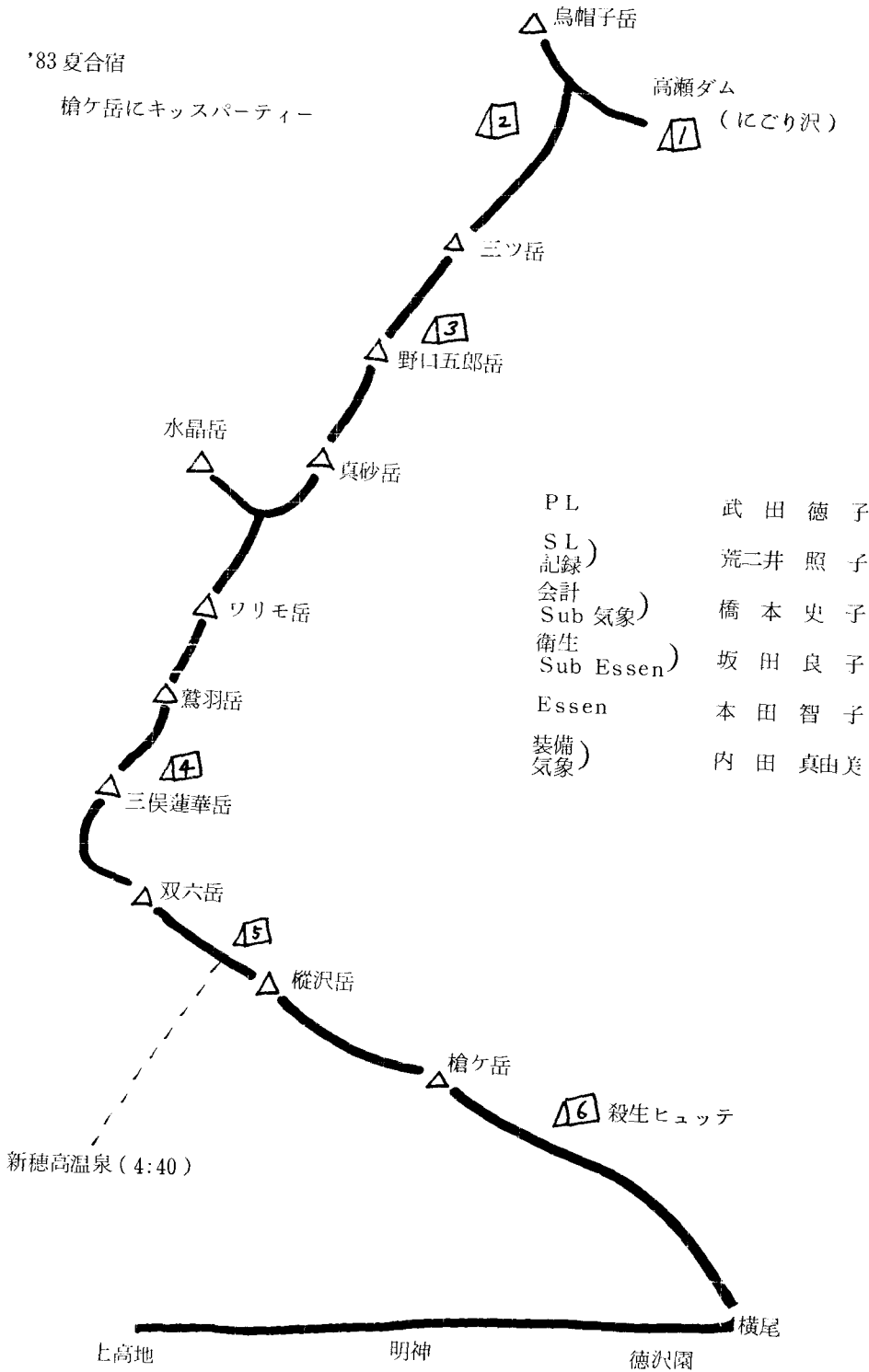
おわり



〈コース概念図〉

'83 复合宿

槍ヶ岳にキッスパーティー



- |            |        |
|------------|--------|
| PL         | 武出 徳子  |
| SL)        | 荒二井 照子 |
| 記録)        |        |
| 会計         | 橋本 史子  |
| Sub 気象)    |        |
| 衛生         | 坂田 良子  |
| Sub Essen) |        |
| Essen      | 本田 智子  |
| 装備)        |        |
| 気象)        | 内田 真由美 |

< コースタイム >

7/20 湯田 5:34 小郡 6:51 ひかり20号 名古屋 10:41 11:00 特急しなの9号 松本 13:18 13:33 15:00 信濃大町

タクシー  
七倉 16:10 高瀬ダム 17:00 [1]

7/21 [ ] 高瀬ダム 5:10 5:47 6:15 7:05 7:15 尾根取付点 9:10 10:00 11:15 11:25 三角点 13:20 14:51 烏帽子小屋 17:20 [2]  
烏帽子岳 16:03

7/22 [ ] 烏帽子小屋 5:55 6:50 三ツ岳標識地点 7:05 7:32 7:40 野口五郎小屋 9:30 [3]

7/23 [ ] 野口五郎小屋 5:15 5:45 6:00 野口五郎岳 7:30 7:40 東沢乗越 9:00 9:10 水晶小屋 10:10 11:15 12:45 11:15 水晶岳 11:45  
岩苔乗越 14:00 14:15 15:15 15:20 三俣山荘 16:05 [4]

7/24 [ ] 三俣山荘 6:35 7:20 8:20 8:36 双六小屋 9:35 [5]  
三俣蓮華岳 7:55

7/25 双六にて沈

7/26 [ ] 双六小屋 5:35 6:15 6:25 縦沢岳 9:20 9:30 千丈沢乗越 11:56 12:50 槍岳山荘 13:30 殺生ヒュッテ [6]

7/27 [ ] 殺生ヒュッテ 4:55 7:10 9:25 10:40 10:50 11:55 12:20 一の俣小屋 13:25 13:40 横尾 14:40 15:00  
槍ヶ岳 5:55 6:20

徳沢園 16:05 16:30 明神 18:00 18:10 上高地小梨平 18:50



はまったの!! ドツボパーティー

PL総括

宮本博

「先輩、もっと山の中にいたいですね。」

と、茶臼のテン場で後輩が言った。僕は夏合宿に南アルプス全山という長期合宿を計画してほんとによかったと思った。合宿するなら南アルプスと思っていた。毎日1000Mのアップダウンがあるというきつい合宿の終りに聞いたこの言葉は感無量だった。入山して16泊目の事である。服や体からは異臭がし、食糧の予備は全くなく、頬はこけて髭だらけでアルプス原人そのもの、しかし満足した顔だった。

合宿出発前、合宿中と、南アルプス全山パーティーならではの苦労努力があったし、みんな文句もいわずよくやってくれた。その苦労が報われたと思う。

トレーニング中のポッカプラス1回や、終了後の筋力トレーニング(通称ガチャガチャ)えらなかった。徹底した軽量化で合宿のエグセンは悲惨だった。マーボー豆腐はマーボー汁になり、カレーは具を捜すのに苦労した。フランスパンには何種類ものカビが発生した。北岳山荘で食べた昼のエグセン、乳児用ミルク入りココア、聖岳ピークのカンパン、どれもおいしかった。

甲斐駒ヶ岳、赤石岳、聖岳のピークでゆっくり昼寝できたのも嬉しかった。

幸にして我がパーティーは病気も事故もなく完全にコース消化することが出来ました。合宿中ほんとにみんなよくやってくれた。うまく言えんけど、「ありがとう」。合宿が成功したのもいいパーメンがいたからだと今更のように思います。

合宿成功ばんざい。

## 南ア全山ドツボP SL日誌

岩谷明彦

7月15日(金)

まだ薄暗い頃、起床の音がかる。いよいよ夏合宿。前の夜に準備しておいたザックを担いで、湯田温泉駅へと向う。ザックの重さは、25kg平均。軽量化の勝利だ。駅で待つこと30分、ぞくぞくとみでなが差し入れに来ってくれる。両手で持ちきれないほどの差し入れをかかえて、いよいよ出発。

長い長い列車の旅。窓の外の景色も、刻々と変わってゆく。昼過ぎた頃から、ポツリポツリと雨が降りだし、甲府に着いた時には、ザーザー降りだった。うっとりうしい雨を、甲府駅の待合室から眺めていると、サイクリング部と偶然出会った。差し入れのスイカを一緒に食べお互いの合宿の成功を祈って僕らは、甲府駅に長旅の疲れをいやした。

7月16日(上)

朝から大チョンボ、アプローチのバスの時刻を間違えてしまったのだ。やむなくタクシードで夜叉神峠登山口へ向う。あいかわらずの雨、雨、雨。よく整備された登山道へ、踏み出す足どりも心なしか湿りがちだ。2本で夜叉神峠へ出たが、雨足は一向に変わる気配がない。心はずでに畑雑に飛びつつも、これからの我Pの前途に、一抹の不安を感じながら、南御室小屋を目指した。

7月17日(日)

雨は弱まるどころか、激しさを増し、本日は沈と決定する。幸い、ダンロップの6テンは、フライはしっかりしているし、グラインドシートは敷いてあるしで、快適そのもの。テント内で雨具が必要な、例のポロテンでなくて本当によかったと、感謝するばかりである。入山そうそうの沈で、本日はフテ寝を決めこんだ。

7月18日(月)

2時半起床。依然として雨は降り続けている。しかし、今日が行かねばならない。この時ほど、コースの長さがうらめしい日はなかった。しかし、薬師岳に着くころから、雨もあがり天候は回復してきた。初めて雷鳥を見たのも、今日だった。観音岳を過ぎ、地藏岳では、オベリスクが雲を下に、そびえ立っていた。高嶺に着くころには上天気であった。高嶺からのパノラマは実にすばらしい。農鳥・西農鳥・北岳・仙丈岳・甲斐駒・八ヶ岳が見えた。オコジョも、岩間から顔を出していた。この時、竹ちゃんフィルム切断事件が起きたが、あの景色を見て、みんな大満足。出発時の大雨がまるで嘘のようで、とてもう

れしかった。今合宿中の最もすばらしい日のうちの一日であった。

7月19日(火)

今日も、天気は上々。時間に余裕があれば、テノ場飛ばしをする、とのこと。早川尾根小屋から仙水峠へと、アップ・ダウンのある尾根道に行く。アサヨ峰からも、絶好の展望が得られた。この時は、秋のような空色で、北アルプスの槍ヶ岳・穂高岳・後立山まで見まわせた。そして、予定通りテノ場飛ばしをしたが、さすがに、甲斐駒のピークに立った時は、へとへとだった。実によく歩いた。今日の行動時間8時間19分。

7月20日(水)

今日はひたすら登るだけ、仙丈ヶ岳への登りである。2本目をとった頃からポツリポツリと降り出す。いやな予感。やがて、ガスも出てきて展望も悪くなる。小仙丈ヶ岳越えコースを断念して、馬ノ背ヒュッテ経由で登る。テノ場に着くと、ガスがひどく視界もあまりよくない。雨も激しさを増す。先も長いことだし、今日は小屋泊り。

L u c k y !

7月21日(木)

あいかわらずのガスと、激しい雨。今日は沈と決定。また一寝いりしてから、行動食のアメを賭けてのドボン大会。この時、あの表情を変えない吉沢がドボン返して、「返し〜〜」と一言叫び、ニヤツとした。一同大笑。それにしても、賞品のアメの中に、ネズミの被害にあったアメがあったのには、まいった。夕食後、ガスの切れ間を

ぬって、仙丈ヶ岳へピストン。北岳・甲斐駒などの上空に、灰色の巨大なレンズ雲ができており、非常にぶきみだった。テン場に帰ってから見た、夕日に染る槍ヶ岳、穂高岳、をはじめとする北アルプスの山々が、あまりに紅くて、印象的だった。

#### 7月22日(金)

小雨の中出発。小雨とはいえ、稜線では風が強くなる雨となる。寒い。一本分歩いて、やっと樹林帯へ入ったと思ったが、この樹林帯の道も、昨年の台風の影響で随分様変わりしている。ダラダラと長い仙塩尾根から両俣小屋へ降りる。ひどい荒れようだ。道はグチャグチャで、いたる所倒木だらけ。おまけに次のコースである左俣への渡渉が難かしく、渡ってからもまともな道がないので、コースを変更。加えて北沢峠へぬける林道の橋も、ここ数日の雨のため流れたのとこので、結局残された唯一のルート、三峰岳経由で北岳山荘をめざすことにする。全員、ビタミン不足気味で昏があれきてきている。宮本さんも今日になって、少し発熱。心配である。

#### 7月23日(土)

2時起床なれど、外は雨。昨日のことも考えて、本日は沈。昨日、偶然一緒になった泉谷氏の上司の方も、今日はおられない。しばらくして、小屋守りの星さんが帰ってこられた。星さんからスルメの差し入れをいただき、それを賞品にまたドボン大会。いつもの様に一ノ瀬氏と吉沢には、なかなか上がりが無い。ようやくひととおりがった所で、夕のエッセン。夕方から、天気はやや回復しており、明日に期待する。それにしても小屋泊り、一人二千円は、大きな痛手。

#### 7月24日(日)

雨はまだ降っている。しかし、今日は行かねばならない。心なしか、Pメンの顔がこわばっている。3時45分、いよいよ出発。出発時に星さんと記念撮影。野呂川越まで一本強分の間、懐電行動。本合宿初である。稜線に出ると横なぐりの雨。歩いても歩いても中間点、三峰岳は遠い。手がかじかむ。休みもそこそこにとるようになる。やっと北岳山荘についたのは10時であった。全身びしょびしょ。まったく寒い。テン場の受け付け 本部への連絡をしていると、山荘の人が親切にもストーブをつけて下さった。一同大感激。ストーブの前に陣取って、ぬれた衣服を乾かす。昼のエッセンは山荘内でとらせてもらい、一段落ついてからテントを立て、すぐさま、夕方のエッセンにとりかかる。この時、少しだけ晴れ間がのぞき北岳をみたが、これより先にも後にも北岳はガスの中で、我々にその姿を見せることはなかった。

#### 7月25日(月)

朝、ガスの中、北岳ピストン。何も見えん。全くいやな天気だ。小雨の中を北岳山荘出発。中白根山、間ノ岳はガスの中である。稜線に降る雨は冷い。農鳥小屋まで来て、トランシーバーの定時発信。今日あたり桑原さんPと再会か、と思っていたのだが……。応答がない。どこかで沈をしているんだろう、と話しているところへ、上の方から「おい／＼」と懐かしい声がする。来ていた／＼思わず笑みが浮かぶ。みんな元気そうにしている。しばらくは、お互いのPのこれまでの行程について、語り合う。その後、昼のエッセンをとる。12時すぎに、両P合同で農鳥・西農鳥岳へピストンをかけることになった。しかしピストンをかけたものの、ピークでの視界はゼロ。全くついていない。

ピストンから帰ると、竹ちゃんの断熱マットが強風に飛ばされ、なくなっていた。風も強いし、テントが張れないので熊ノ平まで行くことにする。けれど再会のよるこびは大きく、熊ノ平へ向かう足どりも軽かった。

7月26日（火）

昨日が強行軍山行だったので、今日は半沈して、雪投げ沢まで行くことにする。例のバカ尾根に取りついたら頃から、天気も回復し、ルンルン気分だ。北荒川岳から雪投げ沢までの道は、まるでアルプスの少女ハイジを思わせるような大お花畑で、ミヤマキンバイの黄色い花が実に美しかった。テン場では、愛媛大学の国賀Pと出会い、コースの情報交換。本谷山ノ三伏小屋間が、倒木でワヤということだった。

7月27日（水）

今日も半沈のようなものである。またしてもガスってしまった。中盤戦の3メートル級は、全敗である。塩見岳から3本で三伏小屋につく。午後1時頃になって、W南の佐藤さんPがひよっこり現われる。このPも、みんな元気そうで何よりだ。3時頃までうだうだ話をしてきた。何でもガス不足のため、沈の日は水で戻したα米を食べていたとか、悲惨ではあるが、他人事として笑いとばした。3時から夕方のエッセン。佐藤さんPとテント間でトランシーバー交信をしてあそぶ。明日は、三伏峠まで一緒に行く予定である。それから、うれしいことに、今日梅雨明け宣言がなされた。W南の山々は、晴れてくれることだろう。

7月28日（水）

晴れた、晴れた、ついに梅雨明けらしい天気になった。三伏ガレの端を歩いていても実に気持ちがいい。一年生も、久しぶりの晴れ間に、口数もしだいに多くなる。小河内岳では、まわりがずっと見渡せ、感慨もひとしお。はるか遠くに甲斐駒・仙丈を望み、今までの長かった山行を思い出していた。また、行手遠くに聖岳が見え、まだまだ長いと、考えなおした。この日のテン場は高山裏露营地。下の方の比較的安全性いな所をテン場とした。天気がいいのでかなり日和ったが、それでも9時半には着いてしまった。

7月29日（木）

今日はテン場飛ばしをする。昨日からそういうことになっていたの、朝からみんな意気込みが違う。朝の一本は懐電行動。エッセンパワーがあるうちに、荒川前岳への700mの登りを切り切る。荒川中岳を通過して、悪沢岳ピストン。天気は上々だし、展望はいいで大満足。一年・二年・三年ともみんなニコニコ顔。悪沢ピストンから帰ると、いよいよ赤石岳への400mの登り。しかし、その前に、ふもとの大聖寺平で昼のエッセンとする。今日はきついテン場飛ばしとあって、仏パン半分に、ジャムは普通一本を二回に分けて使うところを一本全部使い、アーモンドまでついた。さて、赤石の登りだ。一年生も全然疲れを見せない。あっとい間に赤石岳ピークに居た。この日ばかりは、南部の山々の雄大さをしみじみ感じた。天気がよく、行動中はさほど疲れは感じなかったが、エッセンを食べ終わると、みんなすぐに寝入ってしまった。

7月30日(土)

今日は最後の3千メートル級にアタックである。急登の中盛丸山を登りきり、兎岳にさしかかる頃からガスが開始した。まずいノ聖岳のピークを目ざす足どりも早くなる。兎岳から二本で聖岳のピークに立つ。しかし、ガスのため、ほとんど見えない。ピークでエッセンとし、奥聖岳へピストン。一時間ねばってみるが、結局何も見えない。残念だ。聖岳を下る頃から空模様がおかしくなりだした。テン場である聖平に着いたのは、間一髪、雨の降り出す前であった。

7月31日(日)

一気に下山せず茶臼小屋で一泊することになった。ここにきて、天気は今一歩のところであるが、みんなの顔は明かるい。茶臼岳への分岐に差しかかる頃は、いつものようにガスっていた。とりあえず小屋まで降りる。小屋のテン場にテントを張って、ホッと一息つく。PLの宮本さんから、非常食のチョコレート解禁の令が出る。いつもの如く、表情ひとつ変えずに黙々とチョコレートを食べる吉沢。彼を見ていた富田が一言。「孔子ノちっとはうれい顔せーや」。これを受けて吉沢はニヤツとしただけ。二・三年は思わず笑ってしまった。昼のエッセンを終えてしばらくすると、ガスも上がりそうな気配なので茶臼ピストン。ガスは思ったほど上がらず、今まで歩いて来た道のりは見返すことができなかつたが、何と、畑雑のダムは見ることはできた。テン場に帰って、明日はあそこに居るのだと思うと、なかなか寝つかれなかつた。

8月1日(月)

出発してから17日目、入山16日。何と長いこと山に居たことか!

いよいよ今日は、下山日である。天気はあいにくのくもり空。不思議と誰も早く降りたがる者が出ない。6時3分、ゆっくりと下山し始める。一步一步踏み出す足は、全山を踏みしめてきた足だ。長い長い下り。けれども、早く感じられる時の流れ。天気は次第にくずれ、小雨になった。四本かけて、ヤレヤレ峠に来た。「やれやれ、やっとここまでやって来た」。誰しもが、そう思った。大吊橋も、恐くはなかった。さあ、あとは畑雑ダムだノ気持ちは焦って、ペースが早くなる。くねくねと林道は曲がっている。あの角を曲がったらダムだろ、そう何度も思い思いし、ついにダムが見えてきた。しばらくして、我らは畑雑ダムに居た。下山ビルがうまい。タバコがうまい。そして何よりも、デボなし全山縦走を成しとげた感激があった。思い返せば16日前、夜叉神峠から入山し、雨のため幾度となく沈をし、強行してきた感慨がひしひしと胸にこみあげてくる。ああ、俺らはゴールしたんだ、そんな気持ち、なぜか新鮮だった。

< コースタイム >

7/15 ドツボ下宿 4:45 (0:15) 湯田温泉駅 ~~-----~~ 小 郡 ~~-----~~ 名古屋 ~~-----~~ 静岡 ~~-----~~  
 5:35 5:50 6:22 6:39 6:51 10:41 11:00 12:18 12:32

~~-----~~ 富士 ~~-----~~ 甲 府 (ステーション)  
 13:09 13:11 15:45

7/16 甲 府 TEXI 夜叉神峠登山口 (0:30) 8:30 (0:20) 夜叉神峠 (0:40) 10:00 (0:40) 10:50  
 6:25 7:20 8:00 8:40 9:00 9:20 10:10 11:00  
 (0:30) 山火事跡 11:30 (0:40) 苺 平 (0:25) 南御室小屋 [1] (3:45)  
 (エッセン) 12:35 13:15 13:25 13:50

7/17 沈殿 南御室小屋 [2]  
 2:30

7/18 [ ] 2:30 (0:20) 6:15 (0:30) 薬師岳 (0:25) 観音岳 (0:57) 地藏岳分岐 (8:52)  
 5:35 6:25 6:55 7:15 7:40 7:55 9:00 (0:10)  
 9:40 (0:10)  
 9:50  
 地藏岳 9:10 (0:40) 高 嶺 10:25 (0:35) 白鳳峠 (0:50) 広河原峠 (0:30)  
 9:45 (エッセン) 11:50 12:25 12:35 13:25 13:35

— 早川尾根小屋 [3] (5:07 (うちピストン 0:20))  
 14:05

7/19 [ ] 2:30 (0:40) 2553 ピーク (0:40) 6:40 (0:20) アサヨ峰 (0:53) 栗沢山 (0:45)  
 5:00 5:40 5:50 6:50 7:10 7:30 8:33 8:50

9:35 10:48  
 仙水峠 (10:00 (0:48) 駒津峰 11:00 (1:00) 甲斐駒ヶ岳 12:00 (0:55) 北沢小屋 [4]  
 14:23 (2:18) 13:40 (エッセン) 12:55 15:30  
 14:35 (8:19 (4:06))


7/20 [ ] 3:00 (0:45) 5:45 (0:50) 6:45 (0:38) 馬ノ背ヒュッテ (0:35) 仙丈山荘 [5]  
 5:00 5:55 6:55 7:43 7:52 8:37


7/21 沈殿 仙丈山荘 [6] 2:00 (→ 仙丈ヶ岳)


7/22 [ ] 3:00 (0:29) 仙丈ヶ岳 (0:59) 7:00 (0:45) 8:45 (0:50) 野呂川越え (0:45)  
 5:52 6:11 7:05 8:55 9:45 9:55

— 両俣小屋 [7] (4:23)  
 10:40

7/23 沈殿 両俣小屋 [8] 2:00


7/24  2:00 (0:50) 4:35 (0:07) 野呂川越 (0:45) 5:35 (0:45) 6:30 (1:15) 三峰岳 (0:43)  
 3:45 4:43 4:50 5:55 6:45 8:00 8:07

— 間ノ岳 (0:40) 中白根山 (0:25) 北岳山荘  (5:42)  
 8:50 8:55 9:35 10:00


7/25   $\left( \begin{array}{l} 2:00 \\ 4:47 \\ 6:30 \\ 7:45 \end{array} \right) \begin{array}{l} (0:40) \\ \leftarrow (0:35) \end{array}$  北岳 5:27 5:55  $\leftarrow (0:20)$  中白根山 (0:20) 8:25 8:30  $\leftarrow (0:25)$  間ノ岳 (0:40) 9:05 9:15

— 農鳥小屋 (エッセン)  $\left( \begin{array}{l} 9:55 \\ 12:35 \\ 14:30 \\ 15:00 \end{array} \right) \begin{array}{l} (0:40) \\ \leftarrow (0:20) \end{array}$  西農鳥岳 13:05 13:10  $\leftarrow (0:23)$  農鳥岳 13:33 13:37  $\leftarrow (0:53)$  三国沢 15:53 16:00


$\leftarrow (0:10)$  三国平 16:10  $\leftarrow (0:40)$  熊ノ平小屋  (6:40 (3:14))  
 16:50

7/26  (半沈) (0:25) 11:55 (0:05) 安部荒倉岳 (0:30) 12:40 (0:40) 13:40 (0:32)  
 3:30 11:30 12:05 12:10 12:50 13:53


— 北荒川岳 (0:40) 雪投げ沢  (2:47)  
 14:25 14:30 15:05

7/27  2:00 (0:37) 北俣岳 (0:25) 塩見岳東峰 (0:40) 2766 ピーク (1:00) 7:50 (0:43)  
 4:00 4:37 5:00 5:25 5:45 6:25 6:50 7:57


— 三伏小屋  (3:25)  
 8:50


7/28  2:00 (0:33) 三伏峠 (0:35) 烏帽子岳 (0:30) 前小河内岳 (0:25) 小河内岳 (1:02)  
 4:02 4:35 4:45 5:20 5:30 6:00 6:10 6:35 7:05

— 8:07 (1:10) 高山裏露营地  (4:20)  
 8:25 9:35

7/29  2:00 (0:52) 4:55 (0:35) 5:40 (0:38) 荒川前岳と中岳の間点  $\left( \begin{array}{l} 6:28 \\ 6:33 \\ 8:59 \\ 9:00 \end{array} \right) \begin{array}{l} (0:05) \\ \leftarrow (0:14) \end{array}$  中岳

$\left( \begin{array}{l} 6:38 \\ 6:40 \\ 8:40 \\ 8:45 \end{array} \right) \begin{array}{l} (0:40) \\ \leftarrow (0:40) \end{array}$  恵沢岳 7:20 8:00  $\leftarrow (0:40)$  荒川小屋 (0:21) 大聖寺平 (エッセン) (0:45) 11:55 12:02  
 9:40 9:50 10:11 11:10

$\leftarrow (0:38)$  赤石岳 (0:35) 2827 ピーク (0:42) 百間洞  (7:46 (1:39))  
 12:40 13:35 14:10 14:23 15:05

7/30  2:30 (0:18) 百間洞山の家 (0:42) 5:47 (0:20) 中盛丸山 (0:45) 7:10 (0:25)  
 4:37 4:55 5:05 5:55 6:15 6:25 7:20

兎岳  $\frac{7:45}{7:55} \xrightarrow{(0:45)} 8:50 \xrightarrow{(0:45)} 9:00$  聖岳 (エッセン)  $\left( \begin{array}{l} 9:45 \\ 11:00 \xrightarrow{(0:15)} 12:17 \\ 12:17 \xleftarrow{(0:10)} 12:30 \end{array} \right)$  奥聖岳  $\frac{11:15}{12:07} \xrightarrow{(0:45)} 13:15 \xrightarrow{(0:35)} 13:25$

— 聖平小屋  $\boxed{15}$  〔5:45 (0:25)〕  
 14:00

7/31  $\frac{4:30}{6:55} \xrightarrow{(0:45)} 7:40 \xrightarrow{(0:50)} 7:50$  上河内岳分岐  $\left( \begin{array}{l} 8:40 \\ 8:41 \xrightarrow{(0:05)} 9:00 \\ 9:00 \xrightarrow{(0:05)} 9:05 \end{array} \right)$  上河内岳  $\frac{8:46}{8:55} \xrightarrow{(0:50)}$

茶臼小屋  $\boxed{16}$   $\left( \begin{array}{l} 9:55 \\ 13:35 \xrightarrow{(0:20)} 14:48 \\ 14:48 \xleftarrow{(0:18)} 13:55 \end{array} \right)$  茶臼岳  $\frac{13:55}{14:30}$  〔3:13 (0:48)〕

8/1  $\frac{1:30}{6:03} \xrightarrow{(0:43)} 6:50 \xrightarrow{(0:20)} 7:00$  横溝沢小屋  $\frac{7:20}{7:20} \xrightarrow{(0:40)} 8:00 \xrightarrow{(0:15)} 8:01$  ウリッコ沢小屋  $\frac{8:16}{8:27} \xrightarrow{(0:40)}$

— ヤレヤレ峠  $\frac{9:07}{9:50} \xrightarrow{(0:25)} 10:15$  大吊橋  $\xrightarrow{(0:30)} 10:45 \xrightarrow{(0:21)} 10:55$  あこがれの畑薙第一ダム (ゴール)  $\frac{11:16}{11:16}$

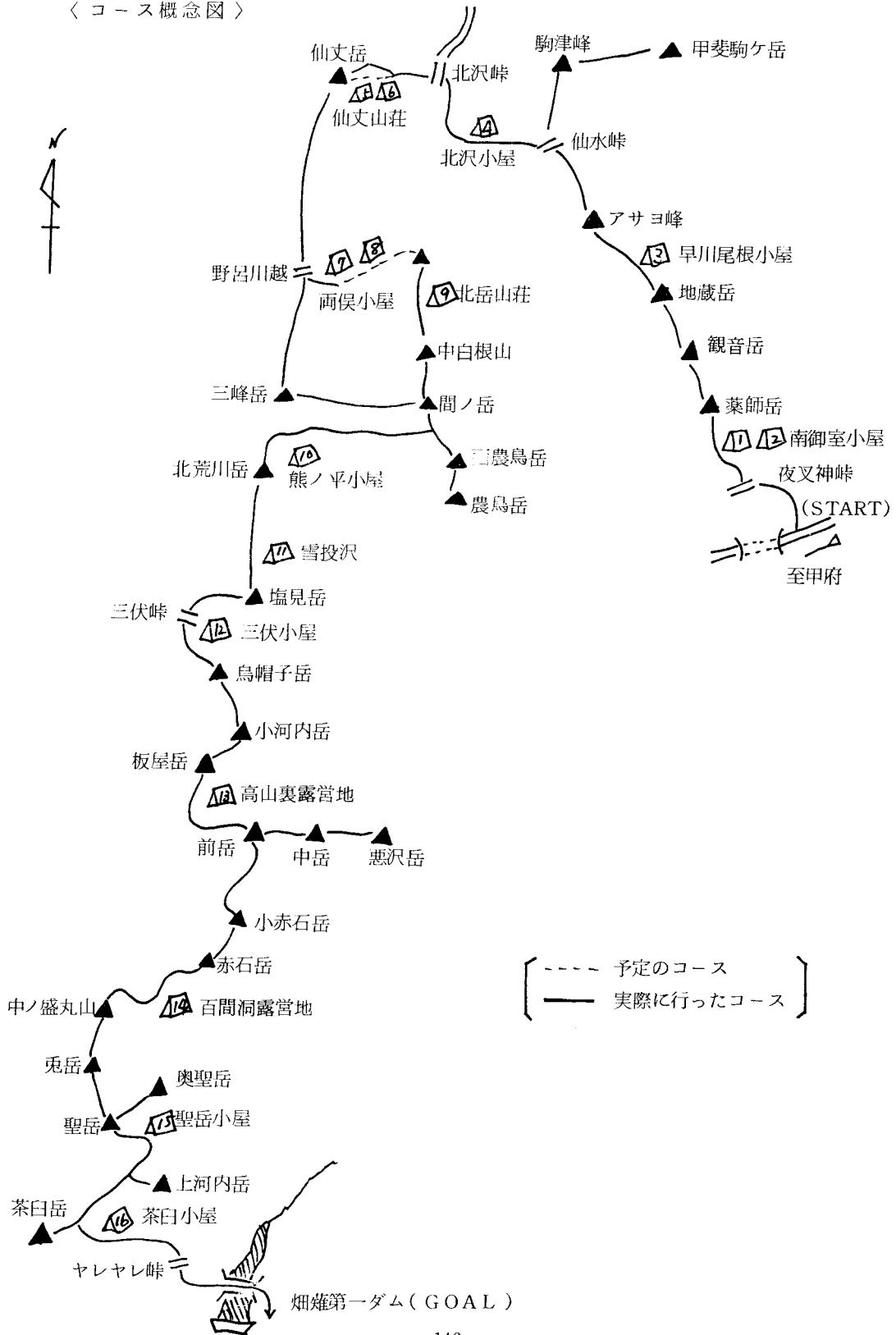
〔3:58〕

{ 総コースタイム 69:58 }  
 { うちピストン 10:12 }

PL 宮本 博 (経3)  
 SL 岩谷 明彦 (経2)  
 会計 一ノ瀬 浩樹 (経3)  
 衛生 竹中 秀四郎 (経2)  
 装備・気象 富田 和郎 (理1)  
 Essen 吉沢 毅 (工1)



〈コース概念図〉



夏合宿、君の汗は塩見岳、僕の体は

赤石だらけ、みんなそろって北ネー岳P

PL総括

佐藤明次

自然を対象とする我々の活動にあって、天候判断が重要な事は言うまでもないが、今回の合宿は、それを痛感させられるものであった。悪天候の下での合宿であっただけに、考えさせられる事も多かったし、また、その中でコース消化できた事は、Pメンの今後の自信につながると思う。

今回の夏合宿において、自分が掲げた目標は、(1)体力、及び精神力の向上、強化。(2)荷の軽量化を、栄養、量の面を落とさずに行う。(3)ミーティング、及びPWで、Pの理解に努める。(4)Pメン決定次第、合宿と考え、Pミーティングの充実を計る。(5)合宿前から、健康面、体力面に気を配る。およそ、以上が今回の目標であった。(1)に関しては、従来よりも、かなりきつくなったトレーニングに出席することで充分満たされると思った。実際、錬成、合宿において、誰一人バテることもなく、Pメンの体力に対する信頼が、自分の判断の大きな支えになったと確信している。(2)について、我が部の軽量化も、ここ三、四年でかなりの合理的水準に達したと思う。しかし、まだまだ改善の余地があるはずである。今回の合宿は、従来通りの軽量化で、進歩がなかったと反省している。(3)に関しては、長期合宿を成功させる上で、

かなり重要な目標であったと思う。山中という特殊な環境、特に今回のように雨の多い合宿では、チームワークが大切になってくる。鴻ノ峰でのPWは、パーティシップの向上という点では、かなり意義があったと思っている。(4)のPミーティングの充実であるが、これは、回数を増すと同時に、内容の充実、特に実践的なところにまで及ぶようにしなければならぬ。ミーティングは、Pの雰囲気作りには、効果があったが、徹底という点で、少し甘かったのではないかと反省している。(5)に関しては、Pメンの自覚による所が大きいのであるが、全員が万全の体調で合宿に臨めたことに、大いに満足している。

以上のような目標のもとで合宿に挑んだわけであるが、自分のリーダーとしての経験の少なさからくる不安、昨夏の台風によるエスケープルートの減少など不安材料は常につきまわっていたわけである。その不安を打ち消してくれるぐらいのPメンの意気込みと協力が、コース消化できた大きな要因であったと思っている。

最後に、南アルプスについて一言  
「われ、山にむかいて、目を挙ぐ。」



君の汗は塩見岳、僕の体は赤石だらけ  
みんなそろって北ネノ岳パーティー

S L 日誌

尾 和 寛 章

七月二十日

プレ合宿も無事終わり、アルプスへ旅立とうとしている自分だが、正直言って今一つ、アルプスへ行くんだという実感がわいてこない。しかし、あの雄大な南アルプスのピークに立った時、本当に南アルプスにやって来たんだと思うにちがいないと期待して、湯田温泉駅を指して歩いて行った。駅では先輩方から、数々の励ましの言葉と差し入れを頂き、今日の最終目的地である大井川鉄道の終点、井川駅へと旅立っていった。あいにく今日は雨だったけれども、パーメンみんなの心の中は期待と不安の気持ちでいっぱいだったことだろう。

午後五時五十分、井川駅に到着、すぐに駅の軒下でエッセンの用意に取りかかる。そう、今日はここでステーションすることになっているのだ。エッセンの間、宮崎先輩は女性の話をしきりにしていたが、ここでは省略する。エッセンの後、差し入れの花火をして楽しむ。このころから、岸先輩がスタンプは2年だけにはまかせられないと、しきりに力説されていた。

七月二十一日

晴れることを祈っていたけれども、今日も雨だった。天気とは裏はらに、K先輩とM先輩は朝っぱらから〇をして、はしゃいでいた。

午前六時十五分発、畑薙ダム行きのバスに乗る。バスに乗ること一時間ダムに着く。ここから、畑薙大吊橋を目指し歩く。途中、南アルプス井川登山警備派出所に登山計画書を提出する。畑薙大吊橋を写真で見たことはあったけれど、実際目のあたりにした時、これを渡るのかもしれない時、一瞬体中に戦慄が走った。ましてや風のため、橋は左右に大きく揺れていた。しかし、自分はSLなのだと思い、慎重に渡っていった。なかなかスリリングだった。橋を渡り終え、振りかえり全員無事に渡り終えたのを確認する。ここからヤレヤレ峠までは急な登り坂だったが、一気に登る。ウリッコ沢小屋を過ぎてから所々、ハシゴがあったけれど、さほど危険な所ではない。そして、無事、横窪沢小屋に到着。今日歩いたコースは急登もあったけれど、なかなか歩きやすかった。このテン場では、水津の便所とじ込め事件が起こったが、詳しいことは本人に聞いてください。クールな表情で、模範解答を得ることまちがいなし。

七月二十二日

今日こそは、晴れることを願っていたにもかかわらず雨だった。しかし、雨にも負けず、風にも負けず聖平小屋目指し出発した。昨日に次ぐ急登で、パーメン全員疲れはててしまった。特に一年生はかなりのバテていたようだ。風がいつそう強まり、あたり一面ガスってきたので、今日は茶臼小屋にテントを張ることになった。テントの中で、M先輩が一年のメッチェンと交換したというバンダナをパーメンみんなに見せびらかせては喜んでいたので印象的だった。

七月二十三日

午前二時半起床、昨日に増して、強い雨と風だった。様子を見ていたけれども、天候は回復せずに沈となった。朝のエッセンの後、合宿恒例、メッチェンコンテストが行なわれた。コンテストが盛り上がりこれからという時、一瞬あたりが明るくなったかと思うと、雨や風もおさまり、急ぎよ出発の運びとなった。稜線はものすごい風で、たびたび吹き飛ばされそうになった。ただ歩くのみの行程だった。午後十二時三十九分、聖平小屋に着く。茶臼小屋を出発してから、はや三時間、一瞬のうちにテン場に着き、またコンテストの続きをしている我がパーティィー。あのあつと過ぎ去ってしまった三時間を除いて、沈の日とまったく変わらない一日。まるで夢でもみていたかのような何とも言えない不思議な一日だった。

七月二十四日

午前三時起床、雨は小降りだけれども、あいかわらずの冴えない天気。合宿が始まってはや五日目、毎日毎日雨が降っては、その中をただ歩いてはコース消化をする毎日。この調子で、はたして目指す北岳までたどり着けるのだろうか。口には出さないけれども、パーメンの顔をながめると、そう心の中で思っているようだし、実際、僕自身もそう思ったのである。うさぎ小屋で昼のエッセンを取り、一息して、いざ出発。ここから、魔のSLの悲劇が始まるうとしていたのである。うさぎ小屋から急登の稜線を登り切つてからすぐに、右へ下らなければならぬ所を、そのまま真すぐの道を行き、当初、兎岳へ行かないはずであったのに行ってしまった。地図さえ、しっかり見ていれば間違うコースではなかった。SL失格である。中盛丸山の登りは、地図

で見る以上に急登で、三点確保をしながら登る必要があった。今日のコースは、急登の所もあれば、だから下りも下りもあり、変化に富んだコースであって、肉体的のみならず精神的にもきついコースだった。午後二時十五分、百間洞露营地に到着、去年は全山パーティィーと、この場所に出合ったと聞いていたので、再会出来るのではないかと少し期待していたけれど、結局来なかった。明日以降に期待しよう。

七月二十五日

今日も少しばかり雨が降っていて、回り一面ガスっていた。一本歩いて休憩、ここで山に入山してから初めての写真を取る。歩きだしてからすぐに、PL氏の一本と言う声、まだ十分ぐらいいしか歩いていないのになあと思い振り返ると、PL氏はそそくさとハイマツの方へ駆け出した。一同あ然。AM七時、再び歩き出す。まもなく百間洞に到着。広々とした回り一面平らなハイマツの草原だった。ここで、SLとして大チョンボしてしまった。右にあるケルンを見逃して、そのまま真すぐ道を行ってしまった。左側にガレ場が見え、一瞬ひやりとする。正しい道に出た時、後方から高校生のパーティィーがやって来た。恥ずかしいの一言につきる。二本かけて赤石岳ピークに着く。パーティィー名の一つであり、ここからの展望を期待していたけれども、雨とガスで何にも見えない。すぐに、今日のテン場、荒川小屋へ向けて出発する。荒川小屋に近づくにつれ、雨もやみ、ガスも消えて来て、右手に待望の富士山が見え始めた。パーティィー全員、足を休めてしばし富士をながめいる。思っていたよりも早く荒川小屋に着く。ガス節約のため、昼のエッセンは水のアルファ米だった。待つこと四十分、初めて体験であり、興味深く食べたけれども、何ともおいしくない味

なのだろう。しばらくして雲がだんだん少なくなり、むこうの山々に光があたり始め、しだいにこちらに近づいて来た。そして、合宿に入ってから初めて太陽と御対面、やったぜ！パーメン全員シュラフや、濡れたくつ下などを取り出して、かわかしはじめた。テントのまわり一面、ゴミの散乱場と化してしまった。しかし、どのパーメンの顔も笑いが浮んでいた。

七月二十六日

晴れ。合宿に入って七日間からの初めての沈、明日からの山行のための鋭気を養う。

七月二十七日

午前二時起床、四時出発する。荒川岳へ向け急登を登る。昨日、体を休めていたおかげで快調に登る。二本で前岳と中岳のコルに到着。ここから中岳へピストンをかける。当初の予定では悪沢岳へもピストンをかけることになっていたけれども、ガスっていたことと、高山裏のテン場を飛ばして、次のテン場の三伏小屋に行くためにカットした。荒川岳の下りは、いたる所ガレ場がありとても歩きにくかった。この下りの途中でまたまた大チョンボをしてしまった。地図ではトラバースしながら下っていく所を、谷沿いに下ってしまった。百メートルあまり行った所で間違いに気付いたけれども、パーメンみんなに大変な迷惑をかけてしまい、心の底から反省しています。それから二度と道を間違わないように祈ったにもかかわらず、三伏峠の下りで道を間違ってしまった。何と俺はアホなんだ！これでも二年だ、SLだと言えろのだろうか、心が煮返るほど自分自身に腹がたってしかたなかった。

今日のコースは二日分のコースで体力的にきつかったけれども、それ以上に精神的に落ち込んでしまった自分にとって悪夢の一日であった。しかし、三伏小屋で、おいはぎ全山パーティーと再会して、合宿のいろいろな話ができ、本に楽しかった。

七月二十八日

三伏峠で全山パーティーと写真撮影、下山して再会することを約束して別れる。お互いトランシーバーのスイッチを入れ、どこまで交信できるかためてみる。明日のメインは塩見岳、そう、君の汗は塩見岳のあの塩見岳だ。塩見小屋から塩見岳のピークまでは、大変なガレ場であり、足をすべらしてしまふものなら、はるか下の谷底まで落ちてしまいかねない。慎重に三点確保しながら登る。登るにつれ、ガスも晴れ始め、もしやと思いつつながら急いでピークまで行った。そのもしやのもしやだった。一瞬ではあったけれども、360°の展望を見ることができた。やったぜベイビーと思いつつ、カメラのシャッターを押し始めると、再びガスが出て来て、少し見えて来たかと思うと、またガステて来て見えなくなるくり返しだった。一時間ちょっとピークにいたけれども、晴れることが期待できず、雪投沢へと下りて行った。雪投沢の手前で昼のエッセン、振り返って塩見岳を眺めると、ピークはピンピンに晴れていた。あと三十分ピークで頑張っていたらと思っただれども、後の祭りだった。十一時すぎには今日のテン場雪投沢に到着、明日あたり、八川さんパーティーと再会できるのではと期待しつつ、昼寝をしつつ、稜線上を眺める。そして、予想通り、メッチェンパーティーと再会、全員で記念撮影をする。合宿とは思えない、まるで合Wであるかのような、なごやかなふんいきだった。

七月二十九日

明日も晴れ、僕たちにもやっと運がむいてきた。メッチェンパーティと別れ、トランシーバーで交信しながら、ハイペースで歩く。右手に富士山の雄大な姿を臨み、目の前には、今から行く、間ノ岳、農鳥岳の姿を眺めながら、ひたすら長い稜線を歩く。北荒川岳では、中央アルプスや北アルプスが見え、とても感動した。合宿前半のあの雨の中の行動とは大違いだ。辺りのすばらしい景色を臨みながら歩くことが、何と気持ちのいいことなんだろうと、あらためて感じた。南アルプス北部は道がかなり整備され、テーピングやペンキングがはっきりしていても歩きやすく、道に迷うことはなかった。しかし、すばらしい自然に人間の手がかなり組み入れられているのを見ると何だか割り切れない気持ちだった。

熊ノ平小屋を過ぎ、井川越から200m登り、農鳥小屋へ行く道は間ノ岳をトラバースするわけだけれども、道はガレていて危険な所もありガスった時は道を見迷いやすいので注意が必要だ。それにしても農鳥小屋のトイレは、うわさ通りのものすごいトイレだった。

七月三十日

今日は、間ノ岳、北岳へのピストンの日だ。朝起きてみると、星も見え今日一日晴れること間違いなし。間ノ岳で初の御来光を見るため午前三時三十七分出発。前日、間ノ岳への登り道を調べに行っていたので、暗い中を迷うことなく登ることができた。ピークに着く前に太陽が地平線から登ってしまうのではないかと不安に思いつつ、急いで登っていった。間ノ岳のピーク付近はかなり広く、所々、まだ雪が残っていた。ピークに着くこと二十分、東の空から登る太陽を見る。し




ばらくの間、無言のまま、一回見入る。ここで、パーメン一人一人の個人シリーズをとる。全員、これから行く北岳をバックにしてとる。


今回の合宿の最大の目標である北岳へと向け出発する。そして、六時二十二分、ついに北岳のピークを踏む。360°の見渡す限り、晴れ、晴れ、晴れ、天は我を見離さなかったのだ。目の前に見える、甲斐駒、仙丈岳を見、今まで歩いてきた山々を見て、今までの苦しく、つらかった思い出をいっぺんに忘れさせてしまうほど、すばらしい山々の自然に満ちあふれた中にいる自分は何て、幸福な人間なんだろうと思いつまでもここにいたい気持ちでいっぱいだった。しかし、そういうわけもいかず、北岳を後にして、農鳥小屋へ引き返した。


七月三十一日

午前二時起床。今日は、大門沢小屋で泊ろうという話もあったけれども、明日以後、雨が降るかもしれないということで、今日下山することになった。今日一日で、二千メートルも下らなければならぬと思ひ、ゆっくり下りて行くつもりでも、いつのまにか、ペースが速くなっている。下りるにつれて、今までがウソであったかのように暑くなって来た。そうだ、今は夏だったんだとあらためて感じた。合宿が始まって今日ではや十二日目、長いようで短い合宿だった。去年は北アルプスに行き、今年、南アルプスに行ったわけだけれども、山の雄大さ、美しさの点で、南アルプスの方が勝っていると思う。北アルプスを、人間をこぼみ、襲いかかる野獣にたとえるならば、南アルプスは、僕たちをやさしい手でつつみ込んでくれる母親のような山々だと、山行経験のまだまだ少ない僕だけれども、二度の合宿でそう感じた。そして、また、いつの日か来てみたい山、それがアルプスなの



〈 行動記録 〉


7/20 湯田温泉  名占屋  金谷  井川

7/21 井川  畑薙ダム 7:15 — 7:50 — 8:50 畑薙大吊橋 ——  
7:33 — 8:15 — 9:05


—— 9:35 ヤレヤレ小屋 —— 10:12 — 11:20 — 12:45 横くぼ沢小屋 


7/22  5:30 —— 6:12 — 7:30 —— 8:25 茶臼小屋 


7/23  9:30 —— 10:47 上河内岳 —— 11:32 — 12:39 聖平小屋 

7/24  5:10 —— 5:42 — 6:40 —— 7:35 聖岳 —— 8:28 ——  
5:50 — 6:50 — 7:40 — 8:40


—— 9:35 うさぎ小屋 —— 11:05 — 12:05 — 13:05 中盛丸山 ——  
10:15 — 11:15 — 12:15 — 13:15


—— 14:15 百間洞露营地 


7/25  5:35 —— 6:02 — 6:28 — 7:00 — 8:05 — 8:45 赤石岳 —— 9:56 ——  
6:14 — 6:34 — 7:10 — 8:15 — 8:55 — 10:35


—— 11:14 荒川小屋 



7/26 沈


7/27  4:00 —— 4:25 — 5:03 荒川岳と中岳 —— 6:18 — 7:27 — 8:33 — 10:08 ——  
4:35 — 5:35 — 6:30 — 7:40 — 8:50 — 10:20

—— 10:48 小河内岳 —— 12:14 — 13:05 三伏小屋 

7/28  4:00 —— 4:30 三伏峠 —— 5:40 本谷山 —— 7:06 塩見小屋 —— 8:08 塩見岳 ——  
4:45 — 5:53 — 7:19 — 9:17

—— 10:02 —— 11:08 雪投沢 

7/29  4:00 —— 4:56 北荒川岳 —— 5:58 — 7:14 熊ノ平 —— 8:25 —— 9:27 農鳥小屋 

7/30  3:37 → 4:38 間ノ岳 → 6:22 北岳  
5:00 — 7:11  
↓  
10:36 ← 間ノ岳 99:24 ← 北岳小屋 7:38  
10:06 — 8:35

であり、それがアルプスの魅力だと言っていると思う。  
午前十一時四十分、最終目的地、奈良田のバス停着。

7/31 3:57 — 4:50 農鳥岳 — 6:00 — 7:03 大門沢 — 8:12 — 9:40 夕 — 10:40

— 11:04 奈良田バス停

〈 概 念 図 〉



- |                |       |      |
|----------------|-------|------|
| PL             | 佐藤明次  | (経3) |
| SL             | 尾和寛章  | (経2) |
| 衛生             | 岸義文   | (教3) |
| 会計             | 宮崎圭二郎 | (経3) |
| サブ気象<br>サブエッセン | 奥丸考司  | (経2) |
| 装備             | 太田知宏  | (人1) |
| 気象<br>サブ装備     | 山本隆久  | (理1) |
| エッセン           | 水津千加司 | (経1) |



## 乱、酒ましたPARTY PL総括

桑原 潤

今回の南アルプス北部縦走を無事に終え、PLとしての責務もなんとかこなし、合宿が大(?)成功して大変満足している。Pメン諸氏は全員南アルプスは初体験だったが、あの何とも言えない雄大さ、素晴らしい体感できたのは、個人として、またワングル人間として貴重な経験になったと思う。それと同時に自然の厳しさの一端―これは合宿自体を規定する最大の要因―にも触れる事もできて、1・2年生にとっては以後の夏合宿ひいては各人の山行にとって大いにプラスになったと思う。

さて、今回の合宿を反省してみると、少なくともこの事だっきあ反省せねばなるまい。起床時間がややルーズであった事である。なぜそうなったかと言えは、午前中雨が降り午後晴れるというパターンに戸惑い、山行の鉄則である早立ち早着きという事を守り切れず、起床がやや遅れてしまったのである。この事は第三者の見地からすると、けしからんという事になるだろう。事実そうであった事もあるが(北沢峠の天場に着いたのは19:30であった)私の総合的な判断(決して予言的ではない!)が正しかったと言えるケースも何度かあった。だがよくない事になったのは、やはり起床とそして撤収の機敏さに欠ける面があることは否めない。その他まだまだ反省すべき点は多々あるがスペースの都合上省くことにする。

ところで、我がパーティが到達しためばしい有名なピークは全てホワイトピークで、晴れたのはアサヨ峰というこれまたピーク標もなく、山溪にも載らないような山だったが、眼前にそびえ立つ甲斐駒、そして北岳・仙丈・塩見の山群をバッチリと心ゆくまで眺めることができ、私にとっては今合宿で最高に思い出に残るピークだった。それにしても山行中は特異なキャラクターを持つサル(複数)がいたおかげで全員楽しく過ごすことができて何よりだった。

最後に、ピークには恵まれなかったが、最高のパーメンに恵まれて楽しい合宿だった。

しがなないPLによく着いて来た阿須賀・秋本・浅野・山科・正に心から感謝の気持ちを述べて合宿の総括とします。

## SL日誌

7月20日

やっと伊那大島に着いた。朝、夜の明けぬうちから湯田温泉を出てから、乗りに乗った列車8時間。今日の朝日は、はるか昔に見たような気がする。

タクシーで塩川小屋の手前まで乗って、ここから歩きなのだ。とうとう雨が降り出した。

それにしても去年の台風の爪あとは凄い。復旧工事にはだいぶ時間

山科 謙二

がかりそうだ。

塩川小屋に着いて聞いてみると、小屋泊りとテント場代とがわずか百円の差。P.L.さんの確な判断で小屋泊りに決定、ラッキー。

田中(正)さんが団扇に日記を書き始める。内容は「雨が抜ける不吉な前兆か」だった。

#### 7時就寝

7月21日

起床4時。雨だった。

初日から出発までに2時間を切るP.M.のすばやさ。もっとも小屋泊りだが。

田中(正)さんは雨の中短パン行動。寒くないのかな。

雨具を着ずに行動したので全身びしょやり。どうして着なかったのかの。

えらい急登を登り切って着いたのが三伏峠小屋。しかしテントを張る場所がない。P.L.さんの判断で三伏小屋まで下りることに決定。が途中で道は川に変わりとても下れない。しかたないので三伏峠小屋に泊まることになった。またまたラッキー。P.L.さんが今日以後は小屋に泊まらないと宣言を下された。

それにしても小屋のおっさんはなかなかストーブに火を入れてくれん。こっちは寝えとるといふのに。

#### 7時就寝

7月22日

3時半起床。ひどい雨なので6時までまた寝ることに決定。なんとなく沈になりそうな雰囲気。行程が遅れることはわかっているのに何となく嬉しい気分だ。

起きて飯を食ってパッキングしていると雨が上がった。テント泊りの連中が出発するのを見てP.L.さんが「もう少しで雨が降り出すぞ」と言う。雨が降り出した。雨を見て笑いながら「ああ沈なんだな」と思っていると、突然出発の命令が下された。いったいななんだ。

稜線は高度によって灌木からハイマツに変わったりしてたいへんおもしろい。

雨の風の中、塩見小屋に到着。

今日塩見岳を越えるのは危険なためここでテントを張ることになった。

塩見小屋のおっさんが水を分けてくれるといふので3ℓポリタンを6つ持っていくと、

「こんな大きなポリタンは見ることがない。」と涙っていたが、結局全部もらった。感謝！

浅野がよく一年を指導してくれるおかげであまり一年を叱れない。秋本も慣れない手つきでエッセンを作っている。山行を終えるまでには完璧なものにしてやるぞと密かに意気込んだ。

#### 7時就寝

7月23日

2時起床。夜も明けぬうちからひどい雨だ。早くもテント内に浸水が始まった。エッセンを食べてしばらく様子を見ることになった。

んなタッパーを尻の下に敷いて縮こまっている。太平洋の無人島で助けを待っている感じだ。あー今日一日はこうして過ごすのだろうか。

いつのまにか寝ってしまった。気が付くと田中(正)さんがテント内の至る所に①マークをマジックで書いていた。阿須賀もまねをして

阿マークを自分の持ち物に書き始めた。しょう油屋である実家の家紋だそう。

昼のエッセンの乾パンを賭けてのトランプ大会が始まった。秋本がこそくに上り続ける。しまいには腹が立って余計に腹がへった。

午後から雨が上ったので田中(正)さんと塩見岳まで下見に行った。(正)さんが岩石の青いのやら赤いのやらを見て「青色地獄じゃー」「赤色地獄じゃー」と叫んでおられた。

強風のため歩きにくく大変危険であるので明日の行動が心配だ。

午後4時半ごろ雲も上り南アルプスの全容を望ませてもらった。小屋のおっさんも「やっと梅雨明けだ。これからバリバリもうけるぞ」といきまっていたが、天気図の様子がイマイチ心配。

7月24日

就寝7時

天気：雨。風：やや強し。

2時に起床して出発。きつい登りを行くと天狗岳、写真をとって出発。ここからの登りは大変冷える。慎重に慎重に。

塩見岳のピークはホワイトピーク。バックが白の証拠写真ができればいい。

稜線を行くと新蛇抜山のあたりからお花畑の中を通る。幻想的なイメージの場所だ。歩きが苦にならない。熊ノ平の小屋でエッセンをとる。ひと心地ついた頃、空が晴れてきた。どうも今年の夏は午前中が雨で、午後から晴れるパターンのような。

三国沢をトラバースし農鳥小屋へと向う。三国沢の大きさには驚いた。おまけに間ノ岳が上から覆いかぶさってくる。南アルプスは確かに大きい。

白峰三山の稜線に上ると富士山が正面に座っていた。今日の彼れも飛ぶ感動の嵐。

農鳥小屋には防府高校出身の方が働いておられた。(正)さんと手を握りあい次に抱き合って感動を深めておられた。

7月25日

7時半就寝

起床4時半。またもや雨のため停滞。うだうだしていると昼ごろ全山パーティがやってきた、久々に会うので何やら懐しかった。

農鳥岳と一緒にピストンに出かけ、ホワイトピークで「ハイ、チーズ」カシャ。

まったく写真についていない。

ピストンを終え、全山パーティと別れを告げ、北岳山荘へと向った。間ノ岳で悪天の中、若いカップルがビールを飲んでた。つまみは餅だった。「ビールか、女かどっちか欲しいよ」と間ノ岳を去った。

夕方(夕暮れではない。)北岳山荘にたどり着いた。「なんちゅう山行じゃ」。

7月26日

就寝9時半

起床4時半。今日はあの北岳だ。

霧の中、トラバースして吊り尾根分岐に着いた。トラバースしたため、だいぶ時間をとってしまった。稜線を行くべきだったのだろうか。

北岳に到着。当然ここもホワイトピーク。証拠写真を撮り、イワヒバリの遊ぶのを見ながら20分間ねばったがやはりだめ。すべてのピークをホワイトピークで飾ろうと団結を深めた。

ここから広河原へ下り、北沢峠まで向うのが今日の予定だ。

大樺沢の下りで渡渉の都合により雪渓を下った。ステップをつけながら歩いてみると、足の裏の皮がむけてしまつて痛いなんの。

二俣でエッセンを取ったあと、午後3時に広河原に着いた。

これから北沢長衛小屋まで林道歩きが始まるのだ。

とにかく長衛小屋に着いたのだ。エッセンを作っていたら就寝中のお隣さんからクレームがついた。あとは寝るだけだ。

就寝時刻不明

7月27日

起床6時半。ラジオをつけるとラジオ体操をやっていた。実にはすがしい朝だ。

北沢峠で本部に連絡したあと、仙丈岳へ向った。

仙丈岳もホワイトピークで念願の全ピークホワイトピークにまた一つ近づいたのだ。

ピークを下りると同時に太陽が出てきて、一同ほっと胸をなで下したのであった。

下りはお花畑の中で黄色や紫色の花の中で記念撮影をした。

蕨沢無人小屋で昼のエッセンを食べていると雨が降り、雷が鳴り出した。そこで全員お昼寝。大変心地良かった。

夕方、北沢長衛小屋に着き、その足で北沢小屋までテント移動することになった。日の出を見てテント場を飛ばす、一石二鳥の手段なのだ。回りの人々がぼくたちのテントを撤収するのを見て不思議がっていた。

北沢小屋に着くと奈良女子大がいた。ルンルン。

就寝8時

7月28日

起床2時。暗いうちに出発して仙水峠で御来仰を見た。こういうのを御来仰と呼ぶのだろうか。どんよりとした雲の中からぼんやりと太陽が出ているのだ。

仙水峠からは甲斐駒ヶ岳のピークがはっきり見える。

急いで甲斐駒にかけ上ると、ちょうどガスってきた。一同喜んで証写真真を撮って早川屋根へと向った。

500Mを登り切ると栗沢山に着いた。ここで南アルプス全山の山容をピークで初めて見てしまったのだ。ホワイトピークの念願は破れたが、はつきり言って嬉しかった。

アサヨ峰で奈良女の人たちと一緒に記念撮影をした。もちろん北岳をバックにして。ピークに立ってみるのもいいが、こうして登頂した山を他のピークから望むのも実にいいものだ。

早川屋根小屋に着いた。実にボロイ小屋だ。正面から見ると平行四辺形に傾いている。よくくずれないものだ。

今日は一度も雨に降られなかった。なぜか不思議である。

就寝7時半

7月29日

起床2時。今日でいよいよ南アルプスともさよならである。しかし今日の行程はきつい。

わけのわからんアップダウンをくり返しアカヌケの頭に着いた。ここからの地藏岳の眺めは奇妙だ。奇妙なので実際登ってみようという話になり、オベリスクにへばりついてみた。やはり奇妙な山だった。

分岐から観音岳、薬師岳をピストンする。コースタイムの4分の1で観音岳に着く。またまたホワイトピークだ。試しに薬師岳はと登ってみるとやはりホワイトピークだった。

ピストンは早めに切り上げ、鳳凰小屋へと向った。

鳳凰小屋のおっさんは御座石鉱泉のまわし者なので、きっと御座石鉱泉に行くと勧められると聞いていたので。そのまま通り過ぎ青木鉱泉へと向った。






ドンドコ沢の滝を見ながらの予定も時間の都合で急ピッチに下山しなければならなかった。下山路はやはり去年の台風の影響でかなり変わっていた。


長い長い下りでだいぶ足を痛めたようだ。一年も少し疲れの色が見え始めてきた。

かなり飛ばしたにもかかわらず予定コースタイムを縮めることはできなかった。やはり道の荒れていたせいだろう。ようやく青木鉱泉に着き、合宿の行程を完了した。


ぶなさん本当に御苦労様でした。





〈 行動記録 〉

7/20 湯田温泉  名古屋  塩尻  辰野  伊那大島  塩川小屋手前







4:36 — 4:53 塩川小屋 




7/21  5:45 — 6:25  6:35 — 7:25  7:35 — 8:20  8:35 — 9:25  9:40 — 10:15  10:25 — 10:30  10:40 三伏沢小屋手前 —



— 11:45 三伏峠小屋 

7/22  8:50 — 9:45  9:55 — 10:45  10:55 — 11:45 塩見小屋 


7/23 沈

7/24  4:40 — 5:13  5:20 天狗岩 — 5:50  6:05 塩見岳 — 7:15  7:30 — 9:10  9:20 — 10:40  13:15 熊ノ平小屋 —


— 14:20  14:35 — 15:15  15:25 農鳥沢 — 15:55 農鳥小屋 


7/25  12:35 — 13:05 西農鳥岳 — 13:33 農鳥岳 — 2:33  — 15:40 —  
13:10 13:45 2:55 15:50


— 16:20 間ノ岳 — 17:45 北岳山荘 


7/26  7:15 — 8:15 吊り屋根分岐 — 8:40 北岳 — 9:12 吊り屋根分岐 —  
8:25 9:00 9:20

— 10:05 八本歯ノコル — 11:13 — 12:00 二俣 — 14:25 広河原 — 15:45 —  
10:20 11:20 12:50 15:15 16:00


— 16:45 — 17:40 — 18:20 — 19:35 北沢長衛小屋 

7/27  8:25 — 8:40 北沢峠 — 9:45 四合目 — 10:50 小仙丈岳 — 11:40 仙丈岳 —  
8:55 10:00 11:00 12:15

— 13:15 薮沢小屋 — 16:05 北沢長衛小屋 — 17:45 北沢小屋 

7/28  4:20 — 4:55 仙水峠 — 5:57 駒津峰 — 7:05 甲斐駒ヶ岳 — 8:22 駒津峰 —  
9:10 9:55 11:05 11:25 12:25 12:50 14:08 14:20 14:35 14:50 15:00 16:05 16:15

— 9:10 仙水峠 — 11:05 栗沢山 — 12:25 アサヨ峰 — 14:08 — 14:35 早川屋根小屋

7/29  5:05 — 6:05 赤薮沢ノ頭 — 7:30 高嶺 — 8:24 アカヌケ沢の頭オベリスク —  
6:25 7:50 9:30

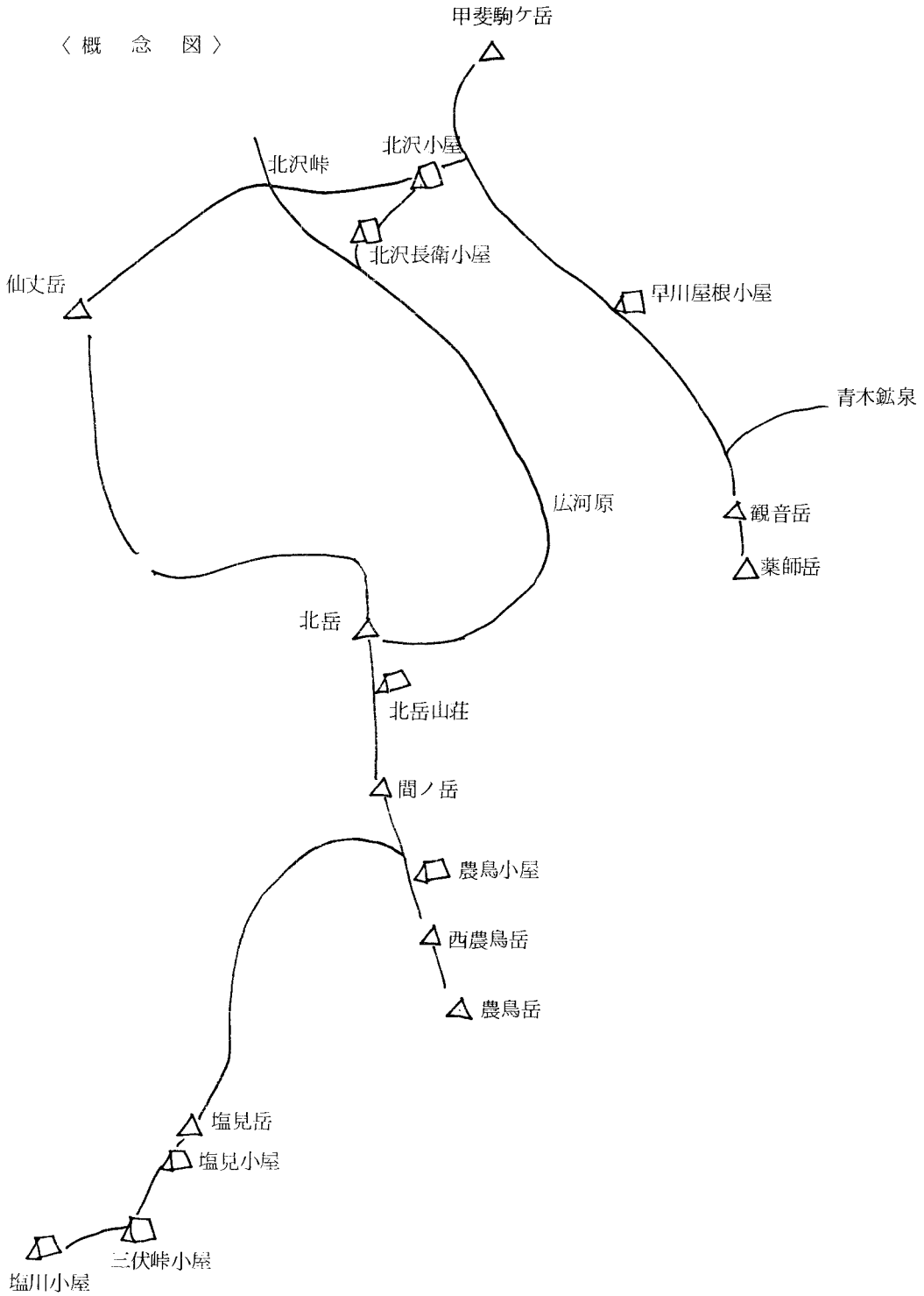
— 10:20 アカヌケ沢ノ頭 — 10:53 分岐 — 11:20 観音岳 — 11:40 薬師岳 —  
10:30 11:10 11:27 11:56

— 12:20 分岐 — 13:05 鳳凰小屋 — 13:48 五色ノ滝 — 14:50 — 16:05 —  
12:35 13:10 13:55 15:00 16:15

— 16:36 青木鉾泉

|          |       |      |
|----------|-------|------|
| PL       | 桑原潤   | (経3) |
| SL       | 山科謙二  | (経2) |
| 会計・撮影    | 田中正則  | (経3) |
| 衛生・Sub装備 | 浅野哲郎  | (工2) |
| 装備・気象    | 阿須賀謙治 | (人1) |
| Essen    | 秋本和博  | (経1) |

〈 概 念 図 〉



## 南アルプス感動のドラマ

### 愛と青春の旅立ちPARTY

PL総括

八川 睦子

ワンゲル活動のメインともいえる夏合宿。昨年北アの山々を縦走した私は、今年、南アルプスの合宿を計画した。PLとして、又パーティでは3年が一人、ということ、その責任の重大さに身の引き締まる想いがしたものだ。

今年例年になく雨に降られた合宿だった。合宿初日から雨、次の日も雨。いっこうに天気回復の兆しも見えず、気が重かった。皮肉なことに、歩き出してしばらくすると雨が降り出し、テン場に着くと止むパターンが続いた。しかし、嬉しかったのは、外の天気の暗さとは裏腹に、パーメンは常に元気で明るく振舞ってくれていたこと。最後のメイン、塩見岳で晴れ、みんな上気嫌で下山できたこと。

南アの山々は本当に雄大だった。1年にとっては初めての本格的な山行であるし、2・3年のメンバーも南アの山々は初めてだった。無事コース消化したものの、PLになってみて、改めて自分の未熟さが目についた。天候などに対しての判断の甘さ、ついつい優柔不断な態度をとってしまう。こんな頼りないPLだったけど、みんなよくついて来てくれたと思う。最初は何をすることも手間暇かかった1年も、9泊の山行を終える頃には上級生の手をとらなくなったし、2年も、よ

く1年の指導をしてくれ、頼りになった。天気に恵まれない合宿だったけど、それなりに又得ることの多い合宿だったように思う。

南ア山中9泊10日、皆さん本当に御苦労様でした。

### 「南アルプス感動のドラマ

#### 愛と青春の旅立ちPARTY」

SL日誌

西原 真理子

7月20日

湯田駅で降った雨が、長い汽車の旅の間やんでいたのに、再びここ伊那市駅で本格的に降りだしてしまいました。南アルプスの桑原Pと別れ、バスで、伊那北駅へ。広島大の混成Pと会う。

今日は、伊那北駅でステーションです。降りだした雨については、皆、楽観的。「あさってにはやめばいい」からね。

7月21日

雨。しかし今日はバスで北沢峠まで。ほとんど行程なし。ステーションで、疲れた体をバスの揺れにまかせて林道に行く。北沢長衛小屋はきれいな河原でのテン場。しかし、空は灰色。

7月22日



一時的に雨がやんだので、P.Lさんの甲斐駒ピストン「するよ」の声。晴れることを天に願いつつ出発。谷沿いの道はなかなか気持ちがいい。右岸へ渡ったり、左岸へ渡ったり。仙水峠へ着いた頃よりガスりはじめる。摩利支天がだんだんと白いベールに包まれていく。

駒津峠ではもう暴風雨。甲斐駒は断念。しかし、意外に周りの人たちは「ピークに立つ」ということに執着がないのです。これ、とっても大切なことだと思う。山に登るということは、ピークに立つことだけがそうじゃないんだということ。

横で、一年のMちゃんがかすりをやっています。シャカシャカシャカ。

7月23日

沈。昼から晴れたので、仙水峠までピストン。

昨日とはちがって、摩利支天がうんと近くに迫ってきて、とても、かっこいいものでした。

そして、天気図に異変!! 梅雨前線の下に高気圧発生!! うふ うふ 期待してしまつたPメン。

7月24日

雨やまず。しかし小雨。今日はほとんどがロードなので出発。去年の台風の影響で林道もずいぶん荒れている。林道で、犬コロと遭遇。あんた何でこんなところにいるの? 小雨の中ぐるぐると逃げていく子犬の後姿がとても哀しかった。降り続く雨は時々やむ気配を見せていたのに。

案の定、午後から晴れる。何でも屋さんをひらく。白峰お池の岸辺

に、キタダケソウを見る。今の時期に咲くなんてめずらしいことで、貴重なものだそう。白い可憐な花びらをひらいたキタダケソウは、北岳を仰いで、やっぱり強く生きていました。

私たちも負けられないね、見た目は可憐でも、強く生きようね。私!? 反対かな。見た目は強くても可憐に生きようね。とにかくまだまだ先は長い。

7月25日

朝は雨がやんでいた。お花畑の直登。何度か休憩をとりながら確かに登っているのを感じる。

草すべり。ほとんど四つんばい。でも思ったより早く分岐に着き、もうさっきからのガスの中に雷鳥発見。ガスは稜線の上で、冷い風に変わる。今にも飛ばされそうなPメン。歯をくいしばって一步一步をふみ出す。やつとこさ、ザックでおさえているというもの。ああもう少し体重があつたらなあ〜!!

今日は、北岳山荘までの予定だったが、この暴風のため肩の小屋でテン場。

今日もMちゃんが横でカスリ。シャカ、シャカ、がんばってね。明日こそは晴れた北岳に登りたい。

Pメン 皆元気ですから、おひさまも元気になってください。

7月26日

もう、何日間「明日こそは」「明日こそは」

今日も正午前より晴れる。肩の小屋でのんびりすごした一日でした。そして忘れ得ぬ日。巨大な富士山が姿を現わしたのでした。皆、カン

ドー。声をそろえて「日本一だねえー」北岳も文句なく、甲斐駒、仙丈、中央アルプスが見えました。今回の合宿でこれだけ展望があったのは初めて。

7月27日

御来光を見ようとはりきったのも束の間。北岳ピークど、三時間もねばるが、ただガスは停滞するのみ。皆ガックリ肩を落として、農鳥小屋へ向かう。稜線上の道。普通なら、気持ちよく足も軽く歩ける所なのにまたもやガスの中。いったい私たちはどこを歩いているのやら。いったい私たちは何なの？ 途中北岳山荘で、エッセンをとり、本部にTELを入れる。

〇先輩、ご心配おかけしました。Kも元気です。がんばってます。先輩もがんばってください。Kがにぎった受話器のむこうの「オレはも〜」のあとは何が言いたかったのでしょうか？

真っ白い間ノ岳を過ぎる頃から雷が鳴り始める。

農鳥小屋にて、虹のかかった富士山を見る。もう何も言えん。

明日の天気が我々の運命を決定するのです。

夜中、暴風。フライが飛ばされたので、外に出ると、きれいな甲府の夜景の上に浮かぶ黒い雲から落ちる雷の線は、まるでSFの世界でした。Pメンほとんど、眉間にしわ。

7月28日

やっぱり農鳥小屋の朝はすばらしかった!!

もう梅雨は去ったと信じてもいいですか？ 今日雪投沢目指してがんばって歩きます。きつとね、雪投沢では、佐藤Pと会えるはずな

んです。Pメン皆、そのためにパワーが出た模様。今まではうって変わったお天気と、小岩峰からの塩見岳が、体中に充電して……やっほー

願い通り、テン場では佐藤P。山の中で久々に、部員と会うことなんてうれしいこと！ 誰もが感じることでしよう。やっぱり我々も大自然には勝てないと思いました。そして、大自然は私たちにそっそさりげなく、人と人との触れあいのすばらしさも教えてくれました。

7月29日

午前5時52分。

南アルプス愛と青春の旅立ちP、塩見岳登頂！

言葉にできない、何かすばらしいもの、この体で感じるのです。槍もはるかかなたに雪をいただいて、光って見えました。いつまでも、いつまでも、見つめ続けて飽きることはありませんでした。富士山のお母さんのような姿。気が遠くなるほど歩いてきた縦走路。

いつの日かこの思いが、きつと私たちの何かの役に立つことと信じています。この頂に立ったことが、私たちに勇気を与えてくれるでしょう。それは、何かに行きづまった時かもしれないし、友人を失った時かもしれないし、もしかしたら、恋をした時かもしれません。うーん、「愛と青春の旅立ち」なのだ。

三伏小屋でテン場。

Pメン皆、満足感。下山まであとひと息。

7月30日

げざーん。

〈コースタイム〉

7/21 伊那北駅  $\xrightarrow{\text{bus}}$  北沢峠 —— 長衛小屋 (1)  
7:18 9:40 9:48 9:57

7/22 (1) —— 北沢小屋 —— 仙水峠 —— 駒津峰 —— 北沢峠 —— 長衛小屋 (2)  
6:18 6:59 7:11 7:44 7:55 9:02 9:12

7/23 (2) 沈 ( (1) → 北沢小屋 → 仙水峠  
1:05 1:47 2:04 2:31 2:51  
15:50 ← )

7/24 (2) —— 北沢橋 —— 広河原 —— Essen —— お池小屋 (3)  
4:42 7:48 7:58 10:40 12:42

7/25 (3) —— 分岐 —— 肩ノ小屋 (4)  
5:58 8:30 8:40 9:23

7/26 (5) 沈

7/27 (5) —— 北岳 —— 北岳山荘 —— 間ノ岳 —— 農鳥小屋 (6)  
4:40 5:17 8:29 9:28 10:42 12:19 1:00 2:00

7/28 (6) —— 分岐 —— 熊ノ平小屋 —— 小岩峰 —— Essen —— 北荒川岳 ——  
5:23 7:15 7:25 7:55 8:01 9:29 10:11 10:55 11:35 12:11

—— 雪投沢 (7)  
1:49

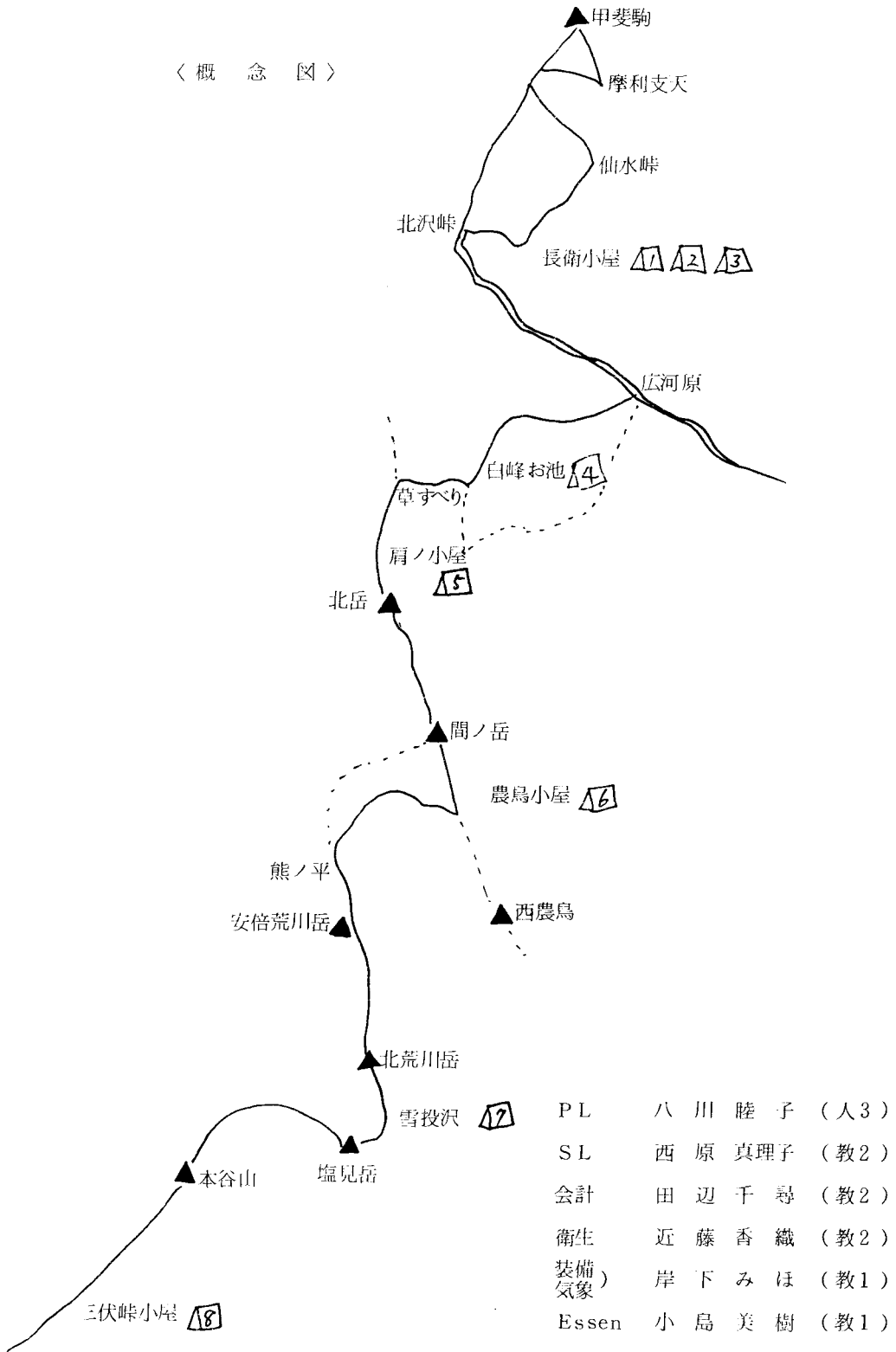
7/29 (7) —— 稜線小休止 —— 塩見岳Peak —— 塩見小屋Essen —— 本谷山 ——  
4:22 4:53 5:19 5:52 8:31 9:38 10:32 12:11 12:36

—— 三伏峠小屋 (8)  
1:36

7/30 (8) —— 塩川小屋 —— バンザーイ!!  
5:14 8:06

もうあとは、下山パワーで歩くのみ。  
だんだん遠ざかる塩見岳に愛をこめて……投げキッス♡

〈概念図〉



# 年間行事



## 一年合宿

吉 沢 毅

八月七日、上級生の参加しない一年だけの自立した合宿が始まった。我ら山大一年は、ヤンキーP、阿須賀P、孔子Pの三Pを立て、総勢十九名で、まだ松本ほんぼんの酒をのこしたまま、あわただしく出発した。ただ井上が家庭の事情で参加できなかったのが本当に残念だ。

目的地「三城牧場」に着く。今日は、キャンプ場までの行程だ。楽勝気分の我らは、トランシーバーを飛ばしながら、三Pが順々に出発。初のPLになってうかれていた私も、コースがわからなくなり、Pメンの反乱に会い、PLもただの人ということを感じた一日であった。

八日、合宿のメインだ。美ヶ原高原美術館までバスで直行。わけのわからない作品を見て、感動する者多少。それをおかしく思う私がわるいのだろうか。ここでは、おいしい昼食だけが思い出となった。我がPは、美しの塔に向かう。はやくもPの隊列はみだれ、PLの自尊心を傷つけられる。もういや。後はどうともなれだ。私は、率先して列をみだした。休憩所で一本、各Pとも、何かしら食べる。ヨーグルトを三百円もだして食べた者の中には、カップも代金の中に入っていると感違い(?)などして、持ち帰る者もいた。その時私は、「しまった。持ち帰らなかつた」と思った。そう悔んでいる内に、王ヶ頭、王ヶ鼻だ。頭から鼻の間では、反乱分子が、ストをおこし、トランシーバーは、大忙がしだった。一本とるごとに寝る者あり、「水子の霊が」

などとわけのわからないことを叫ぶ者ありでした。雲行きがおかしくなり、緊急下山。しかし、途中で、降って来やがった。岩陰で雨宿りする者、三名。その中の私は、PLということで追い出される。そんな役まわりだ。夕立ちの通過後、昨夜の反省から、今夜は、騒ごうと燃える。どうなることやらと思っていれば、疲れのせい、どなたさんも静かに寝るといふ計画倒れに。

九日、やっと山口に帰れる。松本駅で解散。すぐに帰る者、青春十八切符を買う者さまざま。最後にわたくしごとですが一言、「あの夏合宿に耐えた私のキャラバンはどうなったのでしょうかね。」(松本駅に、忘れて来たようで：)

## ワンゲル杯

坂 田 良 子

ワンゲル杯マラソンで、走ること大嫌いっ子の私が、なぜか速かった。中学校・高校とマラソン大会では常にドベを競っていた私に、神様が「たまには……」というので、お恵みをくださったのか。いやいやなんのことはない。みんなの足の不調により、たまたま私が浮き出しただけのことだった。

しかし、苦しかった。東門を出て登り坂にさしかかる頃、頑張れよ！の声援に、にっこりほえんだつもりだったが、顔がピクピクとひきつっていたように思う。それからはただ先輩を見ながら、情性で走っていた、しかし今となっては、どうしてあんな考えがおこっ

たのか不思議であるが、ラストスパートをかけないといけな、い！と思  
った、全力を振りしぼって走った。

走り終わって嬉しかったのは……せんざいが出たことだった。疲れ  
た時に甘い物はつきものです。でも一番嬉しかったのは、やっぱり賞  
状と優勝カップをもらった時だったと思う。

みなさん、マラソンシーズンには、十分足をいたわってあげましょ  
う。

## 第19回 80 km 耐久徒歩の総括

実行委員長 魚住 正毅

「星の中を歩いて見ませんか。」をキャッチフレーズとして親しま  
れてきた80 km耐久徒歩も今年で19回目。この大行事を成功させること  
が、我々工学部ワンゲル部員に課せられた一つの使命とされている。  
準備段階は、早めに行い、ミスのないよう綿密な計画を立てて行事を  
進めていった。特に、安全対策には力を入れ、新たに、夜光チョッキ  
やタスキを準備し、参加者はもちろん我々クラブ部員の行動範囲にも  
十分気を配り事故のないよう対処した。こうした努力と工学部員、ま  
た、参加者の協力においてこの大行事を無事に終えることができた。  
改めて、お礼を言いたい。

ところで、最近一般参加者がめっきり減ってきたと同時にワンゲル  
部員の中でも煙たがれる行事の一つとなっているようだ。車の普及に  
伴ない歩くことが少なくなった現代人にとって80 kmは余りに過酷であ

り、バカらしく思えるのは当然のことである。

「なぜ、こんな長い距離を歩かなければならないのか？」とぼやき、  
痛む足をひこずって歩いている自分が、まるで人生の敗北者のように  
思えてみじめである。自分の背後から悠々と追い越して行く車が憎ら  
しく、人間の足になじんでいないアスファルトがやたら固く感じられ  
る。80 kmを1回でも完歩したことのある者の心境は、おそらくこのよ  
うであつたらう。

しかし、数年後自分の足で歩いた80 kmの距離（単なる萩から宇部を  
結ぶ国道）が、懐しく思えてくるから不思議である。また、歩くこと  
への限界を知り、極限状態の苦さを身をもって体験した者はどんなこ  
とに対しても気迫をもって前向きに生きられると思うのです。

人生は「我慢・辛抱・忍耐……」ほとんどおしんの世界ですよ。

とまあ、個人的な意見ばかりになってしまいましたが、みなさんも、  
80 km耐久徒歩の意義というものを、もう一度自分なりに考えてみて下  
さい。

最後に、この行事がますます多くの人々に親しまれ発展していくこ  
とを願いつつ総括としたい。

## 80 km 耐久徒歩総括

西田 圭吾

萩→宇部80 km耐久徒歩も、今年で20回目を迎え、工学部ワンゲルの

代表的な対外行事として、一般の人々の間にも、広く浸透してきたように思われる。

しかし、今年度は部員数が少ないうえ、県内合ワンの主管が宇部地区にまわってきたために、十分な参加人員の募集を行なうことができなかった。また、今年は、昨年まで休憩場所として使わせてもらっていた明木小学校から一方的に協力を断わられ、開催直前になって、新しい休憩場所を捜さなければならなくなった。この件に関しては、明支小学校の教頭とずいぶん話し合ったのだが、校長の方針だそうで、この先2、3年間は、どうも使わせてもらえそうにない。昨年からは、明木中学校についても協力を断わられているので、今後、休憩場所に関しては、根本から考えなおさなければならぬと思われる。

以上のように、関係各位の非協力的な態度、減少する一方の部員数のことなどを考えると、80 km耐久徒歩をとりまく環境については悪化の一途をたどっていると言っても過言ではない。しかしながら、そういう問題を部員が一団となって突き破っていく姿こそ、工学部ワングルの本来の姿であると思われる。また、工学部ワングル部員の団結を深めるという意味で、これからも80 km耐久徒歩を何としても存続させていかなければならないと感じる。

## 80 km 耐久徒歩

山 本 隆 久

初めての80 km耐久徒歩、先輩たちにはあれは地獄だのなんだのとおど

されて臨んだわけだが、いざ実際走ってみると、やっぱりきつかった。(痛かった)

萩の公会堂で仮眠をとった後、橋の上で軽く体操、ここから30 km地点まで夜中にぞろぞろと列をつくりまるで疎開するが如く歩く。

最初のうちは他大学や一般の人たちとなじみにくかったが、時がたつうちにそれもなくなりいろいろと話がはずむ。これは大切であった。おかげであつという間にドライブインに到着、ワイワイと朝食をとる。

しかし、これが大変なのだ。パンフの最初に「マイペースであるたのゴールに向かって歩いてください」とあるのに、スタートと同時に皆、ランパン、Tシャツ姿で走り出す。

このときに大きなミスを犯してしまう。というのは、事前に1年数人で「先輩たちの手前、初めの30分ぐらい走っているように見せ、あとはゆっくり話でもしながら歩こう」と打合せしていたのだが、ちょっとトイレに行っている間にみんながいらない「はまった!」と思い一気に飛び出す。それもユニフォーム姿に、タバコ、灰カン、重いサイフ持参で……数十人をゴボウ抜きしたころ、「おかしい、あいつらがこんなに早いわけが……」と思い始める。がそのまま走る。なかなかのペースでチェックポイントに着き、この前に何人いるかを聞くと「6人です、でも1年はあなたで2人目ですよ」ここでガックリ、あいつらめ。

ここから地獄が始まる。とにかく異常なほどにのどがかわくので、自販があるたびジュースを飲む(計11本)。何度もユニフォームを脱ごうと考えたが、手に持つのもいやなのでガマンする。そのうちに足がすり始める。それも歩くことすらできないくらいで、数m歩いては休憩というのを繰り返す、その度2、3人が抜いていったが彼らもき



つそうだ。いよいよ街に入りあと3kmというあたりで、はるか後に大集団が見える。あれには負けられないというへんな意地が出て再び走り出す。工学部までの坂道は本当、死ぬ思い。

ともあれPM12:40ゴールをくぐったときの回りからの拍手の音と満足感は、今でも心に残っている。ちなみに翌日の12分完走は見学した。

来年は雨天中止になりますように！

## 雪上訓練

『シユラフ命』男

なぜ編集者はこのテーマを私に与えたのであろうか？と最初疑問に思ったのだった。しかしよく雪上訓練を思い出してみれば、そこにはあの常識を超えた(はずれた?)出来事が鮮やかに私の脳裏に浮かび上がってくるのだった。それは忘れもしない昭和58年1月22日の事であった。我々大峰ピュッピュッテン○パーティは雪上訓練を十種ヶ峰で行い、夜は雪上ビバークをする事になっていた。山口線に揺られて徳佐駅に到着し一路十種ヶ峰を目指した。そしてPLさんの『一本』という声でザックを降ろし、その上にドスン!と座ったが、いつもある、ザックのあの丸こい感触がなく、腰を抜かすような格好になった。その時になって初めて私はシユラフを入れ忘れた事に気付いたのだった。爆笑の渦の中で私は思わず頭をかかえ、次のようにつぶやいたと言う。『青かったぁ……』

その後テン場が同じだった前田さんの素晴らしい発想(ほとんど老人的発想)であるダブルシユラフの一つを借用させてもらい、私は一命をとりとめたのだった。以後私は寝る時は(酔った時は別)絶対に前田さんの下宿には足を向けないで寝ることにしている。

— 完 —

## 錬成

本 田 智 子

具合のときひいひい言いながら背負ったザックを帰って計ってみたら12kgだった。

それなのに、なんと錬成では一次錬で20kg以上、二次錬で25kg以上持たなければならぬのだ。私は山に行く前はいつも、今度の山行は生きて帰れないかもしれない"と思う癖があるのだが、一次錬の前は特にその感がつよかった。

前の晩、錬成のことを考えるとおそろしくてなかなか寝つけなかった。

朝がきて、いよいよ悲愴感はピークに達した。今日か明日のうちに私は死ぬかもしれないんだ"と思いこみはじめた。悲観的になるとことんおちこんでいく性分なのかだんだん気がめいってきた。最後に家に電話しておこうと思い、おかあさん、今日錬成やから、うん、明日帰ってくるよ、とできるだけ明るい声でいい、先立つ不幸をお許してください"と電話をきったあと、手を合わせた。

部屋をきちんと片付け、寮の友だちに「別れ」をつげると、まさに死  
刑台に立つ囚人の気分で、倉庫前に行ったのだった。

歩きながら頭の中で歌でも歌おうと前の日にあらかじめ曲目まで考  
えておいたので、最初はよかったが、あまりのザックの重さに次第に  
そんな元気もなくなってきた。行動食をとるたびにダスターは増える  
し、「もうどうにでもなればいいや！」と、だんだん投げやりな気分  
になってきた。

2日目、パッキングの悪さがたたり、歩くたびに鍋さんが私の頭に  
ぶつかると、ザックがうしろにひかれています。感じて歩きにくくて、腹  
がたつてきた。でも止まるとしんどいしめんどろなので、かまわず歩  
いた。そうしていると今度はだんだん意識がもうろうとしてきた。

側を車が通るたびに、今道路にとびこめば車にひかれてもうこれ以上  
歩かなくていいんだ」とか橋の上では「勇気を出してここからザッ  
クを投げすてれば楽になるんだ」とか、「あの電柱のところまで歩  
いたらもう一歩も歩くもんか」とか、何度思ったことか……。

今、思い出せば本当に笑い話だが、そのときは、いたって真剣に考  
えていた。

そして、棺おけに半足を入れたまま何と生きて倉庫前にたどりついた  
のだった。

「ばんざい！」 人間なんて、そうやすやす死んでしまうものではな  
いのである。

「されど、一錬成！」 「マイペース」同様、やっぱり私にとって限り  
なく生理的嫌悪感と恐怖をおぼえることばなのである。

## 第20回県内合同W総括

横山智広

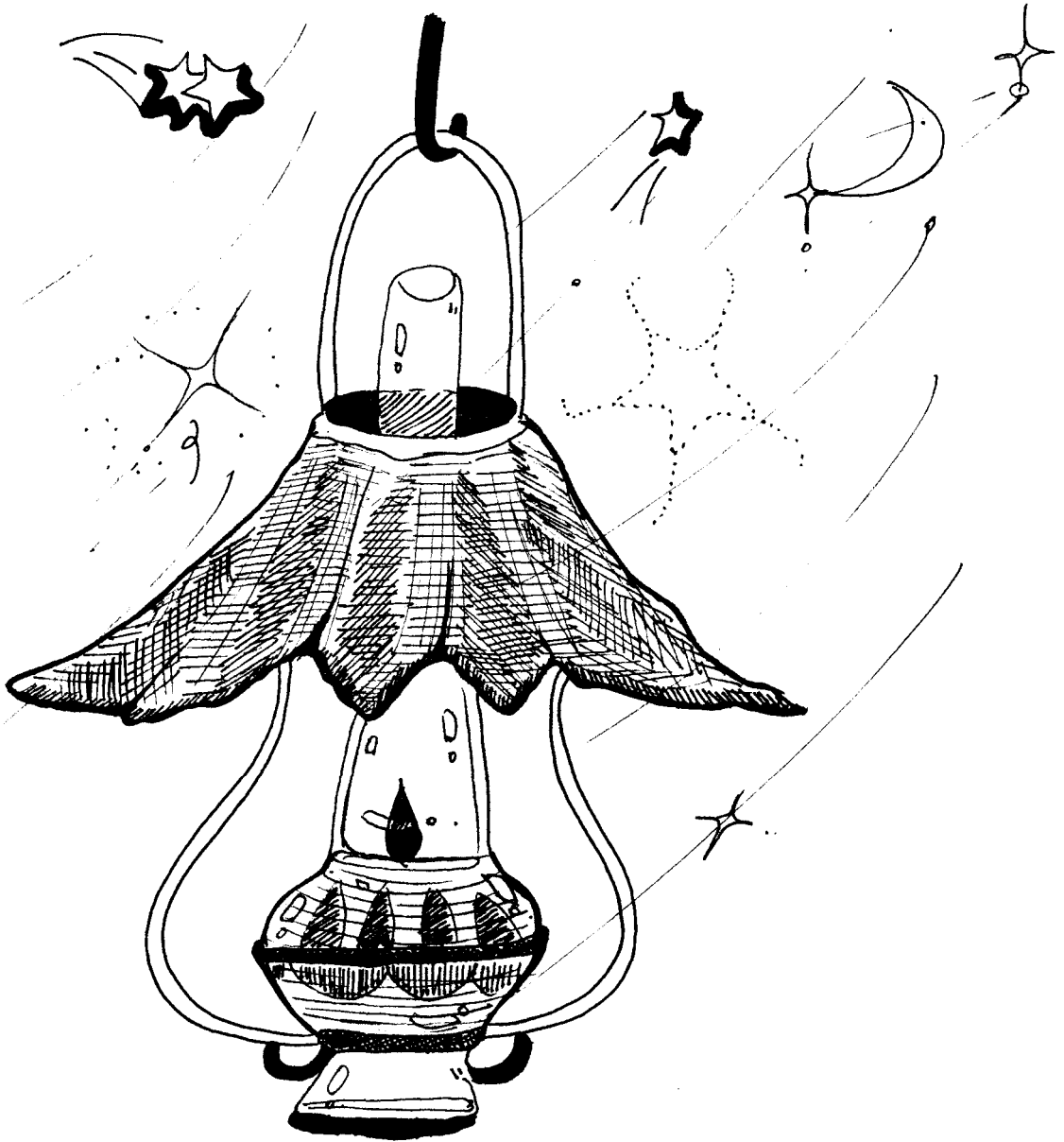
宇部地区主管で行なわれた県合を無事に終えることのできた今は、  
肩の重荷をおろした気分です。しかし、まだ「ごほんの歌」が出来上  
がっておらず、まだまだ県合は終わっていないって感じですよ。

県合を振り返って見ると、山域は秋吉台周辺で4ブツク構成で、  
うち1ブツクのみ展望台からのロードでした。工学部は、近年部員  
が少なくなっているもので、4回生の人たちにもBLとしての役職につ  
いてもらいました。また、コースに関しては、調査Wや整備Wが、完  
全でなく多々ご迷惑をおかけしました事を深くお詫びいたします。こ  
のため集中の時間が大幅に遅れてしまい、さらにファイヤー前に雨が  
降り出すなど悪条件が重なったけれども、みんなこの夜限りとはばかり  
に……。

今年の県合は、参加校がちょっと少なかつたため他校との幅広い交  
流かつ親睦が望めなかつたけれど、各人の自然観及びワンゲル観の意  
見交換の場を持った事により、充実感を得たことと思います。

今回の県合から次回の県合へと引き続き行なわれ、同じ山口地区の  
連帯感を深めると共に、各人が誇りを持ち、より一層大きくはばたい  
て生きてほしいと思います。

最後に、他の実行委員と県合までの長い間それぞれの役割を十分遂  
行し、また、頼りない実行委員長を補助し、盛り立ててくれた事を感  
謝いたします。本当にありがとうございました。明日のワンゲルを……。



# 工学部

## 第二十一期工学部執行部総括

「一般の人々にワングル活動を知ってもらおう」

我々の定めた目標である。我々、ワンダーフォーゲル部の活動を知ってもらふことによつて、部員以外の人にも、自然というものを考えてもらいたいという考えから出た目標であつた。従来の活動を考え直してみると、我々は一方的に、自然という舞台にあがつて、満足感を得ていただけではないか、五感を通してあらゆる快感を享受し、精神的にも何かを得た。その活動の主たる自然が破壊されつつある。自然から多くの恩恵を得た我々が、自然を考え、護るとするのは、ワングル活動の本質的なものだと思つた結果、前述の目標定めた理由である。今、考えると、だいそれた事を目標にしたものだと思う。

実際はどうであつたかと言つと、目標のために「新しい肉体的活動」―清掃ワン、パンフの発行等―を挙げ、それを消化しようとしただけに過ぎなかつたと思える。「新しい肉体的な活動」に関する末端的な話し合いばかりで、それに伴う「精神的な活動」―新しい行事の意義についての論議―が色濃く存在しなかつた様である。

元来、ワンダーフォーゲル活動は精神活動は興つたものであり、―精神活動が、肉体的活動となつて出現し、それが内的刺激となつて還元する―というサイクルがワンダーフォーゲル活動の本質だと、今考えている。その意味から言つと、我々の努力は今一歩足りなかつたと思う。

自分も含めて部員が行事を遂行すればよいという考えに流されていたのではないかと考える。工学部のワングルにおける「伝統的行事」の繁雑さが、そういう考えを部員の心に植えつけ易いことは否めないと思う。現状は、「伝統的行事」だけで飽和状態に近く、新しい行事の入り込む余地は無いに等しい状態だと考える。新しい精神活動が興る前に、次から次へと「伝統的行事」がやつて来る。我々の一年はその遂行のみに時間を費し、それに振りまわされただけであつたと考える。「新しい精神活動」を興すために「伝統的行事」をカットすべきかどうか現在の活動の葛藤であると感じられる。

ワングル活動は今転換期にあると考える。合宿の形態一つにしても、従来のパーティーを組んでの山行から、島、山スキー、サイクリングや電車という交通機関を利用したもので、種々な試みが行なわれている。自分は歓迎すべき状況だと考えている。ワングル活動の本来の姿から考えて、当然だと思つた。個人の精神活動から興つたものであるからそれを表現する肉体的活動の選択の範囲はもっと広くて良いと考える。最初に求めた肉体的活動が「山に登る」という行為であり、それがあまり素晴らしかつたため、今日まで何の疑問もなく存在しただけに過ぎなかつた、それだけのことだと考える。

ワングルの本来の姿から見ると、ワングル部の活動は何事にも、とらわれないことが本当だと考える。たとえ、それが「伝統的行事」でも然りである。それがクラブの発展と言われるものになるのではないかと思う。

次期執行部には、何にもとらわれないで、自分達が本当にやりたいことをして欲しいと願う。

最後に、自分の中のワングルというものを表現すれば、次の一言で

ある。

「たかが ワンゲル。されど ワンゲル。」

## 五十六年度工学部春合宿

### はいむるぶしPARTY 総括

PL 中山義一

工学部では、ハードな面に主眼を置くのではなく、ソフトな面を目標とする文化ワンのような活動が、以前にも行なわれてきた。この合宿も、山行等、体力的な到達を目標とするのではなく、地元の人々との対話を通して、親睦をはかり、かつ、その人々との接触を通して自然に接してみようという試みにより計画され、また、それによって今までの一方的に、自然に接する合宿を、そこに永らく住む人々を媒体として自然と対話をかわせる合宿へと発展させ、やや慢性的に停滞気味のワンゲル活動に新風を吹き込もうとする期待をもこめたものであった。

数回行なわれてきた文化ワンでは、主に行程を浄化しつつ、地元の人々と対話をする形態をとってきたが、この形態では、クラブ員は、通りすがりの者として見られかえって、表面上の対話のみに終わることがあると考えられ、地元の人々と数日共に生活し、溶け込んで、深く掘り下げた対話ができる形態をとることとした。

折しも、ワンゲルの活動の場となっている南西諸島、石垣島附近で

さとうきび刈りの労働力を求めているということから、合宿をさとうきび刈りの援農として行うことにした。

場所は、西表島附近の小浜島とし、地元の精糖工場の協力により、テントサイト等をお世話してもらい、活動をスムーズに行うことができた。各人それぞれ農家に分かれて、共にさとうきび刈りの作業をし休み時間等利用して、農家の人と対話するように努めた。また作業の合い間、2日間ほど西表島へ行き、各部員、個人の計画を実行する日程を組み入れ計7日間の合宿となった。

さとうきび刈りの作業は、想像以上に重労働であり、最初の2、3日は作業するだけで精一杯であり、部員一同、体力の無さを痛感したが、少しずつではあるが対話する余裕をもつことができた。対話の内容は、クラブ活動について、観光化について、島の過疎、自然破壊、島の生活等、とりとめのないものではあったが、地元の人々の声を通して聞いたことは、クラブ員各人にとって、意義のあるものであったと思う。これらの見聞したことは、各個人の報告、また意見として小冊子にまとめ、県内を問わず、中四国大学に送付したことは、評価に値すると思われる。

この合宿中、得られた見聞のうちの一つを特に取り上げてみると、対話した内容の中でも、共通して出てくるのは、我々ワンゲルが活動する、美しい自然を保つ環境に住む人々は、その土地の観光化を望んでいるということがあった。これは産業があまりないが故に過疎に悩まされている土地の人々の共通の願いであるようである。しかし、観光化が進むにつれての弊害をすでに懸念している人もおり、観光化を推進するものと、そうでないものの2つの考え方が、あるように思われた。なるほど、我がワンゲル活動においても、観光化されるという

ことは、交通機関、施設等、アプローチに際してプラスであるが、観光化が過ぎれば、俗化し、心無いハイカー等によって自然破壊が行なわれ、マイナスとなってくる。観光化が進めば、生活が向上するが、それによって生活が乱されてしまうという、この島の人々が持つジレンマは、クラブ活動とに共通した問題といえるのではなからうか。この問題点は、すでにクラブ員みんなが気付いているところであるが、改善しようとする行動を取るどころか、クラブ活動の中で討議の対象となることも稀である。今後の活動が、この問題点について考えて行くことを切望する。

我々、クラブ活動は、ともすれば活動の場に生活する人々の障害になることさえあったが、一つのボランティア活動として地域社会に少しでも貢献したことは、この合宿の特筆すべきことであると信ずる。また、さとうきび刈りの作業を終えて、特別の配慮によって、精糖工場の風呂に入れてもらうことになったが、その帰り、島の人々にねぎらいの言葉をかけてくれるとき、最高の気分であった。ピークに着いた時の気分とは、また、一つちがっていいものであった。

最後に、この合宿は、地元の協力によって実現できたものであり、農家の皆さん、並びに小浜島の照島精糖工場の皆さんに、深く感謝することをここに記し、合宿の総括とする。

## 西表島「苦離島離住PART II」 PL総括

藤山 敦

この合宿を計画するにあたり、念頭においたのは、「サバイバル」ということである、サバイバルとはいかなることか。サバイバルとは生きのびるということである。ただ何も食わずに、何も行動せずに生きのびればよいというものではない。それでは断食にすぎない。ここで、*the survival of the fittest* という言葉がある。適者生存。ある環境（状況）において適した者（勝った者）だけが生きのびるという意味だ。最近、地震などによる災害が問題となっている。妄想かもしれないが、かねてより非常状態における危機感を覚えていた。そこでこの非常状態でいかに生きていけるものかを試してみた。この合宿を計画した。

実際に計画するにあたり、場所を選定するの一番苦労した。非常状態であり、安全な場所。この矛盾。やむなく、それを西表島へと求めた。網取にある東海大学研究所西方の海岸で行うことにした。

当合宿で制限した条件は、テントなし、食糧（非常食として米一人1kg、ソーセージ2本）。では合宿中の様子をちょっとふりかえってみよう。

3月22日

定住地を捜したが適当な所がなく、洞穴におちつく。エッセンはす

き焼。これで当分まともな食事とはおさらばだ。

3月23日

小屋をつくる。魚釣り、魚をやすで突く。なかなか魚はとれない。

3月24日

魚がつかれた。しかし、あとが続かない。夕方よりはげしい雨。

3月25日

雨のため活動ができない。波は高い。


3月26日



風雨のため小屋崩壊。撤去。モニメント完成。アダンの実試食。  
珍味。

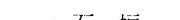
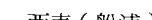

小屋づくりを安易に考えていたが、今回のような暴風雨に対処できるようなものをつくる技術をもたなかったことを深く反省したい。非常状態において何が必要か。それは食糧と安住できる場所。これは当然といえば当然のことかもしれない。しかし、アダンの実を食べ、ゴツゴツとした岩の上で寝て痛感したことである。

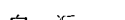

合宿全体をふりかえり、自給自足で生きのびたかどうかといえれば疑問は残るが、制限された条件下で生活しようとしたことには意義があるとさえよう。今後、小屋づくり、食料採取のより確かな技術を身につけての挑戦を期待する。最後に、直前になって残念ながら不参加となった上原、中田両名の準備等における協力で感謝します。

〈行動記録〉


3/19 琴芝 st. — 西鹿兒島 st. — 鹿兒島新港   
6:16 14:49 15:15 17:30

3/20  那覇港   
14:30 19:10

3/21  石垣  西表(船浦) — 白浜   
9:20 14:30 15:35 16:30

3/22 白浜  東海大研究所 — 定住地   
8:10 8:40 9:35 10:00

3/23~26 定住

3/27 定住地 — 東海大研究所  白浜 (合宿終了)  
12:00 12:30 14:00 14:30

(パーメン)  
P L  
S L・記録・撮影  
衛生  
気象・食当  
見送り  
//

藤山敦 (土木3)  
齊藤慎一 (生産3)  
松中 信恭 (機械3)  
吉田 久 (化工2)  
上原 理生 (電気3)  
中田 国彦 (電子3)

## 1982年工学部夏合宿

「朝発（ASADACHI）」パーティ

PL総括

吉田 一久

「合宿の成功とは何ぞや」 合宿出発前、合宿中、そして合宿終了後を通して、常のこの問題に付きまといわれた。我がパーティはコース消化出来なかった。

今年度、工学部ワンゲルの執行部方針は「一般の人々にワンゲル活動を知ってもらおう」ということであった。そこで今回の合宿では各自のテーマに従って、詳細な記録を残すことが目的であった。山岳写真、テン場状況、コース状況、他の登山者の写真、人との接触などがテーマとして上げられ、北アルプス、表、裏銀座というコースは適当であると思われた。

勿論、満足の行く結果が得られた者などいなかったようだが、テーマを持って合宿に臨んでいるという事で、一日一日が充実したものであった。それぞれ、目的を持った山行のおもしろさが味わえ、多少なりとも自己のワンゲル観が広がったのではないかと思う。

自分としては、合宿の成功とは、日頃から「全員無事下山する」と考えている。今回もこの考えを基本に、PLとしての判断を行った。

最後にパーメン一人一人に感謝の意を表すと共に、後輩諸君に「目

的意識を持ち、大胆かつ慎重なるワンゲル活動」を期待し、一九八二年度工学部夏合宿のPL総括とします。

春合宿（S58年3月）

落武者隊PARTY PL総括

PL 魚住 正毅

この合宿を選定する際、クラブ内の諸問題のために山を対象とした合宿が認められなかったことは私自身まことに残念であった。

しかし、今期の執行部方針は、「ワンゲル活動を一般の人々に知ってもらおう」ということである。そこで我々は、豊富な記録を残せるとともに住民たちとの対話においても有利と思われるロードワンを計画した。また、こうした脊梁山群をとりまく地域は、昔平家の落武者たちが逃げ込んだことで有名であり、今もなお隔離散村として面影を残す寂しい光景を我々の心はどのように捕えるか？自分たちの視野を広げる意味においても確実な合宿であると思った。

しかし、合宿終了後我々は改めてロードワンの難しさを認識すると共に合宿の失敗を悟ったのである。パーティ目標を「壮大な自然をスケッチ・カメラ・8ミリカメラとあらゆる手段で記録収集に努める：」ように設定したが、準備段階での情報不足また、パーメンの健康管理の不備も重なり、途中、ヒッチハイクを含むロード一本化に終わらせてしまったことは、PLとして十分に反省すべきであった。合宿



として甘さが出たと思われるのもPLを含む各パーメンが、合宿に臨む目的意識をはっきり定めていなかったためである。

ここで、ロードワン合宿について我々の意見をいくつか述べておく。まず、ロードワンでの目標は、山行以上に具体性のあるものでなければならぬため、準備段階には十分時間をかけて資料収集に努めること。そして、各個人の目的が達成できるようにロードは短めにとり、フリーな時間帯を設ける。しかし、合宿中は気を引き締めてハメを外さないことである。

そして、なによりもロードワン合宿の成功か否かを大きく左右するのは、足の故障と思われる。特に膝を痛めると、今後の行程を断念せざるをえなくなるので細心の注意が必要とされる。

以上のことが、今後のロードワン合宿を進めて行く上で、少しでも参考となれば幸いです。ワンゲル活動の幅広い柔軟性を考えていく意味でどんどんロードワン合宿に挑戦してもらいたい。

最後に、合宿中文句も言わずついてきてくれたパーメンに感謝し、PL総括とする。

## 山工ワンゲル不滅の落武者P SL日誌

吉田 一久

3月19日 晴 4:15起床

工学部恒例、追試の嵐をくぐり抜け、我等、優秀3人組は、一早く春合宿へ出発。丸山氏所有の愛のスカイライン1800GLで宇部新川へ。ある者は合宿への期待に心を震わせ、又ある者はまだ見ぬ世界への恐怖に脅え、又ある者は見送りのメッセンの事で胸をふくらませ、3人共その緊張の色は隠せない様であった。新川6:18発で明るい山陽本線に乗れる宇部駅へ。宇部6:44発で一行は一路聖子チャンの故郷久留米へ。(但し、3人共聖子ファンではなかった) 同じ列車には明るい山女の住吉Partyが乗っていた。3人は偶然にも隣りの席に座り込み、小倉まで合宿の事を語り合いかたわら、差し入れの物々交換にふけていた。小倉での住吉Partyと涙の別れを終え、久留米で我等、貧困ワンダラーはめつたに乘れない急行列車にさっそうと乗り込みデッキに立ったまま熊本へ。熊本から、湯前線で球磨川を3人は若鮎の様に逆上った。湯常へ着く頃には、日頃トレーニングで鍛えた尻も最旅のため細胞分裂を起こしているように痛くなつた。

湯前駅で降りると眼前に市房山が雄々しくそびえ立ち我々を迎えてくれた。近くのスーパードで今日のすき焼き用の牛肉を買い、さっそうと出発しようとしたが、PLのキスリングが壊れ、これから始まる合宿に不安を抱かせた。16:00湯前駅を発ち今日のテント場を捜し求めてロードすること1時間半、七ツ山バス停から少し入った小川の近くでテントを設営。エッセンのすき焼きを食べ20:30就寝。近くで野犬の遠吠えがし無気味な一夜をすごした。

3月20日 晴 4:30起床

朝、ウグイスの鳴き声と共に目覚めた3人は足取りも軽く村所へ向

かって出発したのはよかったが、道を間違えたため1時間のロス。かなり急な登りをロードして熊本と宮崎の県境にある歩いて20分近くかかる長い長い横谷トンネルを抜けるとそこは宮崎県であった。ここからは下るだけだとペースを上げたのがまずかったのか、めったに壊れない吉田氏の膝が壊れてしまった。こういう時、日頃の行いが物を言うのだろう。偶然、山工学部のOBの方が軽トラで通られ声をかけて下さった。村所までヒッチハイクということになったのであるが、合宿中車に乗れると嬉しかったのは吉田氏以外約1名の2年生がいたのは明白であった。村所で車を降り、昼のエッセンを取り、吉田氏の足を心配しながら上米良の廃校目ざして出発。さっきまで痛かった吉田氏の足はうそのように元氣よく前に進んだ。P.Lは痛いのがまんして無理していると良心的解釈をしていた様だが、他の一名はエッセンを食べたので元氣が出たのだと思っている様だった。事実は、上りは大丈夫なのだが下りは痛くなる様であった。廃校はテン場として使えなく、榎之口変電所の登山者簡易宿泊所まで歩くことになった。1人1泊300円、疊敷、電気、水道、トイレ有りというゴージャスな設備であった。合宿中このような所に泊まるのは氣がひけたので、皆、心の中でひそかに万歳をした。明日は石堂山へピストンしてから次のテン場へ向かう予定。石堂山への登山者はけっこう多い様だ。20：30疊の上でひそかに就寝。

3月21日 キリ雨 4：00起床

初めてチョンボでない起床がかかったのに外は雨。天気図を見ると午後には雨は上がりそうだが石堂山のピストンは中止して半沈に決定。9：30雨降る中を次のテン場を求めて全員カッパを着ての出発。途中

雨も止み我等の前途を示すように向こうには晴れ間が見える。大きな虹がかかる中、3人はメルヘンチックに足を進めた。10：40我等落武者3人は目的地である椎葉村へとうとう入ってしまった。今までの道程を思い起こすと道も無い昔、このような大深谷の奥深くまで落ち延びて来た平家達の哀れさとその生命力に日本の歴史を感じるのであった、今も変わらないのはこの美しいウグイス達の声だけであろうか：（ああ、：鳴くよウグイス椎葉村。なんときれいな椎葉村、いいくにつくろウ椎葉村） 昼のエッセンを取る為、今にも崩れそうなつり橋を渡たり川原へ下りた。川底から見上げる山々は一段と厳しくそびえ立っていた。昼のエッセンが終わり歩くこと1時間半、椎葉・大河内の分岐にたどり着いた。これからは2日前、不安と期待の中、歩き始めた湯前を目指して進むことになる。歩けるだけ歩いた末、テン場を見付けた所は矢立であった。いよいよ明日は最終日。短かったが最後は氣合を入れて寝よう。20：15就寝。

3月22日 晴 4：30起床

いよいよ最終日。例の如く「合宿終ったら腹いっぱい〇〇食うぞ」という低俗な話題に花を咲かせながら、まずは一気に湯山峠まで登りきった。横山氏は今までの重い足取りから一変して、ターボをきかせてふっとばしている。ここで横山の若さが出てしまった。横山氏は新国道をふっとばしていたが、遅れをとった熟年二人は近道である旧国道を余裕の足取りで進んだ。市房キャンプ場入口で向こうから一びきの豚がブーブー言いながら近づいてくる……のは横山氏がブーブー文句を言いながらやって来る姿であった。（しっかり地図見ようぜ！）市房キャンプ場へ着き、一応合宿は終わり。パンザイ！ すぐにオプ

〈 行動記録 〉

3/19 宇部新川  $\rightleftharpoons$  宇部  $\rightleftharpoons$  久留米  $\rightleftharpoons$  熊本  $\rightleftharpoons$  湯前  $\rightleftharpoons$   
 6:10 6:44 10:19 10:41 11:48 12:20 15:19 16:00

—— 七ツ山  $\triangle$  ①  
 17:26

3/20  $\triangle$  横谷トンネル  $\xrightarrow{\text{ヒッチハイク}}$  村所 —— 槇之口  $\triangle$  ②  
 6:35 9:43 9:55 10:50 11:15 15:30

3/21  $\triangle$  椎葉村入口 —— 椎葉・大河内分岐 —— 矢立  $\triangle$  ③  
 10:00 10:43 10:55 13:28 13:40 15:57

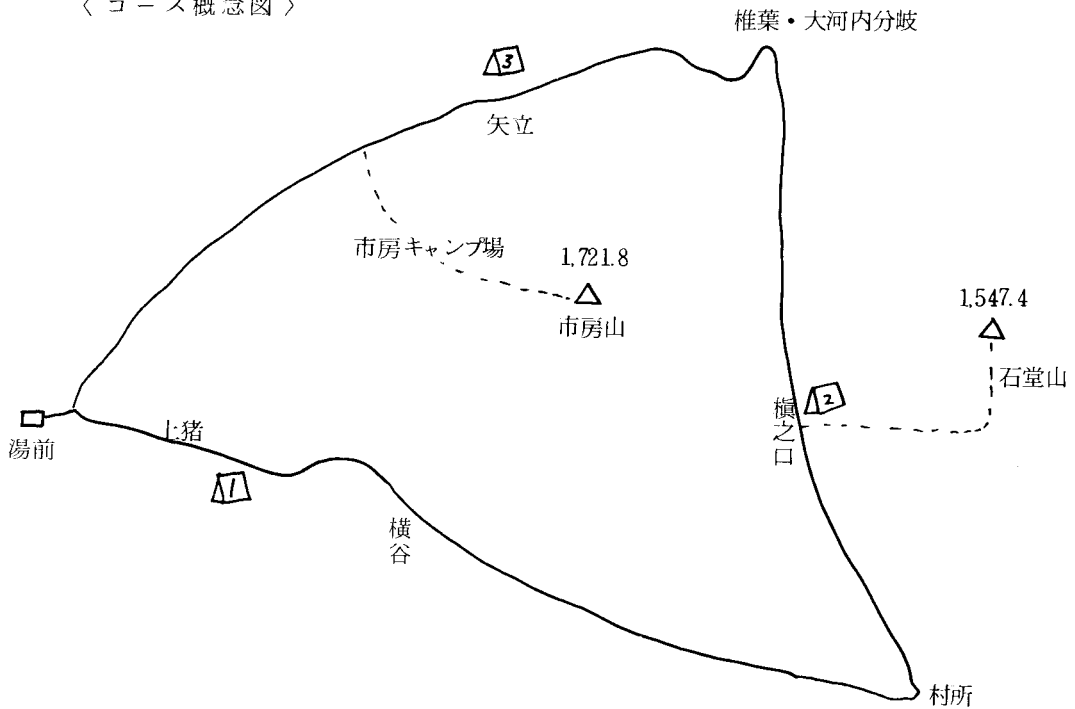
3/22  $\triangle$  湯山峠 —— 市房山キャンプ場入口 —— 市房山キャンプ場  
 6:35 7:10 7:56 8:46 8:50 9:30

〈 メンバー 〉

PL・衛生・会計 魚住 正毅 (資源 3年)  
 SL・装備・記録 吉田 一久 (化工 3年)  
 食当・気象 横山 智広 (電子 2年)

ションでついできた市房山へのフリーワンに出発。市房山は急登でき  
 つかったが、今まで山に登らずに歩いてきただけあって、ピークでは  
 気分最高。下から見上げるのと、上から見下ろすのでは大ちがいであ  
 る。メンバーが全員無事であれば合宿成功である。万歳！

〈 コース概念図 〉



## 「タコ特級PARTY」SL日誌

工学部2年 日 野 裕 幸

七月二十一日 天気 くもり

五時起床、外はまだ薄明るい、昨日パッキングをすませたアタックザックを車に積み込んだ、そう、今年の夏合宿はアタックで行動するのである。

車で新川駅へ向かう途中雨がパラパラと。なにやらいやな予感を漂わせる。

駅に着くと盛大な見送りをいただいた。朝早くから起きて空腹をかくし切れない我々は宇部短弁当がなによりも目当てであった。(若干〇名、それ以外の目当てもあつたそうである)

次々と電車を乗り替え、最後は高原バスである。ガスの晴れ間から薄く剣岳が臨めた。明日はあのピークにたつのだ。

七月二十二日 天気 雨

今日は沈。大雨大風。とても剣のピストンどころではない。おまけに私は起床があたつており、収容人員五人のこのダンロップの六テンから、追い出されるように私はテントごと雨ざらしになった。

午後になつても風雨は弱まらず、ついにはバキッという音と共にポールが折れてしまった。さっそく修繕に取りかかったが、予備のポールをつけた瞬間までも折れて飛んでいってしまった。この時皮肉なことに今まで明日頃から天気回復などと言っていた予報を一転して向

こう一週間は雨、雨、アメ、あめと告げ、パーメン一同、ラジオに向かつておまえはダ・ア・メ・なやつだ。と言った。

夜になってさらに風雨が強まった。五人皆でテントをおさえる。支柱が曲がりだした。フライはとうの昔に飛んでいた。静電気が発生して時々まわりがパッパッと光る。無気味さがさらに増す。他Pは避難小屋へと向かう。我がPもついにテントをたおして小屋へ逃げることになった。あたりのテントをみわたせばダンロップのものはすべて悲惨な状態であった。その時、時刻はAM一時半、実に三時間もの死闘であった。

七月二十三日 くもり時々晴れ

入山より一つのピークも踏まずに今日下山である。テントを撤収してすたら雷鳥沢から逃げ出す。皆、顔色が悪い。昨日寝てないせいもあるだろうが、やはり精神的疲労のほうが大きいようだ。帰りは同じ交通機関で富山へ行く。なんとなくむなしさが残る。空が晴れてきた。再入山の希望がわく。

富山駅で電車に乗ると、突然Y氏が、不思議な行動に出た。窓の外に向かって手を振り始めたのである。それにつられずなんとかふんばっていたH氏もついに振ってしまった。窓の向こうのメッチェンは、何故か手を振り返していた。これぞ工学部得意の振相術である。この二人は、手を振りなかつた後の三人にひどくアホにされていた。

七月二十五日 雨

今日も沈。扇沢から再入山した我々は、またしても豪雨にあい、駅で一日をすごすことになった。おまけに私はトランプじゃ大負け晩のエッセンはどつばにますい。今日はもうだめ、早く梅雨上がってほしいものだ。

七月二十六日 くもちのち雨

やっと今日入山である。柏原新道を通って冷池まで行く予定である。尾根に入ろうとする前、空に明るみが見えた。よし梅雨明けじゃと思つたとたんまた雨である。しかし今日は行動せねばならない。実に今日の登りは千三百米である。尾根の登りはわりと楽である。三本半で種池に着いた。ここで昼のエッセンを取り、早めに終えてすぐ行動に移る。稜線に出るとさすがに風が強い。時間がないので翁カ岳はピストンをかけずにまいた。これが思わぬ結果になろうとは誰が予想しただろうか。やっとテン場に到着。突風で TENT をたてるのに苦労した。TENT の中に入った方がいいが寒さと疲労で食欲がわかない。腹はへっているはずなのだが、

まだまだ風と雨は強く、明日は沈と決定。皆怒りをトランプにぶつけていた。雷鳥沢の二の舞だけは逃れたいものだ。

七月二十七日 雨のちくもり

今日は沈のはずだったが、TENT の状態、パーメンの疲労度からみて下山することになった。撤収して TENT 場を出ようとするとまわりがパツと明るくなった。雷である。すぐ山荘に逃げ込む。しばらく待つて行動する。前のパーティの助言で赤岩尾根をくだることになった。橋が渡れるかどうかは不安があるが。

赤岩尾根の下りは急である。一時間下り出したら膝が笑いだした。二時間近く下ると川が見えてきた。濁流である。橋は大丈夫であろうか。下り終わってロードを一時間すると養魚場に着いた。ここでタクシーを呼ぶことになった。長いようで実は短い合宿はついに終わった。山中三泊五日、全行程九時間二十五分のピークを踏まない合宿であつた。

## ついに出了たタコ特級PARTY P L 総括

平松達己

夏合宿の準備を始めたのは六月にはいつてからだだった。メンバーは二年生と三年生であつて、山に対する考え、合宿に求めるものは、それぞれ違うだけに、それをどうまとめ、一つの方向性を見出すかは最初から問題になった。夏合宿がクラブ行事において、最も大切なものだけに、各人が自分のもっている力を最大限に發揮し、全力で合宿に臨まなければならない。悔いを残さないようにと各人が個人のコース案とは別に個人目標というものを立てた。そして今回のコースが決まり、リーダー養成、錬成とパスし、合宿をむかえたわけである。

今振り返ってみると、今回は、風雨にたたられた合宿であつた。しかし、それ以上に問題だったのは、まず準備段階からであろう。ミーティングの回数が少なかった。時間の都合、話し合いが十分に進められないままに先に決めてしまった。コース、目標等、やはりもっと話し合うべきだったと思う。ただ単に安易に、満足だけを求めたような気がする。そして天候に関してあまり見ていたような気がする。我々は軽量化の意味で、ダンロップの TENT にしたのだが、こうまでも風に弱いものとは思わなかったのだが、やはり、非は我々にあると思う。これも計画段階で、先輩等の意見を聞くことで防げたのではないかと思う。

雨のひどい合宿で、結局コース消化もできなかったが、風雨の中で徹夜でテントを押えたこと、稜線に雷の音を聞きながら、食糧もなくなり、泣く泣く、千メートル下ったこと。いろいろな悲惨な体験をしたと思う。とにかく、無事下山できたのはうれしいことだと思う。この合宿が成功か失敗かは、その後の活動で決まる。皆、これからがんばってけると信じている。

最後にPLの技量不足を補ってくれたパーメンに感謝するしだいです。みなさん御苦労様でした。

# フリー ワゴン



## 尾 瀬

2年 奥 丸 考 司

## 大 山 F W

尾瀬は東北の最南端にあり、それを取り囲むようにして、至仏山や燧ガ岳、会津駒ガ岳などがそびえ立っている。これらの山々の特徴は二千メートル程度の高さであるが、六月でも雪が深く積っていて山を下る時は、アイゼンが必要なくらいである。特に燧ガ岳から尾瀬沼へ直接下る時など、傾斜が非常に急で、しかも雪が堅いので、ヒールキックがきかなく何回もすべってしまった。

またこの附近の山々は、頂上附近が湿地帯となって高山植物の宝庫である。このあたりは、残雪量が多く、水はけが悪いためかもしれない。とにかく頂上附近に、木道や立看板が目立つ。

みなさんは、「尾瀬」という言葉を聞いてもよくわからないかもしれないので、尾瀬についてくわしく説明すると、尾瀬は、尾瀬沼と尾瀬が原とに分けられ、どちらも同じ湿原である。そこには、高山植物がたくさん育ち、特に水芭蕉や日光キスゲなどが有名である。この平原には、木道がたくさん敷かれ、観光客も手軽に歩くことができる。また、このあたりは、雷が発生しやすく、午前中快晴でも午後になると雷とともにひょうが降ってきて天候のめまぐるしさを知ることができさる。

このように尾瀬というところは、ある程度観光化されているが、すばらしいところである。

「今度来る時は縦走しよう」とつぶやいた彼の言葉がこのFWで一番心に残るものだったと言っていていいかもしれません。

大山は、近年、崩壊が激しく、今回も夏山登山道のピストンと西側の天狗ヶ峰までのピストンのみの行程でした。縦走することが私の希望でしたが、希望は希望にすぎないこと、自分の山行技術不足を考えさせられ、断念したわけです。今回、AさんとNさんと私が見た山陰線の車窓にひろがる日本海や弥山までの登山道の心地良さ、山頂からの大山の裾野、険しい北壁と南壁は、大山のほんの一部でしかなかったのです。それでも大山はそれなりに新鮮で大きくて、弥山山頂で、遠く続く縦走路は本当に大山を感じるものでした。

伯耆の空にそびえたつ

南壁 北壁 岩の肌

雲湧きあがる谷間より

歌声高くこだまする

ああ 大山の峰に立ち

輝く青春はるかなり

Nくんがまたいつか日本海を見ながら、南壁、北壁の厳しさを感じながら、縦走できる日を楽しみにしています。そう、大山は緑と光と小鳥がいっぱいだからね。



## 白山 F W

## 御来光にかける執念―白馬岳 F W―

清水 智 美

吉 田 美 樹

夏合宿でアルプスの自然を満喫した後、そのアルプスをはるか遠くからながめてみたいなあと思えて、私はみのちゃんを誘って白山 F W をたてたのでした。

中宮温泉から入山して白山室堂まで縦走し御前峰と別山にピストンをかけるコースを選んだのですが、合宿後のだるさと暑さでかなりきつい行程となりました。

白山を歩いて思ったのですが、白山はとても植物が豊富で、中宮道ではブナの原生林やダケカンバ、ひかげにひっそり咲くアジサイなどを見たし、白山頂上付近や別山では、ハクサンコザクラ、ハクサンイチゲ、イワギキョウなど多くの花が咲いていました。ゴミ持ち帰り運動も定着していて、登山道はゴミが落ちていないし、御前峰付近以外はまだ人がはいることもなくひっそりしているので、北アルプスとはちがった静かな山を味わえたような気がしました。白山は、まわりのお木々を、足もとの草花を、雄大な山容を、どこをみても、心が安らぐそんな山だと感じました。また白山頂上から、白馬、槍穂、乗鞍、御岳を見渡すことができた時、しばらくは言葉を発することができなかつたし、また発してはいけないような荘厳さがそこにありました。いろいろなハプニングはあったけど（みのちゃんごめんね、迷惑かけました）、この静かな山行は深い思い出の一つになりました。

松本ほんぼんで踊り疲れた翌朝、松本駅発 5:15 の汽車で白馬に向います。この日の予定は大雪渓を登って頂上宿舎まで。一本でもう足が動きません。合宿の P L の任務から解放されたたん、だだこねの始まった八川さん、登る気のまったくない S L のきゃおりと私、迷っている武田さん、これでは初めから結論は見えていました。上田 P とテッ場が同じであることに、ラッキー！ と言いつつ、白馬尻にとつたのでした。

八月八日 アイゼンをつけ、大雪渓にとりかかります。相当に急登のはずですが、目新しさとおもしろさで、それほどきつくはありません。さすがに白馬ともなると、ギャルの花も咲き、いつもと違うといえば、赤い T シャツぐらいで、夏山ジョイルック、と気取っていた私たちは、自己満足に浸っていたにすぎなかったようです。

八月九日 御来光をみざして三時起床予定。しかし出ました。八川さんの一時間チョンボ。アルプスで御来光どころか、昼間のお日様もろくに拝めなかった私たちの執念はすごいものでした。エッセンを交替で作りながらテントの中でパッキングをし、一時間で出発。また S L の足の速いこと。「頂上宿舎にザックを置いて行きましよう」と、のどまで出かかっていた言葉をのみこんで登って私でした。（結局十分のコースタイムは、二十六分に縮まりました。まさに女の執念であ

りました。頂上について三分後、考えるとアルプスでは初めての日の出を見ることができたのです。太陽とは、なぜこんなに神秘的なものでしょう。これで雨にたたられて終わった合宿も、少しは報われる気がしました。時間がたつにつれ、見える景色も変化していきます。槍、剣、中央アルプス、日本海。自分が登った山域には懐しい目を向けてしまうから不思議なものです。20歳のしめくりの日にこんなすてきな風景を見ることのできた私は幸せ者だなあという気がしました。雨も多く、クラブの一大行事としてとりくんだ合宿のあとに、3日間とも晴れ、気軽なFWができ、同じアルプスでも、気分的に全然違う山行であったなあと感じます。

## FW 穂高―槍

### 山科謙二

「さあ、ラストだ。行くぞ」

このFWのピリオドを飾る最終ピーク、槍ヶ岳への登攀の合図だ。

去年合宿で登ったときは嘘のように簡単だ。




頂上は見渡す限りの展望。雲ノ平、立山、燕岳、常念岳、そして穂高。

「よう来たのー」リーダーの岡崎さんがポツリ。急登の前穂、鎖の吊尾根、ビビった瀬沢岳、落石の大キレット。いい思い出だ。

岡崎さん、THANK YOU VERY MUCH。こんなば

くを連れて来て下さって。来年はぼくが連れて行く番ですね。そしてあなた以上の人物になります。見て下さいね。

### 行程

- 1日目 上高地―岳沢ヒュッテ 
- 2日目 岳沢ヒュッテ―前穂高岳―奥穂高岳―穂高岳山荘 
- 3日目 穂高岳山荘―瀬沢岳―北穂高岳―南岳避難小屋 
- 4日目 南岳避難小屋―南岳―中岳―大喰岳―槍ヶ岳―槍沢―横尾―徳沢―上高地

## '83 芸北 F・W

### ―ヴァラエティに富んだ秋合宿―

一年 SL 阿須賀 謙 治

十月下旬、秋たけなわ。みごとに紅葉した芸北の山波・三段峽は、私達に様々な体験をあたえてくれた。苦しいながらも素晴らしい山行であった。

十月二十八日、湯田温泉駅を先輩方の見送りの中、一四時八分発の列車で出発。横川駅を経て三段峽へ向かった。途中、可部線に乗り換えてから、PLの山科さんが、数日後の中四合Wを意識してか、得意の広島弁で、

「あんたらあ、ゲームしようか、ええ」と言い出した。結局、一年の太田、渡辺、私は「芸」をするはめとなり、車内の通路で、私は手押

し車、太田はクマ飛び、ナベはインキンおどりを、乗客に対するはずかしさと自分への情なさ、先輩への憤りがいりまじった不思議な気持で遂行したのである。かくして三段峡駅へ午後八時半に着き、近くの駐車場できらめく天の川を見上げながら遅いエッセンをとった。何とか天気の方は心配ないようである。

翌朝、五時半起床、見るとあたり一面に靄がかかっている。芸北叙情の「朝霧たちこむ……」のくだりそのものである。七時半、少し霧もはれたころ出発。SL、私。セカンド装備のナベ（渡辺）。続いてエッセン、太田、二年生、竹中さん、岩谷さん、そしてPLの山科さん。一路、内黒山七五〇メートルの急登を目指す。谷をつめていくルートであるが最初からブッシュであった。そのうち身動きがとれなくなり、左にはずれた尾根を直登することになった。少なくとも四五度はあろうかと思われるわきやわからん急登である。私はザックが軽かったからよかったが、六天を背負ったナベはバテ気味である。木もれ日が木々にあたって、葉っぱを黄色にひからせているのがいい。

ようやく登りきったところで今度は漆地獄が待っていたが一気に稜線へ出た。芸北のなだらかで柔和な曲線を描いた山々が見える。その側面は、紅・黄・茶・緑に彩られている。内黒山まで来ると道はしっかりしており、右手に深入山を臨みながら歩いて行く。深入山は、何処から見てもその形は丸いと言われる。竹中さんが、まだ髪の毛がはえそろっていないKさんの頭のようにだと言って笑わせた。

内黒峠で差し入れのパイナップルを食べて、ひたすら十方山にむかって歩く。途中、空模様があやしくなってきたが、雨男を自称する竹中さんが何やら岩谷さんに謝まっている。丸子頭手前の辺から突然笹ブッシュに入った。一時過ぎたころこの笹の中で昼の食事をとった笹

をかきわけやっとの思いで十方山に着いたのが三時半であった。

十方山（一三一九）。そのピークは平坦で南側にスキの平原が広がっている。羅漢、寂地、冠山が見える。そこですかさず写真を取るが、山科さんはZIPPOのライターをとり出し、タバコに火をつけるポーズで、

「十方でジッポー。」

そこで広大ワンゲルのOBのメツチェン三人に出会ったが、最初に話しかけたのはやはり山科さんだった。

あとは天場に急ぐだけ。水越峠に降りて二軒小屋というところまでロードして、そこが今日の天場と決まった。疲れました。

最終日の行程は、恐羅漢山、砥石郷を縦走して田代出合から三段峡ロードして三段峡のコースに変更となった。

午前六時四〇分、ポリタンの水が凍る冷気の中を出発。テントが凍みついているので、撤収はピストンしたあととなった。恐羅漢へは、スキー場の中を通っていく。山頂は高木がまだらに成育していたが、はるか大佐山やうっすらと日本海を見えた。そこから旧羅漢（恐羅漢より六〇センチ高い）へピストンして、天場にもどる、すばやくパッキングして三段峡を目指した。

三段峡。老年期の山肌を深くけずり、切り立った岩壁や暗緑色の淵を形成している。狭い道幅が川の流れに沿って入りくんでいる。

我々は、昼の食事もとり、FW最後の峡谷美を楽しみながら歩いてきた。日曜日とあって行楽客が多いのでザックが接触しないよう気を使った。突然、すれちがった二人組の女性に、この先でお婆さんが滑落しているということを聞いた。しかし、私達が現場に入っても救助

できるのだろうかという不安があったし、道から川までの高さが場所によっては二〇メートルくらいあるのでどうかと思っていたがとにかく急ぐことにした。だが知らせを聞いて三〇分ほど歩いてもお婆さんどころか人垣さえも見あたらなかった。結局、行き過ぎていた。黒淵方面からかけつけた人に現場をおしえてもらうと約一キロメートル走って引き返した。そこでは、一般の人が二、三人応急手あてをしていてたが、かなりひどいようである。山科さんと竹中さんが下に降り様子を見てから、からにしたザックと全員のキスリンググローブを使って、六メートル下のお婆さんを下から押し上げ、慎重に上からは引き上げた。山科さんの合図で岩谷さんと竹中さんが救急連絡に走る。グラウンドシートとポール、竹ざおで作った簡易担架でタクシー乗場まで運ぶが、無理な体勢からか手と腕の感覚がなくなった。そしてようやく、救急車が来てお婆さんは病院に運ばれた。(一週間後に山科さんのところに連絡があり、お婆さんは助かったとのことだった)

血のついたザックとメインロープを洗いながら、ほっとしたような竹中さんの表情が印象的だった。山科さんも、衛生、応急処置の勉強を徹底させる必要があるとおっしゃった。

再びパーティを編成したころには、列車の時間が迫っていた。三段峡駅へといそぎ歩きながら、みんな、色々あった今回のFWを心の中で反芻しているようであった。

芸北FWの体験から私は大きな経験を得た。そしてワンデリング活動が本質的に自然に親しみ、とりくんでいくものであるかぎり、そこには必然的に「事故」というものが伴って来ることをあらかじめ認識し、そうした活動が、最悪の場合に対処できる方法によって裏付けら

れていなければならないことを痛感した。この裏付けがあつてこそ、自然に対する感動も本当になるのであり、それを見る目も深まってくるのだと思う。

## 霧島FW物語

木村忠由

濡れに濡れ、噂通りの合宿だった屋久島を後にし、私達のパーティは、計画通り霧島へ行くこととなった。正直言って、一年生三名(木村、中桐、下川)は、もう霧島など眼中になかった。無性からだがだるく、無気力充実。早く古里に帰りたかった。僕達は、密かに『反乱』計画をたてていた。「テントもたてまあ、飯もつくるまゝでし。」これが、一年三人の、不屈きな意見だった。

しかし、FWは強行された。私達には、FWの計画を中止することなどできやしなかった。畑瀬氏の丸い目が、清藤氏のどすのきいた声が、太田氏の沈黙が、北野氏のけたたましさが、私達を威圧した。顔を見合わせた一年三名、無言の表情にあらわれるそのやるせない気持ちはお互いに「行かなければならない」という思いで通じ合っていた。まだ顔にあどけなさが残る彼らーまだ18、19であるーは、残された試験に向って闘志を燃やした。夕日が赤かった。不思議と体が熱い。

初日は、韓国岳への登りである。ホーベンの登りと同じように、ていねいにも階段がつけてある、一步一步だるい登りだ。階段というの

はその肉体的な努力もさることながら、自分はあと〇歩登らなければならぬというノルマを、その頂上へ向う線の羅列によって目前に印象づけられることによる精神的苦痛が大きいのだ。階段を登ることは、それを作った自治体や、それを許した環境庁、さらには鈴木内閣への怒りと、政治的問題の感情へと発展する、つまり、からだがきついていると、他に転嫁しようとしている。今は、わがままな思いが脳中をかきめぐっていた。

下からみる頂上はガスっていた。しかし、やっと頂上につくと快晴そのもの、「来てよかったのー」素直な一年生三人組だった。お互いに笑うその表情には、今までこのFWを嫌がっていたことへの照れやばかばかしさが入りまじっていた。山はいつでも俺達を受け入れてくれた。

ヒバリは空高く舞い、ミヤマキリシマは芽をつけ、春は待ち顔、眼前には、長い冬を終えた草原が風に吹かれて波を打っていた。皆の笑顔はそれらが働きかけて自然に生まれてくる一種の美しささえかもしだしていた。キラリと光る皆の歯は輝やっていた。しかし、少し黄ばんでいた。

稜線を歩いてみると、高千穂の峰が天高くそびえていて、歩くたびにずんずんと近づいてきた。これが稜線漫歩というのだろう。私達はこの計画をたてて下さった先輩たちに感謝した。楽しい一日が終り、高千穂河原のテニ場についた。そこには、若人の声がこだましていた。

次の日は、高千穂ヘピストン。火山灰特有の荒々しさが私達を小さくさせた。頂上では雪が舞い、眼下には九州特有の風景が広がっていた。十分楽しんだあと山をおりた私達は、バスの中で合宿、FWをふりかえり、やがて安らかな眠りについた。山を愛することを知った私

達一年生もやがて眠った。心地よい眠りだ。

俺達はしあわせ者だ。私は思った「山を知った俺達は、山を知らない人々よりも、より美しい心を持ちえたのだ」と。

## 九重 F W

内 田 真由美

今年、私は春と秋に二回ほど九重へ行き、それぞれの良さを味わってきた。

若葉色の眩しい五月、まだ入部して間もない時の初めての本格的な山行は、ただただきつかった。歩いて歩いても歩いてもいっこうに坊がつるに着かない。

しかし、そんな思いもいつの間にか消えていた。五分咲きのミヤマキリシマが山肌を染める平治岳、キャンプ場の前に聳える三俣山、そして久住山。自分が雲より上にいることに気付いて、ああ、本当に山に登っているんだなあ、と実感した。

とても楽しい山行だったけれども、生憎天気がすぐれず、今度また来たいと思いつながら九重を去った。

そして秋。今度は目茶苦茶いい天気が続いた。おかげで春あきらめた大船山に登れたし、中岳からは阿蘇や祖母、傾までパッチリ見えた。特に臉に焼きついているのは早朝登った大船山からの眺めである。日の出には間に合わなかったけれども、日の光を受けてオレンジ色に輝

く雲海、その波間から頭を覗かせている遠くの山々、九重連峰……。すべてが素晴らしかった。

九重は女性的な雰囲気を持っていると思う。あそこに行くとなんとなく落ちつくような気がするのだ。まだ行ったことのない人には、私は勧めたいと思う。

## 富士山完全登山

工学部修士2年

丸山 庄治

(工学部57年卒部)

大学受験のため、発狂せんばかりに勉強していた四年のある暑い夏の日のことだった。疲れたので、ふと昔の山溪を本棚からとり、パラパラとめくっていたら「海拔0メートルから富士山に挑む」(高橋稔山と溪谷、P52、11月号(1980))という記事が、目についたので。読んでいくうちに、体が熱くなってきた。これが、この登山のはじまりである。

一年後、すなわちM1の夏、山口から東方便へ大峠、鼓ヶ岳―山しよ峠―ホタキ山―小郡を、ナイトハイクで縦走する計画を立てた。私は、現役時代、自分の限界を判断できず、二度も遭難し、死地から先選してきた経験をもつので、そのため、まず自分の体力の現状を知る必要があった。

1980年7月31日～8月1日

23:00 TシャツにGパン。背中サブザックには、ポリタンと地

図とチョコレートがはいっているのみの軽装で、山口駅を出発。二ツ堂までは、小走りに急ぐ。懐電を用意していなかったもので、月明りをたよりに、方便を登りはじめる。肩からピークまでは、快適なナイトハイクであった。人間、目が慣れたらなんとかなるものである。ピークから、後を振り返れば、霧の滝が佐々並側から山口方面へ、ミルクのカーテンのように、流れ落ちていく。これが、また、月明りに映って、ひどく幻想的な光景だった。

地藏峠から西方便までは、濃いガスの中、防火帯を行く。同じ地形が、何度も繰り返され、ひどく寂しくなってきた。ふと、北杜夫の「少年」が思い浮んだ。西方便のピークで夜が白みはじめてきた。はじめの予定では、丸岳を越えて、大峠に行くことにしていたが、時間がかかりそうだったので吉敷畑に下って、大峠に登ることにした。

大峠からは、ブッシュだ。鼓ヶ岳をめざすが、Tシャツだったので体中が痛い。結局、あきらめて、馬路峠の方へ巻くことにした。ああ、江嶺山が、いい眺めだ。町絵川の上流から、山しよ峠に行こうとしたが、地形が把握できない。この山域は、現役時代、何度もヤブコギをしたところなのに、私もおちたものである。七曲へさえも行くことができなかった。行ったり来たりで、結局2時間ぐらい時間つぶしてしまった。しかたがないので、長田に出てから国道を、小郡に向って歩くことにする。

真夏の炎天下、アスファルトの上を歩くのは、まさに、地獄だった。直射日光をまろにうけ、体は完全にオーバーヒート。80km耐久徒歩の比ではない。とても、まともに歩くことが、できなかった。結局、昼すぎ、上郷で、小郡駅まで歩くのを断念した。

しかし、この山行で、暑い昼間の行動は、不適であるということを、

身をもって体験した。

8月13日～14日

2週間前のナイトハイク、1週間前、九大との合同セミナーの合間に登った九重。体調は、まずまずのようである。台風10号のため、富士川の鉄橋は、流されていた。富士駅で、ロッカーに、いろいろな装備をつめこみ、近くの本屋で、地図を買う。ベンチにすわって、ルートを検討するが、山頂まで、予想以上に、遠い。

東田子ノ浦で、海岸にたたく。こもれ陽が、波に反射して、金色に、キラキラと輝いて、美しく、今から、自分がやろうとしていることが、ひどく別世界のように思えた。

16：40 山頂が、ガスって見えない富士山に向かって、いざ出発。

富士岡を抜けて、間門町あたりで、日が暮れた。さらに今宮で右に折れて、丸火公園入口の方へと向う。さらに、少年自然の家を通り木和田窪に出る。ここからは、天照教林道を歩く。22：55 境塚林道出口で坐り込む。星の出ていない晩、一人寂しい林道を歩くのは、やはりおっかない。何度もビバークを考えるが、実行せず。気をとりなおして先に進む。さらに大淵林道を歩く。自分の足音だけが、あたりに響き、なんともいえず、気味が悪かった。足の痛みを少し覚え、1：45 不動沢付近でビバークすることにする。サブザックから、シユラフを出して寝るが、もろ、体温が地面に逃げる。さすがにTシャツだけでは、1000mを越えると寒い。2時間ほど、うとうととしていたが、突然、数人の女の人の笑い声が聞こえる。気のせいであろうが、あわててとび起き、出発することにする。

薄明のはじまる頃、富士山のシルエットが浮ぶ。西日塚駐車場にはあたりが、白みはじめた頃に出る。ここからは、アスファルトの道だ。

果しなく曲りくねった登山道路を、ヨタヨタと歩く。

6：00 高鉄山バス停で、疲れのピークが来た。道路をはずれて、また、ビバーク体制にはいる。しかし、寒さで、すぐ目がさめてしまった。

6：45 しかたがないので、また出発することにする。この時ほど、時間の流れが、ゆっくり感じられたことはなかった。ふと、北海道の利尻山に登った時のことを思い出していた。あの時も海拔0mから登ったのだ。しかし、すでに、利尻のピークは越えている。何故、こんなことをやっているんだろうか。と、何度も何度も、心の中で自問自答が繰り返される。なつかしい南アルプスの一部が、見えてきた。心なごむひとときである。

天気は、どんより曇っており、いちばん気にしていた暑さは、まったく感じられない。表口登山道路を歩いている私を、車が、つきつきと追い越していく。文明化、そして自然破壊。実際に歩いてみると、よく、わかる。

9：00 新五合目に到着。すごい人ごみである。一瞬、雲のきれ間から、山頂のドームが光るのが見えた。ここまで来れば、あとは、気の持ちよう次第だ。赤茶けた火山砂礫は、足がとられて非常に歩きづらい。何度か、吐き気をもよおしたが、気力を振り絞って登っていく。フラフラになりながら、13：15 頂上の神社に着いた。ここで、地図を広げて記念撮影をパチリ。神社横の郵便局で、友人たちに葉書を出す。ここから、さらに測候所をめざす。最後は、はいつくばりながら登っていった。13：40 測候所着。とうとう来たのだ。日本の最高峰、剣ヶ峰。「富士山に登らないバカ、二度登るバカ」そんな言葉の思い出した。私は、富士山に海から登るバカなのだ。

雨が、パラパラと来たので、急いで下ることにした。下山路は、途中から、登山路と違う近道に行く。これが、また悪夢だった。砂礫の中に、ひざまでもぐってしまふ。重力の法則で、体重は下に向うのだが、体がついてこない。もがくように、走って下った。新五合目が見えた時は、さすがに、全身から、力が抜けてしまった。足は意に反して、動いてくれない。最後の200mぐらいは、休み休み下った。

16：20 新五合目着。ほぼ24時間にわたる死闘も終わったのだ。ここから、バスに乗り富士宮へと向う。苦勞して登って来た道路を、バスが一気に下る。

この日、私は、昔遭難した時世話になった小屋の人たちに礼をいうため、再び、北アルプスを目ざし、夜汽車に乗り込んでいた。体の底から湧き上ってくる充実感を覚えながら、遠くの街の灯を、ぼんやりと見つめていた。そのうち、疲勞とビールによる酔いが、体を包み込み、私は、ここちよい眠りにおちていた。

最後に

ワングル6年間、特に工学部に来てから、いろいろあった。沢、岩、厳冬期そして、初春の北アルプス、春合宿で韓国の山に登ったこと、南アルプスのブッシュ合宿、その他、数えきれないほどの山行、が、何といっても、2度にわたる遭難が私の最大の出来事だった。あの時は、学校ならびに諸先輩方に多大なる御心配と御迷惑をおかけした。この誌面を借りて、お詫びと感謝の意を表したい。

後輩諸君に切望する。

ワングル精神とは、チャレンジ精神だ。わずかでもいい、可能性を見出し、そして、実行せよ。明日のために……。

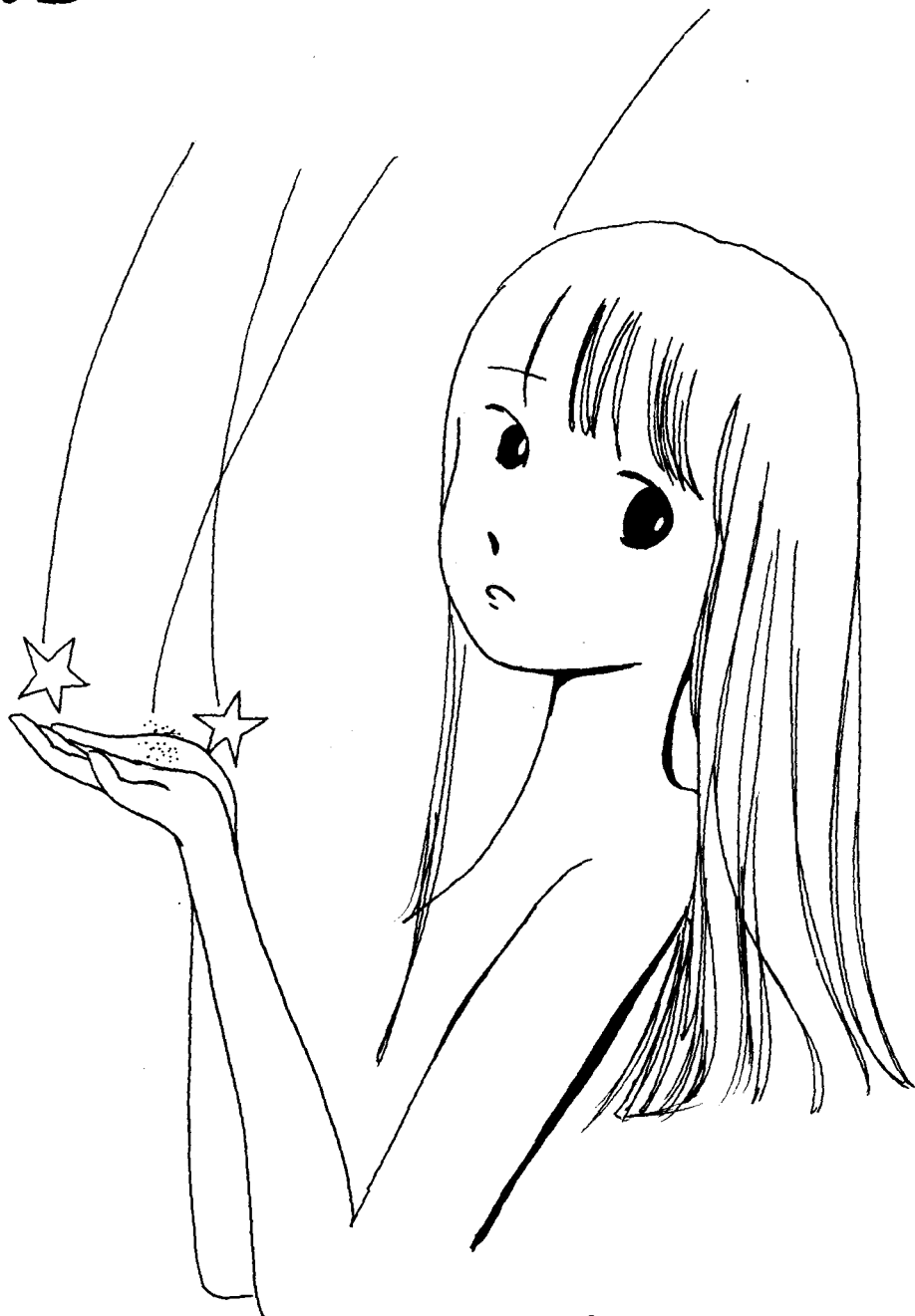
ワングル万歳！

※注意事項 富士山を完全登山する者のためにいくつか注意事項を述べておく。

1. 使用地図 エアリアマップ 富士富士五湖（昭文社）
2. ルート 東田子ノ浦→富士岡→今宮→少年自然の家→木和田窪→天照教林道→大淵林道→表口登山道路→新五合目→頂上  
低標高での行動は、なるべく暑くない夜間の方がよい。林道はよく確認して、決して近道をしようとは思わないこと。登山道では車に気をつける。
3. 装備は、徹底的に軽量化すること、ポリタン1ℓ、シュラフカバー、地図、非常食
4. できれば、単独の方がよい。（自分のペースで行動できるから）
5. その他不明な点があれば連絡を。



ふろふいーる



Nana.

## 二年生

水津 千加司

ワングル部員中、屈指の豪雪地鹿野からやって来た彼は、出舎もんである。しかし、顔立ちは、熱血少年マンガの主人公が如く何もかもが引き締った美少年風である。「田舎をバカにすると許さん」と地の底から湧き上がるような声で言われれば、こちらが田舎者であつてもたじろいでしまう。

内賀 重信

この半年で、内賀といえばナマケモノ、ナマケモノは内賀、という意識は定着してしまつた。また彼は夏合宿後の松本で、時間つぶしに四時間も五時間もマンガを立ち読みしていたほどのマンガ虫であるが意外にも、二回生の中で一番の読書家でもある。暗い部屋で、うすむらさきの布団にくるまっている彼は、ワングルに欠かせないキャラクターを持ち主である。

阿須賀 謙治

彼は一見渋く落ち着いているようだが、実はゴリラでありただの「大バカ」である。林家三平を尊敬し物真似に命をかける彼は人の個性を失わせる悪癖を持つがその犠牲者第一号は彼自身であろう。彼は酒に強いという特性を生かし先輩、同輩を問わず日夜交流を深めることに燃えている。万一、酒に飲まれると「キングコングの襲撃」を思

い出させる。

笠原 洋司

わけのわからん男である。酒乱笠原の異名を一新しようと必死に努力する姿には感心する面があるが、人間というものはうまくゆかないもので、最近はそのしわよせにかなりの欲求がたまり、睡眠中でも隣で寝ている者を殴ったりする。また、下宿の便所があまりにも汚いため、三日も、四日も、がまんして、友人の下宿で用を足すのである。噂によるとそのキジは3kgにも及ぶという。事実、トイレから出て来たときの顔には「ポリタン一杯の幸せ」が満ちている。

富田 和郎

「ヤンキー」の名で知られている彼は、その容貌（頭はチリチリ、側頭部までの判り込み、グレーのカーデイガン、黒いブーツ、そして蛇のように鋭い目。）からは想像できないような何の変哲もない、「バツテンクサ」の博多っ子である。しかし、山とエレキギターに関しては、かなりの実力者のようである。

永田 勝彦

福岡国際マラソンで瀬子とともにロス五輪出場を果たした宗兄弟は実は、彼と58・OBの棟久氏ではないかという話があるが、そんな根も葉もないことを言う奴は、彼に説き伏せられるであろう。何故なら彼は、「男のオバチャン」であるから。とにかくよくしゃべるが、その現実的な意見には敵しさが感じられる。また酒の席では「青い山脈」に始まる曲のメドレーで、確固たる地位を築いている。

荒木 雅彦

みんなは彼を「ダミアン」と呼ぶ。まるで天を褐色に染め、地を裂き、人々を狂気に落し入れる主であるかのように。そして、畏怖の念を抱いている。因に、トランプの「貧民ゲーム」では、666のダミアンは、333のブラボーにも、777のファイバーにも優る。「山椒は小粒でもピリリと辛い」奴である。彼の唯一の弱点は「十字架」である。

吉沢 毅

彼は自らを「孔子」と呼ぶ。だが彼のどこに聖人孔子のような倫理的態度が見られるというのだろう。飲み会ではいつもいじめられ、トレーニングの時には汗臭い服で不快感を与える。また内質と同棲していることは周知の事実である。ただ、一面だけ孔子といえる部分は、高校時代山岳部だけあって、いざというとき頼れる。また面倒みのいいところである。

太田 知宏

根っから真面目な男である。部屋はいつも整理しており、洗濯物もためない。授業もほとんどさぼらないし、人文学部では難しいとされる独語もクリアした。先輩の言うことには口答えはしないし、トレーニングをこよなく愛している。そんな彼の難点をしめて挙げるとすれば、自分の両親を「佐藤さん、岸さん、今からですよ」と間違えるほどの酒好き（酒乱？）であることだろうか。

野上 貴行

大阪は富田林出身の彼は、河内の狼少年である。二回生中、一番の

駿足の持主であり、その髪をなびかせて走る姿、何よりもタラコのような唇は、「狼少年ケン」そのものを彷彿させる。そんな彼であるが現在の主要資金源は、何故か常盤旅館の太鼓叩きだ。ドンドンドン、カラカッカ、ドドン、ド、ドン、

秋本 和博

ワングルの中で彼とコミュニケーションが成り立つ者は、極めて少数に限られている。マサ氏・ギリ氏と同じ下宿に住んでおり、説明書を読破するだけでも気が狂いそうな「ウォーゲーム」を、ピリー・ジョエルの曲をバックに、ひとりで何事かいいながらやっている。かと思えば、酒の臭いがするところには神出鬼没のアキである。

山本 直樹

とうとう現れた。私は、かつてこれほど八方破れの男を見たことがない。笠原とともにワングル維新軍団を形造っており、夜襲の王としての名は、以後の山大ワングル史に残るであろう。彼の論理はまさにヤブレカブレであるが、逆にそれだけデリケートな面をも感じさせる。「ウォー」「ありや直樹が来た」

半田 栄志

「小さな巨人」とはまさに彼のことである。夏合宿の錬成で、彼は自分の体重（48kg。実際、ワングルのメッチェンに彼より軽い人は存在しないという話もある。）と10数kgと違わないザックを背負っていた。後ろすがたは、メッチェンもかわいと思うほどだが、とふり返

れば、クルクル眼鏡の半田君である。

井上 宏 史

クールな奴である。オール・バックの髪をかきあげながら開く口からは、必要以上の言葉は出て来ない。そんな奴であるから、工学部五人衆（井上・笠原・内賀・半田・吉沢）中で来年宇部に行く確率が最も高いひとりとして誰もが信じて疑わなかったが、何を隠そう、今彼は背水の陣なのである。頑張ろう、お互い……。

山本 隆 久

彼は辛酸をなめつくしている。それは、北九州弁、東京弁、山口弁を折衷したしゃべり方からもいえるが、何よりもあのからだを折り曲げた寝姿に、彼の屈折に満ちた人生の全てを見るのである。酒は強いが酔えば、車にはぶつかるとどぶには落ちるので、ここでも労苦は絶えない。それだけに、彼に「ナニ」とにらまれると我々は何も言えない。

渡辺 成 幸

彼は高校時代、生徒会長を務めていただけあって、しっかりものである。また、彼の声の渋さは、ダミアン荒木にも匹敵しておりメッチェンにも定評がある。しかし、「ナベ君、シブイ声しとるんやネェ」と言われた本人は、ヨークシャー（ブタの一種）のような白い膚をピシクに染めて、はじらいを見せるウブな男である。

小島 美 樹

みきちゃんて一見たよりなさそうに見えるけど、実はしっかりもの

です。そして人のことをよく気遣ういい子です。

二年生の中ではいちばん遅く生まれたのに、「畑中葉子」とよばれるだけあって、物知りでもあります……？ あどえへ。

内田 真由美

大きくてくるくる動く瞳、右6℃方向にかしげた首、愛称うっちゃん。日頃は無口なうっちゃんが、唐突に話すことはウィットに富み周囲の笑いをさそいます。おとなしいけれど存在感のある彼女です。

岸下 みは

遠い雪国、山陰・豊岡からはるばるやってきたあどえへ少女・みほちゃん。その独特な口調と表情で思わず周囲をほのぼのとさせる彼女の素顔は、真面目で心優しいロマンチストなのです。決してケロヨンなんかではありま……？ あどえへ。

本田 智子

気っふのいい九州っ娘・ちえ蔵は、頼りがいのあるお姉さんの存在です。彼女の笑顔は周りの人間をも嬉しくさせるけれども、それに加えて最近「お……かし……」を連発しております。（ちなみに彼女は今、新しいパターンを考案中のこと。）

## 三年生

浅野 哲郎

工学部生の彼は、あの黒のユニホームにあこがれているが、まだ着ることができないでいる。しかし、行動力に優れていることはみんなが認める事実である。そんな彼であったが、今秋ついに教養に単位を忘れたまま宇宙へ隠居してしまった。

天野 雅紀

とにかく、けたたましい彼である。あのケタケタ笑いは一聴に値するだろう(?)。'82夏合宿での「おかあちゃん絶叫事件」は記憶に新しい。山口に住まいしているため、最近、赤のスカイを購入。さっそうと乗り回している彼である。

石井 勝

気はやさしいが力持ち、そんな形容がびつたりの彼である。音楽をこよなく愛し、ギターの腕前は抜群である。薬師丸ひろ子の大ファンで、彼の部屋にあるポスターの唇の部分が色あせているのは、彼が毎朝キスするからだとのうわさもある。

岩谷 明彦

根はやさしいのだが、山陰出身という一点でいじめられている。クリスマス会での「紙吹雪事件」は、彼を恐怖のどん底に落とし入れた。

本人は気にしていないのだが、彼の擬態語はおかしらしい。

岡部 浩典

一見若そうに見える彼だが、実は一番の年寄りなのである。そのため最近では、ちょっとしたカゼの治りも遅く、本人も気にしている。「ホリンガ」などの岡山弁をあやつり、真剣な顔つきで怪談を語る。

奥丸 考司

煙草をくわえ、麻雀するさまはまさに勝負師である。独特の理論をもち、学年会で話す時の彼の口癖は20にも登る。それをみんなが、一つひとつ観察しているので、そのうち彼は失語症に陥るのではと恐れられている。

尾崎 幸司

大きな顔に小さくまとまっている顔だちの彼は、実は手足が短かった。そのため、オットセイにもたとえられ、一部ではミニラ、ピグモンともささやかれた。最近では、マンガのキャラクターから「ハート尾崎」といわれている。また、ウルトラマンゲームで奮闘する彼の姿は、思わず笑いをさそう。一見の価値あり。

尾和 寛幸

非常にどんくさいために、雷鳥と言われた彼であるが、バイクの免許も取り、今ではCBX400を乗り回している。また、彼の話し方は、句点がなくわかりにくいといわれている。しかし、何故か、メッセンジャー受けのいい、やさしい彼である。

木村 洋司

うなずきながら食事をする癖のある彼は、一見、さだまさし風である。無類の酒好きで、夏ともなると彼の下宿はビールびんであふれるという。酔うと放浪癖のある彼であるが、山行経験は豊かで、学年会でのオピニオンリーダーとなる。

斉藤 直樹

衝撃の入部宣言は波紋を呼んだ。通称「変太郎」、その名の如く変である。しかし、そんな彼の実態を知るメッチェンは少ない。甘いマスクと赤いセレステを武器に、メッチェンを求め歩いていたが。最近はなりをひそめたようである。彼に何が起こったか……？

竹中 秀四郎

酒に酔い数々の御無礼を働いてきた彼は、やはり豊浦の出身であった。VT250を駆り、メッチェンに乗せて走るのを夢としていたが、夢は夢であった。一本気で男くさい彼であるが、ピアノの名手で、ポピュラーからクラシックまでをひきこなす。

野村 雅兄

美少年である。体がひきしまったためであろう。82夏合宿で、下痢のため7kg減量した甲斐があるというものである。そんな彼であるが、オッチェンの間からは「牛」とみなされている。短気で、動きのぶい教育学部生である。

松本 勲

筋肉モリモリの筋肉マンのゴリラである。切れ上がった目つきは野獣である。金と女と食物と、欲望の趣くものにのみ関心を寄せる。しかし、アメリカ人女性との恋愛経験もあり、国際的な農学部生である。

山科 謙二

宴会部長である。日々、演の研究をしているという。親しみ易い性格で、メッチェンとのコンタクトを求めているが、実は、メッチェン要注意人物なのである。また、山行中、毎食後にキジうちに行くという話は、あまりに有名である。

荒二井 照子（あーちゃん）

大先生と呼ばれる彼女は、同輩、後輩からだけでなく、先輩からもあがめられている。一見クールだが、笑うと目が愛くるしく、表情の変化に神秘性を感じる人も多いだろう。オッチェンは飲めば、結局、彼女のもとに戻るといえるのが、聖地と呼ばれる由縁である。「Sさん私はたいこのことは許しますがねー」というTeruの一声はあまりにも有名である。

兼光 美野（みのちゃん）

「さみしさをいいわけにはいけない」彼女にびつたりの言葉です。みんなからいつも美のちゃんと呼ばれ、酔えば、いや酔わなくても、水戸黄門の華麗なおどりを見せてくれます。名物本田さん譲りのだじゃれを飛ばしている時も、何か文学的なおいを漂わせている彼女です。

近藤 香織（きやおりちゃん）

ほそこい体できやらきゃら笑い、話していると本当に楽しくなる娘です。働かないという、本当(?)のうわさに彼女も苦労したらしいですが……。何か失敗したって許してあげますよ。「だってえ〇〇ですものおー」というかわい言葉と、きゃおりスマイルさえあれば、ね、きゃおり♡は、にんじんを食べて、毎日の活力にしています。

坂田 良子（Ryoko）

ケーキ、チョコレートなど甘い物が大好きで、これらを目にすると彼女独特の「だはは笑い」を引き起こしてはしゃぎ、また料理もうまく、ピンク色を好むというまさに典型的な女の子です。彼女の下宿にお菓子をおいていないことはないらしいですよ!!? それにしても三度目のエレベーター事件を起こさないようにね。

清水 智美（さとちゃん）

具志堅さんの「ちちちゆねえ」に対抗して、さとちゃんの「そんなんでしゅ」と清水walkとも呼ばれる高速回転歩行のかわいいいちよこちよこ走りは、あまりにも有名です。そういえば何回歌ったかなあー北酒場。みんなの口から前奏が流れると、いやとはいえずすくと立ちあがり、こぶしをまわしながら歌っちゃうんです。そう…素直なやさしい女の子なんです。

田辺 千尋（ちひろ）

一見おとなしそうに見える彼女も、マイクをもたせると、ワンゲルの明菜ちゃんに变身する。そのお色気でオツチェンを魅惑し、またひ

そかなファンも多い。もう歌わない、といいながら実は新曲がでるとこそっとテープにおさめテレビの前で踊っているのです。

西原 真理子（まるこ）

まるこ、まるちゃんと呼ばれ、誰からも好かれる人気者、お酒が大好きでグラスをあつという間に空にしてしまいます。

毎晩のような夜襲にもかかわらず、みごとに完成進級を成し遂げました。一見ちっちゃくて、かわいらしいけど、みんなが頼りにするほどのしっかり者。彼女の長つげの長い大きな目でウインクされると吹い込まれてしまっちゃいそー。

橋本 史子（ちかちゃん）

嵐のようにあらわれ、嵐のように去っていく…彼女の居場所を知っている者は常に数少ない。みんな彼女もいったん姿を現わせば、嵐のごとく絶大な影響力を及ぼす。頼もしくて、女性らしい「はっちゃきねーさん」です。彼女の涼し気な目もとを見ればおわかりでしょう。

松島 和子（ズッコ）

泉谷氏の代の追コンで3年早く惜しまれつつ、卒部してしまった彼女は、今もお酒のおいをかきつけ、テーマソング「君は何を今見つけているのー」と口づさみつつやってくる。彼女と話していると心が安らぐんですね、それがお酒と部員が誘う由縁なのでしょう。

吉田美樹(みき)

「ねえ みき お酒飲もうか」といえば、即座に「うんうん」とピンク色のほっぺをふくらませながら答えが帰ってきます。あねさん氣質(かたぎ)で典型的B型氣質、何でも意欲的に手をひろげ、失敗してはただ「ハハハハ」と笑っている、そんなかわいい女の子です。とっても魅力的ですよ。何だかニャーオーと流し目で手まねきされそう……。

## 四年生

石井敬治

コンパ等で我々に醜態を晒した事はないが、その実態は……。黙っていても暗いと言われずドジをしても笑い話にならないのはなぜだろうか。地理研であるので、一緒に山に行くと、いろいろと説明してくれて有難い存在である。

一ノ瀬浩樹

会計で部長からお金をしぼりつつっている彼も、酒とマージャンにおぼれた典型的経済学生である。というより教養学生である。一年中、靴下をはかず、大学通りを歩いて通学する姿は、ゴキブリ浩樹としかいいようがない。

上田泰宏

無口なやつちゃんであるが、物を探ねると、宇部の方言丸出して

「それがいやー」と調子で聞きもしないことまで真面目に長々と説明してくれる。最近ヤツちゃんさりのさりげないしぐさが「カワイイ」と人気を集めている。

岡崎雅治

声の大きさ、うるさはワンゲル。口から発せられるギャグの多さはワンゲル。漢字を知らないのもワンゲル。さすが主将だ。ホッくと同棲しているが、もう一つの下宿にも足しげく通っている様子である。

川原修

教育実習で女子中学生から「オサムちゃん」と呼ばれニコニコしている。本と酒ビンとダスター袋に埋もれた部屋に生きている彼が先生になった時、校内暴力に対しては「ねえ一緒にお酒飲もうや」と言うであろう。実は、彼は藤村のばあちゃんの子である。

岸義文

合宿中の彼の文句がうっとおしいのは有名であるが、三年会でも同様にグダグダと言う。黒川住人の一人として毎夜酒を飲んで昼まで酔って私語記に象形文字を書いていたが、最近では下級生をものにし、そちらの方が忙しそうである。

木村忠由

山小屋トイレ財布転落事件、新宿AIDS事件、教生長挨拶事件と常に話題を振りまいている。教育実習を終え、やっと先生になる気に



なつた様である。入部以来、数えきれない程、恋をし続けてきたが、若葉に城を築きやつと身を落ちつけたが、その影響でピンクのカーテンを架け男の部屋とは思えなくなっている。

桑原 潤

午後五時からの楽しい夕暮れ時を地獄の一時間に変えてしまう男。お寺の三男坊が考えつくとは思えない様なハードなトレーニングを部員に押しつけては喜んでゐる。元気だけはワングル一だが、あのガッツと、考える前に行動するあの性格は大島の風土が生んだとしか考えられない。

小島 直樹

ドツボの大將。ドツボ住民の運転手として重宝がられている。ドツボの宴会には不可欠な人物であるが、至る所でワルサをし、被害を及ぼしている。午前三時の小島につき合わされた人間も多い。涉外である彼は体育会の議長になったそうでこれからの活躍が期待される。

斉藤 昌彦

全く手におえない生物である。人の世話をすればうっとおしいと言われ、彼が笑えば、その笑い方は下級生にばかりにされ、彼が役に立つのはソフトの審判の時だけだ。こういう事を書かれても彼は一向に気にしないであろう。

佐藤 明次

足の速さはワングル一である。そして一番に酒で身を滅ぼすのも彼

である。新品のパッソルも田んぼに落ちるたびに崩壊へと向っている。四年間保証されたワングル杯優勝も、酒の為に逃がしている。ただ飲んだ次の日には必ずグラウンドを走る態度は見習うべきである。合W、マラソンシーズンのたびに恋をするのも彼である。

下川 信幸

昔陰気と言われ、今も陰気である。ビール一杯で酔い、自分の身の上話を始め、どうしようもないことですぐ恋をする。ニヒヒヒヒ。彼の字を見ればすぐに性格がわかるはずだ。

田中正則

彼を短かい文章で表現することは不可能である。タナ坊からマサへと変身するとともに、東へ行つては悪事を働き、西へ行つてはワガママを言い、北へ行つてはおこられ、南へ行つては笑われるという日々を送っている。しかし実にイイ奴でみんなから好かれている。

中桐 清志

マサと同棲しているギリ君である。彼はS君に次いで酒で身を滅ぼすと噂されている。彼は酒を飲むと言語障害に陥いることを自認しながらも、コンパの席では必ず両側にメツチェンをはべらしている。小娘から解放されて現在幸せいっぱいなのである。本当にいい男である。

仁保 章

三国一の照れ屋のホックくんはカーリーナに乗ってCITY BOYになろうとしているが、所詮厚狭の寝太郎であった。合宿は楽な所

をモットーに生きている。前田氏を尊敬し、厚狭の発展を夢みており、厚狭に新幹線が止まったら、新幹線で帰省しようと思っている。彼がおたに入って相撲を見ながら茶をすする日も近い。

宮崎 圭二郎

スケベである。スキーの腕前は抜群である。春合宿スキーツアーにかけの意気込みは他の四年も見習う点が多い。と同時に麻雀への熱意もスゴイものがある。カラッポと噂される頭の中は雀と女とスキーで一杯である。

宮本 博

イーピンと呼ばれる大きな頭をつけて歩く姿は異様である。しかしあの大きな声は、部会や三年会で役立っている。が全く的はずれの発言をするのも彼である。又彼はなぜかいつも右なめ上を見ている。

武田 徳子

口の悪さ、態度の悪さはワンゲルメッチェン一である。彼女のスマイルおケツを突き出し足をピンピン上げながら走る姿はママさんバレエを思い起こさずにはいられない。オールバックの「彼氏」とパークロードを歩いている姿がNHKの天気予報のバックに用いられたということをみなさん御存知かな？

八川 睦子

世のロリコン中年が泣いて喜ぶほどの幼い容姿の彼女である。彼女があらゆる質問に対して「ウー」と一言答えるのを楽しみに物を探ね

るオッチェンも多い。彼女に想いを抱く男性も過去には存在したようだが、彼女にはついていけなかったのか、徐々にオバンへの路をたどる八川さんです。八川は一年のオッチェンにはえらい人気があるそう

(58年度) O B

石川 圭一

子供は正直である。教育実習に行くたび、子供たちからスケベと言われ、返す言葉もない男である。しかし、クラブに關してはかなりシビアであり苦言を呈する数少ない男である。ここだけの話であるが、彼はオランダ人の妻と下宿で暮している。

稲葉 真一

彼は不幸な男である。数々の負傷事件、山陰と言ってはバカにされ、軍歌を歌っては嘲笑される。そして、酒の席で話題が尽きると、みんなにいじめられるのである。しかし、後輩(オッチェン)の面倒見は大変良く、麻雀に、酒にとよく誘われる。最近、歌舞伎町でいい思い出を作ったらしく変な道に走ろうとしている。がんばれ、松江の貴公子。

井野 博之

いつの頃からだろう。たぶん生まれてすぐにちがいない。彼は、言葉と、気力というものを失ってしまった。植物人間、井野。生きいき

するのは麻雀で好調のときと、カープの応援をするときだけ。彼の腰には根が生え、コケむしている。彼がエッセンであったことはすでに忘れられようとしている。

大田 剛

彼は下戸である。しかし酔っている。自分に、そして人生に酔っている。二谷英明のシブサと斉藤清六のアホさ、そして沢田研二の自己陶酔性が、アントニオ猪木の顔に内在しているような男だ。そして彼はひたむきで一途で純な、九州男児である。

岡田 晶博

大洋ホエールズのエース遠藤一彦に似ている。瀬戸内の温暖な気候の中、伊予ミカンを食べながら育って来た彼は、星について詳しく、写真の腕もよい。人が良すぎるのか、おとなしすぎるのか、女禁下宿のためなのか、女っ気は皆無。

垣田 章夫

漢字を知らず、諺も知らず、一般常識もやや欠如している彼は、なぜかトレーナーであった。3年の春合宿でローボートを使って西表を回った、バイタリテイのある男である。酒はあまり強くないのだが酔って下級生にワヤをする。

菊地 輝幸

学年3大秘境の一人。故郷は日本のアパチスのようなところであるが、東京生活の経験もありなかなかなだ者ではない。酒はかなりいけ

るが、すぐ脱ぎたがるので困る。これでかなり苦しい出があるのだが、本人はあまり懲りていない。同級生は敬愛と優越感をこめて彼を「キクちゃん」と呼ぶ。彼は年のわりにさわやかでかわいい。

清藤 展生

恐しい男である。少々の事では驚かぬ、この世に怖いものはないという強心臓で、とくにメッチェンに対して絶対王朝を築いている。銀バジ級の貫禄である彼に「来なさい」と言われれば断られる訳がない。外見で得をしているのか損をしているのかわからない男だ。

田中 康弘

RX-7に乗る「ヤス」は、宇部のアマゾン厚東の原住民である。足の速さ、色の黒さ、身の軽さ、体の柔らかさ、叫び声をあげるなどかなよりの証拠である。性格は、蒲田行進曲の「ヤス」と思えばよい。ヤスも昔は山女、宇部短、芸短と戦略を試みていたが、今は……。がんばれヤスノ

富高 紳夫

「窓から豊後水道が見える」どころではない。「窓の外はすぐ豊後水道」、そして交通違反の横行する無法地帯、大分県蒲江出身の彼は、ワンゲルの海彦である。巷には、「物語の王子様のように」という、とんでもないガセネタがあるが、実体は読み書きソロバンのできないスケベである。酒の席で彼の猥談に悩まされた者も多い。ただこの男、体力だけはある。

西 杉 滋

入部早々、彼は「子泣きじい」とあだ名された。まさに妖怪のような男である。酒宴の翌朝のテントの中のような部屋に生息し、他人の性格を血液型をよりどころに分析し、また、ゴジラ、ガメラ時代に精通し、古きよき時代を懐しむ。長生きしてくれ。

野 村 浩 之

責任感の塊の主将から他人に迷惑をかけるただの壊し屋へと変身した。居るだけで場所をとる、動けば物や人を壊す、ろくなことはない。夏になると下着を頭にかぶって寝る。中学校の英語教師を志す彼は、現在の校内暴力に対し、自らをサンドバックと化して生徒にコンタクトをはかろうとする。部員にもなぐらせろ。

原 田 卓 也

WANTED / 姓・原田、名・卓也。眼鏡をかけ、やや色黒。サnderボードのパーカーに極似。教育学部英研。宇部高出身。細い声で時たましゃべる。下宿を引き払った、車に乗っている等、数々の噂あり。真相は不明。謎の男……。

平 野 展 康

君達は信じられるか。本試験を受けずに単位をもらったことが2回もあるというこの男を。彼の要領の良さをうらやむ者は多い。細身で背も高く、女性にもてそうであるが、いかんせん、かなりのスケベであり、ワングルメツチェンには要注意人物としてブラックリストの筆頭にあがっている。工学部松中氏、富高、清藤と、スケベの「のぶの

ぶカルテット」を形成する。

橋 田 忠 昭

不幸な男である。山では必ず暴風雨。下界ではアル中となり警察の世話（酒気帯）にもなり、神戸の自宅では妹にもいじめられている。故郷韓国は撃墜事件やラングーン事件等、彼に明るい話題はない。ミスター・ロリコンの彼は、松本伊代の活躍だけが生きる糧となっている。

松 野 一 郎

気は短かくて力だけ。いや気はやさしくて力もち。岩男松野はソフトボールではホームランしか打たない。走るのは苦手で「キャプテン」の近藤君を思い出させる。優しい男であるが、女っ気は全くない。

前 田 孝 志

我々は、よく人を「アホ」というが、彼は並のアホではない。入部以来、五竜大キジ事件、腰ぬけ事件Ⅰ・Ⅱ、タクシー乗りそこね事件等、彼の痴行は枚挙に暇がない。大相撲とNHKをこよなく愛し、話をするたびに人を嘲笑の渦に巻き込む。最近、さかりのついた柴犬として大学生、OLを追いまわし、酒の肴となっている。むだなことはよやめ。

棟 久 恭 司

理学部物理学科で下宿にパソコンを持つ、といえは西武の広岡監督のような男を想像するかもしれないが、ただのギャンブル狂のカバト

ットである。教育実習で女子高校生からもらった〇〇〇をひけらかしては笑う。皆さん、体力があまって寝つけぬ日は彼のシャレを聞きましよう。つかれてすぐ寝れます。

渡 辺 浩 幸

プリンプリンの火星人が伊東四郎の声で極道（清藤）にバカにされている。彼を表現すればこうである。彼との対話は必ず「OH」から始まるので有名。教師をめざす彼は、小学生の校内暴力に対し、それに負けぬ貫禄をもつことが課題であろう。

岡 俊 子

無類の甘党。後先のこと考えず、とにかく甘いものをよく食べる。女性初の会計係として大奮闘。部会后、またはBOXで彼女に「お金を払って」と微笑まされると、鬼か悪魔でもない限り、お金を払ってしまふ。そして集めた金を携えて、ほったまではかくせないヘルメットをかぶり、赤のパセッタでバイパスをぶつとばして上山口の自宅まで帰る恐ろしい会計係であった。

重 宗 恵 子

横溝正史シリーズの舞台となるような小鯖村から通う彼女には、道路交通法などはない。ふだんはおとなしうにしているが、ハンドルを握ると鬼になる。しかし、減点を積み重ね、再び0点からスタートをきるはめとなった。

中 富 史 苗

ついに出了。新歡登山の騒々しいデビュー以来4年間、悪評を一掃できなかった怖しいメッチェンである。とにかくよくしゃべり、超音波のような声で豪笑する。「もしシャーシーが男だったら、いい飲み友達だったのに」と、ほめるのかけなすのかわからない噂がある。4年間よく耐えました。御苦労様。

松 本 常 子

???この人はよく判らない。本棚に並ぶマンガの中にある一冊の時刻表のようなものである。私語記、学年会での彼女の奇妙な発言に首をかしげたり笑った者も多い。経済法学科一期生唯一の女性として4年間、いかがでしたか?……ワカラナイ。

工 学 部

平 松 達 己

こ、この男のプロフィールだけは書きたくなかった。はっきり言ってこの男はまともじゃない。それはこの男の伝説を上げればすぐわかる。たとえば小学生売春未遂事件、工学部追コン行方不明事件、北海道と岡山間行方不明事件、そして忘れちゃいけない恐怖のドイツ語A泥酔乱入事件 だ。しかし、彼は、クラブに対する熱意は誰にも負けない工学部WV部第22期主将である。

横 山 智 広

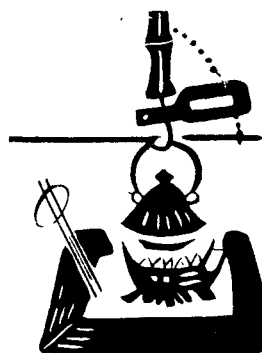
この男ははっきり言ってセクシーである。いや、セクシーすぎる。この男こそ工学部ワンゲルにエイズをもたらす元凶である。あのランニングのときのうしろ姿、あの腰つき。めちゃうちゃ色っぽいラブ

リー・ラブリー・ラブリー智ちゃんノ 話しは変わるが、彼は工学部  
ワングルの中でいちばん責任感が強い男である。

お茶漬

# 利平

湯田温泉 TEL 22-2318



安くてうまい!!

# 大衆食堂 長門館

山口市平川大学通り TEL 22-6698

和洋酒のご利用は信用ある当店へ

# 藤村酒 店

山口市平川生活センター前

電話 自宅 22-6015  
店舗 25-0682

クリーニングは当店でノ

# 太洋ドライクリーニング



株式会社

**グリーンパーク**

佳き日のよろこびをケーキに託して

- ・ザビエルの塔
- ・グリーンクーヘン
- ・長崎カステラ

洋菓子事業本部 / 山口市大内御堀 ☎ 22-7533

営業時間

AM9:00 ~ AM2:00

☆レストラン

**ほらき男爵**

山口市平井大学通り TEL 24-9940

**惣野旅館**

山口市後河原  
TEL 22-1021

MY ♥ SHOP  
YAMAMOTO

TEL 22-0263

コンパにどうぞ！

**福屋旅館**

山口市駅通り 2-1-3  
TEL 22-0531 ・ 24-0941

酒と食事の店

ステーキハウス

**レインボー**

湯田温泉 1-9-12  
虹の街 2F TEL 22-6570

大広間 (120人)

コンパ 大サービス！

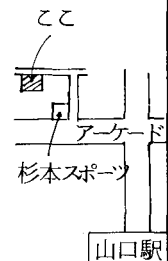
山口駅前

**いこい食堂**

清水書店

山口市道場門前 1-2-11

TEL 22-4545





57年度入部

木 村 洋 司

山口市白石3-11-23 中野茂方

お食事、パーティ、コンパ、二次会には是非どうぞ!!

カフェテラス

**k** and **k**

山口市平井浅の久保567-17

TEL (0839) 24-9800

# 私語記



昭和56年

10月28日

いやー

私語記の一ページ目に書くことがこんなに気持ちのいいものだとは……

新しい私語記にまた新たな足跡が残されていきますように……期待しています。

泉谷

10月28日

個人的に黒いボールペンで書くのはきらいだから、青いのです。

さのうはドラムかんはこびをされていて、スタンツトレーニングにでれませんでした。

むちうちの件ですが、今ひとつ治りがよくありません。原因は、僕の体が老体だからなのです。

でも出来る限り中四には出たいと思います。

みやもと

10月28日

小車輪をやった。つぎは大車輪だ!!

昨日の感想

岡はシャンポンの待ち多し

またアンパイ開発委員会の会長

タナボー フリテンリーチの可能性大

一ノ瀬 最近調子が悪いようだ

泉谷さん カンチャンがはいらなければ恐れるに足らず ナンチャッテ。

問題

|        |        |        |        |        |        |        |   |   |   |   |   |   |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|---|---|---|---|---|
| 三<br>万 | 四<br>万 | 五<br>万 | 六<br>万 | 七<br>万 | 七<br>万 | 七<br>万 | ・ | ・ | ・ | ! | ! | ! |
|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|---|---|---|---|---|---|

待ちは何んでしょう？

雀荘. 宮

10月29日

キジ天特攻隊 いざ出発! /

只今より笹ヶ原にキジ天を建てに行っまいります! /

心地よいキジがうてるように大きな穴を掘って……

では 泉谷

10月29日

ぎりへ かんばんはまかせた

わしゃ ドラムカン洗いと二日酔い

岸

10月29日

えれえ えれえ はよお中四がおわらんかいな  
なんかやりのこしたことがありやしや？

実長

10月30日

棟久さんへ ローソク買ってきました。

¥ 6,600 泉谷さん¥ 3,500 棟久さん¥ 3,000 自己支出¥ 100 です。

正則

11月5日

ファイアー すごくよかったです。

特にForever って文字がまっ暗い中に浮かびあがったの見て感動しました。中四とっても楽しかったです。それゆえ、あっという間に終わってしまって、まだ頭がぼう然としています。

PLさんやSLさんPMがまだ私の近くにいるような気がして、

本当にいい思い出がたくさんできました。

先輩のみなさま、楽しい中四を有難うございました。

武田

11月5日

1年間かけて計画して行った中四も無事終了しました。

各人がそれぞれの役割を果たし、そしてまた一年は新しい知識を得て、それぞれに実りのある中四合Wであったように思います。

この中四合Wで得たものをこれからも何かと生かして行きたいものです。

さあ今度は、マラソン、春合宿 etc. と待っております。気合い入れてやろうぜ！

主将

11月6日

山口大学の皆様、たいへんお世話になりました。

たいへん楽しい日々をすごすことができました。

特に中野さん堀さん先々日はごちそうさまでした。

私はこれから工学部の方へおじゃましようと思っています。

山口大学の皆さんも、これからは山陰に来るようなことがあったらぜひ島大に寄って下さい。

部員あげて歓迎します。

それでは皆さんこれからも頑張ってください。

山口大学に栄光あれ!!

島大2回 小川 満

11月7日

また体育実技を寝過ごしてしまった。富高さん、何で浜松ナンバーのカリーナで起こしに来てくれなかったんですか。

(昨夜血ダルマになりかけたN)

11月9日

落ち

こみっ

(N)

PS 一の瀬君は明日19になります。

私はあと5ヶ月で19です。

11月10日

マラソンシーズンがはじまった。

みんな元気に走ろうぜ。

陽気なトレーナー

11月10日

1年、2年、3年で後期の部費及び装備代まだの者、出来るかぎり早く持ってくるように。

by 陽気な会計

わしゃ しらん

陰気な一年

11月11日

あたまがいて～よ～

気がついたら西田のへやでねていた。

西田 ゴメンネ

昨日の記憶が ねえよ～

久しぶりの黒川下宿でした。

しかし……

なんなんじゃ 昨日は

(みみずの字 岸)

PS おえっ 帰ってねよ、 AM9:03

11月11日

副専が社会科の西洋史に決定!!

岡さんの後はいとなります。よろしく

伊と一

11月11日

私もとうとう車が手に入ることになりました。

皆さんばくの車をみたら、逃げる様にしましょう。

「山56め3309」スバルレオーネです。

よろこびにあふれる棟久君でした。

11月12日

LOVE SONGS をかえして下さい。

(竹内マリアの)

富高さんへ 宮崎

11月15日

大山FWの計画書はっておきます。

11/21(土) AM9:00頃のおき1号発 →以下計画書

11/25(水) 私は自宅で泊まる。他者は任意。

24日は楽勝だと思う。 松江見物可

費用 交通費 15,000円弱(往復)+エッセン代

大山が君を呼んでいる

宮本へ……行くのなら住所と希望の係(PLはダメ)を記入しておくこと。

最近クラブに疎遠のような気がたいへんする。

10月時ほどではないが、なぜか心理的、肉体的に大スランプである。10月来の私の言動は、今思っても異常でありました。反省しております。

これからもよろしく。

立直ろうとあかく 松江の貴公子

方便の若武者

§

11月20日

誰のFWか知らんが、エッセンのゴミをBOXに置いとるやつは、どういづもりや、差し入れ要求するだけが能ではない。

山行記録等、他の者に役立つようにFWの前後もしっかりしてほしいネ。

中野

11月20日

橋田と垣田が東へ行く……

雨雲を連れて……

ただ自分だけ苦しめばいいのに

何の罪もない他のワンダラーを苦しめるとは。

11月25日

先日広島へ行きバレーボールワールドカップ日本VS中国戦を見てきました。

最初は見る気などなかったのですが、運よく広島県の県立体育館でやると聞いたので、さっそくかけつけてみましたが、すでに切符は売り切れ。そこで会場の開りをうろついてどこか入れるところはないかとさがしていると偶然二階の扉が開いていて無料で中に入ることができ、ずうずうしくも放送者席にすわって観戦しました。(切符を買えば¥3,500)

やっぱり国際試合となるとプレーにも迫力があり、藤田、志みずらには黄色いせいえんがさかんにとんでいました。

スタンドにはどこかの学生みたいな人たちがタイコを持って日本!! 日本!! の大せいえんをおくっていて、それにつられてスタンドの人たちもいっしょになってせいえんをおくっていました。結局日本は負けてしまいましたでしたが楽しい日がすごかったです。

みなさんも時には山口を出て都会に行ってSports 観戦などどうでしょう!!

正則

11月26日

昨晚、大峰(奈良県ですよ)のFWから帰ってきました。山伏の人を見かけたりして、さすがは信仰の山という感じでした。山中のことに関しては何も語りたくありません。しばらくは山には登りたくない気分です。

しかし下山してバスがなくて困っていた時に、車に乗せてくれた天理教の御夫婦は親切だった。宗教の持つすばらしい一面を見せられたような気がしました。

by 悟りのひらけなかった はしだ

11月26日

休み中東方便に行ってみるとピーク50m下でショベルカーがエンジン音を放ち、道を削っていた。作業員さんに聞くと遊歩道を作るそう。地藏から坂堂峠にかけての稜線に2m幅の道を付け急登には階段を作るそうだ。実際歩いてみるとピークから坂堂峠までもうすでに2m幅に道が削ってあるではないか。役人は何も知らないくせにバカな事を考えつけて大金をつぎこんで自然を破壊し満足をしている。「自然」は自然だから「自然」であるのである。最少限の手を加える(整備W等)必要があるにしても、今回の遊歩道は行きすぎである。

歩き慣れているはずの大切谷分岐からの登りは何か他の全く違う山に登る感じで非常に悲しく淋

しかった。

石川

11月28日

SALE 大根 1本 20本

ほしい人はBOXの袋の中から持って行って下さい。代金は後で石川まで。

言えばもっともって来ます。

11月29日

津和野の駅で木村を見た。

バイクに乗っていつもの黄色の服であった。

青野山に登った中桐

11月30日

ずいぶん前から気になっていたが、ど～も今の1年生は口が多すぎると思う。(きのうも泉谷さんにいわれたが)ワンゲルというクラブは山行経験がものを言うクラブである。だから何もしないであ～たらこ～たらいうのはおかしい。きのうも2年生3年生のまえで言っていることと悪いことの区別もせんでべ～らべ～らとしゃべりよるやつがおった。わしもよ～しゃべるからえらそうなことは言えんがもう少し自分の立場を考えて発言できるようになってほしい。1年生だけでつっ走るのもいいが、もっとたてのつながりを大切にしなければワンゲルというクラブは成り立っていかないと思う。

(落ち込みのグラフの傾きが $-\infty$ になってしまった西田ヨリ)

12月2日

松沢さんが下宿で $\alpha$ 米を食べていた。

12月4日

マラソンシーズンになりましたね～。いや～僕の好きなシーズンです。勝った負けたの泥試合をしましょう。そして自己満足の世界に陥りましょう。

中野

12月4日

きのうホウベンに登ってきました。雪化粧したホーベンなかなかいいものです。ホウベン一番のりをめざしたのにしっかりとトレースがついていた。残念。

松沢

P. S. タイム表を見て驚ろいた。松野が40分きっている。



世も末である。来週はできるかぎりトレーニングに出ようと思っています。  
その時は前田君よろしくおねがいします。

12月7日

レベッカが全焼。

12月9日

久しぶりのBOXです。昼の平川も久しぶりですね。山口でのんびりと毎日を過しておりますが山口もなかなか住み易い所ですよ。本当に。

12月26日

はじめて新しい私語記の最初に書かせて頂きます。

今年もあとわずかとなりました。

考えてみると、今年は従来になく、クラブにおきましては多忙な年でありました。とにかく4月からあせっていたらもう年末になってしまいました。

県合、夏合宿、中四と思い出す暇もないくらいでしたがそのうちしろを振り返る余裕もできることでしょう。

1年生もそろそろ自分なりのワンゲル観なりをもってよい時期ではないかと思われま。むつかしいもので自分の一つの考えをもつとクラブ全体に対して疑問が生まれ、クラブに流されてしまうと自分を見失っていくような気がします。

自分が山登りが好きなのだと思っていたがそれは実際は単に人といっしょにいるのが好きだったにすぎなかったりクラブ内の人間関係が嫌になったりする時が誰でもあると思います。

そこで僕が二つ言いたいのは、クラブは全体で成り立っているがそれに流されず自分を大切にしなければならぬということ、それから言葉の世界と現実とはちがうのだということ、つまり理屈は所詮理屈にすぎないということを肝に銘じてほしいと思う。でないとクラブに対して無気力になったり虚無感を抱いたりすることになるのです。

現実をよくも悪くもなく現実すぎない。クラブに対して意味とか位置というレベルでの考えを持つと自滅するのではないのでしょうか、自分でも何言っとるかわからなくなりました。

みなさんよい年をお迎え下さい！ 感激あれ若人よ！！

南野骨茶

12月26日

冒頭の南野骨茶氏に加えて……

1981年も、もうすぐ終わり、また82年というわからん年を迎えますねー。

今年もあつというまの一年間でした。クラブにおいては、行事、行事の連続。振り返る暇もなく、1981年は過ぎていくようです。

そこで、今年を振り返り、クラブに関して気付きを述べたい。

1年生を4月に迎えてから9ヶ月、確かにクラブ活動上の基礎は1年生もぼんやりとつかんでるみたいです。しかし、少々頭でっか ではないかと思えます。何をやるにも“無心さ”を大切にしていきたい。

またもう1ついえることは、行事を軽視してる観もある。具体的にはバイトがあるから行事を休むという事実である。学生生活をやっていく上で確かに、バイトも必要な時もあるが、その前にワンゲル部員であるという自覚をしっかりしたものにしてほしい。バイトをしているとトレーニングにさしつかえてしまうこともある。これに関してはある程度も猶予もあるが、大事な行事を抜けるとは何事であろうか、ワンゲルは皆がレギュラーのクラブ。そして一人一人が同等の責任を負うクラブである。その一人が責任を放棄することは野球でいえばレギュラー選手が、バイトのために試合に出ないということと同じと考えられよう。自分の位置をもっとみつめてほしいですな。行事は殆んど土・日をしてる。バイトを考えるならもっとうまくやらなくては……そう思います。

2年生は来年早々には、新執行部の承認もありますなー、まあ、とにかくいま話し合いを重ねることと思えます。

今までは従順であれば、それで済む生活であつたけれどこんどは違う。まあ、正月休みを利用し1年も2年も今年の反省と来年の目標を考えて頂きたい。

泉谷

12月27日

とうとう、昭和56年も終わっていく、自分にとって、なんといろいろなことがあった。変動の一年であったと思えます。その中で大学にはいってワンゲルにはいって本当に良かったと感じさせる年だったと思えます。それは人と話しができたということです。アホな話にしろ、人生論みたいなものにせよ、そして、それによって、自分のいろいろな面に、気付いたということです。それは、人から言われて気付いたり、その後になって、自分で考えて気付いたり、大学とはいろいろな人の集まりです。そして、その一部であるワンゲルでさえもいろいろな人の集まりである。この中であつて、人と話をし、自分を見つめるということは、高校を出てすぐ就職をする(それなりにいい面もあると思うが)ことよりもより多くの機会を与えられていると思えます。これができるから、大学にはいったのではないのであろうか。そして自分をみつめ気付いたとき、このあとにすることは、考えることは、「自分は、これからどうするべきか」ということです。

数学科、及び香川高の伝統をひきつぐ次期トレーナー

昭和57年

1月1日

明けましておめでとうございます。

いよいよ1982年が始まりました。今年もよろしくお願いします。

昨日までアルバイトで輪飾りをダイエーの前で売っていましたが、どこも不況で買い手が少なく、その分、バイト料にひびきました。まあ、昨年のは、別として、今年も一生懸命がんばろうと思っています。

しかし、平川、いや山口には誰もおらんかのように静まりかえっています。山口大学の守衛のおじさんもひまそうだし、大学の中は、閑古鳥が鳴いているようです。皆さん、今ごろ、自宅のこたつの中でテレビでも見られているのでしょうか。またや、岡さんなどのように元旦を山の中で過ごされているのかもしれませんがね。

ところで、かく言う僕は、初詣もせずに、BOXにやって来て、わけもわからんことを私語記にかいているのです。空模様はあまり、かんばしくありません。冷たい風は吹いているし、今にも雪が降りそうです。でも初詣ではいかなくては。では。

念願の1月1日に私語記を書けて満足しながらも、昨日失恋の相手にぼったり会って、困難の表情がまだ消えていない尽々の大歳っ子でした。

1月1日

謹賀新年

本年もよろしくお祈りします。

鳳翽で御来光をみてきました。やはり寒風の中、空が徐々に赤く染まり、初日の出がでてくるのを見ると気分が引き締まる思いがしました。やはり登ったかひがあった。

垣田

1月8日

明けましておめでとうございます！

昨日、小倉まで登山ぐつなど買いに行ってきました。ワーイ くつだ！ くつだ！ 何か少し偉くなった感じがします。アハ、えへ、先輩のどなた様か、ロングスパッツをお譲り下さい。お願いします！ みなさん、今年はSNOOPYの年です！

M u でした  
む

1月8日

昨日、小倉に映画を見にいった、「キャノン・ボール」を見るため東宝プラザ・SY松竹・ピカデリー・東映パラスと雨の中回ったが、どこでもちがうのしかやってない。結局ぐるぐる回って中央会館に行ってようやく見る事ができた。そのわりには、おもしろくなくて、まわりはアベックばかりでこっちは一人、おまけに途中で鼻血がでだして、わややわかる人にはわかる、わからん人にはわからん話でした。

K I Y O F U J I

1月11日

寒中水泳でふたりも死んじゃって全国ニュースにも出て、あーあ、運が悪いかね？山大って、どーしてこんな悪いことでしか有名にならんのかね？なーんかさびしい気分になってしまう。なーんかいいことで有名になって欲しいな。

武田が歌手になればよいのじゃ

②

1月13日

剣山酒乱パーティ（仮称）1月12日ミーティング回顧録

8時～

SL、衛生、エッセン、装備の各係による研究レポート発表。雪山に関しての心構えetc.

8時40分頃？

新年会スタート。（PL氏の意気込みがすごい）1年は水場で調理。この時、既に焼酎1本、日本酒2本、そしてRED1本にホワイト少々が用意されていた。なごやかな雰囲気でお酒がうまい。

10時過？

かなり酔ってくる。上田氏と岡崎氏が藤村にピストンに行く。LAP 16分58秒。ボン酒2本を携えて帰還。確かにこの直後に事故は発生した。耐寒訓練の名のもとに、上級生が1年に脱ぐように要請する。（この際、心優しき上級生達は決してヒワイなことは考えていなかったのである）要請に対して、従順、すなおをモットーとする川原氏が先頭をきって脱ぎ始める。岸氏もブツブツ言いながら脱ぐ。川原氏はシャツ1枚になる。上級生は彼の笑顔を歓喜の表情とうけとり、ついでに上半身裸になるように強い要請をする。岡崎、上田氏も「なんで」といいながら脱ぐ。こうして、素直な1年4人は上半身裸で酒を飲むことになる。入口の戸、窓はすべて開放され、忍び寄る冷気に、川原は前にも増してうれしそうな顔をしている。そのうち、扇風機が持ち出される。水割り用の氷も1年生の背中を散歩する。耐寒訓練はかなり本格的になってくる。そのうち誰からともなく（実は私であるが）上級生も訓練に参加することが提案される。こうして、残る4人（PLを含む）は、パーティシップをはかるために訓練に参加したのである。（決して1年に対する同情からではなかった。それはひとかけらもなかったのである）こうして、どこでどう間違ったか、我々のパーティ8人は全員上半身裸でコタツを囲み、吹き込む風の中で酒をあおるはめになったのであった。泉谷氏が肉体美を披露する。そのうち、原氏がひょっこりのご訪問され、原氏も訓練に加わる。笑いが止まらない。完全に頭がおかしいとしか考えられない。エッサッサ、エッサッサ!!が始まる。泉谷氏の芸が出る。しかし、寒い。岸氏がつぶれた頃、泉谷氏がえらいことをおっぼじめる。墨と筆を持ち出して1年の裸体に書き始めた。これが第2の悲劇の始まりであった。飛びかう墨液。全員の体は墨だらけで黒びかりする。狂乱もここまで来るとどうしようもない。ただ皆笑いが出るだけである。小島（1年）も加わった。今朝見ると、ジーパンが墨だらけ、Tシャツも今はまっ黒である。とんだ耐寒新年会であった。このパーティに果して未来はあるのであろうか。

③

1月19日

最近、よく雪が降りますネ。ボクの故郷（浜田）では積雪が54 cmもあるそうです。うちは雪でうもれているのではないかと心配である。ホントニ

宮崎

P. S. 電話をかけたら、腰まで雪があつて、今は雪かきにせいを出しているそうです。

1月20日

数日間、禁酒をするはめに陥った。おごりの場合は関係なし。金欠病のため。

川原

1月22日

やはり無理でした。

川原

1月22日

桑原君、岡崎君が“ヒモジイ”がってます。

1月25日

皆さんお久しぶりです。追コンの時はどうもありがとう。楽しかったです。もし写真ができれば、記念にしたいので私の分もお願いします。春合宿いろいろなところに行くのですね。出発までに完全に準備を整えて、気をひきしめていってきて下さい。くれぐれも事故のないように。

Kaori Y

1月27日

ピンポーン～♪

剣山パーティ気象部発表によりますと、明日は大陸からの勢力の強い高気圧が張り出して比較的天気の良い一日となるでしょう。これで天気予報を終わります。

P. S. ただし、はずれても当局はなんら責任を負いません。あしからず。

（剣山パーティ 気象部より）

甘い、大陸から高気圧が（強いやつが）張り出すということは冬型やで、男岳も、千種峰も雪か雨になる可能性が高い。

芸北 気象

1月29日

雪が降っています。このぶんだと男岳、十種ヶ峰はそうとう積雪があるでしょう。なのに明日は鍊成れず。くしゅん、あー鼻水が出た。しかしこれが本部での最後の鍊成だと思とうれしいや

ら、悲しいやら、本部のみなさん！ 1年間本当にお世話になりました。  
工学部に行ってもがんばります！

(これは、ほんの冗談です 西田)

1月30日

7 ; 0 0 のニュースです。まず最初に山口のニュースをお伝えします。一昨日以来の大雪のため、男岳-油峠間が不通になりました。又、BOX-倉庫間はチェーン規制でノロノロ運転となります。 以上

from ラッセルいやな子放送局

2月1日

昨日、僕はとても恐い夢を見ました。雪崩が僕を今にも飲み込もうとしているのです。必死に逃げました。そしてもうダメだと思ったとき、目が覚めました。目が覚めると僕の横に川原がねむっていたのであります。

松沢

2月3日

♪ ~ピンポン~ ♪

剣山パーティ気象部発表のまるで、でたらめよくすればあたる、昨日のお天気を申し上げます。九州、西日本をおおっていた高気圧は東に移動し変わって、前線を伴った低気圧が西から移動してくるため、明日は曇ときどき雨といったお天気でしょう。(剣山パーティ気象部)

P. S. こらっ 芸北気象部正しい天気予報を出すな!!

2月4日

ジュリーになりたい～ said のり♡…

あしたLLのテストなのですが、今日は勉強したくない、だからあした起きてからするのです。最近ジュリーが私にのめりこんでしまっているのです。 あーあ ふっ ●

もうすぐ2年です。たぶんオッチェンのみなさんは新1年に期待されていることでしょう。うー！もう1年のメッチェンの時代はおわるのでしょうか、桜の花びらがちるように美しくちってしまわねばならないというのでしょうか。目立たず質素にひそかに残りの3年間を送ろうと思っている次第であります。But, then どうか見捨てないでこういうメッチェンもいたなって脳みその片っぺしにでも覚えていて下さればもうそれ以上何も望むことはいたしません。ほんとにあつという間だった……イエイ！

19の春はなぜか寒い。冷たい風が吹くのです。フーッ ♪ いやしかし、元気を出さねば大山が、比良が、私を待っている。山は私を優しく迎えてくれている…。合宿だ合宿だといいたい所だけれど現実の方が目の前にせまっていてあーあーとなる。

Nori

2月8日

ワングル史上初の狂悪事件

遂に橋田忠昭が逮捕された。

前科4犯(家裁送り1回)。酒に飽き足らぬようになった忠昭は業に狂い。

遂に廃人同様となり家庭を崩壊へと導いた。ガッハッハ、笑ろうた笑ろうた、ニュース見て30分間笑いが止まらず、今朝新聞を見て15分、さっきBOXでまた新聞を見て10分笑ってしまった。

2月8日

ウソです 橋田さんは犯罪者です。

橋田さんには近づかないようにしましょう(メツチェン一同)

2月8日

私は無実です。酒にも業にもおぼれてはいません。

あの人は私とは全く無関係です。

今日学校に出てきたら会う人会う人が私を見て大笑いしやがる。

なんでこんな目にあうんやー。

2月13日

0:20ダゾ〜皆さん試験なんですね。かくゆう自分は卒論でめちゃんこ忙しくなってきた。卒論のバカヤロー、こんな夜は何か無しように書きたくなくなる。

“ワングルの定義付けは不可能である”なるほど僕もそう思います。これまで4年間ワングルをやってきているんな山に登りました。それが陽光まぶしい夏山であったり、紅葉の秋山であったり、白銀の雪山であったり、……そして思ったことは山に登れば登る程“ワングル”というものが解からなくなってきたということでした。自分は山に登ります。なぜ登るんだろうか？それはそこに自分が知らない世界があるからだと僕は思います。1年の時、初めて北海道の山に登った時の感激、秋の大山で初めて雪に接した時の感激を忘れることができません。しかし、2年3年と山行を重ねるとその感激もそれ程新鮮なものとして自分に入ってこなくなったような気がします。それはなぜか？それはそこにもう自分が知った世界があるから、その感情は夏合宿において顕著にあらわれた感情でした。そして雪山に非常に興味を抱くようになる。なぜか？そこには自分にとって未知の世界があるから。しかしワングルにとって雪山は限界がある。しかし行ってみたい！しかしその領域はすでに山家の領域であり、決してワンダラーが踏み込めない領域となってしまう。じゃあワングルとは山岳の予備的なものだったのか？いやそうじゃない、そう否定しても「行きたい」という感情はどうしようもないものとして追ってきます。現在の大学ワンダーフォーゲル部の活動をみているとその主流は山！山！山！……山岳予備軍と呼ばれてもしかたないところがあるような気がします。ワンダーフォーゲルとは山登りなんですか？いや決して

そうじゃない。ワンダーフォーゲルは、“旅鳥”なんです。侵されつつある自然、残り少ない自然をハダで感じ親しむこと。自然をハダで感じるには“山に登る”これも1つの方法でしょう。“巾広いワンデリング”その言葉通りでワンゲルとは広く具体性がないもの。だからそこに無限の楽しみがあり自分独自のワンゲル観を育むことができる場所だと思います。“ワンゲルとは何か？”それはワンダラー自身も持っている考えすべてがワンダーフォーゲルじゃないかと思いません。

“ワンダラーよ 新しい舟に乗り込み 帆をはる新しい水夫であれ！”

それにしても疲れた。卒論のアホー！ 自動車学校のバカヤロ〜！ もう2日間も禁酒している。これは私にとって驚異である。明日はバレンタインデー 敬老精神にあふれるメッチェン僕にチョコレートをください。

松沢

2月13日

皆さん、お元気でしょうか。4年はどうかな？ 忙しいのかな。

さて私は、あと試験を3つ残し、心に不安を感じつつも、やはりお勉強は嫌いで何とかこの現実から逃れようと試みるのですが、やはり現実には現実で、どうやら勉強せんといかんようです。

昨日、今日と良い天気ですがホッと海を見たくなり、昨日萩へ行って来ました。海は素直だから好きです。世の人々もこのくらい素直になれば、みんなハッピーだろうに。

ただいま試験中ですが、みなさんいかがおすごしでしょうか。

わたくしも⑦個という試験の数をこなしておまして、中には実技としてピアノなんかもあったりしたんですが、内容は①大きなくりの木の下でを大きな声で歌いながら伴奏をする。②おつかいありさん(♫ あんまりいそいでこっつんこ〜)を伴奏をつけて弾く、というものでありまして大きなくりの木の下では多少自信があったのですが、あがってしまい、手に対して「うまく弾いてくれ」とおねがいはしたのですが、手に首を横に振ってしまってだめでした(つまり、ふるえた)それであとで先生に結果を聞き係いくと、「いい材料がありませんなあ」と言われたので「単位ありませんか？」ときくと「まあ、出席があるので最低線で……」といわれました。(つまり、可でしょう、可の中でも一番低い)しかし、よかった、よかった、めでたし♪めでたし♪

⑦

2月15日 AM5:00

さきほど牛が一头やって来て人の洗たく物のパンツをかぶり、騒いで帰っていった。しっかりとコーヒー1杯とポテトチップス1袋とみかん2個も喰ってあの牛は気がふれたのではないだろうか。人生21年も生きてるとああなるのだろう。しかし、20年しか生きていないおれもはっきりと頭の限界を感じる。すでにかんりの単位をおとし、もしかすると専門の単位を一つもとら



ずに3年になるかもしれない。気合がはいらぬ。ついでは体の方も学校の正門を飛びこえるときに足をくじいたらしい。

あ～痛て、早くスキーに行きて、西表に行きて。

S R

2月16日

肉親以外の人から初めてチョコレートをもらいました。

むろん女の子からです。

匿名希望

2月16日

決まった～ もう絶望じゃ～ 今晚はヤケ酒じゃ～


橋田さんちに夜襲に行つてやる～

2月18日

留年だ、留年だ 楽しいなあ。

2月20日

いやー みなさん

 ってほんとにいいですね。

優等生

2月23日

昨日、あんまり天気がいいので鴻ノ峰へちょこっと登ってみた。春ですなー。うとうとと昼寝すること、2、3時間、うす目をあけてみると、目の前で女子高校生が3人、ふもとからランニングをできていて柔軟をやっていた。1人あまっているようなので、柔軟の相手をしてやろうかとも思ったが、そこは理性でぐっと押さえて、再びエアーマットを枕に昼寝と決めこんだ。木戸神社のあたりは紅梅が満開でなかなかのものでした。こんな日に下宿で昼過ぎまで寝ているのはもったいない。HAVE A NICE DAY!

夜、酒飲んで、昼は外を飛びまわっている野村でした。

5月9日

AM11:00 ダツヤFWより帰ってきました。

もうきちー きちー ダツヤは最高!!

スバラシイ!! オカルト!! きつい～～!!

詳しい報告はのちほど

つかれた

岸

5月14日

きのうの暑さがウソのような、今日の天気れす。明日は、とうとう80kmですが、みんながんばりましょう。

5月14日

ツボじゃい!! 頭が悪いと困ったことになる。

5月14日

きのうの酒宴では、若さビンビンバリバリだった。

なお、ちまたに広がっているウワサは、一切事実無根です。あしからず

by Moichi

5月16日

ひさびさに、縦走路を見た。感激と、なつかしさ、そのものだ。

でもある一種のさびしさも感じる。それは、自分のワングルに対する、4年間のジレンマのような気がする。

1年のころ、わけもわからず、がむしゃらにやっていた。

今になって思えば、高校の時の延長上にありすぎて、おさなかつた。

しかし、この時が一番おもしろかつたのだろう。

2年になって、ワングルばかりやっていたは、大学生活がもったいないと思い始めた。

アルバイトと勉強に力を入れた。ワングルに $\frac{1}{2}$ 、アルバイトに $\frac{1}{2}$ 、の力を入れた。勉強は別の話だ。

3年になった。このころ僕が最もワングルから離れた時期だった。みんなとギャーギャーさわぐのがバカらしかつた。我々はずっと大人であるべきだと思った。ギャーギャー騒ぐその終わった時、我々に何が残るのだろうかと考えた。夏、そんなことばかり考えていたので、合宿前に病気になった。その時はちっと残念だったが、合宿に参加できなかつたことを苦痛とは思わなかつた。今になって考えると、ものすごく残念であつたことに気がついた。僕は通常の部員よりも、2歩も3歩も遅れた、そんな気がした。

3年も終りに近づき、何か残そうと考えた。今まで僕を育ててくれた山口大WVに何か残そうと思った。隠岐文化&冒険WVを考えた。

5月17日

ボクは昨日小郡駅で、生まれて始めて「手すり」のありがたさを知つた。

by 80kmを制した Super Moichi

5月17日

下半身が死んでいます。まだ両手は元気です。  
昨日はだまで農家の便所を使ってすみません。  
チリ紙を大量に使用してしまいました。

by うんこ



5月19日

やはり昼休みのBOXでのくつろぎはいいものだ。  
ワンゲルに入ってから常にそうであった。  
不思議とBOXに足が向くのぞ。

さて合宿も本日がコース紹介とあって、いよいよ本番となりました。合宿まであと2ヶ月。3年は、本当に忙しくなるでしょう。最近よく考えることを書かしてもらおう。

それは、“ワンゲルの社会性”ということです。

ワンゲルの人員増加(山大の)の裏にみる最近の人間の気質の変化も、その中に含んで考えることができます。ワンゲルが体育会28サークル中の1サークルとして存在している以上、運動系として、体力、精神力の向上は一番である。しかしワンゲルらしさはそれをこえたものを常に求めてきたと思うのです。多くの人間がいるのならいろんな事を考え、いろんな事をいえる場があってもいい。他人批判の前に自分の考えなりの充実をはかっていこうじゃないか。

そこで俺個人の考えではあるが、世間の風潮、世の動きを見る時、自然破壊に対する管轄諸機関の政策の矛盾を感じずにいられない。方便にしても然りです。

自然を愛していこうとする者の一人として考えれば非常に残念なことです。これに対し、我々がいかに対処し反発していくか、これが社会性を考える発端です。だまって行事についてゆき、ワンゲルの一員であるという安楽さを感じているだけの間に自然は着々と国の政策なりにより、荒廃してきているってことです。

泉谷

5月20日

CMCは、2年は田中正則を絶対行かせる。ザマーミロ。  
ほかのやつはだめ。カッカッカ。

by 渉外

の～ 下川 行ってくれえ～や～ 正則  
金がないから ダメ… 下川

5月22日

行きたくな～ 川原

5月22日

木村へ サブザックを借りる。

俺が山の中で寒がっている時に宇部でええことすんなヨ。

中桐

5月23日

ソフトボール大会2回戦 我が技研はKITYSと名乗る。

ソフト同好会にコテンパンにやられた。聞くとところによると、出場したのは二軍の選手だったそう。ヤシや〜。

石川

5月23日

ソフトボール大会本日第二試合3回戦 我が嘉穂高校OBチームは体研にWスコアで又敗けた。もう出番はない。

石川

5月25日

最近私語記にまともな事を書く人間が居なくなった。大変寂しい限りだ。年を追うごとにこういう傾向が増えていくとよく言われる。実際書棚にある5、6年前の私語記を読んでみて欲しい。何となくクラブの雰囲気そのものも違っているように感じられるはずだ。

私語記は確かに伝達簿の役目もするが、それ以上に個人個人の意見、考えなりをクラブに反映させる為の雑記帳である。個人個人が表面的には波風がたたず、うまくいっている様子であっても、いざ心の中は全く知らない、まだ人の事には干渉しないというのでは何の為のクラブか、と言いたくなる。話しにくい事でも一人で悩まずに皆で苦しみを分かち合い、又楽しみも分かち合うというのがクラブがクラブたる存在理由だ。ただ現状を見るならば楽しみだけを分かち合ってる様に感じるが…。

現在のように本音を言いにくい世代であるからこそ、せめて我々ワンダラーぐらいは互いに本音を言おうではないか。特に我々のクラブは80名からなる大きなクラブである。とかく慣れ合いやまあま主義に陥り易いと思う。腹を割って話し書くことが必要である。

本音を言い、何でも書ける場としての私語記を目指そうではないか。試しにこの5月に入った頃からの私語記をめぐってみて欲しい。一ページの半分書いた人間が何人いることか？4年、5年の人だけではないか？1年生も遠慮はいらん。好きなだけ書きまくって欲しい。

野村

5月26日

橋田、田中パーティー リーダー養成より無事帰還 AM7:45

すべてがおかるとじゃ!!

5月26日

歯が痛いよ おわり いの だれか遊びましょ

こんなこと書くと馬鹿だと思われるといけないからなんか書こ、

最近FWの数が増えている。たいへんよいことだと思う。

たまにはメチャクチャなコースをたてて安対に出すのもよいだろう。(合宿はべつ)ただ安対が通さないだけのことだ。もっとビバークしたりブッシュしたりするのもいいんじゃないだろうか。

私は、ワングルは原則として何をやってもかまわないと思っている。ワングルにルールはない。ところが2つだけルールがある。1つは死なないことと(安全対策)もう1つは集団という形態を保つこと(基本的技術、リーダー養成)である。この2つを守ることができれば何をやってもいい。

しかしながらこの2つを守ることは容易ではないのだ。

だからワングルが新しいことを始めることはたいへん困難だと言えるだろう。やりたいことがやれなかったら集団を離れなければならなくなる。

しかし結局のところワングルの主体は個人であるからそれも一つの方法であるとも言える。自然に親しむと言っても自然という言葉の定義がむづかしい。ところで私は何を言いたいのだ。私の言いたいことは次のひとことに尽きる。山について考えるな! ひたすら山を見よ! 人に対しても同様だ。ふもとから見ると山は高い。ピークに登っても下を見て高いと言うだろう。ところが同じ高い山でも意味がちがうのだ。

5月26日

英彦山FWについて

今回は1人で行くことにしましたが、あの日、1日ぐらいでは物足りないと思われる程、面白そうな山です。1つの山(ピークは3つあるが)に数多くの歴史、民話があり、山の地質自体も興味あるものがあります。よってPart I II…くらいにして、この次からは英彦山に興味のある人と一緒に行きたいと思います。景色もいいようです。アプローチも簡単だし、交通費もそんなに高くない。それではまたこの次に。

P. S. 最近、酒の飲みすぎなのか胃の調子が悪い。今日は静かにしていよ。バカ飲みはやめよう。しかし、昔の人はもっと飲んでいたように聞いている。僕の胃が弱いのだろう。

P. S. この前研究室の書庫にかんづめで勉強した時、勉強せんといかんなあという気になった。しかし、下宿に帰れば酒を飲んでわやをしている。勉強は学校でしょう。授業にもおもしろいのと、おもしろくないのとあるが、おもしろいやつには実にまじめにうけている。いい傾向だ。今は英彦山のこと図書館に行くけど、やはり興味あることには、熱心に勉強できる。時にはじっと机について勉強してみるのもいいのではなからうか。

読書をしよう。本はいい。これは絶対に言える。随書館に1度も行ったことのない人、あ

そこに行って、書棚をぐるぐる歩き回るだけでもいい。ひょっとしたら何か興味ある書名に出会うことができるかもしれない。

川原

5月28日

温泉旅行出発（測量というのに名を借りた）

他のパーティもガンバッテこいよ～

P. S. 野村 トレーナーをたのむ。

垣田

5月28日

2コマめ授業に出ようとしたら休講だった。

昨日のかえるの解剖には参った。

はしださんはどういう気持ちで人を切るのだろう。

岸

5月28日

九重 岡崎P（中桐、宮本）

湯田温泉駅 7：15発です。

“絶対によい天気がつづきますように、！”



5月29日

きしへ

コンパスをおいちょく。

P. S. アメ アメ 降れ 降れ もっと降れ カッカッカ

5月29日

とうとう雨が降りだした。

こんなときに降るな。僕はリーダー養成ちゅうに。

5月30日

昨日、温泉旅行から帰ってきた。友人と登った三瓶山はとて素晴らしいところでした。

バスを降りて、1時間ぐらいで登れますので、1泊2日、日帰りでも行ってこれます。頂上から見た日本海がとてすばらしかった。是非お勧めします。

しかし、ぼくは初めて数学科の実態を見てしまった。

ほ、ほ、ほ～たる来いと呼ぶと、おしりにタバコをくわえた裸のほたるが飛んできたり、おしり

にマジックで「数学科」と書いて、万才する奴（それもメッチェン、先生の前で）まさに狂乱の世界であった。

そんな中でひとときわ光ったのがワンゲルできたえたぼくの芸であった。

しかし数学科がこんなところだったとは、もっと早く知りたかった。しかし来月は集中講義、テスト、テスト、テストと地獄の生活がまっている。ガンパロウゼ。

来月は錬成の時期だ。きついかもしれないが（特に1年）しっかりトレーニングにでて、体力をたくわえ、みんなでこの時期を乗りきろう。それにはトレーニングにでるしかない。寝るしかない。ガンパろう。

トレーナー

P. S. 三瓶のお土産をおいておきます。先着13名まで。

5月31日

現在、5月31日 AM3:40なり。 やっとCMCの打ち上げコンパから脱出できた。コンパはPM7:00より始まったが、途中馬術部のものがつぶれてしまい、（PM11:00ごろ）そのかいはうに私1人と会場提供者は今までつきあわされてしまった。

今日は私がかいほうされる番なのでいくらか気持ちはおさまるが、ところでCMCはとてもよかったと思っている。よかったというのは、言葉どおり、よい思い出がつくれたというだけでなく、大学生として反省すべき点も、自覚できたからだ。日頃、生活のリズムが乱れている私たちの実態をもののみごとくさらけだしてしまった。例えば、時間厳守であっても、それを守れないといった具合にである。

生活のリズムを崩すことは、体調を乱すことに他ならない。私たち体育会の各人は、これから本格的なトレーニングに入っていく。これまでのように規律のない生活を続けると、事故の恐れも過分にあり得るであろう。だからとした日々を送らず、はっきりとけじめをつけて、すごすべきであると、CMCを通じて私は悟った次第である。

明日からもう6月。すぐに錬成がはじます。私は錬成というものをよく知らないのだが、かなりきついであろうことは想像できる。だが、1年生のみんな、80km耐歩を完法したことによって得た自信でこれをのり切っていくのではないか。完歩できなかったもの、あるいは参加しなかったものも、80km耐歩で自信を得たものに負けないくらいのファイトで錬成をのり切っていく。錬成を合宿のためのものと考えず、自己の可能性をひき出し、自己の限界を知るためのものと考えてみようではないか。“苦あれば 楽あり”で苦しいからこそ楽しみも生まれてくるのだ。苦しみからぬけ出たときの感激は何ものにもかえられない。きついとかだるいとかいって、自己の可能性をひき出すことを妨げるようなことはするな!!

木村1

5月31日

（九重FW）合宿なみの莫大な量の差し入れを持って出発したFWでしたが、あいにくの雨で残

念でした。しかし九住山からの阿蘇の方のながめ、九州本土最高峰の中岳、ミヤマキリシマ、カ  
ッコウの声、坊ガツルの犬など、楽しい思い出が出来ました。

—今日のコンパが楽しみな2年生—

5月31日

垣田隊員 恐怖の魔の山ダツヤ山から奇跡の生還、  
ただ一言、ダツヤとは人間の行くところじゃねえ。

P. S. 橋田のバカ

トレーナー

5月31日

最近、1年生の意見が私語記に遠慮なくできて先輩として、今後錬成、合宿に向けて頼もしい  
限りの今日このごろ、

錬成なんぞ気にすることのものでもない、ただハーハー言って、汗タラタラ流したら済むだけじ  
ゃ。偉そげに錬成の苦労話をする先輩の言う事をうやみにせんように。苦労話＝自慢話。

俺はそういう事を後輩にベラベラしゃべる事は嫌いです。ワンゲルには特にそういう傾向がある  
と思われるので……。

隣のページでオッチェンがメッチェンの話をし過ぎるというのがあるが、そういう事をいう先輩  
もおかしいし、1年も気にする奴はアホじゃ。18～19（あるいは20）の若者が異性に興味が  
ないちゅうのは、不健全な事でもあるし。だいたいそうになったら人間やめた方がええぞ。大いに  
恋の話をし、自分を高めて行って欲しい。ただし、はじめだけはしっかりつけて。気合いを入れて、  
これからのつらいことを乗り切って行って欲しい。よく分かっていることとは思わが。

P. S. コンパが楽しみじゃ

6月1日

㊦ ㊸ 本日小倉にて免許取得。

わ～い

中小路筆

6月2日

やっとコンパの季節が終わり、楽しい錬成シーズン到来である。

しかし、聞くとところによると、1年でまだ予備錬をやっていない者が数名いるようである。もう  
3日もすれば、1次錬が始まるというのに、いきなり20数キロもボッカすると肩がまだできて  
いない者にとっては、こわいものである。いくら体力があっても、ザック病になる者はなる。常  
ひごろのトレーニングから真剣にこなし、錬成においても、徐々にふやすように心がければ、夏  
合宿のキップは手に入る。一番大事なのは、少々のごことでトレーニングを休むな、ほんとうに山



へ行ってみたいのなら今をのり切っていけ。

ワンゲルはお祭りだけのクラブじゃない。

菊池

6月2日

遅ればせながら、石鎚FWの土産をBOXに置きます、と書いてはみたもの…既にトレーニングが終わったら、全部食べ尽くされていた。このワンゲルの食欲旺盛さには、ただただ驚くばかりじゃー。

石鎚については、一言言わせてもらおうと、石鎚山への登りの鎖は、なかなかスリルがあっておもしろい所だった。なんとピークへいったら、近くの小学生が遠足に来ていた。宇部短は、その小学生に負けた…と聞いて笑ってしまった。土小屋から瓶ヶ森は山道じゃなくて、森道を歩いた。瓶のピークは石鎚と対象的なだらかな山であった。そして西之川へ降りたのだが、このコースは1泊で行ける。おすすめのコースとしては、面河溪から石鎚-瓶ヶ森、そして笹ヶ峰まで足をのばしてみてもどうだろうか。たかが1回行ったきりで偉そうな事はいえないが、1982年に標高1982メートルのピークに立つのは感慨深いことだ。

皆さん！ 今年の秋あたりでも行かれたらよいと思います。

このFWで以前から仁保と佐藤はアホと思っていたが、それ以上に馬鹿であることを知った。

P. S. 1年コンパの収用所における破損物（障子、伊藤つかさのポスター、敷布団）それにゲロの臭いがまだとれん。なんとかしてくれ

執筆者 前田孝志

6月7日

正則の肺に穴があいてるそうです。もしかすると、あと3ヶ月の命かもしれない。

みなさん じいさんを大切にしましょう。

これは事実を無視した報道です。

6月7日

～一口コーナー～

岡山の方言特集

標準語

岡山方言

今のは冗談です。

今のはほりんが～～～

(がをのぼす)

～はしない。

～おえん

～次回を期待～

6月9日

きちー きちー 人生勉強もいいけど  
頭の勉強もせねばならぬ、こりゃあ大事じゃ〜

頭の悪い木村君

6月23日

今日、授業で俳句を約20句つくりましたので、2、3句書きます。

夏の夜 うるさいやつらを 平手打ち  
手の中に めくもりさそう はたるかな

以下、名句の数々、思い出せないのが残念な。合宿では、俳句作ってみようかな。  
しかし、じじくさい。

川原

6月23日

今週に入ってもものすごく、自分自身の気力が充実している。トレーニングも苦しいはずなのに、全々それを感じない。今は、その苦しさよりも、その後の充実感の方が優っているし、トレーニング自体も、気力でもっている感じだ。錬成明けで肩は痛いし、足の調子もいま一步なののだ。話は変わるが、トレーニングはどんどんきつくなる。しかし、今度の1年は、よくついてきていると思う。トレーニングは大切だ。体力ばかりでなく、気力で頑張ろうぜ。錬成なんて、すぐクリアできる。夏合宿はすぐそこだ。

みやもと

6月25日

明日、錬成の方々、がんばって下さい・・・

今日は晴れも晴れ……………明日の天気はいかに…?

私たちは、最後の一本で大雨にたたきつけられて帰ってきました。

気持ちいい……………というのを越えていたような気もしますが……………。

帰りついた時、もはやずぶ濡れ!

私の下宿の近くをうろついている猫-(人なつっこく、部屋にすぐ入ってくる)-は私を見て、思わず尻ごみをしていました……………

少し、私はショックを受けました……………

次の日は、干してあるザックの上で昼寝をしているのですよね-いい気なもんです。

とにかく、天候を征服してがんばって下さい!!

M. Yoshida

6月26日

FWの計画書、張っておきました。大峰という山は、近畿最高峰の八経岳を含む近畿の尾根と呼ばれている山域であり、又、昔から修験道の山として、信仰の対象となっている山で、今でも、山伏の姿をよく見かけることができます。誰か、一緒に行きませんか？下山後は、神戸見物と神戸肉が待っているかも……

最後の2次鍊、ガンバルぞ～～

はしだ

6月28日

今日、3コマ目の英語D（伊豆）で、3人の代変をした。声を変えるのに苦労した。1人代返するたびに、4～5人がゲラゲラ笑ったので、ばれるかと思っていた。しかし、ぼっちり大成功！ここまではよかったが、授業の終わりごろに“田中康弘君”と当てられた時は、ドキッとして、“ハ・ハイ、やってません”と答えた。康さん、俺がいてよかったネ。

6月29日

28日（月）に英語Aの前期試験が行われました。

……遊びぐせがついて勉強不足！！

不可が私を待っています。

前日に、鍊成のあった清水さん、松島さん —— 終わった時に余裕の笑顔……！！

おまけに、1年合宿のParty 名が「留年日前パーティ」

みなさん、♪ 仮進生まれのあの人に～～♪で一緒におどりましょう。

↳ 留年は避けたいと思います。

Miki

7月1日

4:41 a.m.

白々と夜が明けつつあります。

誰もいない構内はひっそりとして、朝の涼しい風が快ちよい時間です。

今日（昨夜かな？）V.S.O.P.を……。

あとが続きません。とにかく今、最高に気持ちがいいんです。

私もです。鍊成も終り……

うん、こんな時間にBOXに来たこと……忘れないでしょう。

夜が明けるのを体じゅうで感じるのってステキです。

頭で考えることと……体が感じることと……まったく別のところで働いているのですね。

だから、私はワンゲル部です……！？

7月1日 AM 4:51 あ…もうこの懐電いらない——

夜明けのBOX最高にステキです。

こんな時に来れる場所がある私達って幸せなのでしょう。

小鳥のさえずり。。。山に行かなくても、こんなに聞こえるものなんですね…

言葉にならない充実感……帰って寝よ ——

7月1日 AM4:57 ねむい目をこすりつつ…

え〜〜!! みんな酔っとるら〜〜

7月1日 PM8:00

あ〜〜あ、2千円が飛んでった ——

あの2千円は、僕より岡さんのほうが好きらしい……。

7月3日

最近どうも、伊藤博文さんと仲良くすることができません。すぐに、他の人のところへ行ってしまう。誰か伊藤博文さんや聖徳太子さんと仲良くできる方法を教えて下さい。

金欠病のMくん

7月4～5日

やっと錬成が終わった。はっきりいって、きつかった。特に初日は、全然足が前に出なかった。これで、もうダメダ、もうオシマイダと、何度思ったことか。どうして、自分がこんなに苦しまなければならないのかと、もうザックをおいて逃げだしたいとかいう気持ちに幾度なったことか。暑い中、30kg以上のザックを背負って何になるのか、と、ロードを歩いているとき、そう考え続けたものだった。

しかし、最後まで歩き通すことができた。錬成を無事終えることができた。先に述べたようなことが頭の中を駆けめぐっていたのに、どうして、倉庫前まで歩けたのか。まず、第1に、PL氏、SL氏、そして市川氏の励ましのおかげであったと思う。そして、第2に、いや、これを第1にもってくるべきであったかもしれないが、苦しい、やめたいと思っていた中で、夏合宿のことが、頭の片すみであったことである。実物は見たことはないが、これまで、写真集などで見てきたアルプスの山々を思い出すと、錬成で歩いているこの道が、それらの山々に通じているのだと信じて歩くことができたのだ。トレーニングも同じようにいえるかもしれない。この苦しいトレーニングが、アルプスの山に通じていると信じているからこそ、苦しいトレーニングにも耐えることができるのだ。“オマエはアルプスへ行きたくないのか”という自己への問いかけが途中でくじけなかった原因であったのであろう。

それにしても、きつい錬成だった。途中、ふと、5月の80km耐久徒歩を思い出した。あのときは、無我夢中だった。宇部まであと何kmと、自分に言いきかせて、走り続けたものであった。ゴールした瞬間のあの気持ちは何ともいえないものがあった。目的を達成したときの感激を期待して、進んでいくのは考えものだが、目的に達して素直に感激するのは、すばらしいことである。

それがわかっているから、合宿へ行きたい、いや行かねばならないと思ったのも当然だったのかもしれない。よく文章がまとまっていないが、これでおしまい。

いま1年で七夕祭の打ちあげをしている真最中の真っただ中にいる

木村<sub>1</sub>でした。

7月5日

何がなんだかわけがわからないままに始まって、終わってしまいました……七夕祭!!

本当に1年のみなさん、ゴクロー様でした!

最後まで、フィーバーしてくれた人、ゴクロー様!

そして、何よりも、何回も来ていただいた先輩方に感謝しています。ありがとーございました。

1日目、用意不十分で、てんてこ舞っていた時に、石川先輩がさし入れして下さいだったフレンチドッグ、本当においしかったです。

あんなおいしいフレンチドッグ初めて食べたよーな気がします。ありがとーございました。

今は、“あー終わった”という疲労感と充実感……

M. Yoshida

7月6日

誰か一緒に富士山行かんか。8月8日、日帰り。

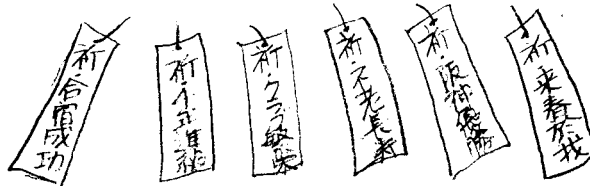
ワングルにはいった以上は、日本1の山には登るべきだ。1年でも可。

垣田

いや、所帯をもって、妻子の手を引いて行くべきだ……某3年

7月6日

明日は七夕である、とふと気づいた。松江では1ヶ月後であるが……



貴方も願いを短冊にこめて……。

7月7日

今日は、uncross だ!!

7月7日

昨日、下宿で冷蔵庫の前に中腰になり、ジュースを飲んでいたら、なんと足を痛めてしまった。

みなさん、ジュースを飲むときは、くれぐれも注意いたしましょう。

匿名希望

7月8日

やっと退院できたけど……まだあまり遊び回ってはいけないという医者言葉にもめげず、自転車のうしろにのっけもらって、荷物になって最終トレの見学にきました。日ごろは、トレーニングというと、ため息がでるけど、今日は、体操しているみんなを見ていて、うらやましくもあり、さみしくもあり……

垣田さんの「走るゾ〜〜」という声も10日ぶりに聞いて、新鮮な感じがしました。

それにも増して、合宿へ行けないことが、とっても残念!!

でも、本部パーティで、みんなが無事に、そして元気に下山してくるのを待ってますから、がんばって合宿を成功させて下さい。

1年合宿には、参加できると思うので、それを楽しみにしています。

それから、お見舞いどうもありがとうございました。

P. S. 某先輩へ アスレチックゲームを明日ボックスにもってきますので。

ズッコ

7月8日

最終トレの惨事、見に行こうかな ——

行きたいな ——

行こう。〇

6:10

7月12日

南アルプス全山パーメン全員に告ぐ

- 全員、学割は取ったか。
- 松本は、ブス板を確保したか。
- 明13日、早朝トレ。午後には装備点検、個装点検を行う予定。そして、明後日14日までに Party 費用を払うこと。各自、体調維持には、くれぐれも注意すること。

from 団長

7月12日

みんなは夏休みでいいですね。なんで、休みに学校でにゃならんのかね。しかし、このキタナイBOXにいよいよ始まる試練の夏合宿を感じると言いたいが、やっぱ「発つ鳥、あとをにごさず」で、きれいにしよう。

3年 岡田

7月15日

一の瀬が「俺りゃ〜山に生きるぜ!!」と私は聞いた。

7月17日

田中正則へ

たまには家に帰ってあげなさい。ご両親が心配して自分の家に電話をかけてきたぞ。

from タル

7月17日

PM 6:00 前田Pより無事連絡入る。

全員元気で、今日甲斐駒にピストンをかけたという事。天気もまずまずで、景色も見えたようだ。予想どおり、ヤスが早くも狂い始めている……と前田が言っていた。今日ピストンをかけたんで一日分の行程を縮めることになり、明日は仙丈山荘 2 の予定。梅雨明けが待ち遠しいと言っていた。

健闘を祈りたい。

野村

7月27日

フニー

中小路の病気が出ました。

中小路

7月30日

コンニチワ、!

私S 47～51、山大におりました。ワングルにはS 48～入部。あんまり山には行ってないダメOBの青木です。

今日は研究室の同窓会があるというので久しぶりに山口にやってきたのです。みなさん、きっと夏合宿中で、いらっしやらないとは思いましたが、チョイと部屋をのぞいてみたら扉が開いていたので入りこんだ次第です。

部屋かわってませんね。相変わらず汚ないこと!!

But とても涼しい風が入って快いのです。

山には卒業後一度行ったきり。今は一児の母なので山行など行きたくてもとてもとても……。

でも子供から手がはなれたらトレーニングでもして、又チャレンジしようと思っています。

夏合宿、無事におえられるよう祈っていますネ。

沢山の部員の皆さん、頑張ってください。

清水光代(旧姓青木)

8月9日

とうとう3回目の夏合宿が終わってしまった。

とにかく全員無事で終了し、よかった。

自分にとっては最後の夏合宿であり、山行、ファイヤー、そして松本ぼんぼんと、今までの中で最高の思い出となったと思う。そして、残りのワンゲル生活も、精一杯ガンバろう。

そして、我絵日記パーティーの絵日記は、全員みごとな出来ばえであるが、みんな内気なはずかしがりやのため公表はせず、見たい人は個人的に頼むように。(西杉じいのが一番よくできている。)

しかし、松本ぼんぼんに行かんやった奴はアホやで、Tシャツもなかりや、ざまあみろ。

しかし、あの松本の夜はいったい何だったんだろうか？

トレーナー

8月9日

きのう帰って来ました。やっぱり山口はいいですね。なぜって、タタミの上にフトンをして寝られるからです。

それにしても松本ぼんぼんはたいへんたのしかったです。でもやっぱり水晶岳から見た槍、鹿島槍から見た槍、とにかくデッカイ槍を眺められたのがなによりもうれしかったです。

みなさん、自分は毎週水、木と必ず下宿に居るとおもいますので、おひまだったら、いらして下さい。

P. S. 夏。太陽。海。日焼け。そしてバイク。

あるときは オカサーファー

あるときは アイビーボーイ

あるときは ツッパリニイチャン(←カイドウレーサーになおします)

そして、その正体ハ、クライマー志望の 岡崎デース

8月11日

たった今帰って来ました。松本からフラリと風にまかせて(ウン、いける。/)新宿へと旅立ち、鈍行でやっとの思いで帰ってきました。途中下車6回、いろんな街の顔を眺めてきました。新宿では日本の性風俗の最先端を知らなければならないと思ひ夜の歌舞伎町のウロウロ、でも広島の流れ川でやっている事と、大差はなかった、ただ人が多いだけ。やっぱり、下山後の「松本ぼんぼん」が最高。/ いやぁ～あれは聞きしにまさるものでした。

所持金45円の一年の山崎はちゃんと生きていたろうか。チロル4つ食えば、まあ、生きていたろう。

合宿大成功(少し狂った)、Freeワン大成功、皆さんおつかれさま。皆さんそれぞれの思い出にひたって下さい。自分は明日より再びいつもの勤労少年となり、暑い山口にたたずみます。暇な人は酒でも持って来て下さい。メッチェンの方は酒がなくてもいいです。

P. S. サーファー、ローラー、アイビー、トラッド娘、いろいろいたがワンゲルの人間がー



番いい……と思う。

キーキー岡崎と同じく、クライマーになりたい久々の木村<sub>2</sub>でした。

8月27日

1年の山崎が交通事故で死亡。

8月28日 午後2時より葬式

一人の若者が天にめされていった。だけどその事実はたった数行の文字でしか表せない。彼には19年の歴史があったのにたった数行でしか彼の死を告げられない。

本当に彼は死んでしまったのか。今はまだ嘘のように思えてならない。夏休みが終わって、彼が「夏休みがおわちまりました。」なんて言いながらこのBOXに現われてきそうではかたない。これが夢ならば……。

ここに静かに彼の冥福を祈ります。

9月4日

夏休みも終わりました。秋です。

1年生及び2、3、4年の該当者のみなさん、お金を払う季節がやってきました。

すぐ試験の毎日が始まります。それまでに払って下さい。

まずは5日の部会にお金を集めますので(壁にはってある表より)自分の金額を確かめて、もって来て下さい! 竹中君は特に!!

岡

9月18日

メッチェンの一部で小さな話題になった曲、佐野元春の“Happy Man”。

世界中のリチギにai ai ai ~~~の部分ですが、歌詞カードを見ましたところ残念ながら「インチキ」でありました。それづもやっぱりナルホド「インチキ」かなァーと思って聞くとインチキだけ「リチギ」みたいやなァーと思いながら聞くと「リチギ」に聞こえますゼェ、元春君……。

P. S. 宮崎さん、トッペもって帰らないのですか?

Miki

9月22日

完全留年だ!! やったぁ~~~~あつ。

9月22日

今日、2人で自動車学校に入校の手続きをした。八川も早く、入校手続をするように。入校は30

日の午後。

愛する八川へ 一ノ瀬より

9月23日

みなさんお元気ですか？ 僕は元気です。

それではさようなら。

from OKAZAKI

9月24日

岡崎が絵を描きながら「牛」の種類をおぼえていた。なんでも試験に出るそう。そこに、なぜか野村(3)さんがいた。

岡崎よ、あきらめろ、どうあがいても経済の連中のあの集中的な記憶力にはかなわんのだ。

N. S. P.

9月25日

夏合宿「絵日記パーティー」打ちあげ 明日8:00

ぼくんち集合

トレーナー

10月1日

昨日は、私は何かしたのだろうか。なにかいげんをことごとくなくしたような気がする。

by すみれ September love

10月3日

呼べーばー 答えるー 佐藤は若〜い〜

10月7日

みなさんがFWに行ってるあいだ自分とあの宮本と某友人とで博多までバイクで走ってきました。夕暮の関門海峡はスバラシイ眺めでした。帰りは宮本が香椎で事故りました。トラックと歩道の間にはさまったのです。生きているのが不思議であった。

中型免許をもっている人、追い越しのとき、絶対オーバーアクションでしないように。ブラインドの向こうには地獄が待っている。

10月13日

教養よサラバじゃ、！

56年度入 岡崎雅治 ㊤

10月14日

ヤッター 西武ライオンズ 優勝!／

10月18日

こんにちわ おわり いの

10月26日

昨夜、私の部屋で飲まれた方々へ

すいません、家主がまっ先につぶれてしまいました。誰にすすめられたわけでもなく、一人で勝手に…。ところで、お茶もいいけど、日本酒はもっといい。あつまって気持ちよくて、と言いつつ今晚どなたか飲ませて頂けません？ 金欠病の川原でした。

こんな川柳、知ってますか？ 「世の中に、酒と女は かたきなり

どうぞ かたきに めぐりあいたい」

10月27日

中四のスタンプ、次のように決まりました。本日のトレーニング後から練習します。

1. 野村さんのあいさつ
2. 日本一の洗濯屋  
全員、松本ぼんぼんのTシャツになる。メッチェンはニッカも脱いでランパンかホットパンツになる。
3. 松本ぼんぼんのB.G.M. スタート。松本ぼんぼん1曲、山口ぼんぼん1曲、松本ぼんぼん1曲の順で踊る。途中、他大学の人にも参加してもらおう。
4. 整列、あいさつ

山口ぼんぼん歌詞

山口ぼんぼん維新の地 / 山に緑の風吹けば / 鐘が鳴る鳴るザビエル聖堂 / 源氏ボタルの花が  
咲く / 歴史に満ちる山口ぼんぼん / ぼんぼん山口ぼんぼんぼん……

川原

11月4日

実に楽しい中四でした。

僕はこれで4回も中四に参加したわけで、4回も参加（一度は主管）すると中四のいろんな面が見えてくる。

合ワンではとにかく、馬鹿にならなければならない、馬鹿なふりをしなければならないと2年の時までは考えていた。

しかし、3年になって主管をしてみるとそのようにふるまうことがいかに自分にとって不自然で

あるかがわかってきた。

自分が馬鹿であるということと馬鹿なふりをするとは全くちがう。馬鹿であるということは自分をさらけ出すということで馬鹿なふりをするということは自分を装うということだと思う。

そもそもふりをする必要はなかったのだ。

ふりをした自分からはふりをした自然しか見えないし、ふりをした先輩面からは、ふりをした後輩面しか見えてこない。

11月5日

今日も元気だ講義で寝よう。

11月5日

トレーナー所感

各自にさまざまな思い出を残して中四が終わった。

「楽しい思い出」「感激したこと」「少し悲しい思い出」そしてこれだけ多くの仲間と知り合えて、本当にワングルに入ってよかったと思った1年も多いことだろう(自分もそうであった)。

しかし、いつまでもこの余韻に浸っていてもしょうがないのである。

何かあるたびにバカ騒ぎをして、中四の思い出に浸っても進歩はない。これからはいよいよマラソンシーズンなのである。

とにかく、山登りのクラブがマラソンを、という非難の声をよく聞くのであるが、登山に必要な精神力、持久力を養うにはマラソンというのは最高のものである。そしてタイムを縮めたときのうれしさ、走り終わった充実感、特に本番の緊張感、責任を果たしたランナーの顔は、実にいい。そして、我部も健在なりとアピールする場合は、まさに、学長杯である。

各自が、限りなく自己に挑戦することは、これからの自分の生き方に大いに役立つであろう。足が速い、遅いは問題ではない。勝利が目的ではない。ただ、一生懸命やればよい。そして、重要なことは、みんなでやることである。一人の落伍者も出さずにみんなが一団となって12月19日のワングル杯まで頑張ろう。トレーニング日数約20日間、そしてコンパのときはみんなでおいしい酒を飲もう。

マラソンにおける注意

- ① 長い距離を、しかもアスファルトの上を走ることになるので膝を痛めやすい。底の薄い、ぼろぼろの靴をはいている者は少しガンバッテ、よいジョギングシューズを買おう。(買えるものは)
- ② ヘビースモーカーは減煙をしよう。
- ③ あらゆるピッチで走って、早く自分のピッチをつかもう。
- ④ 走った後は冷えるので、防寒具を持ってこよう(ヤッケ、ウインドブレーカーなど)。

次に、この前の部分で、宮崎から出ていた、「どの運動がどの筋肉をきたえるか」という問題であるが、

体操 ————— 準備運動  
ランニング ————— 持久力、脚力  
腕立て、腹・背筋 ——— 腕、肩、腹筋  
早稲田跳び ————— 足、腰  
スクワットフラスト — 全身  
馬跳び ————— 腕、足  
足上げ腹筋 ————— 腹、大腿筋  
腕立て静止 ————— 腕、肩、腹

バランス ——— 腕、肩、側筋  
肩車 ——— 腕、肩、足  
倒立 ——— 腕、肩、  
クマ ——— 背、足、  
手押し車 ——— 腹、腕、肩  
ダッシュ ——— 瞬発力  
ボッカ ——— 全身

以上のようなのである。要するに、腕、肩、腰、足を鍛えるのがワングルのトレである。これが登山で一番必要な筋肉、力である。

久しぶりに長々と書いたが、とにかく無断欠席をしないように。

みんなでマラソンシーズンをガンバッテ乗り切ろう。

トレーナー

11月9日

栗の煮かたについて

水と栗と塩少々をナベの中でデートさせて、約1時間熱い視線を送ってやって下さい。大成功するでしょう。

11月15日

公開CAMP御苦労さん。2年は自分達の手だけでやったということで大きな何かを得たのではないかと思う。1年も、中四、公開Cと蔭ながらよく頑張った。2年も1年も今後、この勢いで頑張りたい。ただ、しかし勢いだけに流されてはいかん。締める所はビシッ、と決めて欲しい。けじめだけはつけよ。そうすれば、後はどんなにフィーバーしようが狂おうが、フィーバーした者の勝ちだ。

BOXが汚ない。他サークルの部屋もいろいろと見て来たが、これ程汚ないのは例がない。いや、俺が入学してから初めてではないか。BOXがこれ程荒れ放題になっているのは。床の上をみてみる、机の上、ゴミ箱。どこを見ても乱れ放しではないか。

情ない…。以前も清掃当番があったことはあったが、それ以前に誰かが自発的に何も言わずに清掃していた。今年の状態はあまりにもひどいぞ。

ワングルを愛するならBOXにその態度が反映されてしかるべきと思うが、違うだろうか。

野村

11月19日

僕の右手は悪い子です。

勝手に時計のベルを止めたのです。  
だから体育を“ちこく”してしまいました。  
僕の右手は悪い子です。

11月19日

雨降れ、雨降れ、雨降れ、雨降れ

雨降れ男

11月23日

クンが出る。!

ヤス

11月25日

芸北から昨日帰山したんだっチャ。!

23日の夜、雨がジャンジャン降りテントに水たまりができてしもうて(PL席が特に)俺だけ近くにあったトラックに寝ていました。24日は朝から雪が降り、ピンピンに寒くどうしようもなかったです。! 雪まじりの雨になってきたので大佐山には行けんかった。でも晩秋の芸北は実に静かで美しかったけんね。恐羅から見た牛小屋高原、深入での山の深さ、臥竜Pのでっかい岩、砥石郷からの聖、それにタル床湖、結局ピークのわからんやった掛頭、みんなみんなすばらしかった。帰りの汽車から見た荒波の日本海にも感動しました。

11月26日

皆様、FWおつかれさまでした。寒かったことでしょう。ワンゲルは夏は暑さ、冬は寒さとの戦いでありませう。まさに原始人そのもの。現役3年間のうち、一度くらいは雪のあるところで春合宿を体験してほしいものです。まず第一は合宿に行くことですが…とにかくガレバレ!!

さてさて、大山Pの面々、本当におつかれさん。山口でのうちあげ、12/2(木)拙宅にて行う予定。  
\$

11月27日

石鎚みやもとFWは、精進料理&唄々Partyでした。天気はあまりいいとはいえなかったけれど、全ピークには登ったし、霧氷は見れたし。しかし瓶のピークは滅茶苦茶寒くて、瓶ヶ森ヒュッテでさえ、-10℃くらいだったから、たぶん-15℃くらいになった。ほとんど春合宿で、小屋の中のポリタンが、こおりついてしまう。でも筒上からの鎚は、きれいでした。太平洋も、瀬戸内海も見えました。

P. S. 松山城からの鎚は涙色でした。

11月28日

22日に、野村さんは遅れながらも新幹線に乗り、名古屋を經由して、松沢さん(社会人1年)の故郷、孤野町を通って御在所ロープウェー下まで行った。P.M9時ごろロードしていると、ホテルの調理師をしている人に声をかけられ、(変な意味ではない)1時間の夜間ロードをしなくて済んだ。いつも、FWに行く度にいろいろと親切を受け、暖かい気持ちにさせられる。考えてみれば、今迄のFWも、旅行も、どこかで誰かのお世話になっているからこそ、今となっては楽しい思い出として残っているのであろう。異郷でも「甘え」と言ってしまうまでであるが、人間たまには素直に人の親切に甘えてみるのもよいではないか。何の利益もないのに、汚ない格好をした自分を乗せてくれ、当然何の見返りも期待している訳でもなく、それどころか、自腹をきって飯をおごってくれたり、本当になかなかできることではない。

俺は、昨年(去年)の合宿後、北海道を1人で(時に垣田、小野村とも一緒ではあったが)ヒッチハイクの旅をした。初めての体験だった。全部で23台の車に乗った。トラックあり、自家用車あり、女性ドライバーあり、又新婚旅行中のカップルあり、農家の軽四輪あり、いろんな人が乗ってくれた。23台の車に乗って、それだけで30名からの見知らぬ人と話をし、人柄に触れ、生き方に胸をうたれたこともあり、いろんな職業の側面を見て、いろいろ考えさせられる事もあった。プロカメラマンの車に乗せてもらった時は、プロの厳しさを、自分の甘さを知った。トラックの助手席に乗った時は、まるで世界が自分1人のものになったかの印象をうけた。高い運転席からは、遠くまで一望でき、一直線の道を走りながら感動した。トラックの運転手に対するイメージもガラリと変わった。荒々しく派手な人は皆無であった。その道30年という人は、静かで落ち着きがあり、酒も飲まないと言っていた。概して、トラック野郎は無口で大人しい。大きなハンドルをゆっくり切りながら、チラッとこちらを見て、ボソッと話す。それでもってわざわざ遠回りをして生牛乳を飲みに来て行ってくれたり、ドライブインで飯をおごってくれたり、限りなく優しい。こっちは、言わば「道楽」で旅をしているのに。向こうは生活をかけて、昼夜を通して荷物を運んでいるのに。

車を降りての別れ際がまた良い。せめて、名前ぐらい教えて欲しいと言うと、大抵の人は、はにかんで、名乗る程の事でもないといった態度をとる。あるトラックの運転手は「困ってる時は、お互い様だべ。どこかでトラックがトラブル起こして困ってたら、そんなとき力貸してやってくれや!」と言って、真っ黒な排ガスを吹かせて轟音とともに、ゆっくりと巨体を走らせて、消えていった。思わず、深々と頭を下げて礼をしてしまう。俺もこんな人間になりたいと思うとともに、自分の小ささに気付く、もっともっと大きくならねばと思った。北海道はバカデカイ。しかし、人間も又、「大きな人」が多かった。親切な人が多かった。

FWや、旅をする人に一つだけ言いたいことがあるとすれば、それは「人に触れよ」という事だ。人間、自然に触れることは、人間というものの存在を思い知らされ、又活力を与えられる事であるが、それだけでは片手落ちだ。旅に出たら全く見知らぬ土地でいろんな人が、いろんな生き方で生きているのだから、そういう人との出会いをミスミス自分の方から拒むという手はない。例えば汽車に乗って、同じBOXに座った人に一声かけてみると、意外に話が発展するものだ。は

じめは勇気がいるが、それは旅の恥である。一声かけてみるのだ。それを寝ていたり、本を読んでいたりと、仲間と、キャッキョはしゃいだり(←いや、これはこれでいいのだが)もったいない話ではないか。折角、金を使って旅に山に行くなら、そういう出会いを自分の方からつぶすような態度だけはやめた方がよい。1人で出かけると無性に誰かと話したくなるもので、1人旅というのは、たまにはいいものだ。人と出会う確率は、2人、3人よりもゲンと大きくなる。俺は1人旅した時は、そういう出会いを求めてきた。実際話していて、相手が泣きだして困ったこともあったし、いろいろあった。老人と話すのも好きだ。とにかく自分の知らないその人の生き方の一面に触れられる。山に旅に出たら「出会い」を求めよ!と声を大にして言いたい。

鈴鹿調査Wの3泊目の深夜からは雪が積り出して、25日朝は、ヒザぐらい迄の積雪となった。テントが雪の中に埋まっているのには驚いた。深い所では、腰ぐらいまであり、下山するのに大変であった。それまでは快晴が続き、喜んでいたので最後にツボを見るとは……

しかし誰よりも早く雪を体験したことは今となっては嬉しい事だ。ポリタンの水は凍るは、寒くて寝れないは、吹雪になるは、雪の中を泳ぐは… まあ、いろいろとツボを見たが、雪山に対する心構えをしっかりと植えつけてくれて、なかなかの山行であったと言える。秋の鈴鹿は猛ブッシュの連続であった。俺の背よりも高い2m～2m30cm位のクマザサの中を泳ぐようにして泳いできた。しかし春の鈴鹿はいい。ササは雪の下に隠れ、大変歩き易い。これは本当である。(念のため)鈴鹿はええぞ～。五僧に行けるぞ～。東洋一のロープウェイはすごいぞ～! 白銀の鈴鹿へ行かん!

野村 3

11月28日

誰かぼくのかわりにバカをしてくれる人はいませんか。

竹中

11月28日

よし家のバイトでチップをお客さんからもらった。バンザイ! でも、ついにめしの食いすぎという声のでてきてしまった。

松本

11月30日

先日、私の下宿で誕生会をやった。次の朝、私の部屋はワヤであった。紙フブキはちらばっており、3時間かかって奥丸と掃除したのである。こんなあやまちる2度とくりかえしてほしくないのである。 くそ～～岩谷のやろう

12月1日

もう12月、早いなあ。今年の12月は暖かいということなので、雪の期待も持ちにくいですが、12月が



暖かいということはひょっとして3月が寒かったりして……雪山に挑戦し、ワンゲルの活動に幅をもたせるんじゃ。めざせ雪山

川原

12月1日

金は、あくまで手段であって、目的ではない。金を目的に生きていく人生の何とむなしいことよ。

ワンゲルの伯楽 木村 1

12月3日

僕は昨夜久しぶりにしらふで眠ったのだが、重大なことに気が付いた。自分は夜、ほとんど酒を飲んでいる眼でしか1年のメッチェンを見ていなかった。ということは、1年のメッチェンはほとんどしらふで、酒を飲んでいる自分しか見ていなかったことになる。みんなそうかもしれないが、回数が多ぶんだけこれは重大なことだ。いや笑い話か…

川原

12月3日

親友の岩谷へ。話は聞いた。人生いろいろなことがある。うれしいこともあれば、悲しいこともある。こんなことでくじけるんじゃない。君の将来は明るい。もう一度やり直せ。そうすればおのずと道はひらける。

岩谷の復活を願う某1年

12月3日

西杉翁、米寿おめでとう。 by young

12月4日

昨日から今朝にかけての狂乱は、非常に“マンゾク”いたしあした。目がさめると紙ふぶきをフトンにしていたのだ。岩谷、お前のトーバンジャーを朝食としていただきました。サーこれから講義に参加してぐっすり眠りたいと思いますです。

P. S. ワンゲル is ナンバーワン

蔵王

12月4日

ねむい目をこすりながら、1コマ目の体育実技に来たが、人がいない。休講でした。はよ連絡せんか。ほんま杉浦だっきゃー。さて昨日の1年会、誕生会は、今までにない本音を言うことのできた会であったと思う。我々1年生は、もっと自己主張をなすべきである。何か遠慮のようなものが、先行しがちである。若さ故の、熱き情熱が故の、外部への発散。多に結構である。先輩への反発もいいんじゃないか。だまってじっとしては何も生まれてこない。

P. S. 岩谷、昨日～けさにかけて、積紙10cmをもろともせず、刻一刻とひょう変する部屋をよそに、酒を飲ませてくれた君に敬意を表します。ありがとう。

浅の

12月5日

早大優勝！ PM3:30頃、今日は、天才という人間を見せてもらった。早稲田の10番はすごい。明大の10番も、努力において劣るものではないだろうが、やはり天性の才というものには、自ずから差があるのではなかろうか。最後のゴールキックを右にはずしたのは、明治に対する情では、と思えるほど彼はすごかった。それから彼らは、無意識のままプレーしている状態があるらしい。あれだけぶつかれば、一時的に気絶してもおかしくなからう。しかし今のワンゲルにおいて雪山に行くとか、やれどこに行くとか頑張っているが、遭難寸前に無意識で行動し、生への帰還を果たせる人間がいるだろうか。その点甘さはないか、春合宿を前にして、考えてみたい問題だと思う。彼らも自分達と同じ大学生なんだから。

うれしいことに、今晚雪が降るかもしれないと予報があった。雪を待っている自分にとって、上記の甘さは深い反省点である。

川原

12月5日

現、山口大学W・V部の諸君！ 今机上にある、このALBUMを見よ！ ホコリをかぶり、うすら汚れたこの1冊のアルバムには、二十年も前の古き良き時代の、大先輩方の姿がある。本、WV部創立20周年にあたる今年、皆の目にはこの20年前のワンダラーの姿がどう映るだろうか。諸君が、今忘れ去っている何かを、感じはしないか…。  
流されて生きているような自分の中で、消えてしまおうとしている何かを。ここで、20年の歴史の重みと共に現在のワンゲル活動を再確認して欲しい！

— 3年 太田、岡田より…

12月6日

昨日、アネキがプロポーズを受けた男に会ってきました。彼は、内田裕也に顔が似ていて、たいへんカッコイイ人でした。言葉づかいもよかったので、性格はいいほうでしょう。

彼と俺の会話の一部

俺「アネキと結婚する意志は、固いんですか？」

彼「はい。そのつもりです。」

俺「おやじにどう話すつもりですか。」

彼「イヤー、はじめての経験なので、どう切りだそうか心配なんですよ。」

昔はよくケンカをして、ニクタラシイと思ったアネキでも、やっぱり結婚して、他の家の人になってしまうと思うと、センチメンタルになってしまいます。でも結婚しても、俺のアネキはやっ

ばし俺のアネキですよ。今日はいろいろあってみんなより一段と寒くなりそうな蔵王君でした。

P. S. 今月お誕生日のみなさんへ スピーディーワンダーのHappy Birthday を送ります。

12月8日

体育会29期総務がスタートしました。体育会あつてのワンゲルで、印刷、スキー、ソフト道具、その他計り知れない程世話になっている。表には出ないが、毎日総務は、体育会員の為に頑張っている。せめて、会長の名前ぐらい覚えるように。又、ワンゲル部員は期待されている。期待を裏切らないように。雑用等の依頼を受けた時は、頑張って欲しい。(印刷した時は、必ずゴミを捨てる事)

野村

12月10日

刃折れ、矢尽きた感があった。力の限り戦って来、最後の運命に従順なものの姿があった。島木健作「赤蛙」より 学長杯みんながんばろう。

12月11日

オードリー・ヘップバーンに乾杯!! ホリー・ゴライトリーに古き良きニューヨークにティファニーに乾杯!!

川原

12月13日

丸久さんごめんさい。 川原

12月13日

昨日は、皆んな御苦労だった。ワンゲル史上始まって以来の快挙である。Aチームだけでなく、全チームとも好成績を残し、後は何も言うことはない。本当によく頑張ってくれた。この成績も又、偏に、日頃のトレーニングに精進してきた結果だ。これからも、この勢いで頑張るぞ。昨日、サイクリングの幹部交代コンパに泉谷氏と2人で差し入れに行ってきた。今迄、毎年、学長杯駅伝前だけは競走していたが、他に全く交流というものなかった。まあ、ある意味では、自然を相手にするという点でも、共通点が多く、しかも隣り同志のBOXなのに、なぜか長い間(かなり昔から)、お互いに反目しあっている。これといった深い理由がある訳でもないのに。まあ、強いて言えば、サイクとしては、ワンゲルに対して潜在的に劣等意識を持っているということであり、ワンゲルとしては、サイクを軟弱視したり、無関心であったり、というあたりに源があるのであろう。サイクは、マラソンにしろ、人数にしろ、BOXの活気にしろ、何かにつけてワンゲルに負けるという変な劣等意識を持っており、又サイクに入ろうとする人間が、毎年ワンゲルに流れていってしまうのではないか、といった危惧というか、恨みみたいなものも持って

いたらしい。そこら辺の「妙な意識」が、サイクの元主将村中と飲んだり話したりしているうちに、わかってきた。そこで、これではいかん、という事になって、今年からソフトボール対抗戦を始めし、今回からコンパ度に行きましょうということになったわけである。今週のコンパには、新幹部が差し入れに来ることになっている。お互いに、特別に敵対心というものを持っている訳ではなく、ただ長年、なんとなく…という関係が続いてきた。何かきっかけが欲しかった、と昨日サイクの連中も言っていた。そのきっかけは、昨日のコンパである程度作ってきた。あとは、部員同志の態度次第だと思う。反目するのは簡単であるが、良き仲間であってこそ、良きライバルになりうるということを忘れないで欲しい。クラブ間の横のつながりというのは大切であると思う。自分のクラブでは当然の事が、他クラブでは全く非常識な事であったり、ということもままある。教えられる事も多い。ワンゲルもそうであるが、サイクも井の中の蛙である。まずは他の蛙と仲良くして、徐々に井を掘っていけばよい。隣のBOX同志ではないか。俺は昨日、新幹部連中の殆んどの顔を覚えて来た。今週のコンパで顔覚えたら、あいさつをするように。これは他のクラブに関しても同様である。ヨットはいつも来てくれるが、彼らに対してちゃんとあいさつしているか？こちらはめちゃくちゃ数が多いので他のクラブの人間はなかなか覚えられないものではない。むこうが知らなければあいさつしなくてもよい、という消極的な態度ではだめである。むこうが知らなくても、自分が相手を知っているなら自己紹介をして、覚えてもらうぐらいの姿勢が欲しい。ヨットの連中は、俺に会ったら必ずあいさつをしてくれる。ワンゲルはどうだ？それからワンゲルはどう考えても、客の接待が悪い。これも他のクラブのコンパに出席してから判ったことである。これについては、コンパの前日にでも言おう。

12月14日

ヤッタニャ、うわさの「E・T」を見てまいりました。ストーリーは、うわさされていたほどおもしろくもなかったけど、やっぱりスピルバーグさんは映像がきれいです。それに、コミカルタッチな場面も多かった。みなさん、見る価値はありますよ。

なかの

㊦ 全体的に、夜の場面が多く、画面が暗いので、TV放送を待っている人は、はっきり言って、損です。今すぐ映画館へ！

12月16日

また、ふろに入っている時の、垣田さんの竹やり一撥には、不意をつかれた。きのうは酒をのんでいたためか、足のいたいのも忘れて、田んぼの中を走ったが、今日またいたみ出した。これから病院へ行きます。菊池さん、部屋にはんぼのくつ下があったらぼくのです。

オカベ

12月16日

昨夜、黒川の田んぼの中で熱泥裸男8人衆は…狂った！ 私はあの光景を泥無しには語れない…。

P.L

12月17日

川原が自転車にのった。

昭和58年

2月21日

宇部の街 近きにありて遠くあり。 某工学部生

それを言うなら、遠くにありて思うものの方がよろしいんじゃないですか。

2月21日

英語のやる気が起こらんよー 誰かメシつくってー 洗たくしてー そうじしてー あーしょー  
もな

それにしても今日は良い天気。二日酔いとこの陽気で頭がボーッとしとる。この天気だと十種の  
雪もとけるのではなからうか。 雪ふれー 土・日は雪上だ。

川原

2月21日

私は本田氏の秘密の花園を見てしまった。 ムフフ

㊦

2月21日

前田へ

ぶらさがり健康器、はよとりにこんかい。

西杉

2月22日

あと一步。

まるこ

あと二歩<sub>★★</sub>

CAORI

あと三歩<sub>★★★</sub>

Chihiro

2月26日

本日、志賀高原ばあてえは、夕方の7:30に出発します。差し入れヨロシク。

中国地方最高峰大山は、それは展望がよく、スキー場からは、弓ヶ浜・松江・宍道湖 etc …が見  
え、感動することまちがいない!! 期待して下さい。 では行って来まあ〜す!!

ルンルンの宮崎でした。

2月28日

卒業決定! /

やったぜ! /

Mr. まいど

3月4日

大峰パーティーのトレに参加した。さすがに体がなまっていて、ブッシュの時、目まいがした。

BOXで疲れた体をいやしていると沈みゆく夕日が目に映る。 あー 青春ドラマだ。

僕は青春ドラマが大好きです。

みんな、二度と帰らぬ青春を、悔いのないよう精いっぱい生きようぜい!

夕日のばかやろ～～ ろ～～ ろ～～ ろ～～

Yoshifumi Kishi

3月7日

=重要連絡=

あす8日 PM6:30より NHK山口630の時間で我が西表Pが出演します。

みなさん こぞって見て下さい。

3月8日

朝7時!! 山々の雪をながめつつ山大とうちゃく。

なんと重宗さんの小鯖では車が出られないそうです。Lucky !!

もう冬とはお別れ… 一足とびに夏… 帰ってくることは春♡です ムフ


♪ 山口で見る雪はこれが最後ねと… ♪

4年生のみなさんとはもうお別かれです。一年間どうもありがとうございました。これからもがんばって下さい。

ではでは明日の朝みなさん早起きをしましょう。おねがいしまーす。

みき

3月10日

唯今、ブーブーの練習中。 

生きているんだ! と実感したい人はSRカメの助手席に来なさい。

SRひと口メモ I 昨晚、清藤はサイドブレーキをひいたまま、セコで平川を走ったそう  
うだ。

II サード発進を2日続けてやった私 ウッ…

III 宮崎はエンジンもかけずにバックしようとした。(実話)

3月10日

お酒はもおい～～。 いや まだ まだ

3月15日

PM4:55 C.M.Cからもどったドォー。

体育会の幹部はみんなおもしろいやつばっかしじゃ！

サテト。合宿は全力を出してガンバルゾ！！

大峰P ファイト！

誰も差し入れしてくれねえべなあー。

3月16日

AM7:05 唯今、朝帰りの途中雨が降っているので退避中である。きのうCMCから帰り、夜打ち上げがあり、自分はあの樹氷とかいう葉みみたいな酒を一气飲みしてから3/15の青春は終わったのであった。あー頭痛てー。

さて、体育会の人間は皆、快活なスポーツマンばかりでCMCにおいても、又昨日の打ち上げでも非常に楽しかった。（ほとんどパーばっかしじゃったが…）彼らはスポーツの持っている厳しさ、すばらしさなどを理解しており、クラブ活動においては、ハッキリとした目的意識（試合など）を持ってクラブに参加しているのだ。うちのクラブは競技スポーツのクラブではないので比較するのは、全くせんえつであるが、1つだけ言えることは、部員のクラブ意識が全体的に貧弱ではないかという事だ。この事を深く言及するのは止めておくと、自分は自分として自分なりに解決してゆかなければならない問題だと思う。CMCでは数多くの事を考えさせられ、そして学び、参加して本当によかった。

さてさて、いよいよ明日から合宿じゃ。

いっちょ きばったるで \_\_\_\_\_

by CMCに行行ってバリバリかしこくなった次期トレーナー

3月21日

きのう、山口に戻ってきました。

19日に下山してムーと一緒にドタぐつで天神とシーモールで遊んできました。

1年3人は、今頃霧島です。

屋久島では雨も降ったけど、それよりも寒かった！！

途中雪合戦をしたり…アッという間に終わった合宿でした。

合宿中、後、と食べてばかりだったから… 太る合宿だったような…

屋久 the P 史苗

3月22日

帰ってきたぞー 鈴鹿はきつかった。寒かった。思い出深いすごい合宿だった。1年生ごころうさん。雪やけしてしまったのだ。

S L 川原

3月25日

祝 御卒業！

卒業式に間にあわなくて申し訳ありません。本日夕方、みやもとと帰ってきました。

ワングルで培った体力&精神力そして経験を発揮してください。

入学、入部以来、本当にお世話になりました。先輩方には迷惑ばかりかけていたような気がしません。

う〜 寂しい。これ本音。

着たきり雀士…

3月27日

今日、山口を出て行きます。長い山口での生活も、とうとう終りとなりましたが、皆さん、いろいろ御世話になりました。4月からは新しい執行部の下、新入部員を混え、又新しい出発を迎える皆さんが、とてもうらやましいです。どうかあくまで自然への熱意を忘れず、頑張ってください。

それでは サヨナラ Hor i

3月28日

西表より一昨日無事帰ってきました。

あいにく天気には恵まれませんでした。西表の川や海を必死でボートをこいできました。

西表は1回は絶対行ってみる所だと思いました。合宿後の観光も楽しいし!!

以上 西表の雄 正則君でした。

4月5日

旧記録・図書係より

山と溪谷のバックナンバーをファイルしました。1965年から1965年のもので、ずいぶんと昔の本のホチキスはずして、いらなと思ったのを捨てる時には少し、心苦しくもありました。時には「山口市亀山 山口大学構内 ワングル部」という印ばんが押してあったりして…  
亀山から平川に大学が移転したなんて、知ってはいたけど、本当だったんですね。

松本

4月14日

いつの間にか「終る」季節が過ぎ去って、「始まる」季節となりました。何もかもが「始まり」という感じで春ですね。

新入生がういういしく歩いているのを見るととてもかわいらしくて何となくるんるんしてしまいます。あー あれからもう1年もたってしまったんだあー

1年間、あれもしよう、これもしようと思いながら、何にもできなかった様な気がする。何事にも— 流されまい—と思いながら、どうしても時の流れにはついていけないのですね。

でも今年ももうひとつがんばってみようとはりきってますが…

まぁ あせらずにやっていくしかないですねえ、ねえ

まりこ



4月16日

今日は、いのです、よろしく、5回生の。とうとう空しく5回めの春がはじまった。  
下宿は中小路と同じところになりました。みなさんよろしく。なんのこっちゃ、おわり。

4月18日

“そりゃ～ おみゃ～ … だがや”の連発で昨夜の飲み会は腹の皮がよじれる程笑いころげました。モロ橋（一般参加）の話の中で、愛する〇〇ちゃんを自分の目の前で交通事故で亡くし、自分の無力さを嘆いておりました。そこにいた一同もらい泣き、自分達も昨年亡くなった山崎のことを思い出して涙をこらえることができなかつた。

4月に入り、新入生歓迎のため、これから下宿等で飲む機会も増えると思うが、絶対に飲酒運転はするな！これは、1年、2年、3年、全員に言えることである。自分1人の命と思うな。自分の命はクラブ全員の命と思え！

又、最近、特に車、オートバイ、原付等運転するものが増えている。日頃から無茶な運転は避けるように。人の命なんてあつけないものである。人は無力なものである。  
今回の春合宿で、自然の前でも自分の無力さを思い知らされた部員も多いと思う。くれぐれも交通事故を起こさぬように。

岸

4月19日

今は昼の2:30だというのに、この外の暗さはなんだ。  
ここは山陰か？ もっと光をくれー

明るい北九州の人

4月20日

皆様方に御迷惑をかけ申し訳ありませんでした。

これを機会に タバコ }  
酒 } をやめます ひかえます。…… かもしれない。  
麻雀 }

山本

4月23日

モイチ、八川、はよ倉庫へおいでませ

にぼ

4月24日

ー新入生の方々へー 一次会でのお酒の飲み方

・まず最初にビールが出て来ますが、これはあまり飲まない方がいい。

- 次に日本酒が出てきます。一応そこで各自、自己紹介をしますが、その時、コップ一杯程度の酒を飲むこととなります。まあ、我慢して飲んで下さい。
- この間に、4年生の方々、山女の方々が入ってこられると思います。お楽しみに。
- それから、無礼講になって2回生以上の方々、新入生の皆さんに酒を飲ませようとしています。適当にあしらって下さい。酒はこれ以上飲めない、又、どうしても二次会へ行きたいという人は寝たふりをしたらよいと思います。そして、「二次会へ行くぞー」という声がかかったら、すぐさまとび起きて元気なふりをすればよいと思います。
- 万が一、飲みつぶれて、先輩の下宿に連れていかれた方々は、これも不運と思ってあきらめて下さい。
- まあそう飲みつぶれることもないでしょう。先輩の方々はみんな優しい人ばかりですから。コンパは中々楽しいものです。社会学的に言うならば、社会的凝集力が培われる場の最も適するところです。社会的凝集力というむずかしい言葉を簡単に訳せば友達のを広げようということです。ハイ。

木村2

4月25日

今の若いもんはハングリー精神が足らん。/  
 金が欲しけりゃ世の中どこにでも落ちている。  
 金は働けば手に入る。  
 金は我慢すれば手に入る。

俺の人生哲学

4月26日

工学部の西田です。

西田、西田、西田、西田圭吾です。 ただいま、かぁちゃん募集中!/  
 早いもの勝ち。/ お買い得です。 ヨロシク アホ

4月26日

こら1年、何が寝不足、腰痛、頭痛か、ふざけるな!!  
 気合いを入れーや、 くそー

4月27日

ここちよい日差しになり、何となくダレているような気がする。勉強もしなければならぬのについつい睡魔の誘惑に負けてしまう。勉強なんかは結局自分自身にそのつけが回ってくるので、負けたところで何となくイヤだナーと感じるだけですむが、(決してこのことはいいことだとは言えない!)周囲の者にまでそのマイナスの波動を及ぼしてはならないと思う。

そんな意味でも、最低限、あいさつや行事(トレ、FW、etc)などへの積極的参加を望みたい。誰もがだるく感じる頃である。1年生は特にトレがユーウツに感じられてくる頃だろうが、

少し気をひきしめて乗り越えてほしい。少しの辛ぼうと継続が、大きな自信と強い体力を生むのだから……。

岩谷

5月1日

帰ったぜベイビー！ ほとんど地図通りに行くことができた。やっぱテーピングと地図とコンパスとカンだと思った。勉強になったFWだった。これからもいろんな所に行きたいなあ。そうそう去年、岸さん達が行かれたダツヤのコースタイム役に立ちました。差し入れ下さった方々、本当にありがとうございました。

たそがれのダツヤPL

5月4日

県会の真最中ですね。BOXに来て誰も誰にも会わないなんて。みんなで楽しんでるんでしょう。結構なことです。

この頃ふと考えるのですが、自分はあまりFWに行かなかった。これは自分にとって大きな損ではなかったか。ゼミなんかで池田先生と話していると全く知らない山の名が出てきて、そのエピソードなんかを先生が思い出しながら苦笑して話される時、しみじみと思った。山行もいろいろ形態があるのです。特に単独行は個人にとって非常に思い出深く、又、勉強になるものです。野草や鳥獣を見るのも、景色を眺めるのとは又異った趣きがあります。

新入生の諸君、先輩について、どんどんFWに参加して下さい。君達は多くのことを学ぶでしょう。公開ハイク、新歓、県会のバカ騒ぎとは又違ったワンゲル観がそこに有ります。

“山”はアルプスなど、特に有名なものばかりではありません。良い山は我々の身近な所にいくらでもあると思いませんか？

山の良さは他人に教えられるものではなく、自分で探し、みつけるものです。

人生にも同じことが言えます。自分の夢はやはり自分が行動する中で自らが見い出さねばならないものです。

我々は「最大の努力」をした時、「最大の利益」を得るものだと思います。ワンゲルにしてもただ何となく入部して何となく無難に過ごしたというのでは、その人の得るものは、いったい何でしょうか？

入った動機なんかどうでもいいのです。君達の残り（3年間なり2年間）の時をいかに使い、いかに役立て、自分自身を成長させるかは、諸君達自身の問題なのである。

先にも書いたが、

『何の行動も起こさないなら、そこには何の結果も生じない』  
有意義な大学生を送れる様、努力を惜しまないことです。

4年 棟久

5月6日

2度目の県合終了。

去年よりも参加校が少なかったせいか、どこを見ても山大本部の人、人、人、さる、ぶた、etc. ……。ういういしい1年生がまぶしくて、2年生としての意気込みが新たになりましたなぁー  
うふふふ

来年の県合の主管を思うと、本当に心から今回の主管の皆様……御苦労様でした♡

P. S. かってにファンクラブを結成してみなさん。

会計係はだれなのですか？ 会費を集めて、何か食べさせて下さい…

なーんちゃって!! ジョーダンよ!

まるこ

5月7日

いや～！ 県合お疲れさん。話によるとかなりやりたい放題やった様子だが、無事に帰ってきてよかった。

暇の4年が1人2人くっついてはウジウジしている。昨日もそのパターンで、知らぬうちに6人集まって酒を飲んでた。不良4年生群は皆、運動不足で某〇〇を筆頭にタイコ腹軍団、中年体形団体に変わりつつある。おまけに欲求不満の固まりで始末が悪い。くれぐれも、下級生諸氏は4年には気をつけられたし。

前の方に棟久がなかなかいい事を書いている様だが、やっば4年にもなるとああいう心境になるものだ。時間が欲しい。いかにして有効に使うか、充実した日々を送るか、なかなか皆、真剣に考えているのでないだろうか。

ここで、おじんより一言。現役部員も、今、時間のあるうちに、自分が何をやりたいか模索し、いろんな事、いろんな方面にアタックして可能性を拡げて欲しい。きれいな事ではない。誰もが大学に入った頃はそう考えていたはずであろう。自分もこの年になって、又、新たに、前進したいと張りきっている。前進あるのみ！

BOXにはよく来るのだが、久々に書いた新免男

前某主将

5月15日

なんとまー!

OL大会HBクラスで優勝してしもた！ ワンゲルの面目を保ちました。

ちなみに準優勝は一ノ瀬氏でした。

⊕

5月15日

青野山FWも優勝したぞー

津和野は祭りの真最中だった。

中桐

5月16日

レバーを食わしてくれー!! 貧血じゃーあ!!

浅の

5月17日

県会の集中地の写真にセリフを入れたものは殺す

L I G H T サッサ

5月17日

こら! 内賀!!

宇部短なんか遊びに行かんで実験に出んかい!

工学部

5月19日

自転車がパンクしたので600円だれかくれ!!

笠原

ぼくは山が好きだ山にはロマンがある。ぼくは一生ロマンをおいつづけることだろう。 おわり

5月23日

昨日の80km耐久徒歩では両足の裏に“水ぶくれ”ができ、それをかばって走ったら右足のひざと左の足首がいかれ、おまけに“股ズレ”を併発しました。錬成までにはなおることを祈っています。これからは闘魂しかありません。

追伸 長老のニコチンパワーには驚嘆した。やはり長老は影の実力者だ。

Asuka

5月24日

わがはいは、よいたん坊である。

なんで、よいたん坊なのか、とんとわからない。

浅の

6月9日

昨夜はサイクの人がこの部屋にいらっしまったようですね。もしかしたら部員名簿なんかも見ていかれたのでしょうか?! 他の人が見てはまずくない部員名簿にしたいですねえ… まあいいか。

6月9日

暑いけどBOXには涼しい風が吹いていますね。そしてこの風はどこへ行くのでしょうか?

西表へ送る本を集めながら… なんとなく、ふっきれない気持ちでいます。なぜか自分でもよくわかりませんが、西表の子どもたちが本に乏しくてかわいそーというか、まーそうなのですが、うーん、うーん、ま、いいけどね。あーゆー自然にめぐまれている子どもたち、うらやましい。たまたまそこに生まれたのではあるけど、どこか他にも私たちの知らないところで本をほしがっている子どもたちがいるのでは と思うとね。まーそれを考えると、とても とても 大きな大ごとになるので考えないことにします。スママセン でもね、でもね、ああいう大自然があるゆえに我々が足を踏み入れて、たまたまこういう実態を知ることができて…

まあまあま あいひか。

はーっ さてみなさん、がんばりましょう!!

自分の力を出しきれば出しきるほどきつと何かいいものつかめるでしょう。

まりあ

6月10日

ウデがいたいよ〜〜 再びドブにはまってしまった!

おれの自転車をとった者はゆるさん!

隆

6月10日

九重へ出発しまふ。もし私が過労で倒れても、メッチェンの皆様、ひとつぶの涙など流さないで下さい。山で倒れるなら本望ですから…

「笑っていいとも」を見終えしだい清藤宅を出発します。

§

6月13日

錬成は昨年にひきつづき雨だった。障子から登る途中もどどんくもる空を見ながら、私は、1年前のあの苦しい錬成を思い出してしまいました。全く、同じパターンです。違ったのは重い荷が苦にならなかったこと。

そして歩きながら、私は野村さんと岡さんを思い出していました。

それにしてもやかましいPメン(特に2年)でした。

↓  
まだ死んどらんぜ。

兼光

兼光へ 飯おごったるぜよ! 野村

6月15日

岡部君へ

授業に出た方がよいと思います。

私達だけでは代返ができません! ちなみに政治史は……

出ないのなら、代返を頼んだ方がよいのではないのでしょうか？

おわり

6月15日

荒二井先輩、メシ食わせて下さい♡

内賀

6月16日

仁保さんはわかい。 今はおっさん ほに君

なぞなぞ

「京都弁でブリッコしている星なゝに？」

(答) どうえ(土星)

6月18日

本部の諸君、二次錬成がんばってくれたまえ。わらひはこれからリーダー養成に行って来る。合宿前で皆気合いを入れとるみたいやけど、工学部も気合いを入れとるぞ。最近私は髪を切って新たな気持ちでがんばっちゃう。みんな気を抜いたらあかんぜよ。ここで一言。

気抜け、不気嫌を乗り切る心構え

- その1 ありのままの自分を受け入れること
- その2 自分の信念を持つこと(個性を大切に)
- その3 くだらないと思うことを実行してみることに

P. S. おすすめ図書

加藤諦三 「俺には俺の生き方がある」

「偽りの愛、真実の愛」

ちなみにこの方は、早稲田大学教授、もと東京大学のワングル出身です。

工学部の名物男 平松のタッチャンでした。

6月18日

終わった!

1年生諸君 御苦労であった。

これで合宿へのパスポートをもらったのだ。

これからも気をひきしめてガンバってくれ!

6月21日

ダスター6人衆

ダスター ONE 山本直樹

ダスター TWO 笠原

急告

ダスター THREE 内賀

皆、覚えるように

ダスター FOUR 富田

NK

ダスター SIX 山本隆久

6月24日

トレーニングがきつい口に出すな!

トレがきついのはあたりまえである。楽なトレでは意味がない。錬成もそうである。

楽な方へ、楽な方へと行っていると、肝心な時に、何もできなくなり、いつも負け犬同然になってしまうぞ。

合宿まで1ヶ月たらずである。

今の苦しみを全てアルプスへの糧としろ!

主将

6月30日

“西表島に送る本集め”のカンパ代、約12,000円ぐらい集まりました。あとの足りない分は、運送会社の人が、どうにかしてくれるそうです。マスコミの力は強い!  
とにかく、みなさんのおかげで本が送れそうです。御協力どうもありがとうございました。

7月1日

七夕祭、アイスクリームのメンバーへ

今日の4コマ目のあいている人(強制)は、3時にBOXに来ること。

かんぱん、その他のうち合わせをします。

の上

7月1日

少し前の話であるが、6月25日、下関市立大において、山口県ワンダーフォーゲル部連盟の規約についての話し合いが行なわれました。

この連盟規約というものは、今まで慣習的に行なわれてきた県合をはっきりしたものにするために規約化し、定期的に話し合いをもち、山口県内のワンゲル部の親睦を図ろうというものである。

しかし、地理的、人数的、学校の事情等、考えてみて、山大と同じ考えはしていないのである。今回も、市立大が連盟に入ることは考えたいと主張した。

これは、今まで慣習的に行なってきた県合が規約化されることに伴って、より親睦を深めるため、



という名目のもとに、コンパの行き来、県全体で講習会、話し合い、委員会をひんぱんに行なうのではないかという危惧からの発言である。

市立大も県合だけなら参加してもよいといっているし、一度交際を断ってしまったら回復するのは、はるかにむづかしい。また、県合には参加できても、下関地区だけで主管するのもむづかしい。かといって、常に山口地区で主管するのでは、山口県内ワンダーフォーゲル部合同ワンデリングの主旨に反する。

今、私達は、市立大の立場も考え、市立大の実情に合った規約を考え直さねばならない。市立大のみならず、他のワンゲル部においても同様である。山大は、4年制の総合大学であり、共学である。しかし、水大、市大は単科大で男ばかり（市大は少数女子もいますが）山女、宇部短は女子ばかり、宇部高専、大島商船は、高校生の延長といえる。工学部は本部から出ているがOBの影響が強い、というように各部事情が異なる。

相手の立場にたって考えることが必要である。

今まで、山口大学ワンゲルは、人数が多いのでどうしても自分中心。意識しないうちに山大同志で、あるいは、工学部、山女、知った者同志で話してしまいがち。これがいけないのではなく、自分が楽しむために入ったクラブであるから自分が楽しむのは当然のことであるが、他のクラブの人がいた場合、お客さんがいるとき、相手を楽しませてあげなければならないと思う。

このことは、堀さん、泉谷さん、野村さんがいつも言っておられたことであるが、他のサークルのコンパに出ると、お客さんとしてとても大事にしてくれる。しかし他のサークルの人が来ても、うちわ同志で話しばかりして、ワンゲルと他の人と一緒に楽しく話しをすることがない。失礼である。というようなことである。

20年たった山大ワンゲル部内は充実している。これからは、体育会内、山口県内にと輪を広げていくであろう。

この文章を読んでもピンとこないだろうから、まず、他のサークル、他のワンゲル部の人と話すことから、あいさつから始めてみよう。そうすれば、しだいにわかってくると思う。

26日の水大のコンパに出て、北九州連合のワンゲルがたくさん来ていて、少し話をした。一回コンパに出たからといって親睦が深まったとはいえない。今回はキッカケを作ったにすぎない。今、執行部ができるとは、キッカケ作り、微々たるものである。これを大きくし、発展させてゆくのは、2年生、そして1年生である。

山大ワンゲルここにあり！ ということ体育会に県内に中四にと見せてやれるようなデッカイワンダラーになってほしい。

今、夏合宿の準備に忙しい時期ではあるが、平行してワンゲルについて考えてもらいたい。夏合宿が終わって夏休みになると放心状態になり、だらだらと過ごしがちである。

9月、10月には、山口県内の山へワンデリングに出かけよう。そして、夏合宿アルプスとは違った山口の自然も知り、ワンゲルとは何かを考えてみようではないか。

とりあえずは、夏合宿に向けて全力投球！

今日のトレーニングも Party Meeting も、飲み会も全力でぶちあたろう。



7月2日

垣田さんと坂田がFリクに出てました。

私は笑った……………

一の頼くんのところへ行けばいつでも笑えます。

7月3日

もう酔ってしまって何を書いていいかわからんが、まあとにかく、この七夕祭の力を夏合宿へ向けてがんばってほしい。今夜はフィーバーするだろうが若いエネルギーを思いっきり発散してほしい。歌え、おどれ、さわげ。ヤンキーも錬成をパスしておめでとう。これで1年全員合宿へのパスポートを手にしたんだ。その祝いもやれよ。ここまで1年生本当にきつかっただろう。しかし今までのトレーニングをやってきて、そしてこの七夕祭の団結力で合宿も絶対ついていける。何を書いたかわからん。

まあとにかく御苦労さん。これからの1年諸君の活躍に大いに期待する!!

最後にもう一度

本当に御苦労様

山口グループ某2年

7月4日

サイクのBOXの前ぐらいで、もうビールのニオイがただよって来た。歴史はくり返すというか何というおうか、ほとんど去年と同じパターン。しかし、歌の記録が2曲しかないのはなぜじゃ。ほんに御苦労さんでした。

人2生

酒くせゑー!!

1年 BOXのそうじをしなさい。

7月7日

今日のトレーニングは、神社巡り(荒神→清水→日吉)をする。

遅れてくる者は下記の予定時刻を見て行動するように。

ただし雨天の場合は教養でやる。

|     | 荒 神  | → 清 水 | → 日 吉 |
|-----|------|-------|-------|
| 到 着 | 5:30 | 6:10  | 6:40  |
| 出 発 | 6:00 | 6:30  | ???   |

7月8日

三度目の夏が来た

北海道、南アルプス、そして今年もまた……

山の頂に立ち、風に吹かれ、遠くを眺め、

我を思うか、無我になるか

ひとかけらの感激を得るために

重いザックを背負い ひたすら足を前に

まだ 見ぬ世界を 心に描きつつ

ただ歩くのみ

それは長く苦しい 自分との戦い

山の頂に立てば アルプスは我々のもの

合宿を 目前にして ㊦

7月29日

早いParty はそろそろ下山かな？ 合宿出発には1時間寝坊してしまい見送れなかった。スマン。スマン。スマン。……差し入れのバナナが10房余ってコマッタ。梅雨もあけたようで、俺も大好きな夏雲がうようよとたくさんポッカリ浮かんでいる。今頃みんなは山の上で、夏の高い空を見上げていることだろう。晩夏には又、九重にでもいくとしようか。真黒に日焼けして、山ボケしたみんなの顔を見るのが楽しみだ。

松野

8月8日

時の流れを感じる。1年の夏合宿終了後、BOXで畑瀬さんに会ったとき、畑瀬さんは「BOXにきて誰と一番最初に会えるかと思って楽しみにしてきたら、岸と良い子（西田）だった…」見なれた顔だと少しがっかりしておられたが、それでも1年はたくましくなったと言われた。そして今年私も思った。1年はたくましくなった。2年もよりたくましくなった。俺は、夏合宿の成功によりやっと一人前のワンダラーになった気がする。今まで私が得たもの、先輩よりうけついでなもの、自分で見出したものはあと半年で君たち後輩に残す！後輩は先輩の技術を盗め！教えてもらうまで待つな。自ら、先輩のやることを自分のものとする努力を見せよ。自然に親しむだけでなく自然に親しむことを通じて、団体生活を通じて、自分を大きくすることをワンダー・フォーゲルと思う。ふりかかる災難を逃げることはしない打ち勝つ心を育てたい。夏合宿を終え、自由なワンデリングを通じて、これから自分の道をつくって欲しい。そして、その自分のワンゲル観を春合宿でぶつけよう！

最後の夏合宿を終えて ㊦

8月9日

ようやく山口にたどりつきました。明日から美東のバイトに行きますが、今日1日だけでも自分の下宿の自分の布団で寝ることができることがとても幸せに思えます。1年合宿は松本つかれからか(?)想像もできないほどおとなしいものとなりましたが、初めての1年だけの山行(散策)ということで、あるときは協力しあい、あるときは日よったりして、自分としてはまあまあではないかと思われま。あと今回の夏合宿についていろいろと想いを書きたいのですが、今日はとにかく寝たいので別の機会にします。

おやすみなさい。 隆久

8月10日

昨日8/9 PM8:00ごろ、どうにも暑つくてたまらなくて、1人フラフラとチャリンコでふらつuitott。そして、虫の知らせというものはあるんですね。もしかしたら1年生が湯田駅にいたりして……と思いきや、チャリンコは駅へ向かったのである。私の予感であたった。夏合宿・1年合宿を無事終え、なんという一か。一まわりでかなくなったような1年が、居るではないか。やっとフトンで寝れる喜び、やっと山口へかえって来た喜びそれ以上に何かやったという満足感を顔に満たした1年たちがそこには居た。(実際はどうだか?私にはそう感じた)

浅野

8月11日

昨晚、ここ山口へ降りたちまして、よしだみきの21さいのたんたんを祝い、明日いよいよ帰省する予定。名古屋は暑かった。今回の合宿は雨ばかりでしたが、セーシ的には、得るものがあったと思います。2年生ともなるといろいろと今まで見えなかったものが見えてきて、それを真剣に考えるより、おもしろがって感じてしまいました。おもしろいことと言えば不思議と去年よりも充実感がないことです。ものごとには、かならず「イエス」の部分があれば「ノー」の部分があるものだそうで、その相互作用をうまく利用しながら人間は生長してゆくのだって。たぶん去年は「イエス」の部分ばかりにひたっていたんじゃないかと思った。うん、未熟な少女だったんですね。

夏合宿を終えて…やっぱり、私たちワンダラーはね、自然を通して、「イエス」の部分と「ノー」の部分を感じつつ、大きくなっていくしかないんだと思った。スバラシイな。ステキだな、カッコエエなと感じたことと、オカシイな、ナンダロウ、と疑問に思ったこと、うまく自分で利用して、大きく、たくましくなってゆくのです。

なーんて観念的でほんという自分でもわかっているのやら !? でもとにかく、考えていることをやめまいと思います。

ではでは皆さんお元気で、また新学期会いまひょう

P. S. ムっ私ねー 8月29日でねェ 21才になるんよー しっとったあ?

夏合宿を終えて一段とたくましく成長した まるこより

夏休みはべんきょーするどー あどえへっ

8月12日

松本からザックを宅急便で送ったら

なんと桃が一箱とどいた。

俺のザックはどこにいったんや？

㊦

8月18日

恐らく、5年振りかで、この懐しのBOXにやってきました。

合宿は如何だったでしょうか。

相も変わらぬBOXのヨゴレ方にこの「私語記」。やはり、懐しさの一言に尽きるようです。

そして又、それらを見れば、部活動も順調に行なわれているのではと充分推察されます。

最近、新聞にも活動が取り上げられたと聞いていますが、今後とも活躍されんことを心より祈ります。

昨日、これもただただ懐しさの余り、東鳳翻山に登ってきました。天花用のダムにはただもうア然、坂堂峠もりっぱな道路が通っているらしく、あの小さな峠はどうなっているのか、少々気がかりでもありました。

山頂付近は、台風5号の影響で、風強く、小雨模様で楽しみにしていた山口市街の展望も全くきかず、心残りでしたが、山頂直下には山ユリとリンドウが雨の中、カレンな姿を見せてくれました。私が部にいた頃、山ユリと言えば、男岳付近によく咲いていたものですが……。

男岳と言えば、黒ねた谷のホテルとカジカは健在でしょうか。

2才の娘が隣りで家へ帰ろうと泣いています。

まさかBOXに娘を連れて来るなどとは思いませんでした。

もう少し大きくなれば、山に連れて行きたいと思っています。

6年間の東京生活を終え、今、福岡にいます。

この秋あたり、九重か、祖母・傾に行ってみようかと考えています。

クラブも総員80名とか。

今後の発展を祈ります。

皆んな元気で！

確か52年卒の古谷

8月27日

この夏、ヘアスタイルを大胆にモデルチェンジしました。いや、モデルチェンジなんてもんじやありません。原点へ帰ったのです。ゼロからの出発。なんというカッコイイ〜〜言葉ではないか。気分はもう高校球児、最高だぜ。

by 出会い頭の爆笑を前に、ひたすら自分を慰める男

8月30日

朗報

長らく心配かけました。私のザックは無事送られてきました。

結局、私は桃を一箱得したのだ!!

“母は怒り、父は赤面した桃”

Ⓢ

9月5日

今日から授業と違って学校に来たが、あたりは静寂に包まれていた。俺、まっ青。

9月7日

秋は自律神経の転換期にあたり、精神状態が不安定になりやすい。

よってエルサレムに行く。

プラトン

9月7日

ワングルの方々へ 電気のスイッチはきちんときろう。

サイク

9月8日

BOXに熊が出た。

9月14日

石井2さんへ ぼくは無事、13日に、自動車学校を卒業しました。勝負はどうやら、ぼくの勝ちのようですね。ビール、楽しみにしていますよ。

永田

9月17日

今日、1コマ目、試験受けました。物理です。ほとんど白紙。

また来年も教養と一緒にあそんでくれるお友達、ぼしゅうします。

ヤンキー、内賀、なかよくしようぜ。 ぐっすん!!

9月20日

久々に野村氏宅で4年生の方々と酒を飲んだ。松本のアメリカ珍道中物語も聞いた。  
気がつくとAM4:00。そこで、断熱マット、シュラフ持参で教養24番教室前で寝ました。  
朝になっても松本はよっとった。突然、レミーマルタンを取り出して先生と飲もうと言いだした。  
あーおもしろかった。

教養で2度寝た男

9月20日

Q: 八川へ ついにGALになっただろうか?  
A: う～ う～ う～ う～ まだよう～  
赤飯食べたいヨ～～

9月22日

ついにスポーツマッチの季節がやってまいりました。  
求人活動も本日より解禁となりましたので自由に求人表に書きこんでく はい。

壁にはってある

ズバリ今年の予想順位

優勝 = 中国カーブ

最下位・ドベ・カス = 百姓・としゃくチーム

10月2日

PM0時、明日出発の予定であったFW(筋ヶ岳、弟見山)に、ただいまより出発します。というのは、今晚あのフキエのいる戸根にある水津くんの自宅に泊めてもらうことになったからです。安全運転に徹しますので、ご心配は不用です。では、いざ出陣!

隆久

10月8日

きょうから後期授業開始。  
後期こそは……と思いつつ……  
この決心いつまで続くことやら……。

10月9日

久しぶりに私語記を読んで、いい事書いているなと思います。自分もワンゲル4年やってきて、今、就職として、一つの結果がでようとしています。自分の行く会社には色々な奴がいました。「同志社のラグーのレギュラー」「柔道で山下と勝負した奴」など。けれど、そん中で一番阿呆

やと思ったのは、自分やと思った。西表探険隊のリーダーが勝つとうと思った。みんなも、あと3年、2年、1年、がんばりなさい。

元トレーナー